

斬る？違う、粉碎だ

優しい傭兵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様のとんでもない手違いにより死んでしまった主人公がアカメが斬る！の世界に転生します。

できるかぎり読んで楽しめるように書いていきます。

作者はアカメが斬る！をアニメは全部見て漫画購入中です！

目次

プロローグ	1
第一話	11
第二話	24
第三話	38
第四話	51
第五話	74
第六話	82
第七話	101
第八話	115
第九話	132
第十話	143
第十一話	162

第十二話	181
第十三話	198
番外編！	215
第十四話	235
第十五話	249
第十六話	266
第十七話・前編	284
第十七話・後編	302
第十八話	325
第十九話	342
第二十話	354
第二十一話	366
第二十二話	392

第二十三話	408
第二十四話 前編	422
第二十四話 後編	440
番外編その2	454
第二十五話	473
第二十六話	495
第二十七話	511
第二十八話	533
第二十九話	541
第三十話	559
第三十一話	573
第三十二話	591
第三十三話	607

プロローグ

状況確認をまずしようかな？

季節は夏。

俺は今、学校の昼休みで、屋上で飯を食べて、ランチタイムをエンジョイしていた。見渡せば綺麗な青空。

そして下を見れば、夏特有の灼熱の日光によって陽炎ができるほどのあつつあつのアスファルトが俺を受け止めようとしてくれる。

人生バツトエンド！

「ぎにゃあああああああああー！」

何が!?何が起こった!?(。D。)

なぜに屋上に設置しているフェンスが壊れたの!?

ってか俺死ぬう!!

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ!!」

アスファルトに激突する瞬間、俺の意識は消えた。

《ブラックアウト》ピー

「ん……どこどこだ？」

次に気付いて目を開けたとき、俺の目に入ってきたのは、まさに神様が住んでいるような神殿だった。

「なんでこんなところにきちまったんだ……。あ！そうだ。昼飯食べているときに屋上から落ちて……。だああ！思い出したくねえええ！」

その場で地団駄を踏んでいると……。

「来たかな？中々見ぬイケメンよ」

「む？イケメンだと……。誰だこの褒め上手！」

声が聞こえた方向に視線を向ける。そこから出てきたのは平安時代で女性が着込んでいる十二単の着物を身に付け、おかしな仮面をつけている。

「あのくどちら様？」

「私は君が住んでいる世界という神様見たいんだものさ。よろしく」

「神様が女の人とは、ちよつと顔を見せてくれないかな？」

「なっ……。と、取りたくないのだが……」

「えー。いいじゃん。すこしだけでいいからっ」

言い方が女をナンパするヤンキーみたいになってきた。

「し、しかたないな……。ん…」

神様と名乗る人が仮面をとる。

さて、どんな顔なのかな。とワクワクしていた俺が居た。

さて問題。どんな顔なのかな？

①美人

②普通

③ブサイク

ついでに俺は①な。

仮面を外して出てきたのは。

「こ、これが私の顔だ」

「おお……。なかなかの……。……。……。は？」

「ふっふっふっ……。ついでに歳は5780よ」

「くそばあだああああああああああ！」

なんだよこれ！なんで仮面外したら顔は少し老けてるけど、歳がやたらとやばいクソ

ババアが出てくるんだよ！神様意地悪かよ！あ……この人が神様だったつけ……。出した選択肢よりもぶつとんだ答えと歳でした……。

／（ゝ〇ゝ）／ナンテコッタ！

「むむう……………」

「えつと…、クソババ…、神様？どうしたんですか…………？」

「いや……君の顔が仮面つけてた時に見ていたよりブサメンすぎて…………」

「このクソババアツ！さっきイケメンって言ったのどこのどいつだ！」

ついでに俺は自分で言うのもなんだけどフツメンだ！

「さて、君がここに理由だが……………」

無視か。

「ここは私の宮殿。そしてこの世界は死んだ人がその後に来る世界なのだよ」

「あ、やつぱり死んだんだ俺……。屋上から落ちただけ…………」

「うむ。確かにあれは屋上から落ちこちて死んだが、本当の理由があるんだ」

「本当の理由？」

「私は少し整理整頓ができなくてな……。少しここらを片付けていたんだ」

「あー……みるからに汚いな…………」

「でだ。落ちていた書類などを要るものと要らないものでゴミ分けをしていたんだ

……」

「なるほなるほど……それで？」

「その……捨ててしまったんだ」

「何を？」

「君の生きているときの書類を……」

「俺の書類ね。……え？」

「要らない書類と間違えて……ゴミクズとして捨ててしまったんだ。それが君の死因だ」

……チーン

（。）は？

神様が指差した方向には、紙などで燃えている小さな火があった。

「このクソゴット！何してくれてんだ！ババアのくせにふざけやがって！」

しかも俺をゴミクズとして燃やしやがって！（涙）

「まあ待ってくれ。今回は私の完璧な不注意だ。なので君を私の力で転生させようと思うのだ！」

「転生!?まじか！」

「マジだよ。君の望むように出来る限りしてみせるよ」

なん……だと。

「ついでに私が君に行かせようとしている世界はこれ！」

「ババーン！」と出てきた大きなホワイトボード。

そこに書いてあつた世界名は……。

【アカメが斬る！】

これはなんぞ……？

「アニメであつたアカメが斬る！というものでな。まあ簡単に言うと殺し屋が出てくる

アニメかな」

（殺し屋の世界に行かせようとしてるのかこのババア……）

「心配は要らない。この世界に可愛い女の子は一杯いるから」

「OK分かった」

「反応早いね君……」

あの世界では仲のいい女の子居なかつたからな。ちなみに童ピ―

「さてと、後欲しいものはあるかね？」

「ん〜。そうだ！男なら誰でも欲しいどんな能力でも使えるチートで！」

世界中の男共がほしがるはずだ。………多分。

「言うと思つたよ。他にはないかな？」

手に持つているメモに次々と書き込んでいく神様。

「後は…、転生した時は17歳くらいで頼むよ。赤ん坊のころからやり直すのはまっぴらだしな。前世の記憶は一応置いといて、それと…、他にはないかな？ 後から追加とかアリ？」

「ナシだね」

畜生う！

「チートがついてるんだからなんでもできるよ」

「あ。なるほど」

手をポンと叩く。確かに、チートだしな。

「最後に顔はイケメンで！」

「確かにね、そのブサメンじゃモテな「天誅う!!」ぎやあ！」

はじめて出した、渾身の怒りの空手チョップ。神様の頭にダイレクトアタック！

「君！これでも神様だよ！何するんだ！」

「やかましい！だいたい誰のお陰でこんな事になったと思ってるんだ！」

「だから悪かったよ！ちゃんと転生させるからさ」

「ったく。失礼な事言いやがって……」ブツブツ

「よし、出来たよ。これで君は転生した後、言われたとおりの能力とその姿になってるから」

「なんか悪い気がするが……ありがとな神様」

「礼には及ばないよ。あと「アカメが斬る!」の世界だけど、殺し屋とか帝具使いとか、將軍とか出てくるから、気をつけたほうがいい。いくらチートだからって死ぬかも知れないからね」

「そこは自分でなんとかするよ。折角の転生だし、自分でやらないと面白くない。どうするかは自分で選ぶ」

「ならいい。さてと、そろそろ時間かな。今から転生の儀式をやるからこっちに来てくれ」

「お、おう」

転生の儀式? そんな物あるんだな…。何かお祈りとか、ドラクエという転職の儀式とか? なんだか分からないけどテンション上がってきた!

神様の後ろに付いていったら、なにやら教会のようなところ。

建物の奥には手を握り合わせて祈りのポーズをしている女性の銅像。

でかいな……。胸が。

「では、そこに立って」

神様が指差したところに立つ。すると神様が俺に喋りかけてきた。

「じゃ、気をつけて。第二の人生楽しく」

「殺し屋とかがいる世界で楽しいもないような……。まあいいや。心配はいらないよ神様。なんとかするって」

「それを聞いて安心したよ。じゃ、儀式を始めようか」

すると、神様の着ている服の懐に手を入れゴソゴソしだした。

おいやめろ。ババアの垂れ乳なんか見たくないぞ。

何だすのかな？あの神社にいる巫女さんが持つているアレとか？それとも本とか？

だが、ここでも俺の予想を上回るものが出てきた。

出したのは一つのボタンが付いている装置。

嫌な予感……。

「神様？それは一体……」

「これ？こうするんだよ……。ポチつとな」

ボタンを押した瞬間、地震がおきる……が、ほんの数秒で止まった。

「な、なんだ今の……」

辺りをきよろきよろする。その次の瞬間。

パカッ↑足元の大理石の床に穴が空いた音。

／。(。ロ＼)(／ロ。)／!?

「では、グッバ〜イ」

「このクソババアアアアアアアアアアアアアアアアア……!」

こうして、俺は第二の人生に足を踏み込んでいった。

第一話

「迷ったわね……」

この少女の名はマイン。帝都に跋扈する悪を排除する殺し屋集團の一人である。

その殺し屋集團の名前は「ナイトレイド」。

彼女はそのナイトレイドに任された暗殺の仕事の帰りであった。

今回の任務は、帝都に居る貴族の暗殺であった。その貴族は帝都の住民や、帝都の外で暮らしている住民を捕まえては自分の実験体にしていた。その事実をその実験体として連れて行かれた男の人の恋人の女の人が教えてくれた。

陰から調査し、その貴族が黒だとわかり、すぐに暗殺を開始した。

そして今はその暗殺の帰りであった。

暗殺は無事に完了。その帰り道、この世界で存在している危険種と言われる化け物と遭遇し、撃退はしたがそのおかげで帰ろうとしていたナイトレイドのアジトへの方向を見失ってしまい、森の中で絶賛迷子なうであった。

「めんどくさいわね。ったく、あの危険種、次に会ったら蜂の巣にしてやるわ」

今は完全に真夜中。あたりは真っ暗になり視界が悪くなっていた。

「ここで野宿をしようと思う者もいるが、彼女はそんなこと考えない。

「こんなところで野宿なんてまっぴらごめんよ！汚くなるじゃない！」

ということである。

「仕方ないわ。勘で行くしかないわね」

女の勘で先へすすむマイン。だが、夜の森はそう簡単にいかせてはくれなかった。

夜は夜行性の動物が多い、危険種も例外ではない。

「グルルルウ……」

「あら、また来たの？懲りないわね」

森の茂みから出てきたのは、先ほどマインが撃退した危険種である。

その姿は、まさに狼。その大きさは普通の狼とは比にならない。白い体に黒のタイガーパターンの模様がある。

しかも先ほど撃退した時より狼の数が増えていた。数は10。完璧に囲まれている状態であった。

「まいいわ。今無駄にイライラしていたところだから、あんたたちは私の鬱憤を晴らすのにちょうどいいわ！しかもこの《ピンチ》！使うにはちょうどいい！」

背中に背負っていた身の丈はある武器を取り出す。

その武器の名は帝具・浪漫砲台パンプキン。

帝具

1000年前、帝国を築いた始皇帝の命により造られた48の超兵器。体力、精神力を著しく消耗するがその性能は強大で、帝具の所有者同士が戦えば必ずどちらかが死ぬと言われている。始皇帝の「ずっとこの国を守っていきたい」という願いのもとに開発されたが、開発から500年後の内乱により半数近くが行方不明となっている。

マインのパンプキンはその一つである。

精神エネルギーを衝撃波として打ち出すことができる。使用者がピンチになるほどその威力は上がる。

銃身も戦況によつて形状も変えられる。

「さてと……ぶちかますわよ！」

パンプキンの引き金を引く。瞬間、銃口からマシンガンのように衝撃波が打ち出される。

ガガガガガガガガガ!

「グオオオアアアアッ!？」

襲い掛かってきた狼たちは宣言通り蜂の巣にされていく。しかも見る限り完全なるマインのピンチ。そのピンチによりパンプキンの銃の威力は増す。ピンチの状況ではなければ、そう簡単にこの狼たちはやられはしない。

マインはそれを活用し、狼たちを攻撃していく。

「ギャアアアア！」

「グオオオアア！」

狼たちを倒したのに約40秒、その場に残ったのは銃口から白い煙が吐き出された、その銃を構えたマインだけであつた。

「すつきりー！ふう。まあ暇つぶし程度にはなつたかしら？」

パンプキンを担ぎなおし、先へ進もうとする。その時……。

「ゴアアアアアア！」

地面からモグラのような危険種が出てきた。大きさは先ほどの狼の数倍。

モグラは常に土に潜っているので目は退化している。しかし、この危険種は鋭い眼光を持つていて、マインを鋭く睨み付ける。

「まためんどくさそうな奴が来たわね……。めんどうだし一撃で……………え？」

パンプキンを構えたマイン。だけ、マインの目にはモグラとは違うものが目に入って

きた。

それは、先ほど転生し、チートな能力を手に入れ、この世界にやってきた男が天から落ちてきたのだから。

「このクソババアアアアアアアアアアアアアアアア……！」

どうも天から落ちてきている男です。

あ、この世界での名前決めてなかった。何にしようか……ん。

って！こんな事考えている場合じゃなかった！

「やばいやばいやばい！どうしたらいいの!？」

そう叫びながら落ちていっていると地上に女の子が見えた。

ピンクのツインテール。ピンクの服。ピンクの瞳。まさにピンクづくし。

うむ。神様の言う通り、この世界にはかわいい子がいるようだな。

Sクラスだな。

「その可愛い子ちゃん！この状況どうにならない!？」

「はあ!?無理に決まってるでしょ!？」

「だよなああああああー！」

一直線に地面に落ちていく俺。だが、ここで救いの手が来る。下を向くと、どでかいサイズのモグラ。このまま行けば地面に当たる前にモグラの背中に直撃する。地面に当たるより痛くはないだろう。

「おいそのモグラ！ 動くなよおおおおお！」

モグラとの距離、約100メートル。完璧だ。完璧な着地作戦だー！

だが……。

「……………(スツ)」

「あ」

モグラが俺に気を使ってくれて、少しだけその位置から少しだけ動いてくれて、地面に激突できるようにしてくれた。

(ああ……ありがとうモグラ。うれしいよモグラ。てめえは後でフルボッコの刑だ！)

二度目の人生で最初の思い出。初めて地面とキスしました☆

ドカアアアアアアアアアアン！

「きゃあー！」

俺が激突した地面は、落ちたと同時に大きなクレーターができた。

「あ……が……が……」

「ちよつとあんた。大丈夫？」

「な……なんとか……」

神様からもらったチートののおかげで何とか死なずに済んだ。

だけど体の節々が超痛え……。

（あら、中々のイケメンじゃない。バカっぽいけど……）

「こ、ここはどこだ……？」

「ここは帝都から5キロ離れている森よ。ってか、なんであんた空から降ってくるのよ」
「帝都……なんだそりや……、あ、神様が言つてたあれか。えつと、これには事情がありまして……」

どうやってこの状況を打破しよう……。だけどそんなことをさせる訳ないモグラが、背後からとんでもない殺気を出していた。

「グルルルルウ……」

「あ！このくそモグラ！てめえのせいで痛かつたんだぞ！親父の拳骨より痛かつたぞ！」

当たり前だ。

「ちよつとあんた！早く逃げなさいよ！こいつは危険種。普通の人間のあんたが勝てる奴じゃないわ！」

「え？危険……………ぐへえ!？」

モグラのどかい腕の横振りが俺の体に直撃し、近くの木の前で直撃する。

「いつてえ！この野郎！」

「だから早く逃げなさい！こいつは私が……」

帝具・パンプキンを構え、連射する。だが、モグラの体に直撃しても小さな焦げ跡がつくだけ。それほどダメージは与えられなかった。

「くっ！こいつ体が硬すぎる！」

「ギヤアアア！」

「この……………きやつ!？」

完全に油断した。完璧なピンチ。この威力があればこのモグラを倒せる。だがメインにはそれができなかった。構えなおそうとした時、落ちていた石に躓いてしまった。

「しまっ……………」

即死だ。メインはそう思った。パンプキンは手放してしまい、モグラの攻撃を防ぐ術がない。ここで命が終わる。モグラの攻撃が当たる……………はずだった。

「え……………?？」

「グア?」

「可愛い子に手を出してんじゃねえぞ。このモグラ野郎!」

モグラの一撃を体で受け止めた俺。

この野郎……。とつてもカワ（・▽・）イイ!!女の子に手を挙げたな…。

貴様は……。

「フルボツコの刑だあああ!」

そのままモグラの腕をつかんだまま空中へとぶん投げる。

チートだからどんだけ重くても関係ないのだよ!

「グエエエ!」

「おいモグラ……。超次元サッカーを知ってるか?」

「ちようじげん………?」

腰が抜けたマインが横にコテツと首を傾ける。

あら可愛い。ならばお見せしよう。

手のひらに溜めたエネルギーをサッカーボールにし、それを空中に放り投げる。

「ひつつつつさあああつ!」

足に力を入れ、5メートルくらい飛び上がり、サッカーボールを蹴り飛ばす。

「流星ブレードォー！」

エイリア学園最強！

蹴り飛ばしたボールが流星のように飛んでいき、モグラの丸い腹にめり込む。

あ、お腹にボールが埋まった……。

「グエエエー！」

「お次はこれだ！ザ・ワールド！」

名前を呼んだと同時に、背後に金色のムッキムキの男が現れた。

DIO様あ！力借りるぜ！

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！」

バランスを崩したモグラに繰り出した渾身のラツシユ。終えたと同時にモグラは地面に鈍い音を立てながら落ちた。

「へん！参ったか！ハハハハハハッ！」

腰に手を当て高笑い（＾o＾）／

チートに勝てる奴なんか居ない！この俺様が帝王だあ！

まあ、そんな馬鹿な事をしてるとすごい目で見られるのですよ。例えば、俺の後ろに居る女の子とか？

「あ……あんだ、ただの人間じゃないわよね？」

「いや、どっから見ても人間だよ！まあ、少し諸事情があつて……」

「ナニそれ……まいいわ。助けてくれてありがとう。名前は？」

「名前………えつと、その………」

（な、名前どうしよう……。全然考えてなかつたんだが……あ、そうだ）

「リュウ……。俺の名前はリュウだ。よろしくなピンクちゃん」

「誰がピンクちゃんよ！私の名前はマインよ！覚えときなさい！」

「オーケー。マインだな。そういえば、マインの持つてた銃はなんだ？」

「あ、これ？あんた帝具も知らないの？これは帝具パンプキン。私の相棒みたいなもん

よ」

「てい……ぐ？な、なるほど、分かつた」

分かつてないけどな！

「ところで、あんたは何処から来たの？空から降つてきたけど」

「えつと、これも言えないんだ。こつちも聞きたい事がもう一つあるんだが……帝都つて

何処にある？」

「謎だらけよあんた……。帝都？それならここからまっすぐ行つたら着くわよ」

「マジか！サンキュー！マイン！」

マインの頭を優しく撫でると、マインの顔全体（耳も）真っ赤になった。

おお、茹蛸みたいだ。

「な、なにすんのよ！そんな事しても嬉しくないんだからね！このイナカモノ！」

「誰がイナカモノだ！いや確かにイナカモノだけど！」

「あんたみたいな奴、危険種の餌になっちやえばいいのよ！」

こ、この野郎……。可愛いと思ったけど腹立つ奴だ……。つ。しかもツンデレ……

「兎に角、教えてくれてありがとうとな。じゃ俺はここで……」

「え？リユウあんた、帝都に行くの？」

「まあな。どんな所か気になるしな」

「そう……分かったわ……」

ん？マインの表情が暗くなったぞ？

なんで？

「おい、どうかしたのか？」

「別に……。帝都はあんたが思ってるようなところじゃないから……。それだけ教え

てあげる……」

「お、おう分かった。じゃ、またどこかでな」

「ええ。せいぜい頑張って生き残りなさい」

「応！」

マインに背を向け、帝都に向かって走り出した俺。

そう、この世界では俺はリュウ。これが新しい世界での俺の名前だ！

どんな人生か…。楽しみだ…。

「リュウ…ね。面白そうな奴…」

マインはパンプキンを背負い、ナイトレイドのアジトへと向かった。

暗殺の報告と、リュウのことを報告に…。

人が次第に朽ちゆくように、国もいずれは滅びゆく…千年栄えた帝都すらも、今や腐敗し生き地獄。人の形の魍魎魍魎が、我が物顔で跋扈する…。

しかし、それもこれまで。この時を経て全て変わる。

この世界の未来は、平和な世か、地獄の世か、いずれすべてはこの男によって託されることになる。

第二話

マインと別れて約十日が経過。

無事に俺は帝都に到着し、あの手この手を使って生活している。

帝都に到着した時に思った第一印象。腐っていた。それだけであつた。見るからに市場などは活気で満ちていたが、裏ではそれすらも感じられないほどの闇に包まれていた。住民などを攫つては自分たちの好きなようにする。実験体にしたたり薬漬けにしたりなど人の命をおもちゃにしたりなど。市場や住宅街などでそれが噂になっている。なぜこうなつたか？それには理由がある、帝都の裏の支配者、オネスト大臣である。

今の帝都の陛下は10歳にも満たない子供である。(。D。)ケツクソガキカヨ

その子供陛下を操り、今の弱肉強食の町となつている。強いものが遊んで暮らし。弱いものが死ぬ。この世界のどこに自由があるのだろうか。

そこに、オネスト大臣率いる帝国に反旗を翻すものが現れた。革命軍である。弱肉強食の帝都の住民を守るために、反旗を翻した。目標は、悪の根源であるオネスト大臣を討つ。

そしてこんな話も聞いた。その革命の要の組織が存在する。それは【ナイトレイド】

というらしい。暗殺を得意とする精鋭たちがそろっている革命軍の最強部隊。そういった真夜中に帝都での悪を狩る。とのこと。怖い奴らもいるもんだな。

俺も悪さしたら殺されたり？やべ、ちびりそう……。

「考えないようにしよう……。さてと、危険種でも狩りに行くか」

今、俺は帝都の掲示板に載つてある依頼を達成して、もらつた報酬金で生活している。この前はタコの危険種を退治してそのタコを食べたところだ。あれおいしかったな。今度あいつがまた出たらタコ焼きにして食つてやる……。 (||。ω。) ノキャハだが、今日見た依頼書にはおかしなものが貼つてあつた。

「首斬りザンク？」

載つたある依頼書を手にし小さくつぶやく。誰かはわからないけど報酬金はいいね。今は銃を買うために金があるしな。

というわけで、依頼書を掲示板から千切り、歩き出そうとすると髭のやばいおっさんに声をかけられた。

「ちよいとにいちちゃん！その依頼書やめときな！首斬りザンクをしらないのか？」

「だれぞそれ？」

「首切りだよ。元は帝都の処刑場にいたんだけど、毎回毎回首を切りすぎて、やめられな

なくなったんだとよ。更にはそこで手に入れた帝具を盗んで逃亡。あちこちで首を切っているってさ。危ない奴だからやめとけ」

なるほど。怖い奴だ、ナイトレイドよりやばい奴なんじゃないか？

だが俺は！

「なんだかおもしろそうだな！よし！行こう！」

「なにい!?!この馬鹿者があ！話を……………つてもうおらぬ……………」

その日の夜

「ふっふっふ……………俺を探している奴がいるようだな……………愉快愉快。ならばこちらから会いに行つてやろう……………愉快愉快」

影から顔を出した男。こいつが首斬りザンク。今回のターゲットはみなさん分かるようにリュウである。

その頃。

「しまった…。あのなんたらザンクがどこから出てくるのか分からないんだつた…」

なんの計画もなしに始めたおかげで今からどうしたらいいのかわからない状態である。

さて、どうしよう……。ザンクを探す手がかりがないからなあ。どうしようかな。

「その君。お困りのようだね？」

「へ？」

「ここにきて」

「え？え？（。・ω・）？」

いきなり美人の女の人に声をかけられた。でも美人な人だからついて行くのが俺なんだよねー！

女性の後に付いて行き、住宅街を抜け、大通りを抜けていくと、大きな広場に到着した。さすがに真夜中だから人は一人も居ない。

「あのお、ここに大広場だけど？お姉さん？」

「あゝ。ここにだつたら都合がいいのよ。【殺せるからな】」

「え？」

次に気づいた瞬間、女の人が巨体のおっさんになった。

「こんばんわ……」

? (。□。;) ガーン (。□。;) ガーン (。;。□。;) ガーン!!

「ぎゃあああああああ!美人のお姉さんがおっさんになったー!」

「おっさんよりもこう呼んでくれ……。親しみを込めて、首斬りザンクと!!」

名を名乗ったと同時にザンクの腕の裾から剣が飛び出す。

目に入ってきたのは、隙の無い構えと。ザンクの額にくつついている目のようなものだった。

「え!?お前がザンク?なんでおっさんがお姉さんに?」

「これさ!帝具・スペクテッド。その一つの能力、幻視。幻をみせるのさあ」

(なるほど。さっきのはそれか。あと、その能力の一つって言ったよな?まだあるのか)

「ピンポーン!その通り、このスペクテッドには全部で五つの能力がある。中々鋭いね坊や。正解の報酬に干し首やろうか?」

「げ、心読まれた……。ってか、干し首もってるの?」

「もちろんさだ。なんとたって俺のコレクションなんだからな。欲しいか?」

「いるかー!ー!」

全力拒否。

「なんだ要らないのか…。悲しいねえ！」

ザンクが剣を構えたまま、接近してくる。早い…。けど、

「行くぜ！必殺！」

「空中に飛び上がりそのままファイヤートルネードか？」

「なっ……………!?!」

ザンクの宣言通りに、俺は自分で考えていたように空中に飛び上がり、手のひらに溜めたエネルギーをボールにしザンクへと蹴り飛ばす。

ファイヤートルネード。ボールが赤い炎に包まれ、ジャイロ回転をしながら飛んでいくが、ザンクはそれを簡単に避ける。

「そっか。こいつ心が読めるんだっけ？」

「そうだ。能力の一つ洞視。表情などを見る事で相手の思考が分かっちゃおうのさ。観察力が鋭いの究極系だなあ」

「やっかいな帝具だな。あとデザインがダサイ」

「だけどホントに困った。心を読まれたら手の打ちようがない。最強のイナイレでも無理なのかああ！」

「愉快愉快！焦っているな？心を読まれているからどうしようか焦っているな？」

「一々心を読みやがって…。ボコボコにしてやる。スター・プラチナ！」

今回のスタンドは違う。鋭い速さの攻撃と精密な動きが出来るスタンド。スタンドの色は青や紫など濃い色の姿をしたマツチヨのおっさんだ。

「次の攻撃は素早いラツシユ攻撃だろ！」

『オラオラオラオラオラオラオラオラ！』

スター・プラチナの鋭いラツシユ攻撃。しかしこれも攻撃が読まれているお陰で攻撃を腕の剣で全て防がれてしまった。

「次はこっちの番だあ！」

ザンクの素早い斬撃。スタンドで幾つかは攻撃を防げたが足や腕に深く傷をつけた。いくらチートを使えるって言っても、完璧に攻撃を受けられないわけじゃない。

「クッ！……意外と痛いなあ……………」

「そうだ。斬られるのは痛いもんだろ？大丈夫だ、俺は繊細だからよお、程よい具合にしたんだ。痛いだろう？愉快愉快……………」

「心は読まれている…。なら！考えなきやいい訳だ！」

『スターフィンガー！』

「なにっ!？」

スタンドの手の人差し指と中指が蛇のように伸びて、ザンクの頬を掠める。

「まだまだ！」

『オラオラオラオラオラオラ！』

「甘い！甘いぞ坊や！」

完璧に何も考えずに攻撃したのになぜかは分からないが、ザンクに防御されてしまった。

折角のオラオラが（・ω・）しよぼーん

「な、なんで？」

「スペクテツドの能力の一つ。未来視さ。無心になったとしても俺にはお前の攻撃は防げるのさー！」

「そっちの方がチートなような……」

「坊や。中々面白い戦い方だ。ただの人間じゃないようだが、名前はなんと言う？」

「名前？俺の名前はリュウだ、よろしく頼むぞ」

「リュウか。いい名前だあ、強そうな名前だ。そんなお前に「いいもの」を見せてやろう！」

「へ？」

次の瞬間、俺はナニをされたのか分からなかった…。辺り一体がシンと静かになり、

空が真っ赤に染まる。そして目の前にはザンクが居たはずなのにその場所にいるはずのない人が現れた。目の前にはザンクの代わりに、俺がまだ生きていたときに片思いをしていた女の子が目の前に立っていた。

「な、なんで……君が……」

（クッククックツツ…、びつくりしただろうか？これも幻視の一つさ。今お前の目の前にいるのはお前が一番最愛と思っている人間だ。一人にしか効かぬが催眠効果は絶大だ。………そして！）

「どれほど強かろうが、最愛のものに手を掛ける事など不可能！愛しき者の幻影を見ながら死ぬ！リュウ！！」

接近し俺の首を撥ねようとしてくるザンク幻影の中では女の子の姿となっている。こいつの中では完璧な勝利だと確信していた。誰もがそう思うほどであった。しかし……。

『オラア！』

「ぐへあ!?!」

幻影として見せられた者を殴り飛ばした。

「な、何故だ！一番愛する者が見えたはずだ！それなのに何故え!!」

「ザンク…。お前はとんでもないことをした…。今俺に見えた女の子。それはこの世にはいない筈の俺の学校で俺が好きになった女の子だったんだよ！可愛いかった。だから告白した…。そしたらあの子はこう言った！」

【顔がブサメンすぎて無理】

「ぢくじよー！ー！ブサメンで悪かったな！でも普通なんだよ俺の顔はあ！顔だけで判断しやがって！あの子のお陰で三日は涙で枕をを濡らしてたんだよお！」

地面に拳をガンガンと打ちつけながら泣き喚く俺。ヤバイ、思い出したら涙が…（血涙）

「ザンクう！お前はやってはいけない事をした！俺の怒りは限界に達したあ！憤怒の炎だあ！」

俺の回りから真つ赤の憤怒の炎が燃え上がる。こいつには罰を下してやるううう！

「ブツコロス！」

「貴様にできるかあ！俺には帝具がある。お前の心と未来が読めるんだぞお！」

「だったら俺の凄い十八番を見せてやる！」

足を開き仁王立ちし、左手を腰に当て右手でザンクを指差す。

「次のお前の台詞は、今すぐお前を殺して、俺の干し首コレクションに入れてやる！。だ

!!

「今すぐお前を殺して、俺の干し首コレクションに入れてやる!………はっ!」

これが俺の十八番。相手の先を読み、心で思ったことを当てる事だ。

「ナニツ!?なぜ俺の言葉がっ!」

「そこは前略中略後略!冷酷残忍!その俺が貴様を倒すぜ!」

「ぬうあああ!死んでたまるかあ!

ザンクが怒りの咆哮を上げながら突進してくる。剣を構え、俺を八つ裂きにしようと

殺気が飛んでくる。

(先に殺す!未来が見える俺の方が有利!)

だが、そんなザンクの行動も役には立たなかった。どうして?それは攻撃をしようと動きはじめた瞬間に、もう攻撃はされていた。

「死ねええええ!リュウ!」

「スター・プラチナ!ザ・ワールド!」

時が止まった。

リュウ以外の全ての動きを持つものの動きが止まった。時間を、時を止めたのだ。今からの数秒はリュウだけの時間である。

「ぶちかますぜ！」

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ……』

オラアツ!!』

スタープラチナから繰り出された渾身のラツシユ攻撃。その繰り出されたパンチはザンクの体中に命中した。顔面、胸、腕、腰、足。体の五体全てに直撃した。

「てめえは俺を怒らした」

「グヘアアアアアツ!!」

時を止めた時間。僅かに四秒ほどであったがザンクの体中に蓄積されたダメージはそのときが動き出した瞬間に一気に体中に襲い掛かった。

体中から血が噴き出し、腕や足の骨が粉碎骨折し、その体は遥か高くまでに吹っ飛ばされた。

落っこちたザンクはもう動く事はなく、血だけが地面に広がった。

「ここであの台詞！」

「てめえの敗因はたった一つだけ、ザンク。たった一つのシンプルな答えだ。
てめえは俺を……怒らせた……」

キマツタアア——((((。 (。((。 ∇。)))。)。)。)))——
!!!!!!!

「グハッ……クツクツクツ……。何が起こったか知らないが……これで……俺が殺して
きた奴ら……からの……うめき声がある……聞こえなくて済む……。愉快……愉快……
ありがとな……リユウ……」

それつきり、ザンクが動く事は無かった。

スタンドを体に仕舞い込んだ後、俺はザンクに敬礼をした後、背を向けて帝都の住宅
街へと歩き始めた。

その後、ザンクの帝具はナイトレイドに回収され、亡骸は葬られた。

この戦いを見た人は、影でリユウをこう呼ぶようになった。

【悪を破壊する戦士、デストロイヤー】と…。

第三話

ザンクとの戦いから数日。

大広場で大暴れしたお陰で町中ではかなりの警備態勢が敷かれていた。

帝都警備隊の顔の怖い野郎共があちこちで目を光らせてる。(ー、ドー、)キリッ

しかもこの頃夜はナイトレイドの暗殺が多くなってきたと巷で噂になっている。この前は油屋のガマルと警備隊長のオーガが殺されたらしい。もちろんそれを行ったのはナイトレイド達。

総数何人の部隊かは分からないが数名が手配書に記載されている。「アカメ」「シエーレ」「ブライト」「ナジエンダ」が手配書で記載されていた。殺すか生け捕りをしろとの事。金もそれなりの額。これは俺にとって嬉しい限りである！(●、○、●)ウホオ

そして俺は今までの報酬金でハンドガンとサブバイバルナイフを作ってもらった。銃は7発装填式のM1911A1。モデルはメ○ルギア3の型である。整備もバツチリ。サブレッツサー付きのお陰で音も聞こえない。ナイフも持ちながら銃を構えられるように形を整えてもらった。暗殺での依頼だったら完璧にこなせる。

作者「いいセンスだ」

「貯えも出来たし、そろそろ俺も自分の部屋を探そうかな。最近は野宿が多くなってきたしな」

袋に部屋を買う金を入れ、帝都の町に繰出した。

だが、俺はここでもとんでもない事を思い出した。

それは……。

リユウは方向音痴であるのだ。

絶☆賛☆迷☆子☆☆なう

「／＼。(。ロ＼) ココハダレ? (＼ロ。) /ワタシハドコ?」

おっと、頭がおかしくなってきた。

まずここは何処だ? 大通りを抜けた後に人ごみに巻き込まれて分からない所に行き着いた。人は居ても柄の悪い人が盛りだくさん。

冷や汗MAX!

「どうしたらいいのじゃ……?」

「お困りのようだね。少年」

「ほえ?」

背後から声を掛けられ振り向くと、背が高く、巨乳でスタイルがいいお姉さんがいらっしやいました。

ウホツいい女[♂]

「どちらさまで？」

「私はレオーネ。なにかあったのかな？」

「あー…。道に迷ってしまいました、大通りに戻りたいんですけど」

「それなら付いてきな。私はここに詳しいからな」

「マジっすか。ならお願いします」

あれ？なんかザンクの時も似たようなことがあったような…。

まさかまたこのお姉さんもとんでもないおっさん!?

それは嫌だー!!

「レオーネ……さん？」

「ん？なにかな少年？」

「えつと……失礼しまあつす!」

俺はレオーネさんの胸に手を伸ばした。本当にこの人が男じゃないか調べるためである！全世界のおっぱいの好きな野郎ども！羨ましいと思うなよ。これは俺の命に関わる事だからな！

フニユン

むお。柔らかい…。マシユマロかな？

さて、覚悟を決めよう。

「何しやがるこの野郎お！」

レオーネのターン。

レオーネの回し蹴り！

俺の腹にダイレクトアタック。

効果は抜群だ！

「ぶべらあっ！」

華麗に決まった蹴りは俺の腹に直撃し、そのまま吹っ飛び、壁にめりこみましたとき。

【甘えん坊】

「誠に申し訳ありませんでした」

レオーネさんの前で見事なスライディングDO★GE★ZA★！

「嫌、色々と事情がありまして、ホントに申し訳ない…。できれば帝都警備隊行きは勘弁です」

「事情ね？一体どんな事情が？」

「実は……カクカクシカジカ」

「なんでおっぱいを触った？このクソ虫。見たいな視線で俺を見下しているレオーネさまさま。(違います)」

その理由、ザンクとの戦いのことを話した。ザンクの事、ザンクの帝具の事、俺がザンクを殺した事を。

その話をしたらなぜかは知らないがレオーネさんの顔が険しくなったが、俺は気付かないフリをした。

「と、いう訳です」

「なるほど。じゃ、この店の名物食べさせてくれたら許してあげるよ」

「まじっすか！御安い御用っす！」

財布の中身が空っぽになるまで名物を平らげたレオーネさま。俺の財布が断末魔の悲鳴を上げてらっしやいます。

（。o。o） タズゲデエ

「ふう。ご馳走様ー！さてと、自分の部屋を買いだつけ？予算はどれくらい？」

「これくらい！」

机に袋一杯入れた金をドンツと置く。

「中々溜めたね。私の知り合いに不動産関係の仕事してる人がいるから話つけてくるよ」

「おお！それはありがたいお！」

「お？じゃ、その人連れてくるから待ってて」

「アイアイサーー！」

金の入った袋を肩で担ぎ、俺に手を振って店を出て行った。

1時間後——

「どんな部屋を紹介してくれるんだろうな」ワクワク

2時間後——

「レオーネさんまだかなあ？」ソワソワ

3時間後——

「おそいなあ」ウーン

4時間後——

「……………」

5時間後——

「ちよつとお客さん、もう閉店時間だよ」

「いや、人をまっけて」

「あく、引つかかっちゃまったなあんだ。あれは金を奪うための手策だよ。あんたは騙されたんだよ」

「なん……………だよ」

真夜中——

「あのクソビ〇チが——————」

よくも俺のコツコツと溜めた金をパクリやがって！あれを溜めるのにどれだけの俺の血と汗と涙とエキスを流してきたか！あとの残りの金は少しの食事代と数発の弾丸を買う金しかない。生きていけるのか……………。

とにかくあの女はぶっ飛ばす！めちやくちやのボコボコのぎったんぎったんにしてやる！

そしてここは何処だ！また分からないところに迷い込んだよ！ヤバイ輩の奴らは居ないけど俺が帝都の何処にいるか分からない！ゴミや埃が酷い場所だ。

俺はここで死ぬのか…。否、死ぬわけにはいかない！

「まだまだ！まだ終わってなああい！」

といつても、今の状況をどうにかしないと。

すると…。

「やや！私の正義センサーに反応あり！その君ー！何かお困りですかな？」

「キュキュキュー！」

「ん？」

オロオロしているとまさかの救いの手が差し伸べられた。

「あれ？その服……………」

「帝都警備隊のセリユー・ユビキタス！正義の味方です！」

「おお、なるほど。俺はリユウです、そっちのちっこいぬいぐるみみたいなのは？」

「これですか？帝具、ヘカトンケイル！私はコロと呼んでいます。ご心配なく、悪以外は無害なので」

「帝具…か。こんなちっこいのが役にたつのか？」

「聞き捨てありません！とてもいい子で役に立つ子です！悪を滅するため存在する帝具ですから」

「悪ね。その悪つてのは誰の事なのかな？」

「それはもちろん！帝都にあだなす者たちのことです」

「やはりか。それってナイトレイドか？」

「っ…。もちろんですよ。ナイトレイド…。オーガ隊長を殺したあいつらを私は許せま

せん！」

ナイトレイドの名前を出したとき、セリユートの顔付きが一瞬にして変わった。眼光が鋭くなり、表情が笑顔から一変し、怖い顔になった。

そして俺はその時、ある物が目に入った。それは後に分かること、早速俺は行動に移った。

「そつか。色々悩みがあるんだな。つてか今はそんな話をしてる場合じゃない！俺は大広場に行きたいんだー！ー！」

「はっ！大広場ですか？それなら私に付いて来て下さい！」

「おおおおお！大広場が俺を待つてるぜ！」

セリユートとそれに引きずられるコロに付いていき、俺は路地裏などを抜け、大広場へと向かった。

だが、路地裏などを通っていると、もちろんヤンキーらしき人達にも声を掛けられたりする。

「予想的中…。やはりこうなるか」

路地裏では俺とセリユートさんを取り囲む男たち。おおう…、恐ろしいー（棒読み）

「なんだ？ここは俺たちの縄張りを知つてのことだよなあ？しかもそのガキの横には帝

都警備隊の女だな？ここを通るには金を払え。それかその女には体で払ってもらな
いとなく？」

ま！お下品な言葉！あなたをそんな風に育てた覚えはありません！（当たり前だ）
そんな事を考えていると、俺の横からヤバイくらいに殺気がにじみ出ていた。

「なるほど、つまりお前たちは悪でいいんだな？ならばここで正義の鉄槌を下す！」

「グオオアアア！」

セリユートの顔とコロの姿が凶暴な形へと変わっていく。

おいおい！それじゃセリユートの方が怖いよ！落ち着くのじゃよ二人とも！

「正義を執行する！覚悟しろ！」

セリユートの声と同時にコロの姿が大きくなり、その巨大化した拳が野郎共に振りかざ
されようとする。だが、俺はそれより先に動いた。

「邪魔だ！喰らえ、最強の拳！ワンパンチ！」

俺の繰出した技、ワンパンチ。それを喰らった男たちは一人残らず壁に激突し、壁に
めりこむというアートを作った。

「この趣味でヒーローをしている俺を前にして、いい気になるんじゃないやねえ！ハッハッ
ハッハッ！」

「リュウ君って強いんだね!?今の何?帝具も使つてないのに……」

「あ……これは深くは聞かないでほしいかな。聞かれたくないことだから……」

「あ、わかりました……。それじゃ、大広場に向かいましょう!」

「キュウ!」

男たちを撃退した後、俺はついに大広場に到着する事が出来た。

「やったあああああ!これで俺は明日まで過ごせる!当分ここで野宿決定い!そしてあの女をミックミックにしてやる! (怒り)」

「ええ!?ここで野宿!?ここはあの首切りザンクが出たところだよ?大丈夫なの?」

「大丈夫だ。問題ない。心配してくれてありがとう。やさしいなセリユは」

「え?あ、はい!もちろん人进行うのは正義の味方の仕事ですから!それでは私たちはここで、気をつけてくださいいね?」

「おう、まかせとけ!」

俺の心配をしてくれたセリユはまたまたコ口を引きずったまま姿を消した。怒ったとき以外ならかわいいのに……。

さて、ここで何人かは疑問に思っただろう、なぜこんな広い大広場で野宿をしようと思っただのか?それにはちゃんとした理由がある。

一つ目は俺以外、住民がここに居ないこと。

二つ目は誰にも迷惑がかからない事。

そして三つ目。ここなら暴れられる事…。

それはなぜか？

ここなら全員を相手に出来るからだ。

あの店から出た後、セリユーに出会って、ずっと俺を尾行してきた「奴ら」とな。

大広場の中心に立ち、回りを見渡す。この場所から見えない影から出てきた奴らは7人。俺を取り囲むように均等に間隔をあげ、俺の方へとゆつくりと近付いてくる。

しかもそれには見た事もある顔があった。手配書に載っていた、あの四人の中の三人である。

そう、革命軍の最強の暗殺部隊、夜襲を名前とする殺し屋集団。

「ナイトレイド……」

月の光によって全員の姿が見えた。各々自分の武器を構え、俺を見据える。その目は人との会話で見せるような目ではない、完璧に俺を殺そうとするめである。

そして中心にいる、袖がない服を身につけた髪の毛の長い女の子が口を開いた。

「今回のターゲット、デストロイヤー・リュウ」

持っている刀を俺に向け、そしてこう喋った。

「葬る」

その言葉が、今から始まる戦いのゴングであった。

第四話

帝都大広場――

初めてのナイトトレイドとの対峙。

リュウVSナイトトレイド。

一人対七人。圧倒的にこっちのほうが不利なのは明白である。ただでさえあつちには全員帝具使い。それに対して俺はか弱い男の子（どこが？）乱暴にされそうで怖いです。（・・▽・・）

おふざけもここまでにしよう。

だが、なんで俺を狙う？俺を狙う理由がわからない、ただの神様に送り込まれたチート使いですがなにか。

作者「ニートの間違いだろ」

だまらっしゃい！血流操作で愉快なアートのすんぞ。

俺を狙うナイトトレイド。その狙う理由は、少し前に遡る。

――約五時間ほど前――

「いや。今日も稼げた稼げた」

このお方、先ほどりユウから金を盗んだ金髪巨乳こと、レオーネである。この女性もナイトレイドの一人。身に着けている帝具は「百獣王化（ひやくじゅうおうか）・ライオネル」。ベルト型の帝具。装着者自身を獣と化し、身体能力を飛躍的に向上させる他、五感も強化される。また、装着時には獣の耳のようなものが生える。

「さて、今回のことをみんなに報告するか」

今回のこと、それはリユウのことである。ザンクの話聞いた時に不信に思う点があった。それは…。

なんで帝具持ちのザンクに帝具持ちでは無いリユウが勝てたのか？

帝具の素質上、普通の人には倒せない、なぜなら？強すぎるからだ。帝具持ち同士が戦うとどちらかが死ぬと言うくらいだ。勝てるはずがない。そう思ったレオーネ。

そしてここで一つ、レオーネの頭に浮かんだ。

【これは私たちの敵になるのではないだろうか？】

ナイトレイドの最終目的は大臣の排除。だがそれにはかなりの人と時間と金がいる。今だつて帝都に蔓延るダニを排除している段階である。大臣の排除がいつになるかわからない、だがいつかはそれを達成しなければならぬ。帝都でも苦しめられている人は五萬という今の世の中、彼女たちがやらなければならぬのだ。

だが、帝具無しのリユウが帝具持ちに勝ったという事実が出た今。これは早急に手を討たねばならないと感じたレオーネ。これからのナイトレイドにとって危険分子を多く増やさないためにも。

それから少しして、ナイトレイド全員にその事を話した。

「……という訳だ。全員頭に入った？」

全員集合したナイトレイド。その中にも手配書に載っているアカメ達も例外じゃない。ほかに、帝具持ちでは無いがかなりの強さを持っていると思われるタツミ。帝具・クローステイルを持つているラバック。第一話で出てきたパンプキンを持つているマイン。

そしてそれを束ねる元將軍のナジエンダ。

「まさか彼奴がそんなにやばい奴だったとわね……」

マインが小さく呟く。彼女が一番その力を近くで見たのだ、怪しく思うのは当たり前前である。

「またやばい奴が出てきたねえ。エスデスといい、ブドー將軍といい、これ以上めんどくさくなるのは嫌なんだが」

緑色の髪をしたラバックはそう愚痴を漏らす。

「けどそれは本当なのか？ザンクを倒したってのは」

巨漢の大男、ブラートは疑問を問いかける。彼は元は帝都の軍人だが帝都の腐りきっていた事がわかり革命軍に寝返ったのだ。

帝具は悪鬼纏身（あつきてんしん）・インクルシオ。鎧の帝具。凶暴な超級危険種タイプラントを素材として作られ、並の人間が装着すれば死に至るほど甚大な負担がかかる。しかしその性能は絶大かつ汎用性に優れ、高い防御力は当然ながら灼熱の大地から極寒の環境にも対応可能。

「確からしい。帝都の一部ではデストロイヤーを言われるくらいだ。これは確実な証拠になるだろう」

椅子に座る片腕が義腕のナイトレイドのボス・ナジエンダ。彼女も帝都の將軍だが帝都の真実がわかり革命軍に入った。実力はそれなりのもの。だが今は帝具を持っていない。

話を聞いた全員は険しい顔になり、顎に手を当てリユウをどうするか考える。

そんなん時、タツミが声を上げた。

「なあーそのリユウつてのを仲間に入れることはできないのか？」

予想外の答えをだしたタツミ。それもいいかもと考える者もいるが、それはマズいと思う者もいる。

「はあ!?!お前馬鹿か!?!帝具持ちを倒した奴が仲間になる訳ないだろうがあ!?!これ以上男が増えたら俺のハーレム計画が崩れるだろうが!」

タツミの胸倉をつかんで大泣きしながら叫ぶラバック。彼は大の女好き。特にナジエンダに恋をするほど、だがそれでは足りないのかマイン達にもモテるようになりたいたとか何とか。

「なんでそうなるんだよ!仲間になったらこっちの戦力が何倍にもなるはずだ!」

タツミの意見もわかる。リュウが入れば革命軍はかなりの戦力を手に入れることになる。なんとってチート使いだ。あんなことやこんなことが自由にできるのだ。

言い方が生々しいな……。

「でも、そう簡単に入ってくれるでしょうか?」

眼鏡をかけた長髪の女性、シエーレ。彼女も殺し屋の一人。帝具は万物両断・エクスタス。なんでも両断できるハサミの帝具。その強度いえ、防御にも使える。

「だけど試す価値はある。無理な場合は私が葬る」

そして最後にでたこの少女、アカメ。ナイトレイドの切り札とも言われている。

帝具は一斬必殺(いちざんひつさつ)・村雨(むらさめ)日本刀型の帝具。斬られると傷口から呪毒が入り、即座に死亡する。

「いや殺したらダメだろ」

タツミの華麗な突っ込み。

確かにな、俺はまだ死にたくないしな。

僕はしにましえくん！（笑）

「よし、確かに試す価値はある。全員出動だ！ 作戦内容はリュウのナイトレイドへの勧誘。まずは全員で奴の実力を測るんだ。ザンクを倒した程の男だ。できるなら仲間になつてもらおうように取り計らうんだ。無理の場合は我らのすることに首を突っ込まないように話をつけるように、アカメ。この作戦はお前が指揮れ、油断はするなよ」

「ん、わかった」

小さく頷くアカメ。その目は先ほどのボーっとしていたような目つきではなく完全に戦いをするときの目つきになった。

「ま。私もなんとかして話をつけるわよ、彼奴には助けてもらったからお礼も言いたいし」

マインが髪をいじりながら言う。

「俺はなんとかして仲間になつてもらおうように頑張るぜ！」

力強くガッツポーズをするタツミ。よほどリュウが気になるのだろうか…。

「熱い男なら俺が優しく招きいれるぜ」

顔を赤らめながらつぶやくブライト。ついでに言おう。彼はゲイである！↑これ重要！テストに出るぞ！

「決まりだな！ナイトレイド出動！」

で、今に至る。

やれやれ、俺もとうとうモテ期到来？いやあ嬉しいね。お母さん見てるか？俺もとうとうモテモテだよ！

「でも人数が多いな…。勝てるかな？」

「ターゲット捕捉。ボスの言われた通りにまずは彼奴に実力を測る。行くぞ！」
アカメの声と同時に七人が一斉に動き出した。

最初に近づいてたのはレオーネとラバック。

レオーネは獣化し、ラバックは糸の帝具・クロステイルを構え高速で接近してきた。
レオーネを見た瞬間、リュウの瞳から涙が出てきた（血涙）

「あー！てめえはあの時の巨乳！俺の金返しやがれ！」

「やあ少年。あの金は私の借金につかったからもうないぞ」

「ファツキユウ！借金あるくせに金パクるんじやねえよ！そしてなぜ俺を襲う!？」

「テストだよテスト！訳は後で話すから今は私と戦いな！」

「だが断る！」

レオーネも突き出した正拳突きをバク転で回避し、そのまま後ろ歩きで交代するが俺は大広場の入り口まで少しの距離があるのに「何かに引っかかった」。

「へ？」

後ろに視線を向けると背中に月光によつてキラキラと光る銀色の糸が張り廻られていた。それも一本ではない、何本も何十本も交差し俺の逃走を阻むように、まるで蜘蛛の巣に引っかかった蝶を逃がさないように。

「レオーネ姉さんが戦えつて言ってるんだ。おとなしく戦つてもらうぜ」

レオーネの背後に両手の指先から糸を出しているラバック。なるほど、こいつの仕業か。

「仕方ない。やってやるよ！」

ここにきてのリュウウの初めての戦闘態勢。

「喰らえ！私の鉄拳！」

拳を握りこつちに走つてくるレオーネ。

痛そうだから喰らいたくありません！

「無駄ア！」

某帝王のスタンド、ザ・ワールドがレオーネの拳を軽く受け止める。

「さすがザンクを倒しただけはあるな。どんどん行くぞお！」

レオーネの戦いの本望がやる気を出したのか連続でラツシユを繰り出してくる。

「ふんっ。ラツシユの速さ比べか？」

おっと、DIO様になりかけてた。

『無駄無駄無駄無駄無駄！』

だが普通の人間がスタンドに敵う訳もなくワールドのラツシユのスピードについてくれないと思っていたが…。

「いいぞ楽しくなってきたああ！」

スタンドのラツシユに対抗してきた。ワールドの素早いラツシユを自分のラツシユの攻撃で相殺する。

だが最強のスタンドのワールドに敵う訳もなく、いくつかはレオーネの体に直撃する。

ふん。無駄無駄。ザ・ワールドは最強のスタンドだ！

「くっ！なんだよその能力…。ずるいだろ…」

「ずるくねえよ！俺を騙して金を取る方がずるいだろ！」

レオーネの愚痴に突っ込みを入れる。いやでもこの野郎には金を払わせる！絶対にだあ！

「レオーネ姉さん！避けてくれ！」

レオーネの背後から声をかけたラバック。その手には糸で纏わせた身の丈程の槍。その槍がラバックの手から放たれ俺の胸に向かって飛んでくる。

しかあし！俺はここでやられはせぬ！今から使うのはもちろん、あの技だ。

「行くぞ！ザ・ワールド！時を止まれ！」

その瞬間、時が止まった。スタープラチナの時と違い、今回の時を止めれる時間は1秒。時間が止まったことを確認した後、ゆっくりレオーネとラバックに近づく。

「1秒経過」

ゆっくり近づき、飛んできていた槍も静止している状態。その槍をワールドのパンチで粉々にする。

「2秒経過」

近くにいたレオーネの体を軽く殴る。時間が止まっているので殴られた反動で体が吹っ飛ばはずだが少し立っていた位置が変わるだけ。時間が動き出した時に攻撃のダメージは体に襲い掛かる。

「3秒経過」

俺の近くに張り巡らせていたクローステイルの糸を手刀で斬り裂く。かなりの数の糸が俺の近くに設置されていた。少しでも早く動いていたら切り刻まれていたな。

「4秒経過」

ラバックの手に装着してあるクローステイルの本体を手刀で粉々にする。

「5秒経過」

帝具を壊したことを確認したことに後にラバックの体を殴り飛ばす。レオーネの時と同様、時間が動き出せばダメージが体に襲い掛かる。

「まだ時間がある……。でもほかの奴らまでの距離が遠すぎるな、これで一旦止めようか。」

『そして時は動き出す!』

「ぐあっ!？」

「げへえっ!？」

時が動き出した瞬間、レオーネとラバックの体が後方に吹っ飛ぶ。そのまま飛んでいき大広場を囲っている階段に直撃し、そのまま気絶する。

「安心しろ。軽めにしておいた」

今回は仕事じゃないからな。殺しはしない。

「な、なんだよ今の!? 姉さんとラバックが吹っ飛んだ!」

タツミは驚きの声を上げる。これがザ・ワールドの能力。今は秒単位でしか時を止められないが、いつかはもつと長く時を止めて見せよう!

渾身のどや顔を輝かせていると、背後からとてつもない殺気がした。

後ろを向くとバカでかいハサミが俺の首めがけて両断しようとする。ここで俺の秘儀! 発動!

「すみません」

「謝るくらいならするんじゃねええ! 秘儀! プリτζジ避け!」

背中を限界まで反らし、まるでプリτζジのような形でハサミの両断を回避する。

だがそんなことをしていると遠くから光の弾丸が飛んできた。

「うおおお! その幻想をぶち殺おおおす! そげぶ!」

俺の右手に宿っている力・『幻想殺し(イマジンプレイカー)』。この能力は異能の力だったらどんなものでも打ち消す。普通の弾丸ならまだしも光の弾丸だ。しかもエネルギーたっぷりの。異能には間違いなし!

「ちっ。外したか」

遠くからその弾丸を飛ばしたのはもちろんのこと、マインである。相棒・パンプキンを構え軽く舌打ちをする。

「ああ！君はあの時のピンクちゃん！」

「だれがピンクちゃんよ！マインよマイン！」

「悪い悪い。つてかいきなり撃つな！殺す気か！」

「そんな訳ないでしょ・・・たぶん」

「たぶんだど!?!この野郎、ぶっ飛ばすぞ！」

マインに向かって怒鳴り返すがマインはそれを無視しこちらを攻撃してくる。

迷いなしにだ。

「だあああ！めんどくさい！ベクトル反射！」

某学園都市の能力者の頂点に立つものが持っている能力『一方通行』。これはあらゆる運動（ベクトル）の向きを変えることができ、それを反射することができる。それを
使いマインの放った攻撃をすべて反射し、マインに向かって飛んでいく。

ここでアク○ロリータって思った奴出て来い。愉快なアートにしてやりからよオ。

「きやあー！」

マインの近くに着弾し、その爆風によってマインは体勢を崩す。

しかし、それを黙ってみている者はいない。

先ほどハサミで襲ってきた女性、シエーレである。

「奥の手！エクスタス！」

エクスタスの奥の手、鉋（エクスタス）。金属部分の発光により、強烈な目くらましを行う。

それを完璧に喰らった俺は……………。

「あああああああ！目があああああああ！目があああああ！」

こうなる訳だ。少しの間、目が使えなくなるわけだから回りがよく見えなくなる。

「とどめです。すいません」

ハサミの刃の部分を大きく開き俺を真つ二つにしようとしてくる。が、それでやられる俺ではない。

「時を止まれ！ザ・ワールド！」

またまた時は止まった。

だが目がやられたおかげで視界が悪いので、時を止めていられる時間の中の7秒を目を治すのに専念した。

「7秒経過」

やっと目が見えてきた。まずはシエーレの体を軽く蹴り飛ばしておく。

「8秒経過」

次に取った行動は、できる限りメインに近づくことだ。まだ時を止めれるのだからこれを有効に使おう。

「9秒経過」

宙に浮かびながらマインに近づく。マインは先ほどの爆風で地面に体が倒れている状態。懐から数本のナイフを取り出しマインの服に突き刺す。これでこの子は動けないはずだ。

「10秒経過。心配だな。ダメ押しにもう一本」

残ったナイフを取り出し服に突き刺す。これでOK。

「11秒経過。時間だな、『時は動き出す』」

「きやあー！」

「ええ!?う、動けない!」

先ほど通りにシエーレはそのまま吹っ飛び、マインは服にナイフが刺さっているので身動きが取れない。

「これがザ・ワールドだ!」

バアアアアンツ!

決まった。これこそ完璧なジョジョ立ち。見ているか全世界のジョジョファンのみんな、オレはいま完璧なポーズを決めたのだ。

「さて、次は誰だ?」

そして俺の目の前に現れたのは、銀色の鎧を身に纏った男・ブラートだ。

「俺の名前はブラートだ。兄貴かハンサムって呼んでくれ」

「おう、俺はリュウだ。よろしくなハンサム」

「おお！いい気分だ。さて！どっからでも掛かって来い、リュウ！」

かなりの熱血タイプのような、だが俺はこうゆうのは嫌いじゃない。ノリのいい奴は大好きだからな。

だがリュウがこいつがゲイだという事に気付くのは、少し先である。

「カツコいいな。なら俺もカツコよくなるぜ！変身、雷電!!」

かなりカツコいい(ダサイ)ポーズを決める。その瞬間、青白い雷が俺を包み込む。雷が止んだ時に出てきたのは、全身がサイボーグのボディ、高周波ブレードを身に付けたメタルギアの登場人物、雷電の姿となった。

「どうだ。こっちもカツコいいだろ！」

「おお！お前の中々カツコいいな。これは楽しくなりそうだあ！」

ブラートはインクルシオの副武装の槍、『ノインテータ』を構え、俺に向かって走ってくる。

「速さなら負けないぜ！」

足に高周波を流し込み、いつもの走るスピードの数倍のスピードで駆け出す。

これなら100mでボルトにも負けないぜ！

「早いっ！ぬおおお！」

腕の力を限界まで搾り出し、俺に向かってノインテータを叩きつける。

「っ！」

当たる瞬間に右に避ける。地面に直撃したノインテータ。その瞬間、地面に大きな亀裂が出来、2メートルほどのクレーターが出来た。

「たあー！」

背中にある鞘から刀を取り出しブラートの胸に斬りかかったが見事に弾かれた。

「むう……。硬いな」

「俺の帝具を甘くみるなよリュウ！」

槍を大きく振り回し俺に攻撃してくる。上からの振り下ろし、下からの斬り上げ、横からの薙ぎ払い、体を捻つての斬り落とし。そのあらゆる攻撃を刀で軽く弾き返す。

「中々強いなりユウ。俺も燃えてきたぜ！」

「俺もだハンサム！ワクワクしてきた。だけどそつちには後二人もいるんだ。少しだけ本気で行かせて貰うぜ！」

背中にあつた鞘を左腰に移動させ、手に持っていた刀を納め足に力を入れブラートに向かつて走り出す。

「なら俺も行くぞ！」

槍を構えなおし俺の攻撃に備えるブラート。だが、この技はとめる事が出来ない。
なぜなら【早すぎるからだ】！

この世界に来て、はじめて考えた俺の技。

「抜刀術…活人剣！」

雷電さん。活人剣の名前借りました★さーせん

鞘についてある銃を撃つときに使うトリガー部分を引く。その瞬間、鞘に入っている火薬が爆発しその衝撃で収めた刀が物凄い勢いで飛び出す。それに合わせてリュウは刀の柄を掴みその飛び出した速さを利用して、ブラートの鎧の胸の部分に斬撃を叩き込む。

ガアアアアッ！

お互いがすれ違った瞬間、ブラートは糸の切れた人形のように地面に倒れた。

「安心せい…。峰打ちじゃ」

言いたかった台詞第13位！低いな…。

「さて、そろそろ幕引きかな？」

最後はナイトレイドの切り札、アカメ。

「タツミ。お前はここにいろ、帝具使いのみんながやられたんだ。帝具を持っていないお前が行ったらすぐにやられるぞ」

「わかったよ…。確かにあの兄貴を倒すほどだ、多分俺じゃ勝てない」

「そんな悲しい顔をするな。私がなんとかしてあいつが仲間になれるか試してくる」
村雨を抜きゆつくりと俺に近付いてくるアカメ。俺はすぐに分かった。

「あんたがこの中で一番強そうだな」

「ナイトレイドのアカメだ。よろしく頼む」

「あ、ご丁寧にどうも。俺は「リュウだろ？私達全員知っている」さいですか……」
名乗る前に言われた。こやつ…やりおる…。

作者「なんのこつちや」

雷電の姿から元に戻る俺。あの姿結構キツイんだよなあ。

「では行くぞ」

「そろそろ俺倒れそうなんですけど……」

「問答無用」

さすがアカメ。人とは比べられない理不尽さ！そこに痺れる憧れるう！

作者「すこし黙ろうか？」

さーせん。

「葬る！」

やめてくれええええ！俺死にたくないよおお！

アカメの横斬りを二つ目の秘儀・リンボー避けで躲す。素晴らしいねこの技。さすがだよパトラツシユ！↑馬鹿です

だが、そんな事を言ってる場合じゃない。アカメの鋭い斬撃は下手をすればスタンプラチナより速いかもしれない。スタンドを出して居ない今の俺じゃ下手すりゃ首が飛ぶ。

「なら、卍・解!!」

何も持つて居ない状態で卍解する。その姿はもちろん某死神代行の卍解…。着ている死神の服、死覇装は上から下まで漆黒の黒の色、そして手に持っている刀は黒の刀。全てが黒色で染められている。柄も鍔も刀身も。そして最後には「卍」の形をしている。

「天鎖斬月!」

ちなみにモデルはまだ破面の時の姿な。

(中々の闘気だ…。確かにタツミを戦わせなくてよかったかもな)

お互い刀を構え戦闘態勢に入る。リュウもアカメもこれまで感じたことのない緊張感を。

(強いなこの子。ザンクやさつき倒した奴らとは比べ物にならないな)

(デストロイヤーと言われるのも領ける。ザンクを倒したのも単なる偶然ではないのかもな)

そして、二人同時に動き出した。

ガアアアアアアアアン!

村雨と天鎖斬月が交わる。その瞬間、凄まじい剣圧により先ほどの戦いで出来た岩が吹き飛ぶ。

「ぬう!」

「くっ!」

二人もこれは予想外。お互いはこう思った。「ここまで強いとは」。だがそれは嬉しいことでもあった。二人とも暗殺や殺しなどの以外の仕事でこんなに強い奴と戦えるなんて。

二人は自然に笑みがこぼれる。

さて、さつさと終わらせようか。

一旦後退し、すぐさまアカメに斬りかかる。だがその程度の攻撃はアカメには効かない。軽く防がれたのだ。

アカメもやられっぱなしは好きではない。アカメの反撃。

ギヤギヤギヤギヤギヤギヤリイン!

二人の劍撃の速さは劍を学んでいる奴らとは比にならない程のスピード。

しかしそれもそれなりのデメリットがある。速ければ速いほど体力が無くなる。だからお互い一つの結論に至った。

(次で終わらせる)

今回の出来事はリュウをナイトレイドに勧誘するという名目である。いくら楽しい戦いでもこれ以上の戦いは望まない。

「うおお！」

「はああ！」

これが最後の一撃。二人の刀は交わることなくそのまま振り下ろされる。

その刀はお互いの頸に向かって振り下ろされる。

アカメの村雨に少しでも傷が付けば即死。

リュウの天鎖斬月に斬られたら一瞬にして頸が飛ぶ。

己の力を込めた刀はそのまま振り下ろされる。

後、数センチの所。

勝ったのは

。

どちらでもなかった。

二人の頸は繋がったまま。二人の刀はお互い同じ考えだったのか、刀は頸に当たる寸前に止められていた。寸止めである。

二人は軽く笑った後、自分の刀を下ろした。

「さすがだアカメ。俺もさすがに死んだかと思った」

「殺しはしない。今回は勧誘が目的だからな」

「まあ大体話しは見えるよ。改めて聞こう。その勧誘ってのは？」

大きく息を吸うアカメ。そして強い意志が籠もった言葉でこうリュウに伝えた。

「ナイトレイドに入らないか？リュウ」

第五話

ナイトレイドの戦い（テスト）が終わり、気絶させた人たちも全員も目が覚め、俺たちは近くのベンチに座り俺を襲った理由を話してもらった。

前々から俺のを見ていたらしく今日のザンクの話をしたときに俺を勧誘することを決めたらしい。（´ω´）ノナルホド！

だがナイトレイドの人たちの中にも不満に思う人もいる。帝具を持たぬものが帝具持ちを倒したのだ。これは今までの帝都1000年の歴史ではありえないことであった。逆に言えばリユウをここで勧誘できなければいつかは帝都に住む住民としてナイトレイドに楯突くかもしれないのだ。この中でリユウに勝てるのはブラートかアカメのどちらかである。先ほどの戦いでも二人は全然本気を出してはいなかった。本気を出せばどうなるんだろ？ワクワクこの人達も切羽詰まっているのだろう。今じゃ噂ではえーつと…テスト将軍？

作者「エスデスな」

なるほどS・DEATHな。把握。で、そのエスデス将軍が帰ってきてるらしくてそいつがめっちゃくちゃ強いらしい。名前からして恐ろしいオーラが出てるよ。エスデス、

恐ろしい子……………。

ついでに言うとおネスト大臣の話も聞いた。いやあともない屑野郎だね。俺の必殺マジシリーズでぶっ飛ばしてやろうか。趣味でヒーローをしている俺からしたら言語道断！ブッコロロロロロス！

「それで俺をナイトレイドに？」

「ああ。お前の力があれば革命に大きく近づく。力を貸してくれ。リュウ」

差し伸べられたアカメの手。俺はその手を掴もうか一瞬迷ったが、俺はその手を握った。

確かに今の帝都には革命が必要だ。ただでさえ苦しめられている人達がいる。帝都を操るために子供の陛下の裏に隠れて動いている。こいつはぼっこぼこのミックミックにしないと。

やってやる！やーってやる！やーってやるぜ！いやなあーいつをポーコポコにい！

（〇〇）／ウホッ

みなさん。ガル〇ンはいいぞ！

「分かった。俺の力が役に立つなら協力する！よろしくな！」

「っ……………ありがとう。リュウ」

「うおー！リュウが仲間になったー！」

「熱い男はいつだって大歓迎だぜ」

「ちえっ……俺のハーレム計画がまた遠くなった……。しかも俺の帝具つぶされたしよお！」

「あ、それならちゃんと直してやるから帝具見せてくれ」

しまった……。時を止めているときに潰したのすっかり忘れてた（一一）

ラバツクの手のひらには腕に装着するクローステールの一部分。これが潰れたらもう動かないらしいな。まあ潰したのは俺だからちゃんと治すよ。もちろんあれでな。

「クレイジーダイヤモンド……」

俺の背後から出てきたのは、体にハートマークが多いのが特徴なスタンド。こいつの能力は「人の傷を治す」のと「物を直す」。

『ドラー！』

粉々になったクローステールに拳をぶつける。すると黄色の光に包まれ粉々になった部品一部一部がくつついていき壊れる前の元の形になる。

「ほら、これで元通り」

「うお!?直った！お前のその能力一体なんなんだ？」

「これ？これはスタンドって言って精神エネルギーが具現化したものなんだ」

「うおお！カッケー！」

目をキラキラと光らせて俺のスタンドを見るタツミ。わかるぞ確かにかつこいい！

本当ならスタンドはスタンドを持つ者にしか見えないんだがそこは大人の事情で見えるようにしている。

おそらく神様の仕業だな…。

（おほほほ！おひさしぶりいい！）

「うげえええええ！この汚らしいアホがあああ！」

「ど、どうしたんだリユウ?!」

「だ、大丈夫だ……。問題ない……………」

恐ろしいものを思い出してしまった…。元はといえばあのいババアが俺をゴミクズとして捨てなかつたらこんなことには―！怒りだあ！憤怒の炎オオオオオ！

今度会ったら焼き尽くしてやる。俺はそう心に決めた。

「じゃ、アジトに引き返しますか」

「そうね。私はこんな変な奴いらないんだけど！」

おしとやかなシエーレとは逆でかなりの毒舌だなマイン…。変な奴で悪かつたな！確かに変な奴かもしれないが俺には女の子を優しく思う心はちゃんがあるんだぞ！（+

〇十)

しっかし。いやあ暴れた暴れた。今回は人は殺さなかつたけど少しは本気を出せた。けどスタンドを使いすぎて体力がないんだよね。リュウのHPはもうゼロよ！ま、今からはそのナイトレイドのアジトに行くだけだから別にいいんだけどね！

だが俺たちはとんでもない事を忘れていた。ここは何人もの住民が活用している大広場。夜中とはいえ起きている人もいるはずだ。そんな中で俺たちはさつきまでドンパチして暴れていた。それを不審に思つて帝都警備隊の人を呼ぶ者も……。

「いたぞ！ナイトレイドだ！」

いるわけである。

「(。・。・。)? ナニゴト」

「やばい！帝都警備隊だ！みんな今すぐ逃げるんだ！」

ラバツクの声を聞き全員一斉に走り出す。だが一名だけ動かないものもいた。

「おいリュウ！何やってんだ!？」

「ハンサムたちは先に行け。ここは俺が任せとけ！」カワイクウインク

「そんな気持ち悪いウインクいらぬわよ！」

デスヨネー

「あいつもナイトレイドか！取り押さえる！」

「そうはいかないぜ！独房で暮らすのなんかごめんだ！お前らにはこいつをプレゼントしてやる！」

両腕を頭の上にあげ、そして唱える。

「我らに喜びを与えてくれ神よ！オラに力を分けてくれええ！」

すると両手の手のひらに遠くから飛んでくる光の玉が集まっていく。その球は徐々に集まっていき、大きなエネルギーの塊になる。これを見て分かった人もいるだろうが、違あう！その塊は中で光同士が衝突を繰り返し、より一層大きな球となる。

「いくぜえ！必殺！」

手のひらに俺の力を流し込むと、大きさはより増していき、形を変えていき、灼熱の熱を持った……………。

チーズになった。

俺以外「……………はあああつ!？」

俺以外が目玉が飛び出るくらい驚き口をぽかんと開けている。しかしアカメは例外でそのチーズを美味しそうに見て口の端から涎を垂らしている。

「アカメ! また後で美味しいチーズバーガー食わしてやるから今は我慢してくれ」
「うん」

即答!!

「喰らえええええ! チーズ玉!」

アカメ以外「そのまんまじゃねえか!!」

え? 何かに似てるって? ナンノコト? ボクワカラナイヨ!

そのチーズは帝都警備隊の頭上に移動し、上から盥が落ちてくる要領で落下。ただでさえ滅茶苦茶熱い出来立てのチーズだ。それを喰らってでる言葉といえば…。

「「あつづううううううううう!」」

（、、3、、）ワロチ

落下したチーズは警備隊の全員を巻き込み、地面に落ちて崩れそれは体中に纏わりつ

く。大きくしかも粘々しているんだ。ちょっとやそつとじゃ解けないぜ？（／＼ω＼）
帝都警備隊がチーズに苦戦している隙に俺&ナイトレイドはアジトに向かった。

第六話

ナイトレイドアジト——

「殺し屋のアジトには見えないのは俺だけか？」

「見つかりにくさと逃げやすさを考えて作っているとこういう形になったんだ」

「俺のイメージでは殺し屋のアジトって帝都とかの地下にありそうなイメージなんだが……」

「なんであんな所の地下に作るのよ。変な偏見を持つんじゃないわよ」

「サーセン」

いや〜みなさん。どうもリユウです。ナイトレイドの勧誘を受けて帝都から何十キロか離れているナイトレイドのアジトに案内されたんだが。なんじゃここ！ってというのが俺の反応だ。見た感じの事を伝えると山の中に岩でできた城みたいなのが飛び出てる感じだ。説明が下手で悪かったな！

で、今からそのナイトレイドのボス、ナジエンダっていう人に挨拶しにくらしい。帝都で手配書を見たけど顔をあんまり覚えていない訳だ。やべえ、超怖くなってきた…。まさかとんでもないガチムチのおっさん？ボディービルダーのようなとんでもな

いガタイの持ち主？それかやばいくらい老けてるジジイ？あ、ナイトレイド辞めたくなってきた……。

「あのさ、ボスってどんな奴なんだ？」

「んー…、強くていい人だ。けど怒らせたら死ぬぞ？」

アカメの口から出された一言。俺の逃走本能が働きたした。

「聞きたくなかったよそんなの！リユウおうち帰る〜！」

「逃げるなりユウ！」ガシッ

「離せハンサム！いやブラートオ！俺は死にたくないんだヨオ！」

「大丈夫だ。『すぐに良くなる……』」

「何が!？」

「気を付けとけよりユウ。そいつゲイだぞ」

「……………え？」

レオーネの一言に俺の大事な何かが奪われそうな予感がし、しかも反射的に両手で尻を抑えた。

「まあクワれないように気を付けろよー」

「いやああああ！助けてええええ！」

ブラートに引きずられながらボスが居る大広間へ連れていかれた。

*—

「戻ったぞボス。リュウも連れてきた」

アカメの声と同時に大広間の扉が開かれる。逃げるのを諦めた俺はブラートに引きずられながら入室する。もうどうとでもなりやがれ……。煮るなり焼くなりクウなり好きにしゃがれってんだ！あ：クウのは嫌だ。男として大切な何かを失う……。さあ！ボスって誰だ！俺が相手になるぜ！↑何の？

「帰ってきたか。ようこそナイトレイドへ。リュウ」

大広場の中央に立っていた女性、ナイトレイドのボス・ナジエンダ。俺はその人を見た瞬間、ブラートの手からすり抜けナジエンダの元へ一直線に走りだし、ナジエンダの手を掴み目の前で膝をつく。

「結婚しよう」

「はっ。」

「デメエナジエンダさんに何言ってやがるんじやあああああああああ！」

「ひでぶろう!」

ラバツクの回し蹴りが俺の顔面に炸裂し大広間の中央に飛んでいき三回ほどバウンドした後、エビ反りの形をしたまま地べたを滑っていく。

俺、サッカーボールになりました! (嘘)

「ま…誠に申し訳ありましえん……………」

顔の右頬があり得ないぐらいに腫れ上がった状態のままの謝罪&土下座。しかもラバツクの手によって縄でグルグル巻きにされた状態でだ。俺、もう悪いことしません…。ちゃんとお手伝いもします…。宿題も忘れましえん……………。許してくらーさい。

「ははっ…。いきなりおかしくなったと思えば冗談か、中々面白いやつだ」

初めて会って軽く鼻で笑われた。第一印象、リユウバカってことになっちゃまったな。

いいもん! 気にしてないもん! (涙) いやあナジエンダさんって美人だな。ガチムチとかボディービルダーとか言ってるごめんよ!

「私はナジエンダ。このナイトレイドの頭を務めている。よろしく頼むなりユウ」

「よろしくつす。ってかどんだけ俺の名前知ってるのあんたら……………」

「あんたは裏の世界だったら意外と有名なのよ? あのザンクを帝具なしで倒したやつな

んだしね。っていうか、あんたどうやって倒したのよ」

「どうって……あの手この手でだけど」

「意味が分からないわよ！」

「確かに気になるな。おいリュウ。お前のその能力は帝具か？」

「え……いや帝具……かな？それとも生まれつき持つてる能力みたいな……とか？」↑嘘

神様からもらったみたいなこと言ったらまた馬鹿みたいな目で見られるから口が裂けても言えねえ！一応帝具だって事にしよう！誰も気づかないだろうし。

「なら形のある帝具ではないんだな。エスデスのような帝具だな」

「デスデス將軍？」

エスデスな！

「さて、リュウ。今日からナイトレイドの一員として頑張ってくれ」

「何やら期待されてる？おう。任せとけ！」

「よろしくなリュウ！俺はタツミ。お前より前にナイトレイドに入ったんだ」

「おう。よろしくなタツミ」

男同士の力強い握手を交わした俺とタツミ。年も近いから気が合いそうだな。

顔は俺のほうが上だけだな！だって俺イケメンだもん。

「これでナイトレイドも9人か。戦力も増えてきたことだし今回も依頼が来ているぞ」

「依頼？」

「今回は帝都の下町で起こっている連続殺人者を排除することだ。人数は6。レオーネ、ブライト、ラバック、マイン、タツミ、シエーレ。お前たちで排除しろ」

「「「「了解！」「」」」」

「え？俺は？」

「お前は今日入ったばかりだ。まずは色々な訓練がいるから、お前はアカメの元で働け」

え？

「まじか!？」

「まじだ。アカメ、リュウはお前に任せる。足手まといになるなら斬ってもいいぞ」

「うん。わかった」

いやいやいやいやいや!少しは否定しようぜ!俺ナイトレイドに入ったのにもう死んじやうの!?!2度目の人生1か月で死ぬのは最悪だろおがぁ!うまいチーズバーガー食わしてやらねえぞ!

「では、任務開始だ!!」

翌日

しても口答えしたら100回増やされるし：ランニングの時は後ろから全速力で追いかけられるし：。体の節々が悲鳴を上げてらっしゃいます。もう断末魔の悲鳴になっちゃうよ？俺死んじやうよ？

しかも昼飯はボリウムが多すぎて吐きそうだ……。なんだよカレーシチュー丼つて。カレーとシチューがミックスしていてとんでもないハーモニーが奏でられたぞ。味は意外と美味かったけど。隠し味付きなのかな？

コンコンツ

「ん？どうぞ？」

扉のノックで目が覚める。そこから入ってきたのは…。

「アカメ？」

「いきなりで済まないが任務だ。あと一時間後にボスが説明するらしいから準備はしておいてくれ」

「まじでか。あ、あとアカメ！」

「どうした？」

「今日の訓練の指導ありがとな！」

「あ…ああ。また明日からもあるからな。ついでに量は倍だ」

「こんちくしよおおおおおおおおおお！」

アカメが返事をした時顔が赤くなつたのは何故だ？

*—

「訓練で疲れたと思うが初任務だリュウ。帝都で女たちの誘拐事件が発生している。その犯人は帝都で住んでいる貴族たちだ。女たちを攫つては強姦を続けて痛めつけているようだ。これからの平和な世にそんなやつらはいらない。市民にあだ名す外道を刈れ」

「よつしやきたあ！ここで俺はすごいって所を見せてやるぜ！」

「ボス。その貴族の名前は？」

「シルヴァという男だ。夜は大広場の近くにある屋敷で女たちと一緒にいる。だけど油断するな……。護衛の兵たちは中々の手練れもいる。そいつらも消せ」

「わかつた」

「よしアカメ！ぱつぱと終わらせるぞ。俺は今日の訓練で全身筋肉痛だからな」

すこし笑いながらしゃべっているとアカメが俺を冷たく睨んできた。

「あの訓練で簡単に音を上げるくらいじゃ、簡単に任務はこなせないぞ。これはタツミにも言ったことだが、油断していたら……………」

死ぬぞ」

「っ!？」

アカメの放った一言。その言葉で俺の全身に鳥肌が立った。体中に嫌な汗が流れ呼吸もひどくなってきた。そうだ、いまから俺がやるのは人を暗殺すること。少しでも気を抜けば死ぬかもしれないんだ。油断はしたら死ぬ…か。

(でもそんな言い方はないだろ。せめて頑張れくらい言ってくれても……)

「すぐに出発するぞ。準備しろ」

「お、おう!」

その日の夜。俺とアカメは帝都へ向かった。俺思ってたんだけど、アカメ普通の人間なのになんで俺より早く動けるの? 殺し屋だから? チート使いの俺が早く動いたの間に合わないなんて、アカメ……やりおる!

まあこんな感じで移動していたわけだ。そして帝都に着いた俺たちは大広場に到着し今回のターゲットのシルヴァを捜し始めた。

「しっかし、夜だと視界が悪くなって見つけにくいんだよなあ」

「ボスは大広場の近くと言っていたすぐに分かると思うが……あれか!」

「え? (。|。) 何処何処?」

アカメが指差している方向を見ると確かに大広場の近くにある少し大きな屋敷が

あった。こりや分かりにくいわ……。暗いから景色と溶け込んでるし……。だって屋敷真つ黒だよ真つ黒。真つ黒黒介だよ。目玉ほじくるぞー……

「ついでにどういった作戦？」

「屋敷にどうしようと侵入して先に護衛兵達を葬る。シルヴァはその後だ」

「了解！ じゃ行くか！」

屋敷に接近した俺たち二人は外の警備の男達をフルボッコにした後、屋根裏に侵入した。

フルボッコとはいたものの骨を数本折ったのと顔面をオラオラしたただだから大丈夫だ。いや、大丈夫じゃないな……。気にしなアい!!

「屋根裏到着だな」

「よし。リュウ、お前は今回が初めてだ。身の危険が危ないと思っただらすぐに逃げるように頼む」

「俺ただけ信用ないのよ……。大丈夫だよ！ 俺は死なないからよ！」

「っ！」

アカメの目を見て、自分の覚悟を込めた言葉でアカメに宣言する。この言葉に偽りは無い。帝都が腐っているのは俺も耐えられない。なにより影で隠れてこそコソコソやって弱い奴が殺されるのは我慢なら無い。チキンにも程があるしな！ 性根をへしおつてや

りゅー！」

「途中から声に出てるぞ？」

「……………あ」

やべえ…恥ずかしくなってきた。しかも最後は噛んじやったし。しかも女の子の目の前で……。oh No！

「その方がリュウらしいな。その言葉信じよう」

「おうよ！可愛い子を置いて死にたくないしな！」

「わ、私は可愛くないぞ？それより今は任務を優先しろ」

「おっと、すまない。切り替えるよ」

「三秒後に突撃だ」

「ラジャー！」

アカメが村雨を鞘から引き抜きいつでも襲えるように構える。俺は今回は拳だぜ！

三秒前

「リュウ」

「ん？」

一二秒前

「これが終わったら美味しいと言っていたチーズバーガーを食べさせてくれ！約束だぞ」

一秒前

「まかせとけ！」

O!

ドカアアアアアアアアアアン!

屋根裏の板を足で踏み抜き、部屋に突入する。

「だ、誰だ!?!」

部屋の置くに居た体がぶくぶくと太っている白髪の子。しかもその周りにはかなりの傷跡が残って地べたに横たわっている女の人達。なかには涙を流しているものもいれば目が開いたまま失神している人もいた。なるほど、帝都のクズさがいかにも身にしみて分かってくるぜ。

「ナイトレイドだ!」

あ、ちなみに俺は顔がばれないように虚の仮面被ってるから!

リユウsid

「護衛兵―!侵入者だ―!」

叫んだ瞬間、デブの近くの襖がバンツ!と開かれる。そこから護衛の兵が四人。完璧

な武装をしているお陰でアカメの村雨の刃が通りそうにないな。

ならここは俺が！

「死ねー！ー！ー！」

「先手必勝！正義の鉄拳！」

パツと開かず！グツと握って！ダンッ！ギュー…ドカアンッ！

手は開かず拳を握り、腰を低くし、足で大きく踏み込み、拳に宿っている光を飛ばす。その光は巨大な拳となり護衛兵の一人に向かって飛んでいく。

「グヘエア!？」

そのまま部屋の置くまで飛んで生き、壁に直撃する。拳の攻撃と勢い良く壁に当たった衝撃で護衛兵は息を引き取る。

「貴様ー！許さんー！」

「許さんのはこつちだこのブサイク兵！」

知ってるか？世界の人間たちよ。人間ってのは肉体が勝手にセーブしちゃうから100%の力を出せてないんだとオ。だが俺にとって、そんな限界！お構い無しだ!!

「100パーセントオー！」

「ガハアア!？」

その拳は兵の胸に直撃し、その人間離れた威力で直撃した拳が貫通する。うわあ…

内臓とか見たくないものを見てしまった…。でもこれも仕事だ！我慢我慢！

「よおし！アカメは大丈夫かな？」

アカメ sid

「っ！」

村雨を構えたアカメが一気に残りの二人を片付けようと近付く。しかし頑丈な鎧を武装している兵士だ。そう簡単にも倒せる相手じゃない。

だが、そんな鎧、アカメにとっては無駄なものだった。

武装している二人が自分の武器をアカメに向かって振り下ろす。その攻撃を軽くかわしたアカメは刀を刃から峰に持ち変える。避けて空中に移動したアカメは体を捻り、そのままの勢いで兵士たちの顔面に向かって振り払う。アカメはかなりの腕の殺し屋だ。腕力もそれなりにある。その腕力と捻ったスピードで兵士たちの顔につけているマスクを叩き割る。

「なにっ!?!」

「馬鹿な！帝都で一番堅い鎧なのに!?!」

「そんなもの意味がないぞ」

村雨を峰から刃の方に持ち替える。狙うは兵士たちの頸。

「葬る」

横一閃に振り払った刃は二人の頸に深く傷を付けた。その一撃で即死だがさらにそこから呪毒を流し込む。あれで死ななかつたとしても呪毒を流されているから結局は死ぬ。右へ行っても左に行っても死、あるのみ。

s i d o u t

「ひい!!」

俺たちの攻撃を見てビビッてしまったデブことシルヴァ。腰が抜けてしまったのか足で腰を下ろしたまま足で地面を蹴りながら後ずさりする。

「おいおい逃げんじゃねえ!」

「ひっ!?!」

デブの胸倉を掴みこちらに引き寄せる。おいおいクソデブ。汗流しすぎだ。すんご

いくさいぞー!

胸倉を掴んだままデブの足が地面に着かないくらい持ち上げる。デブだからクソ重
いいいいいい!

「き、貴様は一体……何者だっ……」

「俺か? そうだな……」

言いたかった台詞第7位

「俺……ゾンビっす」

「なん……だど?」

「喰らえ! 800パーセントオ!

「がはああ!」

ドカアアアアアアア!

渾身の800%。デブに向かって放ったその拳は見事に顔面に直撃。直撃した後、力が強すぎたお陰で頸が吹っ飛ぶ。あ、まじで頸と胴体離れたからな?

「任務完了！」

満面の笑みのVサイン！

「良くやったなりユウ。怪我はないか？」

「大丈夫大丈夫！もし怪我あってもクレイジーダイヤモンドで治すし！」

「そうか。怪我がなくて何よりだ」

これは本気で俺を心配してくれた顔だな。いつもなら見ないオロオロした顔で俺を心配してくれてる。以外な一面を見て俺得！脳内のファイルに保存だ！

「さてと、さっさとボスに報告しようぜ！腹減ったしな」

「そうだな。今日は肉づくしだ」

「いや待て待て！昨日も肉食べただろ！栄養バランス考えてるのか！野菜も食べなさい
！」

そんな言葉を返すと、任務前の険しい顔じゃなく、アカメ自身気付かない位の可愛い女の子の顔で返事を返した。

「何の事だ？ふふっ……」

「やれやれ……可愛いやつめ」ボソッ

さてと、帰るか！

「よしアカメ！先にアジトに着いた方が飯をご馳走するだからな！」

「何ッ!?負けられない!!」ドドドドド

「ふんっ。この俺に勝てるかな………ってはやあ!？」

はじめての俺の初任務。無事に終了。

この後、俺は一キロほどの距離を空けられ、見事に競争に敗退。アカメには俺の知っているありとあらゆる肉料理をご馳走した。

勿論、チーズバーガーもな!!（へっ）ノ特大サイズですぜアニキイ!

第七話

「うおおおー！」

「(。▽。)キエエー！」

時間的に言うとな朝の六時かな？俺は訓練場と言う名のストレス発散所でブラートとガチンコバトルなうだ。あ、武器は模擬戦用な？俺はもちろん能力でだ。この前の俺の勧誘戦でブラートを気絶させたのが悔しかったのか俺を訓練としてよく誘ってくるようになった。この訓練でよく分かる、ブラートはこのナイトレイドで一、二を争うくらいの実力者である。あの時気絶させたのはまったくの偶然、当たり所が良かったのかな？ま、運が良かったと言う事で！（*、*）ニコッ

この前のアカメと一緒にの任務で俺はナイトレイドで正式にメンバーになった。あれは採用試験みたいなものだったらしい。アカメもそうだが、他のメンバーも俺を温かく迎えてくれた。まるで家族だな！ウレピー！あと、俺はこれから少しの間はアカメの下で働くようになった。ボス曰く、「アカメの下で働いていた方が得られる物も多いだろ？まだ入り立てのタツミもブラートの下で働いているしな」との事。まあ確かに！アカメの一つ一つが勉強になる。殺し屋としての動きや心得的な？毎回メモを持ち歩く

くらいだぜ！美少女と一緒に働けるとかいいね！最高だ。

「必殺う！アンパンチ！」

「狙いが甘いぞ！」

「ぶへえ!？」

ブラートの槍が俺の顔面に直撃！吹っ飛びそのまま地面で三回ほどバウンドした後、頭から着地。

「ああああ！頭がああああ！」

「大丈夫かりユウ！」

堅い地面に直撃したおかげで頭への激痛が半端じゃない！脳が揺れまくって今何が起こったかも認識できないほど。

「な……なんと……か……って、なんで俺をお姫様抱っこしてるでせうか？」

「あ？手厚く介抱するために決まってるんだろ？」

「ゲイに介抱されたくないわ!!」

「ゲイ？おいおい……大丈夫だよ、心配すんなよ……な？」

「否定しろよおおおおお！」

ダメだ！このままだと俺の貞操が奪われる！だれか！誰か俺に救いの手おおおおお！

ヒトに戻れなくなるううう！

「おいリュウ」

俺の色々な物が非常事態の時。神が俺に救いの手を差し伸べくれた。

「朝食を作る時間だ」

「アカメ様ああああ！」

白のエプロンを付けて髪の毛を纏めてポニーテールにしているアカメが来てくれた！このナイトレイドではアカメが炊事担当らしい。理由はつまみ食いが無限にできるから（らしい）。アカメの下で働いている俺も同じく…だ。ねえみなさん。女の子のエプロンっていいよね？なんか包容力があるというか。あと私め…ポニーテール大好きなのです！

ということではブラートの腕の中から逃げた俺は、アカメと共にアジトの厨房へ向かった。

「で、今日のメニューはどうする？」

「カツカレーだ！」

(朝からごっついもん食うな……。胃がもたれるぞ……………)

キランとした眼つきでドヤ顔を決めるアカメ。この子の胃袋はどうなっているのでしょうか……………。肉料理やチーズバーガーをご馳走したら一分もしない内に平らげました。化け物？貴女はインデックスですか？いやトリコかな？ま、一杯食べるのはいい事だ。健康的！……………なのかな？

「よおし！完成！自分で言うのもなんだけどこれはいけるだろ！」

自画自賛！

机にメンバー分のカツカレーを並べ、先にきたレオーネとボスとシエーレと一緒に食事をとった。

「おお！中々美味いぞこれ！リュウが作ったのか？」

「まあね。隠し味に味噌を入れてみたぞ」

「確かにおいしいですね。味噌を入れてくれているおかげでコクが一層深まっている感じがします」

「ありがと。おかわりあるからな」

「おかわりだ」

「アカメはもう少し限度というものを考えような!?つまみ食いの時で鍋のカレーもう半

分しかないから！」

「ふふっ。仲良くしていてなによりだ」

少しワイワイした食卓。帝都で一人で生活していたのと比べるとこっちの方が断然いいな。すごく楽しい。

他のメンバーも来てより一層食卓が賑やかになった。殺し屋つてもっと暗いイメージだけど意外だったな。そしてアカメさん？俺の分無くなるからおかわりストツプな？

朝飯を食べ終わった各々は自分のやることをするために食卓から出て行った。

「リュウ、食材や調味料が少なくなっているから買い出しに行ってくれないか？」

「買い出し？あいよ。何を買ったらいいんだ？」

「これだ」

小さなメモを差し出されそれに目を通す。

「了解だ。じゃ行ってくる」

帝都に住んでいた時に目に入ってきた人の表情とナイトレイドで話を聞いた今みる表情は違いがありすぎるな。目に入る人の10人中7人は暗い表情をしている。やっぱり今の帝都が腐りきっているからかな？ホームレスも多い。早く革命を起こさないと。ま、今は少しずつやっていくしかないけど今の俺は買物物を急がなきゃいけないがな……………」

大体の買物物を終えた俺は大きな風呂敷に食材などを詰め込み、肩に背負い、街をでようとする。

そんな時、ちよつとしたハプニングが起こった。

「きやつー！」

「ほえ？」

何かにぶつかつた手応えを感じ、そちらに振り向くとヘッドホンとかわいいリボンを着けた可愛いお姉さんが尻もちをついて倒れていた。いや、俺と同年か少し上かな？

「大丈夫か？お姉さん」

「痛た…………もう気を付けなさ……………ああああ！」

いきなり叫びだしたかと思うと地面に落ちて粉々になっていた飴が複数落ちていた。

「ちよつと君！飴踏み砕いたわね？どうしてくれるの……………」

「ええ!?俺が悪いの!?確かに踏み碎いたのは悪かったけど…そこまで怒らなくても……」

「弁償しなさい……ね?」

「ひいつ!?わ、わかりました!!」

これはやばい!につこりと目が笑っていない笑顔を向けられた瞬間、俺の本能がやばいと悲鳴を上げていた。

(早くしないとこのお姉さんにちよん切られるぞ?)

(何が!?そしてお前誰!?)

(作者だ!ではさらば!)

ってなんだそりゃ!?

「さ、まずはごはんでもおごってもらおうかな?」

「はあ!?飴だけじゃ……」

「口答え禁止ね?」

「わ、わかりました……」

素直に聞いておくか……。

【食事処】

「これとこれと…あとこれとこれね？」

「かしこまりました。しばらくお待ちください」

(やめてくれええ！俺の財布の中身の金がああああ！)

さつきからこの子食べる量が半端じゃない！アカメまでとはいかないが食いすぎだ！デザートもあり得ないくらい食ってる！パフェとかクレープとかアイスとかケーキとか!!俺の財布が叫んでるから!!

俺の財布「くかかけきこきかくこけかいこけかくきこききけかこかくけくこけか！」

叫び声ところじゃねえよ！

「いやあ人のお金で食べるごはんっておいしいね？」

「このドSめ…ソウダネ」

「あ、自己紹介がまだだったね？私はチエルシー。よろしくね？」

「俺はリュウだ。あとそろそろ飯を食うのをやめてくださいせえチエルシー殿… (涙)」

「んー、反省しているようだしね。いいよ」

「やったああああ!!」

拳を天に掲げガッツポーズ！これで俺は救われた！WRYYYYYYYYYYYY

YYYYYYYYY!

「リュウはなんで帝都に？」

「え？えっと、俺は買い出しかな？」

「買い出し？それは家の？」

「いや、そうだな……。仲間たちのかな？」

「仲間ねえ……。それってさ？……………」

小さな声で俺の耳元で囁く。

「ナイトレイド？」

「っ!？」

なんでわかった!?!俺がナイトレイドだつていう素振りは何もしていないのに。この人はそれを簡単に見破ってきた。誰だこの人は……。この人は誰で……何者なんだ？

「一つ聞く……。あんたは何者だ？」

「そんなに殺気ださないでよ。大丈夫、私も革命軍の人間だから」

「革命軍の？なんでそんな人がここに？」

「偵察みたいな感じかな？大丈夫だよ。私はかなりの殺し屋だけど手配書なんか載ってないから」

「え？（……？）それどゆこと？」

「後で話すよ。今は一緒にごはん食べよ？」

「お、おう……………」

その後、俺とチエルシーは運ばれてきた料理を二人で分けおいしくいただいた。やはりこの人中々食べるな。恐ろしい！

食べている間も俺は彼女への警戒を緩めなかった。

食事を終えた俺とチエルシーはその食事処から少し離れた路地裏に入っていた。

「さて、なんで俺がナイトレイドだと？」

「この前ナジエンダさんに聞いたんだよ。ナイトレイドに新しい仲間が入ったって」

「ボスが？ほほう、なるほどな」

「しかもこつちでも有名だよ？帝具なしで帝具持ちを倒した『デストロイヤー』の話を」

「そこまで大層な事してないんだが…。ちよつとアイツが俺の癪に障ることをいつてきたからな」

昔に告白した女の子を出しやがって！嫌で苦い思い出が蘇ってきたよ！憤怒の炎だあああ！

→このネタ楽しいな…。

「で、さつき言った載らない理由だけど…それはこれだよ」

次の瞬間、忍者が消えるようなドロンという効果音を出しながらチエルシーの周りから煙が出た。

「ぐわああ！ゲホゲホゲホッ！なんだ今の……………え？」

「これが理由だ。わかった？」

煙が晴れ、中から出てきたのはチエルシーかと思いきや、出てきたのはなんと！

姿や服もすべて瓜二つの【俺】が出てきた。

「な、なななな！なんで俺が!？」

「これが私の帝具・ガイアファンデーション！好きなものに化けるんだよ？」

帝具の変身を解き元の姿になるチエルシー。おいおいこれは反則だろ…。なんでも化けるっておれにとつちや素晴らしい帝具だ！いろんなものに変身できるなら女の子になったり女の子になったり女の子になったり！（女ばっかだな…）

「あ！なんでも化けるから顔がばれないんだ！」

「その通り、この帝具のおかげで暗殺がとても楽なんだよ。君の能力じゃ真似できないでしょ？」

「確かにな。俺の能力じゃそんな器用なことできないしな」

「でも君の能力は強いね。あのエスデスに勝てちゃうんじゃない？」

「さすがにそれは分からないよ。試したいもんだけど（試したくないけど）」

だってあの帝国最強の將軍だぞ!?俺が勝てるわけないし第一会いたくない!!噂ではDSの塊だとかなんとか…。しかも極度の拷問好き。さらには帝具持ちときたもん

だ。まさに最強（最恐）。

「あ、チエルシー、飴はどうするんだ？」

「飴？今はいいや。結構ご飯食べさせてもらったし」

「それならこれどう？」

ポケットのの中から今日のおやつとして食べようと思っていたグレープの棒付き飴。俺があれを踏み砕いたわけだし、また買ってこればいい話だしな。

「え？いいの？リュウのじゃないの？」

「いいよ。飴踏み砕いちゃってごめんな？」 ナデナデ

「う…うん！ありがとう！大事に食べるね」

喜んでもらえてなにより。この世界にない味だから喜んでもらえたらいいかな。わいはグレープが一番好きだからナア！

そしてお礼を言う時なんで顔が真っ赤？

「ぱくっ…ん!?おいしい！はじめての味！」

「喜んでもらえてなによりだ」

「ん〜！甘い〜。あ、そろそろ行かないと、また会えたらいいね」

「そっか。また会えるさ。その時は飴を大量に用意しとくよ」

「やった！じゃまたね！」

チエルシーは走りながら大きく俺に向かって手を振り人ごみの中へ消えていった。中々いい子だな。あんな子が殺し屋とは思えないが……。ま、いつか。

「よおし！今日は気分がいいからアカメに美味しいもん食わしてやる!!」
今回はカツ丼だな。

風呂敷を担ぎ直しアジトへ向かって俺は移動を開始した。

俺は、この時こんな風に思っていただろう。このような楽しく素過ごせる日々が続けばいいなど。アカメと一緒に飯作って、タツミと笑いあつて、ブラートと特訓して、レオーネの酒の相手して、シエーレと一緒に落としたり眼鏡を探したり(？)、マインの買い物にタツミと一緒にいたり、ラバックと風呂を除いてレオーネに拳骨貰ったり、ボスと一緒にタバコを吸ったり、みんなで力を会わせて任務をこなしたり。こんな毎日が来ればいいと俺は思っていた。

だが、現実はこちらも簡単には行かなかつた。俺が買出しに向かっている間に、タツミとレオーネ、シエーレとマインが帝都で薬を作り、スラムで生きている女の人を騙し連れて行き、薬を使って意のままに操る輩がいるらしく、それを暗殺しに任務に向かったらしい。

俺が戻った時に任務を終えて帰ってきていた。……が、悲しい報告を聞いた。マインと一緒に任務に向かっていたシエーレが、任務終了の帰り道、帝都警備隊のあの小女、セリユー・ユビキタスと戦い、マインを庇って「戦死」したという報告を……。

第八話

「……………いつつ！」

「マイン…私が食べさそう」

「一人で食べれるわよ……」

「冷めてしまう……」

「……………分かったわよ…あむっ……………」

この前の戦闘でマインは負傷、シエーレは戦死。ナイトレイドには重い空気が漂っている。それもそうだ。仲間の一人が殺されたんだ。マインが一番それを悔やんでる。この仕事をしていけば、いつかは死は訪れる。誰だって例外ではない。それがいつかは分からない。それは俺も一緒である。だが、これで帝都も分かったはずだ。帝具には帝具だと。これからは帝具使い同士の戦いが始まる。帝都と革命軍での帝具での死闘が始まる。

「大丈夫かマイン。食いやすい物作ろうか？」

「別にいいわ。腕が動かない訳じゃないから。それならデザートでパフェ作ってくれる

かしらっ？」

「任せとけ。極上のパフエを食わしてやる」

「む！極上？それならリュウ！私にも作ってくれ！」

「もうちよつと自重しようなアカメ？まあいいけど」

さすがはアカメだ。殺し屋としてのキャリヤが長いのかシエーレが殺されてもまったく動じてない。クールなままだ。

「ほらよ！甘すぎない程度においしくしたイチゴパフエだ！アカメは特大サイズな」

「来た！ではいたたく！」

「あら、おいしそうね？おいしくいただくわ」

「おう！隠し味付だ。この味は誰にも負けないぜ！」

「リュウおふあわりら（おかわりだ）！」

「食うのが速いのもいいけどちゃんと噛んで食べなさい！」

あ、俺ことリュウ。完全にナイトレイドのコックになりまちた！く（ゝゝゝ）> なんてかって？アカメが自分で作る料理より俺の飯のほうが美味いからだつてさ。

【訓練場】

「はあああ！」

「おおお！」

訓練場に顔を出せばタツミとブラートが模擬武器で訓練をしていた。しっかしタツ

ミ今日は何時よりも気合入ってるなあ。

「どうしたタツミ！腰が引いてるぞ！」

「ぐあー！」

ブラートの槍捌きを防ぐ事が出来ず、その打撃が脇腹に直撃し地面に転がる。

「おいタツミ。えらい気合入ってるなあ？なにかあったのか？」

「別に…、早くレベルアップしたいだけさ。俺はアカメと約束してるんだよ！絶対に死

なないって！」

タツミ……。

「そっか。なら頑張れよ！お前は強くなれると思うぞ。まあ訓練してない俺が言うのも

なんだけどなあ？」

「リユウは便利な能力があるからいいだろ？」

「俺のもそこまで万能じゃねえよ。まだ体力が無いからな〜」

「ならリユウ！俺たち三人で特訓するか？」

「はい……………」

見事に俺とタツミの声がハモる。

「鍛えるなら俺と組みな！みっちり鍛えてやるぞ！」

「おおおお！兄貴い！」

「さっそく行くぞ！レッスン開始だ！俺について来い！」

「おっしやああ！テンション上がってきたああ！＼（＾o＾）／

「兄貴！厳しく頼むぜ！！」

俺とブラートとタツミは軽い身支度を済ませ、先に走り出したブラートの背中を追いかけた。

「あ、傷ついたら俺がベースキャプで手厚く介抱してやるからな？」

「なんで顔が赤くなってるんだよおお！！（TOT）／

「色々イヤイからやめてくれ兄貴！」

【帝都宮殿】

「エスデス將軍。北の制圧見事であった。褒美として黄金一万を用意してあるぞ」
「ありがたいございます。北に備えとして残してきた兵たちに送ります。喜びましよう」

この女性がエスデス。帝国最強と言われている將軍で、なぜ最強と言われているか。それは圧倒的な力である。異民族40万人を生き埋め処刑にするとかなんとか。もちろん帝具持ちだ。能力は無から氷を生成する能力。自分の思う造形の氷を作り、敵に攻撃できる。隕石なみの大きさの氷、巨大な氷の槍、幾多もの氷の刃など、できるものはないがまま。あとは自分オリジナルの能力があるらしい。(作者情報だ)

「帰ってきて悪いが仕事だ。ナイトレイドをはじめ凶悪な輩が蔓延っている。これを排除してくれないか？」

「わかりました。それなら一つお願いがあります」

「む？兵士か？」

「はい、賊の中に帝具使いが多いと聞きます。帝具には帝具が有効。【6人の帝具使いを集めてください】。兵はそれで充分。帝具使いのみの治安維持部隊を結成します」

「將軍には三獣士と言われている帝具使いがいるはず。それから更に6人か……」

「陛下。エスデス將軍に任せられそうです。私が帝具使いを用意しましょう」

「そうか！お前がそう言ってくれるなら安心して預けられる！頼んだぞ大臣」

このクソデブオヤジが、全ての元凶であるオネスト大臣。この顔のみるだけでわしは腹が立ってくるね！（。口。）（作者な）

こいつが今の帝国を裏から操っている張本人。まだ子供の皇帝を騙し、今の帝国を作り上げた。

「そうだエスデス將軍。後一つ、この者について何か調べてくれませんか？モグモグ………」

飯を食う時はちゃんと机で食べなさい！！

「この者？」

大臣から渡された書類に目を通していく。

中々分厚いな。

リュウ

身長：180センチ

体重：68キロ

装備武器：ハンドガン一丁・サバイバルナイフ一振り

見た目：少し赤よりの黒色の髪。全身黒色の服。左目に斬り傷。

帝都の依頼版に張り付けてあった依頼書を次々とこなしている人物。噂ではザンク

を殺した張本人。依頼の受けている主な内容は一級危険種討伐。手配書の人物の捕獲。または半殺し。

「こんな装備で危険種を討伐？しかもあのザンクをだど？ふつうの人間とは思えないがな……」

「私もそれは思いました。帝具持ちと考えましたがそれらしい物を身に付けておりません」

「私の帝具のような能力者？ではなさそうだな……」

「エスデス將軍の帝具は特殊ですからなあ。もしかしたら帝都の戦力になるかもしれない。とにかく調べてくれませんか？」

「わかった。今度帝都で探してみよう」

「よろしく頼むぞエスデス。後、ほかに欲しいものはあるか？やはり何か褒美を与えた」

「そう……ですわね……。言うならば」

「言うならば？」

「恋を……………したいと思います」

「……………え??」

一瞬にして凍り付く空気。

ン? ナンダツテ? コイ? (;)

「そ、そうか! 將軍も年頃なのに独り身だしな。この大臣などどうだ?」

「ちよつ!?! 陛下?」

俺がもし女だったたらこんなクソデブとは絶対に結婚しないな (|| . ω .) ノ

「お言葉ですが大臣は高血圧な故、明日をもしれぬ命」

「失礼な! これで健康です。で? どういったものが好みなのですか將軍?」

「我ながら、好みにはうるさいらしく見合うものはそうそう見つからないと思います。いづれ正式な文書を作成しお届けいたします」

將軍の好み……………気になる!!

「行くぞタツミ!」

「よし来い！」

ブライトとの訓練の後、俺たちはアジトに戻り自己訓練を開始した。今は俺とタツミが模擬戦。ブライトは近くの革で鎧泳ぎ。鎧を装着したまま川を泳ぐという訓練。しかも逆からだ。あいつは化け物か？

「これを全部斬ってみろ！」

腰のホルスターからハンドガンを取り出しタツミに向かって発砲。マインほどではないが射撃には自信がある。こんどスナイパーライフルでも買うか。いや作ったほうが早いかな？

ドドドドン！

「はああー！」

一つ一つの弾丸をすべて一刀両断、中々の動体視力だな。全部の弾丸を真つ二つにしているな。アカメほどとはいかないが剣戟が鋭くなってきた。これがアカメの言っていた將軍級の器か。

ならこれならどうだ？

「エンペラー（皇帝）！」

リボルバー式拳銃の形をしたスタンド。射程はそこまで長くはないが弾丸も自由自在に操ることができる。ん？それじゃなんで普通のハンドガンを買ったかって？欲し

いからだよ！

一発の銃弾を発射。その弾丸はタツミの剣に当たる瞬間、弾丸の軌道を変えタツミの腕をかすめる。

「くっ！なんだよ今の…その銃か？」

「弾丸だつてスタンドなんだぜえ」

「ズリイぞ！」

「悪かつた悪かつたつて。なら次はこれだ。うまく避けるよ？」

右腕に力を籠めタツミに向かって走り出す。その右腕は《ある回数》を重ねることで、どんどん筋肉が膨れ上がっていく。

「とおおう！」

足に力を入れ大きくジャンプ。ほぼタツミの真上上空に達する。

「喰らえタツミ！17連……………」

「やばっ!？」

俺の拳が当たる瞬間にモンハ○ンの緊急回避で避ける。

「釘パンチ!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド!

釘パンチ：数回のパンチを同時に打ち付けるパンチで、その回数分内部から釘が突き

刺さるかのように破壊するという技。

もちろん17連なので訓練場の地面に大きなクレーターができました！ゞ(@)(@)(@)ノ

「やべえ……あれ喰らってたら俺死んでたぞ……おいリュウ今の技って……」
クレーターの中心にいるリュウに声を掛けるが………。

「……………」

「おいリュウ？」

返事がない。ただのシカトのようだ。

「……………」

「ぐっ。」

「いぎやあああああああああああああああああああ！」

腕がああああ！腕が死ぬううう！釘パンチは腕に負担をかける技だ。しかもそのままで体力や体が出来上がっていない俺が使えば腕に激痛が走るのは当然である。

「おいリュウ大丈夫か？痛いのはわかったがそんなに痛いつて叫んでたら兄貴が飛んでくるぞっ！」

「大丈夫だ、問題ない」

「立ち直り早いな!」

だつて介抱されたくないもん!この前の特訓で俺が危険種の攻撃でたまたま気絶した時、ベースキャンピングで俺の服脱がして介抱とか言いながら本当に俺を襲いそうだったからな!!

「あかん……いやな記憶が蘇ってきてしまった……」

作者「なんで関西弁なんだよ」

うるせ!

そんなやり取りをしていると……。

「おい二人とも」

「ん?」

「ラバ?」

「ナジエンダさんの緊急招集だ。おそらく任務だと思っけどいやな予感がするぜ」

「了解だ。すぐに行くよ」

「集まったな皆。悪いニュースが入った。エスデスが北方を制圧し、帝都に戻ってきた」
「「「「「!?」」」」」

「レオーネ。帝都に行きエスデスの同行を探ってきてくれ」

「りようかあい!どんな奴か興味あったんだ」

「殺戮を繰り返す危険人物だぞ。用心しろ」

「オーライオーライ」

ボスの警告を聞くレオーネだがその口はニヤリと笑っていた。

(つてことは、隙あらば倒しちゃっていい人間だよな? 帝国最強と言われるDSの將軍! 大臣並みに仕留め概がある)

「そして……………エスデスの帰還と同じくして帝都で文官殺人事件が起きている。被害者は文官4名とその護衛の61名。問題はナイトレイドと書かれたこの紙が殺害現場に残っている事」

ボスが見せたのはナイトレイドのマークに文字で「ナイトレイドの天誅」と書かれた紙だ。

書いてある絵へタクソだな。俺の方が上手く書けるぜ(|| ||)

「俺達に罪を押し付ける気か」

「でもさ、普通分かるだろ。犯行声明なんてワザとらしい……………」

「そんなの簡単だ。俺たちを誘い出すためだろ？」

「リュウの言うとおりだ。最初に1、2件は怪しく思われたが今は我々だと断定されている」

「なんで!?!」

「殺されたのは一流の護衛を連れていた者たちだ。並みの賊では返り討ちにあうだけだからな」

「強そうなものを選んで襲ってるって事ね。そんな事ができるのは……………」

「こちらと同等の力を持つ者……………」

「つまり帝具持ち。エスデスの手のものと考えて間違いないだろう」

「本物を誘い出して狩る気だな」

「それを分かった上でみんなに言っておきたい。今殺されている文官たちは能力も高く、大臣に抗う国を憂う人間たちだ。そんな文官たちこそ新しい国になった時必要不可欠なんだ。後の器用な人材をこれ以上失うわけにはいかない。お前達の意見を聞こう」

ボスの、皆の視線がタツミを見据える。

「俺は政治の派閥とか良く分からないけど……………」

「ナイトレイドの名前を外道に利用されてるっただけで腹が立つ!!」

「そうだな……その通りだタツミ！」

「兄貴！」

「(コクツ)」

タツミの言葉を聞き、全員が小さく頷く。

「よし！決まりだ！勝手に名前を使うとどうなるか殺し屋の掟を教えてやれ。次に狙われるであろう文官たちの候補は二組。アカメとラバック。タツミとブライトで、それぞれの護衛に当たれ」

「(おう!!)」

「俺と兄貴が守る文官はどこへ向かう予定なんだ？」

「帝都近郊、大運河の出発点に停泊する巨大豪華客船【竜船】!!」

さあ、帝具使いの戦いが始まるぜ。

「さあ！外道を狩れ！」

ボスの言葉聞き、四人は一斉にアジトから出発していった。レオーネも偵察のために帝都に向かう。

あれ？

「ボス…俺は？」

「リユウはアジトで待機だ」

「???????

☒

ω

☒

???????

うわあああああああああ！」

皆……頑張れよ（血涙）

「さありユウ。私の怪我が早く治る為にパフ工作りなさい！」
 「ぢくじよおおおおおおおおお！がじごまりまじだあああああああ！」

第九話

俺、マイン、ボス以外のメンバーが任務に行つて二日が過ぎた。文官警護組からはまだどんな状況なのかも連絡はなし。エスデスの偵察から帰つてきたレオーネは尋常じゃないくらい汗をかいて戻つてきた。話を聞くと単独行動をしていたらしいがそのエスデスから湧き出していた殺気が尋常じゃなかつたらしい。何十万、何百万というほどの人を殺してきたからか、ありえないくらいの殺気。自分の本能に従い撤退してきたらしい。

あの獣のレオーネをビビらせるつてどんだけの人!?(; ㊦) さすがは帝国最強。その名前は伊達ではないというわけか。

作者「ニュー○○○○は伊達じゃない!」
そうそうそんな感じ。

今の俺たちはアジトで待機。と言つてもやる事がない。ボスは革命軍のなんたらとかで出かけてるし、マインは療養中だし、レオーネはマインと一緒にいるし。

その通り、俺はポッチです。悲しいねえ。↑誰かに似てるな
てな訳で。

「ギイイイヤアアアアア！」

「危険種討伐ターーーイム！」

ドカアアアアアアーン！

アクション戦隊の爆発ですね、わかります。

「ギャハハハハハ！演出ご苦労ウ！華々しく散らしてやるから感謝しろオ！」

今回の帝都での依頼は帝都から少し離れた処に位置する大きな湖に住んでいる巨大イカの討伐。一級危険種にも登録されているほどの怪物。日に日に湖を通りかかった人や動物を食べてデカくなったとか。

育ち盛り？（・ω・）

色々と被害が大きくなってきているからこいつを討伐してほしいとのこと。報酬金もかなりの額である。だがしかあし！俺の目的は金でもあるが違う！それは……………。

「俺たちの晩飯イイイイイイ！」

晩飯の材料目的が最も目的である。アジトのみんないっぱい食べるしね。特にアカメ……。これだけデカイイカなら蓄えにでもなると思ってな。完璧にアジトの厨房は俺の物となった。料理すきだからいいんだけどね。

「ギシャアアアアアアア！」

イカの大きく開いた口から紫色ぼドロドロの液体が吐き出される。スピードがないから軽く避けてみたら俺の立っていた位置が溶けていた。なるほふお、あれは溶解液か。しかも王水レベルかな？

「いいねいいね最高だねエ！きつちり俺の敵やってンじゃん」
「キシャー……！」

「悪いが一瞬で終わらせてもらうぜ。マインには上手いもん食わして怪我治してもらおうんだからな」

「ギユアアアアアアアアア！」

10本の足を俺に向かって延ばしてくる。しかも普通のイカじゃないから一つ一つの足に銀色の刃がくつついている。俺を串刺しか？

「やれるもんならやってみるおおお！ピツピカチューー！」

リュウの10万ボルト！

バリバリバリバリバリ！

「ギユオオオオアアアアアアア！」

効果は抜群だ。

ズウウン↑地面に倒れる音。

巨大イカの丸焼きが完成した。上手に焼きましたあく。

「よし俺の大好物のイカのゲソあぶりでも食うか」
醬油を少し掛けるとうまいぞ。

イカのゲソを切ろうとした瞬間。

「ヴァイスシュナーベル！」

「っ!？」

大量の鋭い氷片が湖の奥から飛んでくる。

「いきなりなんだ!?!金剛槍破!」

一振りで百の妖怪を薙ぎ払う刀。鉄碎牙を一瞬で作り出し、金剛槍破を放つ。この技は普通の衝撃波ではなく金剛石の槍を相手に向かって放つ技。そしてその金剛石の槍で、飛んできた氷片の槍を相殺する。

「おいコラー!人の飯を邪魔するのはどこのドイツだ!」

ドイツそおれえい!

湖の奥にある木の茂みから姿を現したのは……………。

(今のところほとんどパーフェクトだ。もしかしたらこの少年は………さあ最後の関門だ！無垢な笑顔を見せてみる!!)

「リュウ。お前はまだまだ伸びる。これからも自分に厳しく鍛錬をするんだ。そしてらお前ももっと強くなれる」

「鍛錬……。わかった！帝都の將軍に褒められたらなんだか自信がわいてきたぜ！ありがとう！エスデス將軍！（無垢な笑顔発動）」

(・ω・) 完璧な100%な笑顔だぜ！

キュン／／／

「あ……………」

コイスルオトメイッチョアガリイ！（・ω・）

「リュウ、さっき言った通りにお前は弱い。なので
.....」

「私が鍛錬してやろう!!」

「はい???」

「私が鍛錬すればお前は更に強くなる。今日でお前は私のモノだ」

「理屈があつてませんけど!?!なんで俺があなたのモノっていう事にい!」

「今のお前の笑顔……。私はお前に惚れた……。心が温かくなつたんだ。お前のすべてが欲しい。リュウ、私はお前が好きだ!!」

「いきなりの告白!?!まだ会つて一時間も過ぎてませんけど!?!」

「好きなものは好きなんだ!さあ、行くぞ!」

エスデスは俺の意志など関係なしに俺をどこかに連れて行くこうとしている!誰が行くもんかああ!マインやボスたちが俺の帰りを待っているんだー! (正確に言えば晩飯の為)そして俺はゲソを食いたいんだー! !

ここうなつたら久しぶりの.....。

「ザ・ワールド！ 『時よとまれ！』」

久しぶりのザ・ワールド。俺以外の時間が止まった。

「いやあ見るからに美人だなこの人……。敵じゃなかったらいいのに……」

こんな俺を褒めてくれた人が敵でいいのだろうか？ いや、でも結局はこの人もあの大臣側にいるんだ。いつかは戦わなくてはいけないんだ。慈悲なんかいらない。

「できればもう会いたくないな。そう願っておこう」

8秒経過。

「じゃあな。帝国最強」

時間が止まっている間に俺はエスデスの前から姿を消した。

おっと危うくイカを忘れるところだった。

「はっ。リュウはどこに？」

あたりを見渡してもリュウの姿は見えない。時を止めている間にできる限り遠くに行き姿を隠したのだ。

「リュウ…。せっかく好きになったのに……………」

あたりを見渡しても誰もいない。リュウもイカも。

「しかしどうしてリュウが目の前から消えたんだ。ずっと見つめていたのに……………。私の摩訶鉢特摩（まかはどま）と似たような能力か？ますます面白い奴だリュウ。また会おう。そのときこそお前を惚れさせてやる！」

「そういえば今日は例の帝具使いがくるそうだな。ふふふ……………」
「イエーガーズ」の誕生が近いぞ」

エスデスはそのまま踵を返して帝都へと戻っていった。

「危ない危ない。この事はボスに伝えとくか」

俺はそのままイカを持ち上げたままアジトへと帰還した。帝国最強、エスデス。あいつが帝都に戻ってきたって事は絶対に大きな戦いがあるはずだ。それも帝具使い同士。革命軍と帝国軍、二つの勢力がぶつかる日もそう遠くはないのだろう。あいつらに

はそれなりの思想や理念があるかもしれないがこっちにだつてある。ただでさえ帝都で苦しんでいる人たちがいるんだ。守らないと、助けないと。

アジトに戻ると文官警護組が帰ってきていた。アカメとラバックは無事だったが、タツミとブラート組ではブラートの死体を持つていたタツミしか帰還していなかった。話を聞くとエスデス軍の三獣士と戦闘しブラートは戦死したとのこと。タツミはブラートの帝具「インクルシオ」を受け継ぎ正式な帝具使いとなった。

タツミは泣かなかつた。ブラートは男らしく名譽の戦死を果たしたのだ。メンバーの全員も泣かなかつた。悲しくならなかつた。ここで苦しんではいけけない。これ以上仲間を死なせないために。死んだ友の死を無駄にしないために！

この時が帝具使いの全面戦争の始まりであつた。

「さあ！気合い入れるためにみんなでイカ食おうぜ!!」

それから数分後、イカはアカメとタツミによつてほとんどを食べつくされた。

第十話

—帝都の一室—

(いきなりでなんだけど……ダレカタスケテクダサイ)

俺の名前はウェイブ。帝国海軍の帝具使いだ。今回は帝都の特殊警察の召集で帝都にやってきた。栄転ってやつだ。しかも今回の召集は俺だけではなく同じ帝具使いの同僚もいるらしい。期待に胸を膨らませ集合場所である帝都の宮殿のとある一室に来たのはいいんだが………なんで来てる奴ら全員変な奴らばかりなんだよおおおおおおお!!!

最初に目が合った変な覆面被ってる人、焼却部隊のボルス。第一印象はおっかない人だと思った。見た時拷問官かと思っちまったよ!!

んで次にきたセーラー服を着た暗殺部隊のクロメという女の子。第一印象はおかしの好きな女の子だと思っただけどいきなり俺に向かって「このお菓子はやらないから

！」って自分のお菓子を抱えて俺を睨み付けてきた！

次に入ってきた二人&一匹だが、結局変や奴には変わりは無かったー！帝都警備隊の女の子、セリユー・ユビキタスとその帝具、ヘカトンケイル。一見しつかりした子だと思ってたけど、正義正義連呼する変な子だったー！そして、そしてだ！その後に入ってきた男（オネエ）、研究者のスタイリツシュ。なんで俺を見た時に好みとか言ってくるんだよ！男の趣味は俺にはネエ！

唯一の救いと言えば教師で帝具使いのランって男だったな。一瞬女かと間違ったのは聞かないでくれ。

で、ここからだ。俺達で構成された部隊の上司、まさかのあのエスデス將軍だ。部屋に入ってきた時は変な上司だと思ったけどな。あの帝国最強のエスデス將軍が隊長なら心強いけど…………………………。

「俺、ここでやっていけるかなあ……………助けてくれ母ちゃん」

「大丈夫ですかウェイブ？顔色が悪いですが……………」

「ありがとなラン。お前だけが頼りだよ……………」

「何がですか？」

「いや、こつちの話だよ。今はこのパーティーを楽しもうぜ」
「ですぬ」

そう、俺たちは今宮殿で陛下の謁見の後での俺たちの歓迎パーティーの真つ最中だ。いきなりの陛下の謁見はぶつ飛びすぎだとは思ったけど、それくらいのこと俺は動じない!!

——女達のガールズトーク——

「隊長！隊長は休日をどうお過ごしなんでしょうか？」

「狩りや拷問。またはその研究だな。だが今は……………」

「恋をしたいと思っている」

「!?!」

セリユーとクロメが驚きの表情。エスデスは戦いを欲する人物。花より団子ならぬ花より戦。(。―。)バケモノ？

「そして今は…好きな奴も見つけた……………」

「もうですか!? 誰なんですか?」

「少し……………気になりますね」

「そうだな。教えてやる。名前はリュウだ」

「え!? リュウって、あのリュウ君!?」

「なんだセリユウ? 知っているのか?」

「はい! 帝都で迷子になっているところを私が助けたんです!」

「迷子? ふふつ、中々可愛いところもあるなあいつは」

「あと凄く強いんです! 帝都での路地裏にいた悪の輩を一撃で撃退していました!」

「それは私も思ったことだ。少し手合わせで攻撃をしたが私の攻撃を全て相殺した程だ。あいつはもしかしたら私と互角の力を持っているかもしれないな」

チート使いですから! (ゝゝ♪)

「あいつは凄い。危険種の狩りも出来、更に強くなろうと努力する。すべてが素晴らしい。そして何より……………無垢な笑顔がいいんだ」

「ふわあ……………隊長すごくかわいいです! あれ? でもここにはその当の本人がいませんんが?」

「確かに、それらしき人物みてないです……モグモグ」

「実は逃げられたんだ。だが私はその程度であきらめはしない！リュウは必ず私のモノにしてやる」

「隊長！私も協力します！」

「私も……それなりには………」

「すまないな二人とも。必ずリュウは手に入れてやる」

「待っている。私のリュウ!!」

—アジト—

ゾクッ！

「ふあ!?!」

「グシャ!!↑本日の晩御飯のデザートに使おうとしていた林檎を握り潰した音。

「どうしたリュウ!?」

「い、いやなんでもない……………」

（なんだ今の悪寒と殺気は!? 本能的に身の危険を感じたぞ?!）

「ちよつとリュウ! 大事な林檎握り潰してんじやないわよ!」

「え? あー! 悪い! つい握り潰しちゃった!」

「あんたはゴリラなの……………」

「誰がゴリラだコラアアアアア!? \（。ロ\）」

「リュウはゴリラじやないのか?」↑アカメ

「あんだだけ強かったらゴリラじやないのか?」↑タツミ

「ゴリラとかwwwwザマアwwww」↑ラバック

「リュウがゴリラ? ははははははははははっ! 傑作!」↑レオーネ

「リュウのこれからの呼び方はゴリラだな」↑ナジエンダ

「てめえら全員明日の朝飯抜きじゃああああああああ!!!（；。㊄）」

その日の夜。ラバックの叫び声が聞こえたのは誰も知らない

—翌日の夕方—

「リユウ。久しぶりに任務だ。帝都で小さな子供を金を掛けたゲームで殺している帝国軍の幹部たちがいる。そいつらを排除するんだ」

「了解。その任務は俺だけ？」

「お前一人でこなせる任務だと思うが誰かいるか？」

「いやいや、それなら俺一人で行くよ。その幹部共には愉快的なアートになってもらうぜ！」

「頼んだ。それともう一つ……………」

「ん？」

「帝都ではエスデス率いる『イエーガーズ』が帝都で朝も昼も夜も目を光らせている。今まで以上に注意しろ」

「ラジャだぜー！早めに終わらせて帰ってくる」

「気をつけてな。後私はこの前でのタツミたちと戦っていた三獣士から奪取した帝具を革命軍に本部に届ける為に少しの間ここを離れる。みんなで頑張ってくれ」

「それもラジャー！」

「イエーガーズ」

先ほど出ていたエステス&6人の帝具使いが集結した特殊警察だ。

メンバー

「エステス」

「ウェイブ」

「クロメ」

「セリユ」

「スタイリツシュ」

「ボルス」

「ラン」

一人一人の個々の能力は高く、ナイトレイドと互角の力を持っている。中ではウェイブとクロメが頭一つ抜けているかもしれない。ウェイブはドジが多いが……。

「さてと！夜になるまでに準備しておくか」

特に準備するものは無いが非常食くらい持っていこうかと自室に戻る俺。そんな時m後ろから声を掛けられた。

「おーいリュウ」

「レオーネ？（・・・）？」

「この前のエスデスとの接触は本当に大丈夫か？」

「大丈夫だって言ったろ？ 怪我は無いつて」

「だけど今日の夜もエスデスたちがいる帝都に行くんだよな？ 気を付けていきなよ？」

「珍しいな。レオーネがそんな事言うなんて」

「当たり前だろ!!」

「むぐう!？」

まさかの展開!?!レオーネが俺をいきなり抱きしめて自分の完璧なる女の武器である巨乳に俺の顔を押し付けてきた!なんだこの柔らかさ!こんな世界にはここまで柔らかい物があったのか!正直に言うと言葉では言い表せない!マシユマロか?と勘違いするくらいに柔らかさ!やはりおっぱいは最強だ!あ、俺はどんなおっぱいでも愛せるぜ!

「もうこれ以上、仲間を失いたくないんだ……………」

「レオーネ……………」

シエーレとブラートも死んだ。俺よりも先に出会い、幾度もの任務を一緒にこなしてきて、長い時間を共に過ごした。そんな仲間が二人も死んだんだ。顔には出さなくても心には深い傷を負っている。

「お前が死んだら悲しむやつもいるんだからな。そこも考えろよ?」

「大丈夫だよ。俺は仲間を残して死んでたまるかよ!まず俺は死んでも死なないからな!」

「それおかしいだろ…。ちゃんと帰って来いよ」

「任せとけよ。帰ってきたら一緒に酒でも飲もうぜ」

「おうよ!約束だよ!」

レオーネに手を振った後、俺は準備を進める為に自室へと戻った。

その日の夜。時間的に言うとなら7時かな?俺は帝都の一番高い建物の屋根の上で索敵をしていた。今回のターゲットの幹部二名は夜に今度はどの子供を攫おうかと帝都を歩き回っている。考えると屑野郎どもだな?これからの新しい時代でその子供たちが必要になるかもしれないのにその子供たちを自分たちのゲームで殺す。そんな奴らには風穴空きの刑だな。(; ∇ ;)

今回は長距離射撃で仕留める。武器はウルティマラティオハカートII。12.7mm口径の対戦車ライフルだ。これを喰らったらどんだけ頑丈の奴でも大きな風穴ができ

るぜ。

「見つけた」

スコープを覗き込むと人気のない道を進んでいる幹部二人が見えた。見るからに今回の攫う子供を見つけたのか口元がニヤニヤしてやがる。そんな気持ち悪い顔で子供を殺すのはやめておくんだったな。

「いつでもどんな時でも『チェックシックス』だぞ？ 目標を狙い撃つぜ」

ヘカートを構えスコープを再度覗き込み射撃体勢に入る。多少のブレがあるので大きく息を吸い込み数秒の間呼吸を止める。狙うは標的の頭。スコープの照準を頭に合わせ、

引き金を引いた。

ドオオン!!

強烈な爆音と共に弾丸が火薬の爆発と一緒に銃口から吐き出された。その弾丸はそのまま一直線に飛んでいき標的の一人の頭に着弾し、頭を吹き飛ばした。

打った直後にボルトアクションを行い、次弾を装填し、すぐにもう一人の標的に照準を合わせ、発砲。

ドオオン!!

最初と同様、綺麗に頭を吹き飛ばした。

「それなりの報いだ。地獄でたっぷりと味わいな」

へカートが消し、顔がばれないように顔に虚の仮面をかぶる。

「さてと、さすがに音でばれるだろうからさつきとここから消え……………」

次に発しようとした言葉は『ある声によって掻き消された』

「グラン・フオール！」

上からの奇襲に俺は対応ができず、その攻撃をモロに喰らってしまいそのまま帝都の外へと吹き飛ばされた。

「ぐあああー！」

帝都の外に吹き飛ばされた俺は、帝都の近くにある密林へと入っていき、そのまま地面に激突した。

「いつてえ…誰だよいきなり……………」

虚の仮面をつけていたおかげでそこまでダメージは喰らわなくて済んだが、多少のダメージはある。

「お前、ナイトレイドか？」

目の前に現れたのは、いまタツミが持つている帝具インクルシオに似た物を身に着けている男が現れた。色は黒。白のインクルシオとは対なる帝具だな。

「さっきの射撃もお前か。無差別に暗殺を繰り返す無法者集団・ナイトレイド。今ここでイエーガーズのウェイブがお前を倒す」

「ちっ、今日は早めに帰って酒飲むつもりだったのによお。ぶっ飛ばしてやるー!」

「うおおおお!」

ウェイブが俺に向かってとびかかってくる。またあの一撃を喰らったらさすがの俺でもやばいな。

「武装色・硬化!」

この能力は体の周囲に見えない鎧のような力を作り出す能力。自分の体を硬化させればその部分が黒く変色する。

今回俺が硬化させたのは右手。そのままウェイブの飛んできた拳にぶつける。

「おりゃああ!」

「ぐおっ!」

拳同士がぶつかり、あたりに凄まじい衝撃波が走る。その衝撃波によって回りの木々がバキバキとへし折れていく。

「お前に時間をかけてるわけにはいかないんだよ!」

「逃がすかよ！腹くくって戦いな！」

「なら……騙しの手品だ！」

瞬間、地面に『仕込んであった細いロープを引き上げる。そのロープはウェイブの足元に広がっていたので引き上げた時にウェイブの体中に絡みつく。

「なにっ!？」

「気づくのが遅かったな！クラツカーボレー！」

懐から鉄球に糸をつけたアメリカンクラツカーを取り出し、ウェイブに向かって叩き付ける。

「波紋疾走（波紋オーバードライブ）のビート！」

「ぐほあああ！」

いくら帝具を身に着けていたとしてもこの攻撃は防げまい!!

「コオオオ……打ち砕いてやるぜ!!」

とどめに大きく振りかぶって、ウェイブの顔面に向かってクラツカーを叩き付ける。

バコオオン！

「ぐあああああ！」

吹っ飛んだ後に言うセリフは勿論これ!!

「去りやがれ！」

吹き飛ばされたウエイブは近くの大きな大木に直撃し、気絶した。
 「やばいやばい。もう少しでやられるところだった」

実際本当にそうだった。あの時にロープを地面に仕込んでいなかったらありえないくらいフルボッコにされていた。顔が腫れあがるくらい……。いやそれだけで済めばいいくらいだな。ただでさえ俺たちは人を殺しているんだ。捕まったら死ぬよりつらい拷問を受けるに違いない。あのエスデスにな！

「想像するだけで嫌アアアアアアアアアア！ここで俺はサヨナラする!!」

昔のアニメで走るような走り方で俺はアジトにマッハで帰っていった。

スタコラサツサ（（（（（（（（（（（（；・・・）

俺はこの時気付かなかった。俺たちの戦いの一部始終を見ていたイエーガーズが居たことに。

「あれが隊長の言っていたリユウ？いや、あの仮面をつけてる時はデストロイヤーとで

も言うべきかしら?。」

「どうします? スタイリツシユ様?」

「もちろん追いかけるわよ。私達『チームスタイリツシユ』でナイトレイド全員を殺すのよん!!」 スタイリツシユ!

「さすがはスタイリツシユ様! では直ちに!」

「一つも音は聞き逃しません!」

「いいわよ目、耳、鼻! それじゃあスタイリツシユに行動開始よ!!」 キラーン☆

—アジト—

「たーだーいーまー!」

「おかえりリユウ。怪我は無かったか?」

「あー、怪我は無いがイエーガーズの一人とやりあつてきた。なんとか逃げてきたけど」
「イエーガーズに!?! よく生きてたわねあんた」

「まあ俺だから！ちよつとやそつとじゃ死なないぜ！！」

「お前は本当はバケモノか……」

「おいラバック！バケモノ呼ばわりすんじゃねえ！俺はれつきとした人間デース！」

「あんたたちうるさいわね。せつかく私の怪我が治ったんだからもつと喜びなさいよ」

「ワーメインガゲンキニナッターウレシー」

「棒読みじゃない！眉間打ち抜くわよ！！」

「上等だ！狙い打つぜ！！」

「やれやれ……じゃ！マインの怪我が治ったことだし！久しぶりに飲むぞく！」

「おう姐さん！俺も付き合うぜ！」

「レオーネ！約束どおり飲むぞ！」

「リユウ！飲むなら私に料理を作ってくれ！」

「私もよ！おいしいパフェ作りなさい！！」

「うおおおお！いくらでも作ったらアアアアアアアアアア！」

「リユウ！俺にも美味しいもん頼むぜ！」

「俺にはデザートランナーのから揚げ頼む！」

ふっふっふっ……この時に言う台詞は考えてあるぜ！

「俺にいいいい！まあかせとけええええええ！」テンションMAX！

その後、アジトで蓄えていた備蓄や食糧が消え去った。

誰のせいかなんか、言わなくても分かってくれるよな……………？

—アジトの外—

「ふん。匂いや足跡を消そうとした努力は認めるけど、私の作った強化兵には通用しないわよ。まさかとは思ってたけど本当にナイトレイドだったとはねえ」

スタイリッシュの作った偵察用の三人の強化兵。

目。

耳。

鼻。

その名の通り、その器官が通常の人間の数百倍はある強化兵たち。目は通常の人間より視力が数百倍に跳ね上げられている兵士。耳は数キ口先の音も聞き分けられる。鼻

はほんとの微かな匂いすら嗅ぎ分けられる。

ト〇コでいうココとゼブラとトリコだな。φ(*?▽?*) φオタダキマス

「この先にあるはずよん。アジトが」

林を抜ける。その先に見えたのは。

「ビンゴォー！ナイトレイドのアジトみーっけーっけー！」

目の前に見えたのはもちのろんの事、ナイトレイドのアジトである。

「さあ!!チームスタイリツシュ!熱く激しく攻撃開始よオ!!」

叫ぶと背後から何千何万というほどの強化兵が飛び出してきた。

「「「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」」」

万対6人の戦いが始まる!

第十一話

チームスタイリッシュ突入の数分前。

「ふああ、寝すぎちやつてたのか……」

よ、レオーネ姐さんだよ。今日はマインの怪我が治ったことを祝ってリュウの飯食べながらドンチャン騒ぎしててみんな寝ちまつてたんだ。今回は飲みすぎかな？ まあ私
は中々酔わないけどな！

「風呂でも入るか……」

ここも片付けないとなく。辺りに酒のビンや食器が散乱してるしみんな地べたで死
んでるし……。タツミなんか白目向いてるからな。

ふみっ

「んぐああ！鼻があああ！」

「あ、悪いリュウ！見てなかった」

地べたで倒れてたりリュウの顔を間違えて踏んじまった！全然下見てなかったから
気配すら感じてなかった！少し気抜きすぎかな私達。

「鼻があああああ！ぐおおおお……」

鼻押さえながら悶えてる……。なんか芋虫みたいな動きだな……。

「ま、気にせず風呂いくか!!」

リュウ放置!!

——露天風呂——

「まだねむ……」

目を擦りながら湯船の湯を手で掬い上げ顔に掛ける。

「ふう！気持ちいい『ポチャ』ぼちや？」

水面を見つめると、まあ勿論私の顔が映ってるよな？………と思ってたんだけど……。

「(ニヤリッ)」

「っ!？」

見つめてると大きなハット帽を被った男が水面から飛び出してきて私の顔に向かってナイフを突き刺してきた。

ブスッ！

「ぎひひ！ やりましてぜスタイリツシユ様！ このトロローマが一人仕留めましたぜえ！」

スタイリツシユ side

「引き続き任務を続行します。このことですスタイリツシユ様」
「盗聴ご苦勞様、耳。ようやくアジトに潜りこめたようね……」

「さあ！ チームスタイリツシユ！ 熱く激しく攻撃開始よ！！」

「「ヴオオオオオオオオオオオ！」」

ドカアアアン！

ナイトレイド side

「こんな時に敵襲かよ！」

レオーネに踏まれてた俺は先ほどの爆発音で目が覚め外に出ようと廊下を走っている。鼻がすんごい痛いんすけど!!

(まさか尾行?あのウエイブって奴と戦った時か!だがあいつは気絶さしたはずだ。それらしき気配は無かったのに)

兎に角今はここから脱出して外に……………。

「ウウウウ……………」

「なんか出てきたぞ……………」

廊下の影からへんてこりんな仮面をつけ露出度の高い服をきた男が出てきた。お前男の癖にそれはないだろ。レオタードの短い版か?

「ウオオオオオ!」

「うるせえええええ!無回転ヤクザキイイック!」

ぬ〇孫で出てきた一子相伝の技。無回転のキックである。

バコオン!

蹴りは見事に顔面に直撃し、頸が90度回転し後ろ向きになる。あれだ。体は前向いて顔は後ろを向いている。頸の骨大丈夫か??

「ケツザマア（ノ口。）ノ」

だが。

「又ググ……………」

グリリ……………ゴキンツ！

「お前マジか！頸元に戻すつてバケモノか！」

バケモノが言うんじゃない。

ウルセエ！

「ウオオオオオ！」

「いい加減くたばれこんにやろー！連続普通のパンチ！」

ドドドドドン！

「ブゲアア！」

ドサツ

「一昨日きやがれ！」

敵のミンチ肉の完成です！

「さてとこれで外……に……でれ……るう？」

奥から何十体もの兵士達が出てきた。しかもなんで四足歩行!?

「[[「ウウウ……………」」

「……………よし」

「ここで俺が取る方法は。」

「あーばよとつつああん!」

「[[「ヴオオオオオオ!」」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアア!」

ε || Γ (Γ ^ o ^) 」 Γ (Γ ^ o ^) 」 Γ (Γ ^ o ^) 」 ヴオオ! ε || ε || ε || ε ||
ε || β (; . ρ) ノ ニイヤー!!

本日から発売。ゲーム「リユウ!アジトから逃げろ」地上最凶の強化兵たちから逃げ

切れ!

値段は定価1800円だ。

んなクソゲーいるかあああ！あと四足歩行で追いかけてくるなあああああ！！
それからは、俺と強化兵たちとのアジト内での壮絶な逃走劇が繰り広げられた。

「うおおお！」

「グゲア！」

「ゴハア！」

「ブゲア！」

ドドドドドン！

インクルシオを装着したタツミがアジトの外で強化兵相手に一人で戦っていた。
「数が多いけど…そこまで強くねえ!!」

次々と襲い掛かってきた強化兵達のの急所を狙い、次々と薙ぎ倒していく。

「ほお…それが帝具インクルシオか」

「?」

声を掛けられた方向を見ると、体中が普通の人間とは比べ物にはならないほどの肉体をもったおっさんが出てきた。ムキムキだな。ガチムチ?

「よお鎧のにいちゃん。お前の相手はこのカクサンらしいぜ」

「っ!」

タツミは出てきた男よりもすぐに目に入ってきた「とある帝具」が目に入った。

「その帝具は!」

「へっへっいいだろう。『万物両断エクスタス』。ご機嫌な俺の帝具さ。」

そう、その男が持っていたのは俺たちのメンバーで、戦死した女性、シエーレの持っていた帝具である。あのセリユーとの戦いで帝国側に回収されたのだろう。

「それは…てめえのじゃねえ!!」

腰に差してあった自分の愛剣を引き抜き、大きく踏み込んだ後、カクサンに向かって剣を振り下ろす……が。

ガシャアアーン!

カクサンの肉体に直撃した瞬間、刀身が粉々に砕け散った。

「ふん!肉を切らせて骨を断つ!」

エクスタスを大きく開いて、タツミを捉えた瞬間にそのハサミの刀身を勢い良く閉じ

る。

「くっ！」

一瞬早く気付いたタツミは、体を大きく捻りその攻撃を回避する。しかし、刃の部分が右腕を掠め少し大きめに切り傷だ出来る。

「いい反応だ。切り落としたと思ったのに」

そのままタツミはカクサンの背後まで飛び、右腕を押さえながら着地する。

「折角堅い鎧を持つてるのに、可哀想になあ。こっちはこの世の全ての物を切断できる。

防御力なんか無視だ無視！」

「くそっ……………」

スタイリツシユside

「予想通り、インクルシオに対して優勢です」

「計算通りね。相性がいい相手にぶつければこちら側が有利に事を進めれるわ」

「ただ、歩兵が随分倒されてます。雑音が多すぎて正確な情報が分かりませんが……深
刻な被害かと」

「悲しい犠牲ね……………」

ニヤリ

(なあってね。兵隊なんかいくらでも替えが効くつての。元々こいつらは罪人。罪の減刑と引き換えにあたしと契約をした『つもり』でいるマヌケ達。本当は死ぬまで……実驗体だけどね！)

そう、今ナイトレイドが戦っているの兵隊も、スタイリツシユの護衛として連れてきた偵察隊のこの三人も罪人である。スタイリツシユ、中々のゲス野郎だな。

タツミside

「それを返せよ！シエーレのだ!!」

カクサンの持つているエクスタスの取っ手の部分を掴む。

「ああ？誰だよそいつは!!」

バコン！

エクスタスを持つていたタツミを回し蹴りで吹き飛ばすが、当たり所が軽かったのか見事に受身を取られてしまう。

「そんなに死にたいなら望みどおり……切り刻んでやるよー」

「くっ！やられてなんかいられるか！うおおお！」

すぐに立ち上がりカクサンに向かって走り出す。

「馬鹿があ！その体真つ二つにしてやるよ！」

エクスタスを構え、走ってきたタツミに向かって大きく横に薙ぎ払う。

「いまだ！」

横に薙ぎ払ってきたエクスタスが直撃する瞬間、その下をスライディングで回避しカクサンぬ向かって走りだす。

「何ッ!？」

「だあ！」

顎に向かってアッパーカット。

「ぐおあっ」

そして

「だああ！」

体を捻り、踵での回し蹴りをカクサンの顛顛（こめかみ）に直撃させる。

「ぐおあ!!」

顎を揺らす具合のアッパーカット。追撃での顛顛への回し蹴り。いくら頑強な奴でもさすがに脳が揺れるのはどうにも出来ないよなあ！

「この野郎……っ」

「とどめだ！」

拳を握り、最後の渾身の一撃を喰らわせようと再接近するタツミ。

「馬鹿が！奥の手！エクス……」

「マズイ！」

その時、

「タツミ。避けなさい！」

言葉を聞いたタツミは少しだけ体をずらす。タツミの顔のほんの数センチ横から一筋の光の一閃が駆ける。

その光はタツミを通り過ぎ、カクサンの顔面に直撃し、顔面が消し飛んだ。

「マイン……」

「情け無いわね。そんな奴一人で倒しなさいよ。シエーレの帝具使ってた奴なんだから」

「わ、悪かったよ」

マインはパンプキンを地面に置き、倒れていたカクサンの死体の近くで落ちていた帝

具エクスタスを拾う。

「うっ……ぐすっ………」

エクスタスを力強く抱きしめ、目から大粒の涙を流す。

「おかえり……シエーレ」

シエーレの心の帰還である。

その近くの木の陰で……。

「キヒヒッ。可愛い可愛いお嬢さん……」

先ほどレオーネに不意打ちしたハット帽を被った男、トローマである。

目標はマイン。

「後ろがから空きなんだよおおおお！」

持っていた少し丸みの帯びたナイフを構え、マインの死角を狙い、攻撃を仕掛ける。

だが。

ドカアアン！

「んぼおあー！」

「よくもやったなこの野郎ー！ー！」

ライオネルを装備したレオーネのとび蹴りが顔面に直撃。

「いきなりナイフなんか投げつけやがつて！うっかりしばらく意識が飛んじやつたじゃねえか！」

「ああ……………（汗）」

タツミとマインがお互い汗と小さなため息に似た言葉がでた。

この二人がこの時同じ事を考えた。

（あ…こいつ終わりだな（ね））

ガシツ…ググググ…。

ぶつ飛んだトローマの頸を両手で鷲づかみし持ち上げ、頸を思いつきり締め付ける。

「く、苦しい…………タスケテエ…………」

「私はなあ！奇襲するのは好きだけど、されるのは大嫌いなんだよ！丈夫に強化されてるっほいがその分楽に死ぬると思うなよ…………」

ググググ……。

「んぐぐぐ……ギヒッ！シヤアアア！」

その瞬間、履いていた靴の先から小さなナイフが飛び出し、レオーネの顔に向かって突き刺す。

ブウン！ガキーン！

「なっ!?こいつ！さつきもこうやって防いで！」

レオーネの顔に向かって襲ってきたナイフは、レオーネの獣化した時に頑強になった牙によって止められた。

本物の真剣白歯取り？

「ふうん!!」

「ごべあああー！」

地面に向かって叩き付ける。

「ふうく。奇襲の一発目で貰った一撃が効いた効いたく。あ、ヤベ！一撃で倒しちゃった！」

叩きつけられたトローマさん。一瞬で死にました★

「姐さん？今の大丈夫？」

「さつきは不覚を取っちゃったけど、変身した私は治癒力も高まっているからこれくら

いならな!!」

右手で左腕を掴んでのガッツポーズ。カッコエエ

「みんな無事か？」

寝巻きを来たアカメと普段着を来たラバックがアジトから出てきた。

「おおー!」

「これで全員集合ね」

「いや、一人忘れてるような……………」

「まさかりユウは……………」

はいその通り。一名忘れてらっしゃいます。

「じゃまだどけえええ! 月牙天衝オオ!!」

一つの黒い斬撃がアジトにの内部から飛んできた。

ドツカアアアアン!

アジト半壊。

「ヒヤツハアアアアアア！汚物は消毒ダアアアア！」

はい、白○護になりかけてるリュウです。ちなみに虚の仮面は装備済みです。（完全虚化の。角生えてます）

（（（ああ……あいつが死ぬわけないか……）））

「さあみんな！俺にアツマレエエ！」

「イヤ。お前が最後だから……しかもアジト壊したし」

「一番ドベよあんた。アジトボロボロじゃない」

「リュウが最後だったな。アジト、また変えないとな」

「もつと早く来なよリュウ。アジト壊す必要は無いと思うけど……」

「お前が死ぬなんか想像できねえ……あとアジト壊すなよ」

あれえ？かなり歓迎されて無い様子……（。――）しかも俺の心配よりアジトに心配！（・ε・）スネチャウ

「「グオオオオアアアアアアアア！」」

ババンツ!

またまた森から強化兵達出現。今で何体目よお。

一瞬にして俺たちを取り囲んだ。

「まだ残りが居やがったか」

「でもこいつらで糸に反応してる敵は全部だぜ」

「他にも回りに匂いも無いしね」

「よおおおし!みんな集合したんだし!一気に潰そうぜ!!。(。▽三。三△。) ウホー
!」

「「「「ああ! (おう!・ええ!)」」」」

「イツツツツ!パーパーリーリー!? (。ω。)?」

「「「ヴオオオオオオオ!」」」

「くっ……。カクサンもトローマもやられました……。歩兵もごっそり減っています」
「意外とやるわねえ。ちよつとびっくりしたけど、これはむしろ好都合よ」

「どいつもこいつも実験材料にしてあげる！あたしの奥の手でね!!」パチーン☆
その奥の手の行動は、すでに始まっていたのだ。

第十二話

アジトでの戦いが始まるほんの少し前。

「いやな予感がするな。これは少し急いだ方がいいな」

ナイトレイドのボス。ナジエンダは焦っていた。それは革命軍にある帝具の占いの結果を聞いたからである。ある方角であるメンバー達が帝都の人間の攻撃を受けているという話を聞いたのだ。思い当たるそのあるメンバーはナイトレイドのメンバー。その帝都の人間とはおそらく革命軍の人間から聞いたイエーガーズの人間だろう。それにしかもその人間はおそらく帝具使い。帝具使い同士が戦えばどちらかが死ぬ。これ以上仲間を失わないためにも急がなくてはならない。でもあいつらが負けるとは考えられなかった。その理由は帝具使いでもないのに帝具使いに勝った実績があるリュウである。どの帝具も例外はない。必ずどちらかが死ぬ。今までそうであったのだ。だがリュウの登場によつてその掟はなくなつてきているのだ。リュウがいれば、帝具使いには負けることはないはずだ。あいつの力。今はまだ断言できないがナイトレイドを含んだ革命軍の兵士の中でも一番強いのはおそらくリュウだ。色々な見たこともない能力。どんな事態でも対応できるあの臨機応変の動き。あのナイトレイドの切り札

であるアカメと同等、いや、それ以上の速さ。これは革命軍にとって大きなプラスになったのだ。でもそれでも焦る。この戦いで死なないなんて可能性は100%ではないのだ。リュウが死ぬ可能性もあるのだ。

「誰も死なせはしない。それに『新しい戦力』のお披露目もあるしな。」

ナジエンダが乗っているのは特級危険種のエアマンタ。空を飛ぶエイの危険種である。革命軍本部から借りたものだ。特級危険種を飼いならして乗り物にするなんてなーんてスタイリッシュ!!↑

おつとあぶないあぶない（汗）

乗っている人数は3人。ナジエンダと他2名。その正体は!!……乞うご期待!なんちやつて(^^)

一人はナジエンダの……と、あの女性である。

「おらおらあ!汚物は消毒だあああああ!!」

完全虚化しているおれは襲ってくる強化兵たちを斬り刻んだり吹き飛ばしたりなど！粉砕！玉砕！大喝采！である（@、）／

「ウオオオアアアア！」

「叫ぶなあああ！虚閃！」

仮面についてある角から放たれた真つ赤な閃光。その光は一直線に進んでいき、直線上にいた強化兵たちはチリも残らず消しとんだ。

「ギャハハハハハハハ！ほらもつと来いよお！全力でだあ！」

「「「ヴオオアアアアアアアアア！」」」

ドカアアン！ドーン！

「あいつ容赦ないねえ」

「何かいやなことでも…は！私がアジトの食糧を全部食べたからか！」

「いや、それはないと思うぞアカメちゃん」

「ただただ暴れてるだけでしょ。ほら私たちも動く！」

「そうだ！いつまでもリュウにばかり活躍させていられるか！」

リュウを含めたナイトレイドの攻撃により、強化兵は次々となぎ倒されていき、等々

数百人まで数が減っていた。

だが、突然危機が舞い降りた。

「よし！数が減ってきた！このまま乗りきるぜ！」

「ああ……………っ!？」

その瞬間、おれの言葉を返してきたアカメの体がゆっくりと地面に倒れた。

「アカメ!？」

アカメだけではなかった。俺とタツミ以外のメンバーが地面に倒れてしまった。

「おいみんなどうしたんだ！」

「体が……………急につ……………ウゴカナイ……………」

「この感じ……………船のときと似たような……………」

「ちが……………これ……………は……………毒……………か」

スタイリツシユ side

「デストロイヤー、インクルシオ以外、敵面に効いています。スタイリツシユさま」

「ふふん。奥の手その1。スタイリツシユ特性の麻痺毒よ！」

「さすがスタイリツシユさま！敵にばれずに毒を簡単に撒き散らすなんて！そこに痺れ
ます懂れます！」

その男はハンマーを持ち上げ強化兵たちを睨みつける。
そして空から。

「さあ目の前の敵を駆逐しろ。スサノオ」

「わかった」

空を見上げると我らがナイトレイドのボス。

「ああ！ナジエンダさーん！」

「ボス！帰ってきたのか！」

「ナイスタイミングだぜ！」

エアマンタに乗ったナジエンダが黒のマントを翻しながらこちらに優しく微笑みかけてきた。おお、今のしぐさに俺もドキツとしちまったぞ。

そしてスサノオと呼ばれた男は白いハンマー。いや棍棒を構え強化兵たちに向って走り出し次々と始末していく。その棍棒からは鋭利な刃が飛び出しまるで扇風機のようにグルグルと回りだしミキサーのような状態になる。その棍棒に触れた強化兵たちは斬り刻まれ、ミンチとなる。しかも攻撃にまったくの無駄がない。攻撃していくにつれ、強化兵は全員死んでいた。

「や、やべえな」

「すげえ」

俺とタツミは感動とカッコいいと思う歓喜の声しか出なかった。あざやかに攻撃するのはまるで舞のような動き。スバラシイ！

すると、倒れていた強化兵の死骸が急に膨れ上がり、爆散した。スサノオもそれに巻き込まれ黒色の煙に包みこまれる。

「ほっほっほ！特性の人間爆弾よ！これで一丁上がりね！」

黒の煙が晴れてき、左手と右の横腹が吹き飛んだスサノオが姿を現した。俺が驚いたのはここからだ。そのスサノオの吹き飛んだ腕や横腹が、みるみると体の肉が膨れ上がり元の姿に戻る。言葉の通り再生だ。

「あの助っ人！生物型の帝具！帝具人間です！」

生物帝具：簡単に言うと、オートで動く自立式の帝具。セリユーのヘカトンケイルと

似ているが、違うとしたら、スサノオ動物ではなく人間、人間の形をした帝具である。

「スサノオ！南東の崖に敵だ！逃がさずつぶせ！」

「わかった！」

「はっ！ここがばれました！」

「仕方ないわね！ここは一旦逃げるわよ！」

回れ右した後スタイリッシュは偵察隊の3人を置いてその場から逃げようとする。

（生物型にはどくなんかなか効かないわ！コアを壊すかあいつを動かしている使い手をどうにかしないと！）

だが、簡単には逃げれない。

「逃がすかよ！月牙天衝！」

遠くにいる敵に向かってはなつた斬撃。それはスタイリッシュたちの方まで飛んでいきその場にあつた崖に直撃しその崖は跡形もなく吹き飛んだ。

「なかなか逃がしてくれないらしいわね！」

地面に当たった斬撃はスタイリツシュたちに当たるよりも襲ってきた爆風によって当たり所が悪かったのか地面に転んでしまう。その隙を狙いスサノオと俺はは距離を詰め、スタイリツシュの目の前に立つ。

「ご安心くださいスタイリツシュ様！」

「我々は将棋でいう金や銀！必ずお守りします！」

（いやいや！無理でしょこの状況!!偵察隊のあんたらが勝てる訳ないわ！こうなったら……………）

スタイリツシュは懐から紫色の液体が入った注射器を取り出す。

「奥の手その二！危険種一発！これしかないようね!!」

注射器の中身を右腕に注入する。すると……………。

「ス、スタイリツシュ……………様？」

スタイリツシュが注射器を打って数秒で体に異変が起こった。体の節々が大きく膨れ上がっていき、歪な体の構造になっていく。

「来た！キタキタキター！これで究極のスタイリッシュウウ！！」
（おいおい進撃の〇〇かよ…。でかすぎワロタwwww）

体の大きさが40メートルくらいになり、その巨人の体の頭の部分はマッチョとなつたスタイリッシュが体を上半身だけだして装着されている。

「あたし自らが危険種となることでえ！お前達全員を吹き飛ばーす！！」
スタイリッシュ、人間やめました）～o～（

「おお…。美しい……」

「さすがはスタイリッシュさま……（ガシツ）え？」

「貴方たちはあたしの貴重な栄養よお！ひとつになりましょおう！」

巨人の体の腹部分が一と千〇の〇〇〇の顔無しみたいに大きな口が開き、目と鼻の両名を口に入れ、『喰らった』。

グチュ…バキバキツ…ブチイ…。

「ああ……いやあつ！」

耳はその光景を目の当たりに全力疾走で逃げ出すが、その巨大な手に見事に捕まり、大きな口の中に入り見事に養分となりました☆

「いいわあ！♥栄養のある肉を豪快に食してえ…レベルアールツプ！」

元の普通の巨人の体からまたまた歪な姿へと変貌していき、まさに完全なる完璧な怪物の巨人となった。（肉食べたから頭が出来ました★！）

「なんだよ…あれ……………」

「気持ち悪い……………怪獣じゃないっ……………」

タツミとマインの口から出された言葉。まさにその通りだ。大きさは60メートルと大きくなり、右腕に堅そうな装甲を装着しており、頭の部分がなにかしらの液体が入った物を被っており、背中には大きなチューブが右腕に繋がっていた。

「でも、まだまだこの大きさでは足りないわ。あの【至高の帝具】には届きそうに無い…………。さらなる高みにたつ為にももつと大きくならなくっちゃあ！そのためにも貴方達もいただくわあ！」

俺とスサノオに向かってその巨大な腕を伸ばしてくる。

「むっ……」

「キモ博士にまけるかあ！」

振ってきた巨大な腕に向かって俺は高速回転しながら自ら向かっていった。

「悪魔風脚（ディアブルジャンプ）……」

右足が体の高速回転によって真っ赤に光りだす。

「画竜点睛（フランバージュ）ショットオ!!」

繰出した蹴りは巨大な腕の手のひらに直撃。

ゴオオン!

だが、

「か、堅てええ!？」

「甘いわよお!!」

足をつかまれ、そのまま持ち上げられ地面におもいつきり叩きつけられる。

ドガアアアン！

「ぐぐべはあ?!」

なんちゆう声だよ…。

「ぬうん！」

スサノオも自分の棍棒で攻撃するが、効果は今ひとつのようだ。

「はっはっは！…どうしたのよ生物帝具！もつと攻めてきてもいいのよお!!」

俺は無視かい!!

「リュウ！」

見ると、インクルシオのタツミにおんぶされているアカメの二人が登場。

「ナニそれ？二人羽降り？フラフラなあんたたちはあ！潰れチャイナサアい！」
タツミはその攻撃を全部避け、アカメの村雨で攻撃するが。

ガキイン！

「っ！」

「無駄よオ！一斬必殺の村雨でも刃が通らなければ意味はなあい！いい加減あきらめることねえ!!」

村雨は少しでも傷を付けられればそいつは終わりだが、傷が付けられなければ確かに意味が無い。

「くそっ」

「どうすれば……………」

今の戦力ではスタイリッシュに攻撃を与えることは出来ない……。と思っていたその時。

ドキュウン！

「んん!?!はっ!?!」

巨人の頭を貫通した光の光弾。発射されたほうを向くと、エアマンタに乗ったナジエンダとパンプキンを構えたマインがいた。

「このお！」

ドキュウン！

放たれた光弾を防ごうとするが、その今のピンチによって引き上げられた威力を「防ぐ事は出来ずにバランスを崩す。」

「いまだ！タツミとイケメンさん！あいつの攻撃を防いでくれ!!」

「む?」

「ええ!?リユウどうすんだよ!」

「本気でいく。切り札を使うぜ」

バランスを崩したスタイリッシュへ走り出す俺とタツミとスサノオ。

「くっ!まだまだよお!」

両腕が俺たちに向かって伸びてくるが、その攻撃も軽くタツミとスサノオに止められる。

「デストロイヤー!」

頭の部分から針のくっついた触手を俺に伸ばしてくる。今の俺にはそんなもの効かない。

手に持っている天鎖斬月を握りなおし伸びてきた触手を全て粉々に斬り落としてい

く。さすがはスピードは伊達ではないな。

「必殺マジシリーズ………」

刀を捨て、右手を力強く握り。

「マジ殴り！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！

巨人の体に直撃したパンチ。その威力は絶大。直撃した瞬間、スタイリツシュの頸から下の本体の体と巨人の上半身から上が……。

【消えた】

「あ……貴方は……何者なのよ……」

ズウウン……………。

下半身だけとなった巨人はそのままゆっくりと地面に倒れ、頸だけのスタイリッシュな地面にコロコロと転がり、アジトの近くにある谷へと落ちていった。

「ナイトレイドのデストロイヤー。リユウだぞ★」キラーン

第十三話

綺麗にスタイリッシュの巨大化した体を粉々にした俺。結構体にくるな〜マジシリーズ。一撃が強い分に体のあちこちが悲鳴を上げている。オオオオオオ!! w(。口。 ; w(。口。) w ; ; 口。) w オオオオオオ!!

「リュウ。怪我はないか?」

「怪我?俺は怪我をした事はなああ!!」

「え?その頬の怪我は?」

「へ?」

頬を触つてみると右の頬に少し大きめの切り傷があり、そこから真つ赤な血がドロドロ……と。

「ファツキュー!ドクタアアア!」

このイケメンの俺の顔に傷を付けたなああ!!スタイリッシュウウウウウ!殺してやるウ!(殺したけど)てめえの血は何色だー!(赤です)

もちろん傷跡なんて作りたくないのでクレイジー・ダイヤモンドで治しました。

そしてだ。

「あんたは何者？」

先ほどの戦いに入ってきた棍棒を持ったイケメンのおっさん。確か名前はスサノオだったような……。

「まあ待てリユウ。警戒を解け」

俺の肩にポンツと義手を置いたナジエンダ。そこまで言うならと思い警戒を解く。

だが俺はそのナジエンダの後ろにいるローブを被った人物への警戒は解かなかった。

「ボス。その二人は誰なの？」

ラバックに肩を貸しているレオーネが問いかける。大丈夫？（？ー??）

「そうだな。今の内に紹介しておこう。まずこの男、いやこれは革命軍本部から譲り受けてきた私の新しい帝具、電光石火・スサノオだ。オートで動く生物型だから負担が少ない。今の私でも使えるわけだ」

このイケメンが帝具う？しかも形が人間だ。セリユウさんの持っていたあのちつこのとは違うわけか。つか背でけえな……。俺よりデカイぞ……。

よし、ここは俺が代表として！

「えっと、俺はリユウって言うんだ、よろしくな」

握手をしようと手を伸ばす。だが俺の予想のはるか斜めの事をしだした。

「むー」 シュバババ！

「へ？」

いきなり俺に近付きさっきの戦闘で乱れまくっていた俺の服を綺麗にしわなどを伸ばしたりシャツをズボンの中に入れるなど、乱れていた服装を整えた。

「よしー！」

「なにがだよー！」

「正確は以外と几帳面だ」

「帝具のくせに……………」

間違いない。

「ほかにも出来るが後で話そう。で、もう一人のこいつが……………あれ？」

後ろにいた人物の紹介といこうと思ったがそこには誰もいなかった。

どこいった？

「君が噂のアカメちゃんだね。近くで見るとホントに可愛いんだね」

「な、なんだいきなり……………」

アカメの長髪を優しく弄るその人物と顔を赤めるアカメ。うむ！いい表情だ。脳内

フォルダに保存！

ん……あれ？この声……どこかで……。

「久しぶりだね。二ヶ月ぶりかな？」

来ていたローブを脱ぐと、そこには久しぶりに見た女の子。

「また会えたねリユウ」

「あああ！チエルシーー！」

そう、二ヶ月前に帝都で飴を踏み砕いたのが出会いで知り合った革命軍の殺し屋。チエルシーである。

「なんだ知り合いか？」

「ま、まあな」

「お前なんでこんな美少女と知り合いなんだよおおおお！」

「ぶほへえ!？」

いきなりフラフラだったラバックの怒りの回し蹴り。クリティカルヒットオ！めっ

ちや痛い!!なんかこんな事前にもあつたような……。

久しぶりに出会ったチエルシー。まさか助つ人がこの人だったとは。

「あんなデカイ奴をぶつ飛ばすなんてさすがリユウだね」

「へへん!もつと褒めてもいいぜ!」

「で、君がタツミだよな?」

スルー!?。(。|。) 他のメンバーに声をかけにいつちまったよ!?

そして最後にはアカメに飴をプレゼント。さつそくアカメが餌付けされたのだった。長い戦いでお腹が空いたのかな?

「でもチエルシーさんって俺たち以上に殺し屋にみえないっていうか」

確かにな。こんな美少女のどこが殺し屋なんだ。

「見た目で判断するな。アカメ並に仕事をこなしている凄腕だぞ?」

デジマ!?

「さて、軽く自己紹介が済んだからまずはここから離れるぞ。新しいアジトの場所を革命軍に探してもらおう間に少しだけ帝都から離れよう」

【イエーガーズ本隊】

「ドクターの家宅捜査が終わりました。ですが、行方不明を解決する重要な手がかりは掴めませんでした」

「ただ、貴重な実験素材や道具は研究室に丸々残っていました」

「逃亡……ではないな。やはり殺されたか」

「強化兵たちも居なくなっている事から、交戦して全滅したと思われます」

「そうか……」

（セリユーはまた、恩人を失ったわけだな）

【帝都宮殿中庭】

ゴシゴシッ

「……………」

「キユウ……………」

「スタイリツシュが居なくて武器のメンテは大丈夫か？」

「っ。大丈夫です。研究所に素材は残ってましたし、追加や代えは無理ですが……現状維持ならなんとか」

「そうか………」

『数週間前。スタイリツシュ研究所』

「セリユー。十王の裁き。各武器の調子はどうかしら？」

「はい！大丈夫ですドクター！」

スタイリツシュの実験により、セリユーの体の内部などに多数の改造や、体に装着させる10個の武器『十王の裁き』などを使いこなせるようになっていた。

「実験に耐えられたのは見事だったわね。その力で目的のために頑張りなさい。怪我してもあたしが要るからね★」パチーン

「ははっ！はい！」

【回想終了】

「うう………グスツ………」

セリユーの手の甲に大粒の涙が落ちる。

「親も…師匠も…恩人も……、私の大切な人が…みんな賊に殺されていく……」

「キユウ……」

「セリユウ……」

「隊長……。私…悔しいです。早く……早くあいつら根絶やしにしたい！」

「……」

ギユツ

「私と一緒に要れば……その望み叶えてやる。必ずな」

「うう……隊長……。ありがとうございます……。この力、この命……。正義と隊長の
ために……」

「うむ……」

コツツコツツ

「よし！バシツとセリユウを元氣付けてやるぜ！」

「ウェイブには無理だと思うよ？」

「母ちゃんが言ってたんだ。女の子が悲しんでるなら男として力になってやれって！」

「ふうん……」

「今がその時だ!!」

そして中庭に到着。

「セリューー！俺が着たぞお！」 ビシイ！

「隊長……」

「セリューー……」

上官が既にケア済みでした☆

「は……………」

「……………ドンマイ」 ポンッ

その頃のナイトレイド。隠れ家に移動中。

「ひゃほううううう！気持ちいいいい！」

「本当にそれだよ！めっちゃ楽しい！」

俺とタツミ。エアマンタでテンションMAX！

「はははっ！殺し屋と思えない無垢さだね。リュウとタツミ！面白い奴！」ニコツ

「いやあく。でも思ったよりこれ楽しいな〜」

「良い……」

「(ガタガタガタガタ)」↑ラバツク

「(ガタガタガタガタ)」↑マイン

「良くないわよおおおおおおおおお！」

帝都から南東に800キロ。「マーグ高地」。垂直に切り立ったテーブルマウンテンが数十種点在し、独自の生態系を形作っている。危険種のレベルも高く人間が住むには適さない……………「秘境」である。

「今は革命軍の偵察隊が、アジトに適している場所を帝都周辺で探してくれている。それまで私達は、ここでレベルアップだな」

確かにレベルアップには適している場所かもしれないけど、危険種がゴロゴロいるじゃねえか！トリコでいう捕獲レベルが80くらいの奴がめちやくちやいるんですけど!?

ブワア！

「あれ？行っちゃったけどいいの？」

エアマンタが誰も乗せずにどこかへと飛んでいった。

「本部にある巢に戻るんでしょ？マインってばそんな事も知らないんだね。アハハハハッ！」

「こいつ…………ムカつく…………！」グギギ

「それが私の得意な事なのよ。貧乳チビ。チッパイチッパイ！」

「ムツキー！シャー！！」

マイン落ち着け。ツインテールが猫の尻尾みたいになってるぞ。

「ところでボス。出発する前に言ってたスサノオの出来ることって何？接近戦が強いつてことだけ？」

ここでナジエンダの心に火がついた。

「ふんっ。ふっふっふっ……。では見せてやろう。驚くなよ……」

その大きな義手を高々と上げ……。

「やれ！スサノオ!!」

「わかった」

一体どんな凄い事をするかと思ひ、俺は期待に胸が膨らんでいたが、予想の遥か斜め上の出来事が起きた。それは!!!

「むうううん！」

トントントンザシュ！ガチャガチャガチャゴシゴシトントントンジュウ〜パチ

パチパチジュワア!

近くにある木を斧で切り落して行き、その木で三階建ての一軒家を作り、俺たちの持つてきた洗濯物を洗って干し、どこから出してきたのかは知らないが野菜類等を包丁でリズム良く切って行き、火を起こし下ごしらえをしてきた食材を調理していく。

「いや……凄いいことは分かったんだけど……なんすかそれ……」

「家事をしてるようにしかみえないんだが……」

「その通り!」ドヤア!

ナジエンダのドヤ顔いただきました!

「スサノオは元々、要人警護として作られた帝具だ。戦闘力は勿論、つきつきりで守れるように家事スキルが完備されている!掃除洗濯なんでもござれ!さらにだ!作れる料理のレパートリーは1000種類にも及ぶ!!」

「!」ピクッ

「戦闘と関係ないでしょうが!」

「いやいや、すごく便利だぞこれは!! まあ勿論、戦闘面でも奥の手はあるさ。な?」
「ああ」

戦闘面でも中々の力を持つスサノオと、なんにでも姿を変えられる帝具・ガイアファン
デーションを持つチエルシー。これが新しい仲間か……。なんだが心強いな!!

一つだけ心配なのは……。

「全然私よりちっちゃいわね。もつと大きくなりなさいよ貧乳wwww」

「キシャー……!」

「料理もできてイケメン。でも帝具でしょ? ははっ負けるきしないね!」

「ん?」

チームワークが心配だ……。

ん? 料理が上手い? しまった! このままではナイトレイドでの料理人の俺の地位が危うい!! しかも1000種類だ?! なんてすばらしい武器なんだ! 下手をしたら負けてしまう! こうなったら……。

「おいスサノオ! いや……スーさん!」

「む？スーさん？」

「俺と料理勝負しろ！」

「「「「「はい？」」」」」」

「おれはナイトレイドの厨房を預かってる身なんだ。まだ来たばつかのアんたに厨房は譲れねえ！だから、俺と勝負しろ!!。(。+・、ω・、)キリッ」
いきなりの宣戦布告。

「おおー！リュウとスーさんの料理勝負か？やれやれー！」

中々乗り気のレオーネ。

「二人の料理が食べれる!?!そう思うと腹が……」グウウ

お腹が空いて涎をたらすアカメ。お決まりですね☆

「なんだか凄いことになっちゃった……むぐつ」

少しノリに付いていけなくて飴を舐めるチエルシー。

「ほう。それは私も気になるな」

少しワクワクしているナジエンダ。

「次回!!番外編!ナイトレイド隠れ家開催!リュウVSスサノオの料理対決!絶対みてくれよな!!」

「誰に言ってるのよりユウ?」

(なんだが凄い事になってきた……) ↑タツミ&ラバツク

番外編！

これは持論だが、食べる事は生きる事だと思ふ。

俺は今からいまままでの闘いとは比べ物にならないくらいのプレッシャーを感じる死闘（料理対決）に向かう。

食べる事で、なるべく大勢の人に、栄養があつて美味しい物を安く食べてもらいたい。それはナイトレイドの全員も一緒である。食べる事は生きることの原動力になる。腹を減つては戦は出来ぬという言葉があるのはみなさんご存知でしょう。意味はご存知かね？あれは腹が減つていては、いい働きができない、というたとえである。俺たちは殺し屋。いついかなる時に襲われるか分からない……。だからこそ食べるのだ！生きていく為の基本は食す事！そして俺はそのナイトレイドの厨房を預かるもの！この前来たばかりのスーさんには負けるものか！どちらがどれだけみんなの腹を満たせるか勝負だあああああああああ！

「そうかしら？ 私はスーさんが勝つと思うわよ？」

「中々面白い対決になりそうだ」タバコスパ

「皆さんはすでにお腹をすかしている模様！ タツミい。今回はどうなると思いますか？」

「そうですね。いつも俺たちはリュウの料理を食べてきているから初めて食べるスーさんの料理は期待できるな〜」

「なるほどお。ついでに俺はリュウに少し期待している…。さすがのあいいつもガチになっているからな。どんな料理を出すか期待大だ！」

「さすがラバだな。これは面白くなりそうだぜ！」

「その通りだ！ さあいよいよ始まります！ 俺たちの胃袋を満たしてきたリュウと1000種類の料理のレパトリーを持っていくスーさんの両名の登場だあ！」

すると、厨房の両端の扉が同時に開かれる。そこから出てきたのは何時もより気合が入っているのか自分の大好きな色の黒のエプロンを身に付け、頭には迷彩柄のバンダナをしているリュウと、自分の心臓とも言ってもいいコアの色と一緒の赤のエプロンに身に付けたスーさんこと、スサノオが登場した。

「負けないぜ。スーさん！」

「よく分からないが、主であるナジエンダと審査員全員の胃袋を満たすのは俺だ……。」

二人の間に火花が散る。誰でも見て分かるように二人とも本気だ。

「おおお！まだ始まっていなにこの二人の言葉のジャブ！男の俺もテンションが上がってきたぜ！」

「こりゃあとんでもない戦いになるぜ、ラバ！」

二人で鋭く見つめ合い、お互いのダイニングキッチンにつく。

「お互い位置につきましたな。じゃあはじめませ！今回のルール説明を……タツミ。頼むぜ」

「分かった。今回のルールの説明をするぜ。制限時間は一時間。審査員五人分の食事を作り評価してもらおう。料理の内容は個人の自由だ。どれを作ろうが大丈夫だ。評価でその人の料理が良かったと思うほうの名前を紙に書いてもらおう。その名前の多かった方が勝ち。シンプルだろ？」

「ようするに、美味しいと言わせたほうが勝ちと言う事か！燃えてきた！」
「了解した」

「じゃルールも分かった事だし、はじめるか!!」

「それでは第一回！ナイトレイド料理対決！ハジメエエエエエ！」

ドジャアアアアン!!

開始のゴングを鳴った瞬間、俺とスーさんは料理に取り掛かった。

(制限時間が一時間あるんだ。ゆっくり下拵えをして今まで以上に美味しいもんを作つてやるルルルルルルルルル！(*▼ω▼)ノ)

「スター・プラチナ！」

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!』

ザシユザシユザシユズバズバズバグチャグチャグチュグチュ!

「おおっと！リュウはいきなり勝負に出たあ！自分のスタンドのスター・プラチナの素

早さと精密な動きで食材を切り落していくぅ!! なにか聞いてはいけないような音をきいたよーな……(ボソツ)」

「リュウは今回は本気だ。よほどナイトレイドの厨房を守りたいんだな」ゲンドウポーズ

「男らしく豪快に料理するリュウと比べてスーさんの状況はあ!?!」

「……………」

トントントングツグツ…。

「おお!?!リュウとはまさに正反対! 豪快な料理をするリュウに比べてスーさんは黙々と調理しているぅー!」

「俺たちはスーさんの料理を食べた事無いからな。どんなものが出来るか検討もつかない……………」

「それは俺もだ。ではでは! 審査員のみなさんにも聞いてみましょう!!」

「リュウの料理も気になるけどスーさんの料理も気になるわね。ボスがドヤ顔しながら言うんだからそれなりの料理を作ってくれるのよね」

「マイン。スサノオを甘く見るなよ。その様子だとあいつに胃袋をつかまれるぞ？」
「二ヤリ」

「リュウの料理は今まで食べてきたが、初めて食べるスーさんの料理がとても気になる……。早く食べたい……。早くしてくれないと腹と背中が引つ付くぞ……。」

アカメは要するに早く料理が食べたいようだ。

「スーさんの料理姿を見ると意外とそこまで重そうな食べ物じゃなさそうだな。私的には酒を付けてくれると嬉しいけどな。」

「あ、それ私も！たまにはおいしい酒を飲みながらご飯食べたいよね。」

「どうやら審査員の女性陣は早く食事をしたくて我慢できない様子！だがご安心ください！残りの時間はあと少しです！お腹を空かせてお待ちください！」

「オラオラオラオラオラオラオラ！」

『オラオラオラオラオラオラオラ！』

ズバズバジュワア

「むん！」

ザシユザシユグツグツ！

ピツピツピピー！

「制限時間終了ー！今から審査に移りまーす！審査員もみなさんは食事の準備をしてください！！」

五人分の料理を皿に乗せ審査員の方へと向かう。ここで落とさないよーにしないと………？（口？）オットット皿

「先ずはリュウの料理をいただきましょう！ではリュウ、料理を」

「おうよ。俺の料理は………これだ！」

みんなの前に出したのは………。

「さっぱり煮込みハンバーグと肉の野菜詰め合わせ巻きだ！」

「「「「お〜」」」」

見た感じは普通のハンバーグとベーコンで野菜を包んだ肉のサラダ巻きである。ついでに飲み物として特製オレンジジュースだ。（レシピは機密だ…（—）（—））

「見た感じは普通の煮込みハンバーグだけど何処がさっぱりなのよ?」

「それは食べたら分かるぞ。じゃあみなさん、おあがりよ!!」

この世の全ての食材に感謝を込めて……。

「」「」「いただきまゝす」「」「パクッ

お味は……?」

「」「」「おいしい!」(美味い!)」「」「」

「すごい!このハンバーグ、肉汁が出る位味が濃厚なのにさっぱりしてる!」

「それに味付けがいい。濃いすぎず薄すぎずで私好みだ」モグモグ

「この肉のサラダ巻きもいい。野菜と肉がいい具合に調和して美味しい」

「ほんとは酒も欲しかったけどこのオレンジジュース美味しいな。料理に合う!」

「リュウの料理ってどんな物なのかなって思ってたけど意外とおいしいね!」

みなさん満足してらっしゃる！これはいけるぞ。

「ねえリユウ。このハンバーグなんでこんなにあっさりしてるの？」

「それは中に豆腐と少しだけレモンを入れたんだ。豆腐を具財で使ってるからハンバーグが柔らかくなるし、レモンを入れたから酸味が出て味がさっぱりするんだ」

「あんたつて馬鹿じゃなかったのね……」

「この野郎！これでも頭はいいんだよ！（前の世界では）」川・ε・川　チョームカツクー
!!（コギヤル風）

「くっ、俺も見ていて腹が減ってきたが、俺はこの実況をやめるわけにはいかない！」

「俺もだらバ。後で貰おうぜ」

「おう！では次行きましょう！スーさんの料理を！」

「お前達、味わって食すがいい!!」

出てきた料理は……………。

「え、なにこれ…『真っ黒』……」

「スーさん、これが料理なの？」

「勿論だ。それは特製イカ墨スパゲッティだ!」&レオーネのリクエストでおいちい酒
☆

なぜ、特製なのか?それはあの某イカ娘から搾り出した墨であ……………。

作者(嘘だからなー!絶対違うからなー!9

「スーさん…、これホントに大丈夫なのよね?」

「大丈夫だ。味はちゃんと保障する」

「なにやら気になる食べ物!!見たところ黒いスパゲッティ!では審査員もみなさんお願い
します!!」

「「「「い、いただきます」」」」パクッ

おくあくじくはく?

「「「「おいしい! (美味しい) !」」」」

「どんなとんでもない料理かと思っただけで凄く美味しい!!」

「黒いからお腹に悪いかと思っただけだが、柔らかくて腹に簡単に滑り込んでいく……」

「これは、病み付きになるくらいだ。凄く好みの味だ」

「しかもスーさんの出してくれた酒に凄く合う!!」

「ほんと!これは仕事終わりだったら疲れ取れそうだよ!」

エエエエエエエエエエエエエエエエエエ!?なんだか皆さんの食べた時の表情が俺より明るいんですけどおおお!?何故だ!酒か!酒のせいか!おのれええ!オレンジジュースより勝っているとしてもいいのかああ!!(人それぞれだ)

「両名の食事も済んだところで!審査と行きましょう!!審査員の皆さんは美味しかった方の名前を手元のホワイトボードに書いてください!!」

「リュウとスーさんは後ろを向いててくれ」

言われたとおり俺とスーさんは後ろを向いた。

(大丈夫だ。落ち着け……。俺は全てを出し切った。雨の日も風の日も雪の日も嵐の日も危険種との戦いの日も(?))。俺は全力で料理に情熱を注いできた。信じろ!勝つの

Y
 !!!!!!!????
 」

なぜだああああ！俺の料理は完璧に『美味しく』できてたはずなのにいいいい！
 なぜ俺が負けるのだ——！！

拳を握り、目から大粒の涙を流しながら床を殴り続ける。

「キコクカコケキククケコカカウケカケカケケキコクケカカクカケキカケコケココカカ
 !!!」

「リユウ——！落ち着け！」

「もう戦いは終わったんだ！楽になれ！（お疲れ様と言う意味で）」

作者（縁起でもない……）

☆しばらくお待ちください☆

「なんで誰も俺の名前を書いてくれなかったんだ……」チーン

「いや、お前のも美味かったぞリュウ?」

「アカメが俺の頭を優しく撫でてくれる。嬉しい……。」

「でもなー。なんだか違うんだよな」

レオーネの言葉が気になる。違う……?」

「私もそれは思ったわ。なんだが何時ものリュウの料理とは違う気がしたのよね」

「ドユコトヨ」

「それならスサノオに聞いたほうがいいな。スサノオ」

「分かった」

ナジエンダの後ろにいたスサノオが俺の目の前に来る。

「リュウ、お前の料理は食べさせてもらった。確かに美味しい。もしかしたら俺より美味いかもしれない……だが、それだけだ」

それだけ?

「お前は美味しく作ることしか考えなかったか?」

「あ……」

そうだ。俺は勝負でスーさん勝つために作る料理を出来る限り美味しくしようと考えてた。

「料理を作るものとして……大事な事は何だ？」

大事な事……？

「それは……料理に対する愛情と食べてもらう者に対する気持ちだ!!」

「なっ!？」

「料理人足る者、いついかなる時でも食べてもらう者のことを考えなくてどうする!!」

ズキッ

スーさんの言葉が俺の心に突き刺さる。

「確かに美味しくさせるのは大事だ。だが食べてもらう者のことを考えていなくては、いくら美味しいものを考えてもダメだ。その人のことを考え、つくり、美味しくし、それでこ

そいい料理人だ。だが他の者から聞いた話では今回の料理はいつものお前らしい料理では無いらしいぞ。いつも通りの料理も、人を思う気持ちのこもった料理すら作れない奴が、料理人の聖域である厨房を守るには100年早い!!!」ドオオン!

「!!」

スーさんの言うとおりだ。俺は料理を美味しくすることしか考えてなかった。おそろく、いや、確信できる。俺はこの作った料理に、メンバー全員のことを考えた気持ちも愛情も入っていないかった。俺は馬鹿野郎だった。

「スーさん……。俺、目が覚めたよ。これからは！みんなの事を考えて料理するよ!!」

「うむ。わかったのならそれでいい」

力強く握る握手。この時に言葉は要らない。そこには男同士での友情、無言の歌があった。

「素晴らしい！これぞ男同士の友情！美形キャラこと、私ラバック！涙が止まりません！！」

「俺もだらバ！これぞ友情だ！」

お前からまだ実況と解説してたのかよ……………。

「よし気を取り直して！今からチエルシーとスーさんの歓迎会を始める！リユウ！みんなの料理を作ってこい！！今度はしくじるなよ！」

「お、おうよ！！」

それから数分後。

「では皆さん！新しく入ったチエルシーちゃんとスーさんのナイトレイドの介入を祝して……………」

カンパーイ！

「「「」

この時が俺にとってこの世界に来て一番楽しかった時間だった。

第十四話

「プギイイイイ！」

「待ちやがれ俺の昼飯イイイイイイイ！」

マージ高地に来てはや一ヶ月。まだ新しいアジトの場所とかも見つけていないらしくもう少しの間は隠れ家で過ごす事になった。んでもって俺はいま自分の昼飯の為に食材となる危険種の狩りに出ている。今追いかけているのも危険種。ドデかい豚だ。

「その肉食わせろおおおお！」「(^ o ^)」

四足歩行です☆

「プギイイイイ！」

「まあああでええええええ！」

目が白目になりながら追いかけております。バケモノじゃねえか……。

「ミギーー！」

パラサイト代表、右手に寄生した寄生獣ことミギー。俺のチート能力はなんでも出来

る。その気になれば世界をドツカンすることも……（笑）あ、でもこのミギーは喋らないんだよな。おもしろくなああい！

『うるさいぞリユウ』

喋ったあああああああああああああ！（。o。o。）

俺の手から目玉が飛び出て俺を見つめてくる。そんな曇りなき眼で見ないでくれ。

『あの豚を殺せば良いのか？』

「正確には捕まえるな。頼んだぞ」

『やれやれ……』

少しため息交じりに返事をするミギー。目玉が手の中に入った直後、手の形が幾つもの鋭利な刃になり、まるでゴムのように伸びていき（ゴムゴムのくではありません）豚の危険種をズバズバのグツチャグチャにしました☆

「いや、ここまでしなくても……」

『別にいいだろう？君が食べるんだから』モグモグ

「そうだけど……つてお前が食べるんじやねえよ……」

ミギーがおいしく頂きました（笑）

「ああ……俺の昼飯が……」ガツクリ

『私は寝る。もう起こすなよ』

「もうお前を呼ばねえよこんちくしよおおおおおお！(涙)」

隠れ家に帰るか……。オナカガスキマシタ……。トボトボ

そして隠れ家に戻ると。

「いやゝ。スーさんの作る料理は美味しいな！修行の疲れが吹っ飛ぶ！」

アジトに戻るとスーさんとアカメが二人で釣ってきた危険種の巨大魚で料理してくれていた。さすがスーさん！そこに痺れる憧れるウ！！

いやそれにしてもスーさんは凄いな。なんでも簡単にこなしている。

「スーさん！明日稽古しようぜ！」

木刀を持ったタツミがはしやぎながらスーさんのお願いしている。

「だから言っただろう。スサノオは凄いと」ドヤア

うわお……。ボスがすんごいドヤ顔かましてる……。

「こんな凄い帝具、よく革命軍が貸してくれたね」

凄すぎるウー！

「いや、今までスサノオは眠っていたのだが、私に反応して動き出したんだ」

「っ！……さすがボス！」

「フツ……まあ、なんとというか……魅力……かな？」キラキラ

あれ？女性なのにここにイケメンがいる……？

「ナジエンダは、昔のマスターに瓜二つなんだ」

「なるほど」

「さぞ素敵な人間だったのだろう……」

義手から鳴る鈍い金属音を鳴らしながらボスが俺に近付いてきた。

「え…………いや、あの…………ナジエンダさ…………ま？」

「他に言い残すことは…………？」ギロリ

「え!?ち、ちよつと…………タツミやレオーネは…………？」

「イイノコスコトハ？」

やべえええええ！ボスの目がマジだ！これ以上言ったら息の根を止められる！だが本
当に面白かつたんだもん！仕方ないだろ!?ボスが男と瓜二つ…………wwww

俺は…………後悔はしない…………。

「ボス…………イケメンだぞ？」ウインク☆

その後、ナイトレイドの隠れ家から人間とは思えない叫び声が聞こえたのは、聞くま
でもない…………。

—翌日—

俺たちナイトレイドはアジトが見つかるまでの間、自分の力のレベルアップの為に危険種相手に修行をしている。その理由はエスデス率いるイエーガーズの戦力がずば抜けているのと、帝国も着々と戦力を集めてきているからだ。今のままでは力不足、もつと力をつけなければいけないということで、各々修行である。今回はタツミとレオーネ、マインとラバツク、俺とアカメでの行動。俺は相変わらずアカメとである。え？イヤじゃないのかって？んな訳アルカアアアア！美少女との修行ほどわたくしへのご褒美はありません！（@??@）ジュール♪

「さてアカメ。今回はどんな危険種を狩る？」

「うむ。今回は少し離れたところにある草原を縄張りとしている危険種を葬る。その後はりユウは私と手合わせだ」

「オツケー……って、はあ!?アカメと手合わせ!」

「そうだが、嫌なのか？」

「嫌と言うわけではないが……どうしていきなり？」

「初めて会ったときの事を覚えているか？」

「まあ覚えてるけど……」

「あれからお前がどれだけ力を付けたか気になってな。大丈夫、死なない程度にする」

「村雨使つてる時点で死なない程度も関係ないような……」

アカメとやるのか……。死なないとはいえ怖いな……。あの村雨に触れただけで死ぬからなあ！コワイヨオ〜！

「「グルルルル………」」

そしていつのまにか回りが危険種によって囲まれていました。なんだコイツラ……見た感じワニと馬と鳥を混ぜたような危険種……。簡単に言おう……。

「ぎゃあああバケモノオオオオオオオ!?」

「リュウ、先ずはこいつらを葬る。死ぬなよ?」

「ぜつつつつつたい死なない!!!」

そう言葉を交わし二人は別行動を取る。

アカメは村雨を鞘から引き抜き襲い掛かってくる危険種を一刀両断していく。

そして俺は……。

「よっ、ほっ、ほいっ」と

次々と襲ってくる攻撃を軽く避けて危険種との距離をとる。

「攻撃のスピードは普通。でも当たったらその部分は溶けるんだな」

距離をとる度に危険種は近くに転がっている岩などに噛み付く。その噛み付いた痕を見てみるとジユ〜と音を立てながら溶けている。

「危ないからパツパと終わらせる！スーパーサイヤ人2!!」

ゴオツ！

髪の色が金色になり、体の周りがパチパチと電気が走っている。

「キシャー！」

「ダァー！」

拳が危険種の顔面に直撃。その瞬間危険種の頭と胴体が離れ、胴体は地面にバタリと

倒れ頭は遠くへと吹っ飛び、たまたまそこにあつた少し大きめの穴に頭が入る。ホールインワン!!

「ギャー——!!」

「ギョオオオオ!!」

その光景を見た残りの危険種が咆哮を上げこちらへと近付いてくる。

「オラオラオラオラ!!」

ドドドドドドドド!

右の拳と左の拳での連打。放った拳は危険種は腕や足や胴体などに直撃し鈍い音を立て地面に倒れる。

「よおし!お前達は今回の晩飯に決定だ!俺の栄養にナリナサーイ!」

おっと、俺はスタイリッシュじゃないからな?

ブウン!ドゴオン!

「ぶべらあ?」

突然体に襲ってきた打撃。それをモロに喰らった俺は地面を5回ほどバウンドしな

がら転がっていく。

「なんだ今のつ……」

視線を前に向けて、さきほど俺の栄養になろうとしていた危険種の一回り大きい体で頭にユニコーンのような角が生えている危険種がこちらを睨みつけていた。

「こいつらの統率者か？ お前も俺の飯になれええええええ！」

ブウン！バシイ！

地面をおもいつきり蹴り上げ危険種に近付く。だがさすが統率者と言ったところか先ほど仕留めた危険種とは違っていた。俺の攻撃に早く察知し俺の拳を自分のご立派な尻尾で防がれてしまう。

「さすがだな！ならこの攻撃全部防げるか!？」

ドドドドドドドーン！

バシバシバシバシバシバシ！

渾身のラツシユもその丸太のような太い腕で防がれてしまう。

「ラツシユの早さ比べと言いたいところだけど……すぐに終わらせてやる!!」

バシイン！ブオン！

瞬間、俺は誰もに対応できないほどのスピードを出し、危険種の足を払い尻尾を掴み空中へと放り投げる。

「ギユアアアア!?」

「行くぜ…鉄砕牙!!」

腰の鞘から抜いたおんぼろ刀を抜く、抜いた瞬間に鉄砕牙の刀身が元の大きさの数倍になる。

「喰らえええええ!爆流破あ!!」

薙ぎ払った衝撃により刀身から巨大な竜巻が飛び出し、危険種へと襲い掛かる。

「ギユアアアアアア!?」

爆流破に巻き込まれた危険種は粉々になり地面へと吹き飛ばなかった体の部分が黒墨みたいになり地面へと落ちていく。

「討伐完了!!」ピース!

体がある状態で倒れていた危険種を持ち上げ、戦いで別れたアカメの方へと歩を進める。

そこにあつたのは、俺が倒した同じ危険種の残骸と大きく積みあがった亡骸の上でポケ〜としながら胡坐をかいているアカメがいた。

「カオス……………」

「リュウ、終わったのか？」

「ああ。こいつらは今回の晩飯！じゃあさっそく手合わせするかアカメ？」

「うむ。そうだな「グルルルル」あ……………」

アカメのお腹からかわいらしいお腹の音。これはまさか……………。

「アカメ……………お腹すいたの？」

「空いた……………。だから今から腹ごしらえだ!!!」

ビューン！

「え」ポツン

ありのまま今起こった事を話すぜ…。お腹が鳴ったアカメが俺の言葉を返した後、あのポットに勝るほどのスピードで消え去った……。あれは100m5秒だったかもし

れない催眠術と超能力でもない…。本当に走って消えていったんだ……。

ここで俺が取する方法は……。

「俺もご飯んんんんんんんんんん!!」 ダダダダ!

アカメの後を追って隠れ家に戻る。

だが俺はこの時分かっていた……。この後、チエルシーから俺たち殺し屋にとって厳しい言葉を言うてくることに……。俺はこの言葉を聞いて怒りを隠せなかったのだ。

第十五話

各々、修行が終わり隠れ家に全員集合する。

「この周囲の危険種はスムーズに討伐できるようになってきたな」

「色んなタイプの奴が攻撃してくるから気が抜けないぜ」

「いいじゃん。その方が面白い」

間違いない。

「ここは空気も薄い。過酷な環境での実戦、結構レベルアップしたんじゃないのか？」
「確かに……手ごたえは感じるわね」

この隠れ家に来てからの実戦、確かに全員今までよりレベルアップしている。自分の持っている帝具の扱いも慣れていき、どんな時でも臨機応変に対応できるようになってきた。

「チエルシー」

「んー？」

「どうだ？ ナイトレイドのみんなを一ヶ月みて」

「うん。強いね…、前私がいいたチームよりも強い。特にリュウとアカメちゃんは頭一つ

飛び出てるくらいに強い」

「まじでか!!」

(よおし! 認めさせたわ!!)

俺の横で満面の笑みを浮かべながらガッツポーズするマイン。お前: チエルシーとなにかあったのか?

「でも……………」

チエルシーの声色が重くなった。

「強いからって生き延びられる訳じゃない…。昔の報告書は読ませてもらったけど、シエーレやブラート、殉職したこの二人、人間としては好感持てるけど……………殺し屋としては『失格』だと思う……………」

「「?」」

チエルシーはアカメと同じくらい仕事をこなしている殺し屋のプロ。俺やタツミなどのまだ経験不足の奴らになら言っても何も言い返せない。だけど、俺たちに色々教えてくれたあの二人をとやかくいわれたくねえ!!

「みんなも甘いところをどうにかしないと、これから先、命がいくつあっても足りないんじゃない?」

そういう残し、チエルシーは隠れ家の屋敷の方へと踵を返す……………が。

「おい待てよ……」

チエルシーの肩を掴み此方に振り向かせる。

「なによ……」

「確かに俺たちはまだ弱いところもある。チエルシーが言うように甘いところもあると思う。でも、今あの二人をとやかく言うのは関係ないだろ?」

「そうね。あの二人は関係ないのかもね。でもあの二人が死んだのは自分の甘さが問題だったんじゃない?」

「なんだと?」

「シエーレの時は確か帝都警備隊で今はイエーガーズにいるセリユーって子にやられたんだよね?それってさメインがやられている時にそれを庇って死んだんでしょ?ブラートの時もそうよ。三獣士との戦いでタツミのやられているのを守りながら戦って死んだだよな?」

「何が言いたい……」

「まだ分からないの？それは二人の優しさなのかも知れないけど、その優しさで自分の甘さ呼んで死を招きいれたんじゃない！」

「!!」

シエーレにブラート。この二人は最高の人間だった。シエーレは誰にでも優しく接してくれた人。ブラートは熱い気持ちで厳しく修行をしてくれたけど、戦いの後での報告で傷が無いかなどきに掛けてくれた優しい奴だった。なのに……。

「仲間で……強くて……そして！優しかった二人を馬鹿に済んじゃねー！」

拳を握り締めチエルシーへと襲い掛かる。

「マズイ！みんなリュウを止めろ!!」

「わ、分かった！止まれリュウ！」

「大丈夫だよ」

啜えていた棒の付いた飴を出し、向かってくるリュウを前にして無防備の状態で突つ

立っている。

「この野郎!!」

握り締めた拳をチエルシーに向かって振りかざすした……が。

バシイン!

「え?」

俺の攻撃を避け、更に追い討ちで俺のスキだらけの足を自分の足で足払いをする。

「はあ!」

ガシツ!ドオオン!

「ぐへああ!」

そのまま俺の頭を鷲づかみにし地面に叩きつける。

「く……くそつ……」

「ほら、ここも甘いところだよ。リュウの能力は強いけどそれだけ。殺し屋ならいついかなる時でも冷静に判断しないと……」

「!」

少し細長い針を俺の眉間に突きつける。

「こようゆう風に殺されるよ?」

それを言い残したチエルシーは屋敷へと入っていった。

「くそっ……………」

—その日の夜—

俺とタツミとラバックはマインの緊急招集により、屋敷の前に集合となった。

「で。話ってなんだよマイン」

「あんた達は平気なの？シエーレやブラートのことあんなふうに言われて。特にあんなよりユウ！あんなにボコボコにされて悔しくないの!？」

「そ、そりやあ悔しいけど…………」

少し頭を冷やしてから言われた事を考えると、なんとなく分かってきた。確かに俺たちは甘いし弱い。しっかりとしないと本当に命がいくつあっても足りないような状態になる。俺たちは殺し屋。いつ殺されえもおかしくないんだ。

「俺も…兄貴の事をとやかかくいわれたくねえよ…」

「ならチュエルシーをギャフンと言わせて、お前だつて隙だらけだけぜ！つて笑つてやりなさい！そして！シヨックを受けているところに！アタシがとどめをさして勝利宣言！！完ツ璧！！」

「……………」

ナニイツテンダコイツ…。

「お前と組むとロクな事にならん気が…………」

ああ、そうか。タツミはマインとの初任務の時にパンプキンの攻撃を受けて頭が大変な事になったらしいな…………。

禿げたらしい…。ププツ

「なによ。当然あんた達はアタシの味方でしょ？そうよね？」

すんごい上から目線だな…………。

「分かった分かったよ…。でもどうやってギャフンと言わせるんだよ」

「そこはラバとリュウで考えなさい。アタシは自分のを考えるから」ガチャ

マインは踵を返し屋敷へ向かい扉を開ける。

「いいわね！今夜決行するわよ！ギャフンだからね！！」バタンツ！

「相変わらず強引だね……」

その気持ち分かるぞらバ……

「ギャフンと言つてもどうするよ……」

「そうだな……俺たちも帝具を使つてなにか……」

ピコーンッ！

「ああ！閃いた！俺閃いちゃったわ!!」

「おお!!」

——温泉にて——

現在チエルシーが入浴のお時間。服を着ても分かる中々のおっぱい。そんな素晴らしい武器を持つているチエルシーが自分の体を露とし湯に浸かっている。こんなの見えていたら我慢できな……

作者「これ以上やると18禁小説になるヤメナサイ」

なんだこの野郎。チート使いに張り合うきか？

作者「お前は私には勝てない」

減らず口を!!ワンパン……

作者「踏み潰す」

ドオン！

へぶらあ!?!プチ

作者「作者権限には勝てないのだよ」

何故だ！チート使いの俺が！

作者「坊やだからさwww」

くそ作者め…。

作者「はやく話し進めないと君のピーを……アンナコトヤコンナコトニ」

スイマセンススメマス。

ケプコンケプコンツ。話を戻そう。今はチエルシーの入浴の時間。この時を俺たちは有効活用する!!

チエルシーから少し離れた岩の後ろに隠れているのが……。

(まさかこんな事になるとは……)

透明化したインクルシオ。今回の作戦は透明化を利用して入浴中のチエルシーの頭

に風呂桶をかぶせるわけだ。

確かにこれは驚くな……。

(あんまり見るのも悪いしサクツと終わらせるか……。あ……。でもちよつとは見たいな……)

葛藤する思春期の少年。

(ふ……よし！)

近くに落ちてあつた風呂桶を拾い、音でばれぬ様に抜き足差し足で近付く。

ここで気づいた事が一つ。

傍から見たら風呂桶だけが動いているように見えるんだよな……。怖すぎだろ……。

*注意*オバケではありません。

残り数メートル。あと少しで風呂桶を被せられる。

その時……。

バシヤアツ！

「ふう……」

そこから出てきたのは……………。

あ…………ア……………ッ！男かよお！！

「そこにいるんだろ？分かるぞ…………」

ゲッ！バレテル！仕方ない…………。

渋々とインクルシオの透明化を解く。

「げ…………スーさん…………なんでばれたの？」

「インクルシオは姿を消せるがそれだけだ。気配や存在感までは消せない…………。この事を忘れるな…………じゃないと死ぬぞ？」

「……………」

シューウウ……………。

インクルシオの鎧を解いて出てくるタツミ。

「うん…………」

「ふん…………『隙あり』」

ポコンッ

スーさんの軽いチョップを頭に受けるが俺はいきなりスーさんの声が変わったことに驚いた。

「え……ええ!？」

ドロオン

「にやははは。実は私でーした」

「なっ!？」

大きな煙が飛び出し、中からバスタオルを巻いたチエルシーが出てきた。

自分の帝具・ガイアファンデーションで姿を変えていたのだ。

「タツミの気配が近付いてくるのを感じてたからさ。逆に驚かせてやろうと思ったわけ」

「で、変身して待ち構えていたと……」

「そのとーり! 騙しは私の得意技。そんな私を騙そうなんて10年はやーい」
おもいつきり騙された……。まさかスーさんに化けているとは……。でも……。

「騙されたのはどっちかな？」

「え?」

ドロン

タツミの周りからまたまた煙が上がリ、そこから出てきたのは……。

「10年なんて要らなかつたな。簡単に騙せたぜ」

リュウである。

「え!? タツミじゃなくてリュウ? でもインクルシオ付けてたのに……」

「俺の能力はなんでもできる。タツミのインクルシオを真似することもな。はっはっはっ!」

そう、相手が騙しの天才ならそれは騙し返してやろうと思い、俺が風呂桶を被せる役を自主的に志願したのだ。まあ、スーさんだったのは俺もビックリしたけどな

? 「騙しの手品だ!!」

「これは一本取られたわね…。やるじゃんリュウ」

「そりゃどーも。あとチエルシー…、さつきはいきなり殴りかかっちゃって…ごめん…」

「へ?」

「チエルシーの言われた事は的確だった。確かに俺たちは甘さが残ってる。それをこれ

からは何とかしていくよ」

「へえー…物分りいいじゃない、後さっきのことは怒ってないよ。私も怒りすぎたと思っただしね」

「ごめんな。でも……なんであそこまでみんなにキツく言っただ？もうちよつと優しく言ってくれてもよかったんじゃない？…」

「それには理由があるんだ……」

チエルシーの顔の表情がいきなり暗くなる。

「私はさ…ついこの間、仕事から帰ってきたらチームが全滅、なんて経験したからね…」

腰まで伸びた髪を翻しながら悲しく、そしてポツリと呟いた…。

「この連中にはそうなって欲しくないわけよ…」

『みんなも甘いところをどうにかしないと、これから先、命がいくつあっても足りないんじゃない？』

(そっか……)

あの時言ったのは、みんなの事を思ってた。チエルシーはチームの仲間が全滅したという経験をした。それは普通なら耐えられない出来事である。悲しみで一度はどん底まで落ちたチエルシーだがなんとか立ち直り、ナイトレイドへとやってきた。眩しい言葉にどれだけの感情が詰められているのか。俺はすぐに分かった。彼女は人一倍厳しいが、人一倍優しく、人一倍辛いのだ。

(なんだ……)

「チエルシーも優しい奴じゃないか！」ニコッ

「ッ………／／／」ドキッ

するとチエルシーは風呂桶で湯船のお湯を汲み……。

バツシャアア！

「違うわよー！」

「ほぶうっ！」

いきなりの事で避ける事が出来なかった…。あーあ…服が……ピチヨピチヨ…。

「私の精神衛生上の問題ね。あ、今度入浴してる時に侵入してきたら切り落すから覚悟してね？」シャキンシャキン

左手の指でハサミの真似をするチエルシー。あれ……背後にジエイオンがたつてるような？しかもなんか聞いた事にある台詞をきいたよーな!!!

ここで俺の最強の神技。人生で最初に最後の業のお披露目である。

地面に膝を着き正座の形を作り、両手を三角の形に。そして頭は地面に着くように。そう！これぞ俺の神技の！

DO☆GE☆ZA☆!

「スイマセンツでしたああああああアアアアアアアアアア!!!」

俺の生きていての人生で最初に最後の本気の土下座である。

それから俺は約三時間ほどの拷問&説教を受けました。ある意味でエスデス將軍より上のドSだぞこの人……。

—チエルシー自室—

「ふう……」

寝巻きに着替え、ベッドに腰を下ろすチエルシー。先ほどの出来事を思い出している
と、一つだけ心に残っている言葉があった。

『チエルシーも優しい奴じゃないか！』ニコツ

ドキッ……

「なんなんだろ……この胸の痛み……」

手を胸に当て横になるチエルシー。

「リュウ……」

今チエルシーが持っている胸の熱い痛み。これに気付くのはそう遠くない事なのか
もしれない……。

第十六話

「俺たちが帝都から姿を消して約二ヶ月。個々の能力を上げる為の修行を行っている。だがそんな時、その帝都でとある出来事が起こっていた。それは……………」

新型危険種の出没である。

—帝都から数キロ地点にある民家—

「……最近、帝都付近で新型危険種が多く出現しているって話だ……」

猟銃に弾を込めている男と、食器を洗っている女性。この二人がここに住んでいる。

「お前、絶対一人で出歩くなよ」

「ええ、分かっていますよ」

ドオン！ドオン！バコオン！！

瞬間、扉が蹴破られる。そこから出てきたのは人の形をしている危険種が入り込んできた。そう、この危険種が今帝都付近で出現している危険種である。どこから出てきたのか、どこからやってきたのは誰も知らない。

「!？」

ドオンドオン！

猟銃を構え発砲。

「ギュウアオ！」

ブン！ズボア！

「へ？」

危険種の腕が男の胴体を貫く。傷口から大量の血が噴出し危険種は男を外に放り投げられる。

「はっ……ああああ！」

女性は腰をぬかし、尻餅をつく。目の前で夫が死んだことのショックで頭の中が真っ白になり考えることが出来なくなつた。

「イヤ……イヤアアアアアアアア！」

「ギヤアアアア！」

その太い腕が女性に襲い掛かる……………。

「飛天御剣流・九頭龍閃!!」

ズドドドドドドドドド!!

「グ……ガア……ア……」

ドサア。

女性に襲い掛かろうとしていた危険種、全てが地面に鈍い音を立てながら倒れた。

「え……?」

女性が顔を上げる。そこに居たのは黒の服と黒の刀を身に付けたナイトレイドのメンバーの一人、デストロイヤーことリユウである。

「大丈夫ですか?」

「あ、貴方は?」

「趣味でヒーローをやっている者です☆」

「はい?」

「さて後はこの人を……」

胴体を貫かれた男の遺体を持ち上げる。

「しゅ……主人に何を!!」

「大丈夫ですよ。見ててください……」

「あ……がは……」

（よかった。まだ息はある。あの刀を使ってもいいけど大丈夫だろ）

「クレイジー・ダイヤモンド!」

『ドリア!』

拳が男の人に直撃。すると危険種に負わされた傷が塞がる。

「よしこれでおっけい!!」

「う…あれ?おれは……………」

「あ、あなた!!」

涙を流して主人に抱きつく女性。リア充バクハツシロ……。

「では俺はこのへんで…しやらばにやり!!」

噛んじまった……。

この後、この二人の間には元気な男の子が生まれたとかなんとか。

(あの危険種はなんなんだ…?一応ボスに報告しておくか)

そこから少し離れた場所で俺の戦いを見ていたものがいた。

「あれがむちやくちや強いって噂のデストロイヤーか?確かに強いな」

その男はフードを深く被っていて顔が分からない。ただ一ついえる事は……。

「もうちよつとおもちやで遊んでてもらおうぜ」

新たな『闇』が迫ってきていた。

イエーガーズ side

「この所、新型危険種の出現が多くないか？」

「そうですね。またイエーガーズにもまた依頼が来るでしょう」

ウエイブとランは疲れを癒すために帝都を散歩していて、近くの喫茶店で軽く食事を取っていた。

「しっかしあいつらはなんなんだろうな。行き成り出てきて人や家畜の牛や豚を食べてるって話だけど……」

「来たと言うより、誰かに連れてこられたではないでしょうか？」

「え？どうゆう事だよ？」

「少し前に大臣から隊長とあの危険種を捕獲しろとの命令でありまして、隊長の帝具で

氷付けにしたあと調べた結果……あの危険種は『人間』だったんですよ」

「は!？」

「おそらくドクターの実験体だったのだと思います。それも帝具を使つての」

「あのオカマ……まじかよ……」

「ある場所に隠していたのでしようけどそれが逃げ出したのではないでしょうかと」

「逃げ出した? それはないんじゃないかと」

「はい。ここからは私の考えなのですが、逃げ出したというより……誰かに解き放たれた』じゃないかと」

「解き放たれた?」

「おそらく第三者の帝具使いかも……」

「ナイトレイドも面倒なのにまだ来るのかよ。やれやれだぜ……」

「ナイトレイドも面倒ですよ。あのデストロイヤーが入ったという話しですし」

「くそっ……。一度戦つた事あるけど俺らと同等くらいの力だった。いや、もしかしたらそれ以上かもな」

「大丈夫ですよ。ウェイブは強いですし、私達にはエスデス隊長が付いていますから」

「だ、だよな! これからも俺たちが一層頑張らないとな!!」

「はい。あとウエイブ。一つ言いたいことがあります……………」

ランの表情が少し変わった。

「ラン？」

「クロメさんにケーキ食べられてますよ？」ニッコツ

「え!？」

テーブルに目を向けると目の前においてあったケーキの乗った皿が消えており、横を向くと皿に乗っていたケーキを頬張って食べているクロメがいた。

「ああああああ!!クロメ!俺のケーキ!!」

「だってウエイブ喋ってばっかで食べなかつたから要らないのかなって思っ……………」

「だからって人の奴をたべるんじゃないやねえよ!しかも全部食べやがって!!」

「だって美味しそうだったから……………」モグモグ

クロメさんに美味しく食べられました☆

「俺の……ケーキ……」ガックリ

その後、ランから半分ケーキを貰ったウェイブであった。ヨカッタナー

ナイトレイド side

危険種討伐の依頼がナイトレイドにやってき、俺たちは新しいアジトへと帰還してきた。見た目はもちろん前のアジトとそっくり。しかも温泉付きだ！あ……また変な事すると斬り落とされる……（（。ロ。））ガタガタブルブル

そして戻ってきて早々帝都付近で出現している危険種の排除することになった。メンバーはアカメとマイン。タツミとラバック。レオーネとスーさん。俺とチエルシーである。ボスはお留守番（ゝゝ♪

その日の夜、俺たち二人はフェクマ（フェイクマウンテン）辺りを散策していた。

「暗すぎだろフェクマ……。絶対ここ出るだろ……」

「あれ？リユウってオバケ無理なの？」

「居ないって思いたいけど本能がそう思っていないんだよ……。お陰でマジで存在するって思い込むようになった……」

「男の子だからそういうのがすきなのかと思ってた」アメパクツ

「偏見だそれは。俺だってオバケ怖いんだよ！」

「強いくせに……」

「強いは関係ないだろ!!」

「まるで子供みたい」クスツ

「へーへー、俺は子供ですよー」

「アハハッ！」

リユウとのちよつとした言い合い。私はそれでも凄く楽しいと思った。リユウはナイトレイドのメンバーとは少し違う気がする。根本的というのではなく、なぜかそう思わせるような人物だった。殺し屋とは思えない無垢さ。馬鹿やつてるけどやる時はやるその性格。見た事もない能力をもっているその力。すべてが不思議だった。いまでも分からない。なんであんなに胸が熱くなってくるのだろうか……。私はそれが知りたい。

それからしばらくして……。

「中々でないな危険種。寝てんのか？」

「もしかしたらイエーガーズが狩り尽くしたのかもしれないよ？」

「それもそうかもな。ちよつと頂上まで見てくるよ」

「気をつけてよ。なにかあつてもすぐ戻る事!!分かった？」

「はいはい分かつてるよ。んじやいってくる」

凄いジャンプ!★

ドオオン!

垂直飛び結果・約1000メートル。

チーターメエ…。

—頂上—

「ほい到着!見た感じいなさそうだな」

辺りを見渡しても人の気配も危険種の気配もゼロ。どうやら本当にいなかったようだな。んじや速いとこ退散してチエルシーと合流するか。

そう思い、頂上から飛び降りようとしたその時。

ドオオオオオオオン！

「へ!？」

背後からとんでもない爆発音がし、そちらに振り向いた。

俺はこの場で思った。こんなトコに来るんじやなかったと……。

振り向いたそこに居たのは、俺に恋した帝国最強のDSの將軍。

みなさんご存知の……。

「少しモヤモヤしていたときに危険種を発見だ。新しい拷問を試して

……………え？」

エスデス將軍だ。

「ハアアアアアアアアア!!?Σ(ー!i。D。ノ)」

(エスデスウ!?)

「リユウ……………!」

(な、なんでエスデスがここに!?!つてか空から急降下とか予測できるわけねえだろー!!?)

ズシンツスジンツ……………。

「ん?」

近くの岩陰から四足歩行している例の新型危険種が顔をだしてきた。

「てめえら今頃かあああああああ!?!」

(あ、でも逆ナイスタイミングかも?どさくさにまぎれて逃げる事も……………)

だが、そんな事考える出家で無駄であった。

「ふんっ!!」

ジャキイーーーーーン!!

コンマー一秒でエスデスが危険種を切り刻んだからだ…。

(あ…無理だ…)

一瞬で諦めたリユウ。

「ガ……グガア……」

辛うじて生きていた危険種一匹がエスデスに近付いていくが。

「っ!!」ギロリッ

ブツスウ!!

「ギャアアアアアア!？」

履いていた長いヒールの付いた靴で危険種の頭に突き刺してグリグリと押し込んで
いる。

痛そう……(汗)

「邪魔をするな……………」グリグリグリグリ

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!!イマノコノヒトハマジヤバイ!!

「……………」チラツ

「ほえ?」

「夢ではないのだな?再開できる日を楽しみにしていたぞ…………リユウ!」

(いや…………本当に夢であってほしいんですけど…………)

「ぎゃあああああ!!」グリグリグリ

(あと早くトドメさしてあげてやってくれえ……………)

—その頃のチエルシー—

「遅いなあ……………リュウ……………」ポツン

第十七話・前編

「夢ではないのだな？再開できる日を楽しみにしていたぞ……リュウ！」

（いや……本当に夢であってほしいんですけど……）

（てかなんでこんな所でエスデスがでてくるんだよおおお!?）

まさかの超展開……。危険種探しに来たのに会いたくない奴と会っちゃったよ!!どうやったら空から落ちてくるんだよ！スカイダイビングでもしてたのかよ！

作者「説明しよう！エスデスは自分の愛用のペットで使用している危険種を使って月をみながら散歩のところ人影が見えたから例の危険種かと思いき接近してみたらその人影がリュウだったと言う事なのだ！」

説明乙。

チエルシーside

「リュウ遅いなあ。何かあったのかな？」

一人になったチエルシーは先ほどの場所の岩肌にもたれ掛かり、飴を舐めていた。
ボツチですね。

「……………?!?殺気?隠れないと…………」ドロン

ボーとしていた時、誰かは分らないがとてつもない殺気を感じ、ガイアファンデー
ションで姿を岩に変え、近くの岩肌と同化した。

そこに現れたのは、フードを被ったあの男であった。

「ドクターの忘れ形見も全滅…。一応てっぺんまで行って見るか…」

その男は普通の人間とは思えない速度で山を駆け上っていく。

(なによさっきの奴…。普通の人間とは思えないスピードで走っていったけど…。リュウも戻ってこないし、なんだかキナ臭くなってきたわね…………)

その頃のリュウは……………。

リュウ side

「会いたかったぞリュウ…。あの時はよくも逃げてくれたな……………」

「むぐぐぐ!!?」

一瞬で捕まり、エスデスのその素晴らしき巨乳に溺れかけていた。

（な、なんとという巨乳！けしからん、実にけしからん!!だが俺は許そう！俺はどんな胸でも愛せるからな!!ってかどんだけデカイんだよ！レオーネといい勝負だぞ！いや……………
少しだけエスデスの方が上か？）

「つくしゅん！」

「レオーネ？風邪か？」

「んにゃ……………誰かが私の噂をしているような……………」

「？」

「つてか…なんでここにエスデスさんが!？」

「最近、帝都周辺を脅かす危険種の排除だ。……………ん?とところでお前はなんでこんな所に?」

「っ!!」

「……………」ジーン

(やべえ!怪しまれてる!なんて答えれば……………そうだ!)

「腕試しだ!危険種がいい相手になるかと思って!!」

「なるほど…。お前もそのクチか…………」ジロジロ

ん?なにやら俺の体をジロジロと見てくる。どしたの?。(。ー。*?) オヨ?

「確かに…………前見た時よりレベルアップしている。体つきも一回りよくなった。ちゃんと鍛錬しているんだな?偉いぞ…………お前はまだまだ伸びるぞ?」ナデナデ

「まじで?いや〜」デレデレ

(つてかそんな事言ってる場合じゃねー！！なんとかして此処から逃げないと！)

「危険種は一通り掃討してしまっただぞ。迷惑な奴らだったが……………」

ガシツ！ギユツ！

「ングウ!？」

「こうしてお前と巡り合えたのだ……。運命と言うのはわからん……」

「ん————!？」

(やめて死ぬー！おれの第二の人生おっぱいで窒息死!?嬉しいけど嬉しくねー！)

逃げられませんでした！

ザツ。

「つ！今日は邪魔者が多いな……。今隠れた奴……出て来い！出てこなければ問答無用で攻

撃する!!」

エスデスはレイピアを抜き、何もない場所に言葉を飛ばす。なにをしてるのか分からなかったが、そこからフードを被った男が出てきた。

「上手く隠れたつもりだったのに……やるじゃん。さすがは帝国最強と言われるだけあるな。しっかし……あんたと鉢合わせるとは、こりや今回の『おもちゃ遊び』は終了だな？」

おもちゃ遊び？

危険種があふれかえった理由を知っているようだな？拷問室まで案内してやろう

……」ニヤリ

「生憎そういう趣味はねーんだわ。終わりついぞに！あんたにはデツカイおもちゃを片付けてもらうとするかあ!!帝具・【シャンバラ】！発動!!!」

男が叫んだ瞬間、俺とエスデスを中心に半径7メートルくらいの大きな円が出てきた。

「なんだこりゃ!？」

瞬間、俺とエスデスの前から男が姿を消した…。いや、言い方を正しく言うならば……【男の前から俺たち二人】が消えたのだった……。

俺たち二人が姿を消した後、男はフードを外しニヤリと笑みを浮かべた。

「さて、次は何をして遊ぼうかな?」

この男の名前は『シユラ』。帝具。シャンバラの使い手であり、帝都の悪の根源であるオネスト大臣の『息子』であった。

「エスデスさん……俺に痛みをくれ……」

「リュウ……そんな趣味だったとは……やはり相性抜群だな……私達……」

「いや違うから!!」

俺はドMではない。絶対にだ!

「さっきの奴の仕業で俺たちに何かの暗示を掛けたのかもしれない! だったら、痛みを与えたら目を覚ますかもしれないね!!」

「分かった……行くぞ!」

「おう! バシツときついのをいっぱ………んん!!?」

お母さん……。俺、今日を経てファーストキッスを奪われました……。

強いピンタが来るかと思いき、目を思いつきり瞑った瞬間、唇に柔らかい感触があった。それはなんなのか分からないから目を開けた。そしてすぐに目に入ってきたのは、エスデスとの距離が零距离になっていたのだ……。

そう、口付け、接吻、キスである。

「ん……………。違うな、感覚がリアルすぎる。潮の香りや海風。気温、湿度、全てが本物だろうな……………」

あんたはなんでキスしたのにそんなに冷静なの!?俺なんか初キス奪われたんだぞ!!
「恐らく……………さっきの奴の能力だろうな…。別の場所に飛ばされたか?」

「空間操作ってこと?」

「恐らくな。帝具の中には失われた国の秘術も使われているものもある。時間や空間も操るものもな」

帝具もそうとうチートじゃねえか……………。

ん?時間も操るって俺のザ・ワールドみたいなの?はたはキングクリムゾン?そんなのがあるのかよ。オソロシイ!

(空間操作など……………帝具の中で五本の指に入るほどの性能……………。あいつは何者だ?)
オネスト大臣のムースコーです★

「とりあえず辺りをみておくか……………」

「へ?」

エスデスが地面に手を置いた瞬間、その足元から氷の柱が現れた。

ズガガガガガガガ!

「ヴえええええええええ!」

このいきなり氷の出てくる能力なんなんだよ!?もしかしてこの人の帝具か?

「つて! 辺り海じゃねーか………」

右を見ても、左を見ても。海、海、海。

つてことは此処は無入島?

「これはまた綺麗な景色だな。……まるでデートしているみたいだな。私達」

ナニヲイツテルノコノヒト……。

「落ち着いてるなあ………」

「帝具の力は人の創造を絶する。思考柔軟にしないとやっていけないのだ」

「あ………確かに」

一々、色んな帝具みて驚いてもキリが無いしな……。

「話を戻すが……………」

「はい？」

「まるでデートみたいだな！この状況は！」

「だー！近いしデカイし暑苦しいー！ー！」

なんでこの人は抱きつきたがるんだー！おっぱい気持ちいいから悪くないけどー！

ズズウン……………。

「?」

傍からみたらイチャイチャしているようにしか見えていない時、海の浅瀬から約20メートルほどの危険種が現れた。あれ？あの危険種どつかで見た事あるような……………。

（あーあの危険種！スタイリッシュの変身後にそっくりじゃねえか！あの時はみんなで頑張って倒したけど…………俺たち二人で倒せるのか…………？）

ん？までよ。あいつがあの時打った注射はこの危険種の何かだったのか。と言う事

は……ここは無人島に見えるけど、元はスタイリッシュの実験で作った新型危険種の隠し場所ってことか？

『ゴアアアアアア！』

ドシンドシン！

「ぎゃー！こつちに走ってきたー！」

「邪魔者は容赦せん……」

エステスが俺の目の前に立ち、両手を合わせた瞬間、俺たちの周りに何百という数の氷の鋭い氷片を 展開された。

「貴様のような奴は串刺しのし甲斐がある！『ヴァイスシュナーベル』!!」

ズドドドドドドドドド！

『ヴォオオオオオ……』

ズズウン……。

その鋭い氷片を危険種に向かって放つ。その攻撃は危険種の手足、体中に突き刺さり地面に倒れた。

(すんげえ……一瞬で倒しやがった……)

『ヴオオオオ………』ググググ……

「ほお？意外とタフだな。面白くなってきた……」

「エスデスさん。思ったんだけどあいつの頭部の部分。どうみても脆そうじゃないか？」

この危険種はあのスタイリッシュの変身後にそっくり。あいつも変身した後、頭部の額近くに本体の体が設置されていた。目の前に居る奴もまた同じ形である。

「うむ。私と同じ意見だ。やはり気が合うな！『グランホルン!!』」

ビュン!!

氷の柱の中間部分から、巨大な氷の氷柱が飛び出す。

『……ッ!』

危険種はそれをすぐに察知し、軽く右に避けた。

「しぶといな……（ビュン！）ん？」

「うおおおおお！」

俺はその氷柱の上を走っていき、危険種へと接近していった。

「リュウ?!」

俺はエスデスの声に耳を傾ける事もせず、手に天鎖斬月を構える。

（頭の部分がもしかしたら弱点か……。スタイリツシユの時は吹き飛ばしたから分からな
が……。一瞬で決めてやる!!）

接近し、残り数メートルの距離で足に力を込め大きく飛び上がる。

「はあっ!!」

『グゴアアアア!』

人なんて簡単に握りつぶせる程の巨大な手がこっちに襲ってくる。だがしかし

……………。

ジャキキキキキン!!

『ギユアアアア?!』

その手を粉々に斬り刻んだ。

「残念！ 月牙……………天衝お!!」

ズバアアアアン!

黒い斬撃が刀身から放たれ、危険種の頭部に直撃。そのまま体を真つ二つに斬り裂いた。

ドシイン……………。

「見事だ。しかし……………かつこいい所を見せて惚れさせようと思ったのに、逆にこつちが惚れるとはな……………っ!？」

ドガアアン！

『ぎゃああああ!!』

「え!? まだ居たの!?!」

いつの間にか危険種がもう一匹出現しており、エスデスの作った氷の柱にタックルを喰らわしていた。

「まかせろ……相応しい死を与えてやる」パチンツ

氷の柱から飛び降りたエスデスが指をパチンと鳴らした。次の瞬間、俺は自分の目を疑った。超能力とか催眠術でもなかった。だって見てはい。そうですか? とは言えない事が怒ったのだ。エスデスは普通の指を鳴らした。大抵のことには驚かないつもりだったけどこれは度肝を抜かれた。指を鳴らした直後、エスデスの背後に直径60メートルを超えた巨大な氷塊を展開させたのだ。

『ハーゲルシュブルグ!』

エスデスはその氷の氷塊を押し、危険種を氷塊の下敷きにした。危険種はモロにその攻撃を喰らい氷塊に押しつぶされ、それ以降動く事はなかった。

「おいおい……こんなの俺のチート並だぞ……?」

普通の帝具使いとは一味も二味も違う。素早くかつ、豪快な戦い方であった。

(これが……帝国最強の実力……。俺たち、いつかはこいつと戦うんだよな……)

見た感じ、無から氷を作り出している。もしかしたらこれはその一部分なのかもしれない。エスデスの中では今見せたそれ以上の攻撃力を持った技を持っているのかもしれない。

(俺たち……この人の勝てるのか……?)

戦いを見ている時、俺はその力の恐ろしさと激しさを見ている時、手に持っていた天鎖斬月をずっと力強く握り締めていた。

第十七話・後編

大型危険種を討伐した俺とエスデス。もう危険種が出てこない事が分かった俺たちは、木に生えていた果物などを食べながら一休みを始めた。

「いや〜まさかあんなデカイ危険種が出てくるとは思わなかった。見た事もないし、あんなタイプは聞いた事も無い」モグモグ

スタイリッシュの変身を見て知ってるんですけどね!!

「どうやらここは新型危険種の隠し場所の間違いのないようだな。おもちゃの片付けとはこういうことか……」モグモグカキカキ

エスデスは果物を頬張りながら自分のメモ帳(?)らしきものを取り出し、何かを書き込んでいる。帝国の将軍だからまじめなんやね〜。

「これからどうする? エスデスさん」

「まずは周囲の探索だな。色々と情報を集める必要がある」

「確かに。謎だらけだしな」

「パニックになれば自滅あるのみ。落ち着いて行動するぞ」

「サー・イエツサー！」

あ……普通に返事しちまった…。この人は敵なのにな。なんか調子狂うな。

「ん〜…似ないな…」

何が!?

作者「リュウとエスデスの抱きついている絵をかいているYO」
なるほ………つて、えええ!?

作者「気にしない気にしない」

それからの俺たちは無人島の探索に力を入れた。一言でいうと不思議な場所であった。人が一人もない無人島である。居るとしたら豚や牛などの家畜や、色とりどりの迷彩を施している鳥、その肉を好物として欲している小型危険種達。危険種の方はエスデスに斬り刻まれてたけど……。暫くしてからは木に生えている木の実の採取、食料

になる獲物の討伐など、敵同士なのにエスデスと周りからみたらイチャイチャしているようにしか見えない状態ですごした。(羨ましいか？非リア充共！)

エスデスの帝都での印象は冷酷、残忍、最強の戦士として名が広まっている。この時間を一緒にして俺はそうなのか？と疑問に思った。俺と接する時に見せる表情、それが本当に帝国最強とは思えないほどの無垢な笑顔であった。まるで大事な人に向けている笑顔。これがこの人の素の表情らしい。俺得かな！脳内の『美女笑顔シリーズ』に保存だな。意外にも俺は、心から『楽しい時間』をすごしたと確信した。美女との時間は最高だよ。

それから暫くの時間が過ぎ、時間的に言うところの夕方の後半に入りかけていた。

「あく疲れた。探索していたらいつの間にかこんな時間になってたな」

砂浜に大の字で寝転がる俺。いや、まじで疲れたよ。君たち半日くらい無人島あるいてみる。めっちゃ疲れるから！

「だが、楽しかったな？リュウ……」

「あ、はい」

まあ、敵とはいえ楽しかったのは事実だしな。

「それとな、この無人島の場所が判明したぞ」

「デジマ!!」

「ここは帝国から遙か南東に離れた無人島だ」

マジかよ……。あの野郎かなり遠くまで飛ばしやがって……。クソ暑いしクソ暑いしクソ暑いし！（暑いしか言ってるねえ……）

「ってか凄い落ち着いてるなエスデスさん」

「戻る方法に心当たりがあるからだ。だがそれにはリュウの協力がいる。しっかり働いてもらうぞ?」

「イエス・マム!!」

（やった!その戻る方法が上手くいったこの人から逃げられる!チエルシーも心配しているだろうしな。やってやるぜ!!）

エスデスに付いて行き、到着したところは俺たち二人がこの場所に飛ばされた場所であつた。だが、違うと言ったらその場所に「とある物」があつたからだ。

それは……。

「なんだこりや?」

足元を見ると、紫色の煙を上げていた丸い紋章らしきものがあった。あれ?これってあの野郎が俺たちを飛ばした時に足元に浮かび上がってきた紋章と一緒?

「どうやら、ここに秘密があったらしいな。あの帝具が飛ばせるのは数人程度。しかもかなりのエネルギーを消費するに違いない。しかも此処に紋章が残ったままということとは……」

「待つてたら帰れるかもしれない!」

「そう言う事だ。これが戻る方法その一だ。で、次のその二に行く前に……」

「行く前に?」

ガシツ!ギユウウ

「んむ!お!」

「折角二人つきりなんだ。お互いもつと分かり合おう!」

今日で俺は何回おっぱいで死に掛けなければいけないんじやー!!

なんとか離れた俺は、エスデスから少し離れて腰を下ろした。まあ、離れてもエスデスの方から近付いて座ってくるんすけどね。やべえ……、おっぱいの谷間が……(鼻

血)

ばれぬように鼻血を拭き取り、一旦落ち着いた。

「分かり合うつてもどうやって？」

「そうだな。まずは自分たちのことを話し合おう……………」

(究極の選択肢がきちやたアアアアアアア!!だ・か・ら!話すつても能力のことは良
いとして、何処でどのようなように育ったかと言われた場合どうすんだよ!)

作者「なんとかごまかせ……………」

イエス、司令官……………」

「先ず最初の質問だが、刀はどこで覚えた？」

あ、意外と普通な質問。

「誰にも教えてもらってない。全部我流なんだ」

「我流か……………」誰かに教えてもらったとかは？」

「ナツシング!教えてくれる人も居ないしな」

「なるほど。じゃあ次だ。その自分の持っている能力はどこで手に入れた？」

（はい来ちゃったよ来ましたよ！この質問！どう答えたらいいの!?どんな面接よりも厳しいよこれ！）

【逆に考えるんだ……。あげちゃつても、いいさと……】

いやそれチガウ……。どうすんだよこの質問……。あ！そうだ！

「なんだが知らないけどこれは俺の生まれつきの能力らしいんだ。最初はパニくつただけど今は大丈夫。親になんでこんな風になったのと聞きたいけど、二人とも居ないから」
現実世界ではいたけど!!

「なんだが奇妙な家系だな。親は死んだのか？それと帝具使いだっただのか？」

「俺はなにも分からない。帝具使いだっただのかもな。親はどっちも殺されたらしい。危

險種にな……………」

「そうか。色々興味があつたのだがそれでは聞けない、仕方の無いことだな」

「ああ……………」

(WRYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY!! ミッションコンプレ
リイイイイト! 完璧! 完璧だ! こういうば特に聞いてくるのもないだろう! さ
すが俺! 騙しの天才だ! ★)

「お前の親が死んだのも、弱かったせいだな…」

「へ？」

「お前も分かるだろう。この世界は弱肉強食の世界だ。強いものが生き延び、弱いものが死ぬ。そのようにこの世界は出来ているんだ……」

「エスデス……さん？」

「なんだ？ 雰囲気が変わったぞ？」

「お前の話も聞いたんだ。私も話そう」

それから、エスデスの身の上話を聞かせてもらった。ある意味情報かもしれないから必死に聞いた。（究極の記憶力・発動！）キラーン

エスデスは北の辺境の出身で、パルタス族という種族らしい。危険種専門の狩猟民族

で、長の娘として育った。エスデスは生まれつき身体能力も高く、弱つていたりするどんな敵でも容赦なく殺すことが出来ていた。エスデスの父親は『天性の狩猟者』という太鼓判をおしていた。食うか喰われるか。そんな環境で過ごしていたらしい。危険種とパルタス族。互いに全力を尽くしての命のやり取りを楽しんですごしていた。この時点でエスデスは生まれつきの戦闘狂であった。サ○ヤ人？

命のやり取りの時にエスデスは学んだ。『強者が勝ち、弱者は滅びる』という弱肉強食を。エスデスの母親も狩猟者であったが、危険種の襲われ死んだらしい。だがそれは仕方のない事だと思っていた。弱かったから負けた。それだけのことらしい。俺の親（偽親）の事で言つて居たのはこの事だったらしい。

そんなパルタス族にも悲劇が訪れた。エスデスが狩りの出かけている間に北の異民族が攻めてきたのだ。だが戦力的にも大きな差がありすぎてパルタス族は全滅した。長である父親は異民族の奴らによつてたかつて串刺しにされ殺された。だが彼は特に異民族を恨んでいなかった。【弱い俺たちが負けた】それだけだと……。

その後もエスデスは危険種の狩りを続けていたが獲物も居なくなつてきたので帝国に仕官したのだつた。それがエスデスの身の上話である。

なら北の異民族は恨むべき仇であると思うであらうが違つていた。エスデスも父が

死んだの彼が弱かったからと思っっているからだ。

相当なクレイジー野郎だな……。

「他に聞きたい事はあるか？」

もう今の話でお腹一杯なんですけどね。

あ、それなら。

「エスデスさんの帝具ってなんなんだ？氷を使ってたけど……」

「ああ。私の帝具は『デモンズエクス』だ。北の果てに住んでいた超級危険種の生き血を飲んで帝具使いになったんだ」

「血が帝具!？」

「その血をすべて飲んで危険種も持っている氷を操る能力が身についてな。さっきの危険種の討伐で使っていた氷の力もその帝具の力だ」

（元がクレイジーなのに能力もクレイジーかよ……）

「シンプルかつ使いやすい帝具だ。思うが仮に氷を操れる」

（神様……！この人の方がよっぽどチーターです!!）

これ以上話をしていたらこっちの気がおかしくなりそうだ。帝国最強で、拷問好きで、能力がやばい。こんなクレイジーな野郎を相手にするのかよ…。俺たちはっ！

話を変えないと……。

「そういえば。戻る方法その二つてのは？」

「それは乗り物の調達だ。危険種の中には背に乗って移動できる奴もいる。それを捕まえて調教すればすぐに帰れる」

それってあのデカマンタのこと？

*エアマンタです。

「それが見つかるまでは出口が出るのを待つしかない。どうだリュウ？ 私と軽い手合わせでもしないか？」

「手合わせ？」

「初めて出会ったときと比べて実力が知りたいからな。心配するな、好きな男を殺しはしない……」

好きではなかったら殺す気だったのですね……。まあこの人はクレイジーですしお寿司。

「軽くしてくれ。帝国最強が相手とはいえ怪我はしたくないからな」

「分かっている。もし怪我をしたら私が手厚く介抱してやる」

聞きたくなかったぜその言葉……………（涙）

俺はいつもの戦闘スタイルとして天鎖斬月を構え、いつでも戦えるようにアホな時とのスイツチを切り替えた。

「さあこいリユウ。何処からでもいいぞ」

「なら…行くぜ!!」

素早く移動し、エスデスに大きな一太刀を与えた。

ブウン！ガキイン！

「中々の鋭い攻撃！だがまだ弱いぞ!!」

振り落とした剣戟を弾かれ、またまた距離を離れた。

「『ヴァイスシユナーベル!』」

さつき見た時とは数が減っていたが、氷の氷片が俺に向かって飛んできた。

ドシユシユシユシユシユシユシユシユシユシユ!

「グラグラの実!!ぬううん!!」

飛んできた氷片が飛んでくる直前に、俺は『空間を殴りつけた』。この能力は、大気や空気、地面や空間などに地震を起こす能力。俺が行ったのは空間を殴りつけたのでその地震の衝撃が空間に走り、強烈な衝撃波を与えた。その衝撃が空間中を走り、飛んできた氷片を粉々に砕いた。

パキイン!パキキキ!

「おお!空間を攻撃して氷をを弾いたか!面白い!」

エステスが自分の愛剣であるレイピアを抜き、人間のスピードではない速度で接近してきた。

「うおおお!」

「はああ!」

ガアン！ギヤリリリリリン！

黒い刀と銀色に輝くレイピアが交差する。攻撃の度に大きな火花が飛び散る。だが俺が驚いたのはそこではなかった。「エスデスの攻撃が速過ぎる」。

（なんでだ……?!なんでこの人はここまで早く動ける？卍解した俺のスピードに追いついてくる？いや違う…。俺が遅いんじゃない。この人が速過ぎるんだっ！）

天鎖斬月は卍解した時は小型の日本刀に姿を変えろが、その中に力を凝縮させ、最強の超高速戦闘を得意とする。そうすれば俺の速さはアカメをも上回るのだ。エスデスがなぜこんなにも速く動けるのか。全く理解が出来なかった。分かったとしたら、これが『天性の狩猟者』と言われた、エスデスの帝具を使わずして戦う、普通時の戦闘力なのだと。

「くそっ!!」

ガアアンツ!!!

レイピアを弾き、もう一度距離を取り、刀に霊圧を流し込む。

「月牙……っ天衝!!」

黒い斬撃がエスデスに向かって襲い掛かる。軽く戦うとは言ったが、こつちに関して力は抜いたら簡単に潰されると判断し、半分だけ本気を出す。込めた霊圧もそれなりにだ。

「ほう。斬撃を飛ばすか、だがっ!!」

地面に手を着くと、その場所から分厚い氷が出現した。一つではない。幾つにも重なった分厚い氷だ。

ズガアアンツ!

「と、止められた………?」

「中々の攻撃だ。これは面白くなってきたぞ!」

かなりの力を込めたのにそれを意とも簡単に止めやがった。初めてだ……。俺の攻撃

を簡単に止められたのは。初めてだ……。こんなにも人に『恐怖』するのは。だがそれで俺はあきらめない。

(戦いのセンスや、戦闘経験なんて関係ない。差があつても覆す!!)

足に力を込め、地面を思いっきり蹴り上げる。本気を出したと思われないほどの速度でエスデスの回りを駆け回る。その速度は微かにも薄い残像が出来るほどであった。

シユババババババ!

「いいぞリユウ!まだ此処までスピードが出るとはな!もつと私を楽しませろ!!」

(めっちゃ舐められてるううう!?!隙を見せた瞬間に攻撃してやるよ!)

高速で動き続け相手の出方を窺う。さすがのエスデスも待ちくたびれたのか氷を生み出そうと次のモーシヨンに入る、だが、それを俺は狙っていた。

「いまだハーミットパープル!!!」

エスデスの足元から紫色の棘が飛び出した。これはスタンド・ハーミットパープル。能力は遠い物の像をフィルムなどに移す『念写』で戦闘には不向きだが、相手を縛りつ

ける事は出来る。なので最初に剣を交えた瞬間にエスデスの足元に棘を仕込んでいたのだ。

「なんだと!？」

流石のエスデスもびつくりか? そりやそうだな、なんとって俺は……。

「騙しの天才だからな!!」

このスタンドは常に右か左の手にくっ付いている状態である(今回は左手)。なのでエスデスの足首に巻きつけた瞬間、大きく左手を引く。足首に巻きついていた棘が大きく動き、少しだけエスデスのバランスを崩す事ができた。

「いまだっ!!」

その瞬間を狙い、俺は一瞬にしてエスデスに近付く。持っている刀に腕の力を込めエスデスの頸元に振り下ろす。

(獲った!!)

もしこの戦いを傍からみた者がいればその一撃でこの戦い(手合わせ)はリュウが勝つ結果となっていただろう。だがそれはなかった。このタイミングは良いというべき

か悪いというべきか戦いは終わった。その理由は、『俺たちがこの島に来た時にあの男が使っていた空間移動の紋章が大きく光り出したからである』。

キュイイイイイイン！

「ここは、昨日いた山頂か。戻ってきたようだな……」

気が付けば俺たちがいたフェクマの山頂にいた。どうやらさつき有能力で元の場所に戻ってきたのだろう……。だがその場にいたのはエスデスだけであった。

「リユウ！何処に行った？……あの一瞬で逃げたというのか？ありえない。せいぜい数秒だぞ？」

俺はというと、少し離れた所に位置する岩陰に姿を消して隠れていた。インクルシオの透明化の真似であるが……。

（少しでも動いたらばれる！！息止める俺！死んでも止めるおおおお！！）

「居ないな……。まさか別の場所に飛ばされたか？いずれにせよ……」

「また、はなればなれだな……………」

少し悲しい気持ちになったがその感情はすぐに捨てた。今回の戦いで分かった。エステスはガチでやらないと倒せない相手だ。いや、本気を出しても勝てるかどうかはまだ分からない。ならばどうする？答えは簡単だ。強くなる！アイツに勝つために！！

「だが、二度あることは三度ある。また巡り会えるだろう。私たちは……」

（確かに、その可能性はある。だがその時はあんな楽しい時間はすぐせないだろう……）

リュウは殺し屋。エスデスは帝国將軍。影の戦士と光の戦士。チートと帝具。男と女。無敵と最強。リュウは思った。

(今度会うときは敵としてだ……エスデス!!)

エスデスが姿を消した後、俺はナイトレイドのアジトへ帰還した。

みんなからは心配されたが、今回の話をするともんなから鉄拳と罵声を浴びせられた。なんで!!?!

一番強かったのはチエルシーだな。まあ今回のパートナーだったし仕方ないとは思う。けどなんでエスデスと一緒に居るって事を話したら一番先に怒ってきたんだ？

わからぬ………。
（――…？）

第十八話

—アジト・訓練場—

「300ツ!.....301ツ!」

オツス!オラリュウだ!筋トレなうでござすよ。この前のエスデスと別れてアジトに戻った時にスーさんからご馳走を食べさせてもらってな。流石に食べ過ぎたと思つて筋トレ(ダイエツト)なうなんだ。

だが、今回はハードトレーニング設定だ。

それはなんと!!

「リュウ、何をブツブツ言っている。気が抜けているぞ?」

「ほらほらリュウ!もつとペース上げないとラバとタツミに追いつかれるぞー!」

アカメとレオーネが背中座っている状態だ。中々な体重のおも:ゲフンゲフン!中々なキツイトレーニングだな。

ちなみにタツミは.....。

「こらタツミ！リュウとラバに負けたら承知しないわよ！」

「にやははは。ほらタツミ！ペース上げて！」オシリペシペシ

「め、めちやくちや言いやがって………300！」

マインとチエルシーが背中に乗っている。まるでお嬢様に躡られている下僕みたいだ。べ、別に羨ましくなんかないし!!

一応ラバの状態をお伝えしておこう。一応な………？

「……………ズツシリ

「なんでだよ！なんで俺だけスーさんなんだよ！リュウとタツミは女の子が乗っているのに俺だけ男かよ!!理不尽だ！理不尽にも程がある!!」

ちなみに500行くまでにギブアップした野郎はスーさんの棍棒でのケツバットだ。

「ぐぬぬぬぬ!!も、もうダメだあああああ！」

ドシーン!

ラバ、アウト。

「はあ．．．はあ．．．お、俺もだ．．．．．」
ドスン。

タツミ。アウト。

はっはっは！まだまだだな君達！その程度では俺を負かす事なんかできぬあーい！

「リュウ、途中から声が出てたぞ？」

「え」

「これは重さアツプだな」

「え」

レオーネが俺の背中から飛び降り、近くに落ちていた筋トレ用の重さ500キロの岩を持つてきた。え？誰がこんなの使うのかって？スーさん意外に誰がいる．．．．（震え声）

「重し追加くくく★」

ズツシリ!!

「ギヤアアアアアアア!?オモイオモイオモイオモイオモイ!!シヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌ!

その筋トレが終わった後、ボスことナジエンダが風呂に入っている間に軽くミーティングを行っていた。

「新型危険種を全部狩り終えたのは良いが、それからと言うものイエーガーズは私達に狙いをつけてきている。皆、任務の時は充分気をつけてくれ」

アカメの一言に全員深い頷きを返した。あの時の新型危険種の討伐の日では、俺たちナイトレイドのメンバーが倒した危険種の数は一桁にもいかなかった。どうやら殆どの危険種はイエーガーズが狩り尽くしたらしいな。帝国の事だから捕まえたりして実験台にしてるに違いない……。あ、スーさんの淹れてくれたコーヒー美味し。

「まあ目ぼしい賊はもうナイトレイドだけだしね、ここは南の島でバカンスしていたリュウを差し出して手を引いてもらっちゃおっかな〜?」

「ブウウウー………ツ!？」

口に含んでいたコーヒーが全て口から霧のように噴出す。コーヒーの雨だ!! キタネエ!

「好きで行ったわけじゃねえよ!! へんな奴の手で無理矢理巻き込まれたんだよ!!」ゲキオコブンブンマル!!

「美人と南の島で二人つきりとか、別に羨ましい訳じゃねえけどさあ。なんだったら置き去りにしてくればよかったじゃん。別に相手が相手だし、羨ましくなんかないぜ? いやマジでえ!!」(号泣)

ラバ? 俺と同じ目にあって同じ台詞を吐けるか?

「涙拭けよラバ。DSとの思い出を上書きしてやる!! 私の乳を喰らえ!!」
「むぐう!!」

なんかこの頃、胸に殺されかける事が多いような……。あ、でもやつぱりレオーネの胸最高だ……。柔らかくてモチモチ……。おっぱい万歳!!

「アイツは昔からしづといからな。置いて来ても自力で戻ってきただろう。だったら貸

し借り無しにして次に会うときに全力で戦えるようにしたほうがいい」

風呂場から帰ってきて、タオルで頭を拭きながらボスが入ってきた。

あ、そつか。ナジエンダって元々帝国の將軍なんだっけ？

「昔から？　そういえばボスって歳いくつ？」

「私は二十台中半だ。エスデスはもつと下だが……………」

え？

「ボスってそんなに若かったの!?　白髪だったから結構歳いつてるかと……………」

「……………(m) # ムカツ」ニ

コリ

あ、フラグ……………。

ナジエンダの髪は白く見えるが銀髪である

た。

ダズゲデエ・・・。

ついに革命軍が蜂起を始めた。そこで俺たちに与えられた最初にミツシヨンが伝えられた。安寧道といわれた広く民衆に知れ渡っている宗教が存在する。その安寧道はここ10年で東の大きな勢力と化して来ていた。だが、その安寧道が武装蜂起、宗教叛乱を起こす事が分かった。俺たちはそれを利用する考えである。帝国の腐敗政治は民を苦しみ続けてきた。革命軍の蜂起が起こる前には民衆の怒りが爆発すると見えている。『この国はすでに末期まで来ていたのだ』。だがいくら大きな勢力としても帝国の勢力に潰される。だからこそ俺たちはそこを狙うのだ。武装蜂起が起こった瞬間、革命

軍と同盟関係である西の異民族に帝都に攻め入ってもらおう。そして、帝都は兄部にも敵、外部にも敵を作る事になる。だけどそれでも持ちこたえるであろう。その瞬間に、革命軍が西側で蜂起を開始する。三段構えである。けれど、それでも持ちこたえるであろう。理由はエスデスは勿論、帝国の切り札である『ブドー大將軍』とその近衛兵が迎撃してくるであろう。だが、そのお陰で 帝国内部の警備は激減する。その時が悪の根源、オネスト大臣の暗殺のチャンス。俺たちナイトレイドは宮殿に突入し、大臣を殺す。帝都を中から斬り崩すのだ。その時は大臣にはしつかりと死んでもらうか。オラオラ & 無駄無駄の刑だな。それでも足りないくらいだが……。

「だが、その安寧道の内部が揺れているらしい」

ほえ？

絶大なカリスマを誇る教主の補佐にポリックという男が居るらしい。だがその正体は大臣が送り込んだ帝国のスパイだったのだ。ポリックの目的は安寧道を教主の変わりに掌握し、武装蜂起をさせない事である。

「そこで私たちの出番だ。私達は安寧道の本部までいきポリックを討つ。奴は一部の信者には食物に少しづつ薬を混ぜて中毒にし忠実な人形にしている外道だ。遠慮はいらんぞ」

ここで俺とスーさんの心が一つとなった。

「食材の大切さを分かっているらしいな!!」

「食材に薬を盛るとは、食材に対する侮辱だ!!」

「絶対に許さん!!」

憤怒の炎おおおお!!

ガシツ!! つと腕を組む俺たち。さすがスーさん分かってらっしやる。

「お前達、怒るポイントちよつとズレてないか?」(汗)

食材を使っている時点で俺とスーさんの敵だ。ブッコロス!!!

「最後にイエーガーズだが、あいつらはエステスが率いている以上、大臣の私兵であることに代わりはない。そこで今回の任務を円滑に進める為にも先に潰しておくべきだろう」

!!!

「あいつらは今、全力で私達を狩ろうとしている。ならば帝都の外までおびき寄せ．．．．．．そこで仕掛ける!!!」

来たな．．．．．．。

「いよいよ前面对決してわけね!」

「中でもクロメとボルスは機会があれば消してくれと本部から依頼があるしな。今の不敗政治にあいつらは特に関係ないが、それでもやるしかない。できるな? リユウ．．．．．．」

「．．．．．．」

帝国海軍ウェイブ、帝国暗殺部隊クロメ、帝都警備隊セリユ、帝国焼却部隊ボルス、

それと中で一番職が分からないラン。この人達は今の帝都がどれだけ腐っているのか知らない者が多い。もしかしたら新しい時代に必要かもしれない人材かもしれない。だが、今はそんな事を行ってる場合じゃない。俺は殺し屋だ。自分の意思でここに入ったんだ。

「ああ!!もし標的じゃない相手とやるときでも全力全開で戦う!!それが例え、新しい国に必要な奴でも!!敵になるならこの手で叩き潰す!!」

ナイトレイドのメンバー、一人一人と目を合わせていき領き返す。みんなの目は何時もの目ではない。戦う覚悟の出来た目だ。

「よし!!!」

ナジエンダも笑顔でそれに答える。

(良い目だね。強い覚悟を感じる。これなら敵に情けを掛けられて命取り……なんてこともなさそう……)

勿論、チエルシーも一緒だが、その心にはもう一つの感情があった。

(つて……あれ? ただ。なんで私……リュウの事ばかり見てんだろ
う……)

チエルシーはこの頃、リュウを見る事が多くなった。そのリュウの強い覚悟を見せた熱い瞳を見ると、いつも胸が熱くなる。

(……やっぱり……この気持ちは『そうなの』かな……)

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

エステスは自室にて自分のメモ帳に目を通していた。そこに書かれていたのは無人島に飛ばされた時に書いたリュウの絵であった。その心にあるのは勿論恋心。またリュウに会いたい気持ちであった。

「隊長、ナイトレイドのアカメとマインと思われる人物が東のロマリー街道沿いにて目撃されたそうです・・・・・・・・・・」

エステスはメモ帳を閉じて軍服についている帽子を被る。その瞬間に恋をする目から、帝国最強の人物としての目に一瞬で切り替わった。

「イエーガーズ全員を招集しろ」

人が次第に朽ち行くように国もいずれは滅び行く。新国家の誕生を目指す者たちと国を守る者たち。思想、理念、目的、全てを違えた彼らは避けられぬ運命によって衝突の日を迎える。必殺の武器をその身に纏い、己の決意を胸に秘め

決戦に挑む！

この戦いの運命は、帝国の悪を破壊する者、『デストロイヤー』と帝国に仇名す輩を滅ぼす者、『帝国最強の怪物』の手に委ねられた。無敵の力と、最強の力。2つの巨大な力の戦いが始まる！

第十九話

—翌日—

目が覚めるとアジトの自室の窓から眩しい日差しが差し込んでいた。今回の夢はおっぱいの谷間で死ぬ夢をみた。俺この頃こればっかりだな。さて、起きたならみんなの飯を作らないと……。

だが、覚醒しかけた俺に向かって拳が飛んできた。

「起きろー！ー！リユウ！」

レオーネの獣化した拳が俺の腹に深くめり込んだ。

ドオオオン!!

「グホエア!!」

その拳の一撃で俺の目は完全に覚め、あまりの痛さでベットで悶えていた。

「レオーネ！朝からいきなりなんだよー！」

「いやあ、呼んでも中々起きないからさ。此処は思いっきりドオン!と」

「普通の姿ならまだしも! 獣化してる姿でやるな! 俺を殺す気か!!」

「リユウって死ぬの?」

「俺をなんだと思つてやがるこんにやろう……」

「そりゃあ……優しくて、強くて、飯を作るのが上手い、私達の仲間だろ?」

「レオーネ……」

嬉しい……。レオーネがここまで思つてくれるなんて、あれ? 目から水が……
(涙です)。

「後は、バケモノってことかな? (笑)」

「俺の感動を返せ……」

ま、こんなやり取りが出来るような存在になれたという事として許してやろう。

「……でさ」

「ん?」

「なんで俺の上に跨つて馬乗りしてるの?」

俺はベットで仰向けで寝ている状態。そしてレオーネが俺に跨つて馬乗りの状態である。ふむ。お尻も柔らかいな……。

「サービスだよサービス!」

「うむ。感無量である」

いやマジでだよ。こんな美人のお姉さんが俺の上に馬乗りになってるんだぜ？これで嬉しくないという奴の方がおかしい。

「もつとも……」

「へ？」

レオーネの顔が近づいてき、体と体が密着するくらい、二人の距離が近くなってきた。

「この先のこととしてもいいけど……」

「は、はあ!? 朝から飲んでんのか!? 冗談はやめろよ!」

「冗談じゃないよ? 少しくらい……いいだろう?」

レオーネの唇がどんどん近づいてくる。金色の髪が揺れ、うっすら赤みを帯びた柔らかそうな唇が俺の唇に向かって近づいてくる。レオーネは誰もがみてもわかる美しい女性だ。その立派なスタイルも、獣化したことによって変わったその姿も。その全てが俺の目を奪っていく。

こ、これは色々やばい! 俺の貞操が奪われるううう!! あ、でもレオーネなら良いかな? いいやダメだ! いくら仲間とはいえ、これは好きな奴とやる行為だああああ! (俺はレオーネを仲間として好きだからな?)

「猫騙し!!」

ペアアン!!

「わあ!?!」

レオーネの目の前でもいっきり両手を合わせた猫騙し。さすがのレオーネもびつくりしたのかベットから崩れ落ちる。

「まったく、朝からからかうなよな」

「あつはつはつはー! いや〜やりすぎたかな? 悪かったよ。スーさんが朝飯作ってるらしいから早く来いよ」

獣化を解いたレオーネは一足先に食卓へと走っていった。

「やれやれだぜ……………」

「朝から楽しんでるね。リュウ」

気付いたらチェルシーが俺の部屋の椅子に座ってた。

「ギャアアアアアアア！びっくりしたああああ!!」

思わず尻餅をつく俺。

「い、いつから？」

「レオーネに殴られたところから」

最初からじゃねえかああああああ!!

「まさか、隠れてたのか？」

「本当は私が先にリュウを起こしにきたんだけど、中々起きないからどうしようかって考えてたらレオーネが来たのよ。どうなるかと思つて壁に変化してたわけ」

「見てたなら止めろよな……。まったく」

（あんたも……もつと早くレオーネを止めなさいよ……。人の気も知らないで……。リュウの馬鹿）

「ん？なんか言つたか？」

「何でもないわよ虫」

「虫!?!俺虫なの!?!」

「早く降りて来なさいよ。朝ごはん冷めちゃうから」

お前は俺の母ちゃんか……。

「まったく……本当に馬鹿なんだから……」ボソ

チエルシーの部屋を出て行くときに言った言葉は、俺の耳には届かなかった。

(――?) ナンダッテ?

食事を終えた時、メンバー全員集めてナジエンダからイエーガーズとの対決の説明を聞いていた。

「先ほど偵察隊から連絡が来た。エスデスとイエーガーズ全員、帝都を出発してこちらに向かつてきているという情報があった。今回の標的はボルスとクロメ、この二人を消せば上出来だ。そこでチームを分ける。クロメとボルスを迎え撃つ、私、スサノオ、タツミ、アカメ、マイン、レオーネ、ラバック、チエルシーの8人と、エスデスを食い止

めるリュウだ」

「えええ!? エスデス止めるの俺だけ!?」

「といつても一時的にだ。ある程度の時間エスデスをとめる事が出来れば完璧だ。お前のどんな事にも対応できるお前の力が必要だ。危険な任務だが、やってくれるか?」

「俺にしかできないならやってやる! 皆の役に立ちたいからな」

「頼んだぞ。足止めはある程度でいいからな?」

「アラホラサツサー!」 ケイレイ

「先ずはあいつらをおびき寄せる必要がある。エスデスの進行速度を考えれば、私達の足跡の聞き込みがあつたとしても明日の午後にはこちらに付く。そこでマインとアカメ。お前達二人はさりげなく人目についてくれ。顔がばれて居ない奴らは体力の温存だ。」

「「「「「了解!!」」」」」」

イエーガーズSIDE

—ロマリー街道沿い—

「ナジエンダは東へ、アカメは南へ、ここへきてやつらは二手に分かれたと目撃されている」

「東にいけば、安寧道の息がかかるキヨロク。南にいけば反乱軍の息がかかる都市。どちらにしてもキナ臭いですね」

「急いでいけば追いつきますよ！行きましょう！」

「まあ待て、ナイトレイドは帝都の賊、地方までは手配書が回って居ないので油断してるところを追跡され、あげく二手に分かれたという目撃がされてある。都合が良すぎるな」

「はい。高確率で罠だと思えます。わざと人目に付いたのでは？」

「私達を帝都からおびき寄せて倒そうと？」

「ナジエンダはそういう奴だ。燃える心でクールに戦う」

「てことは追うと危ないですね」

「いや、この機会は逃さん。今まで巧妙に隠れてきたナイトレイドがご丁寧な姿を現してきたんだ。罠を覚悟した上でそれごと叩き潰す。私とセリユーとランはナジエンダ

を追う。クロメとウェイブとボルスはアカメを追え」

「お姉ちゃん………」（ニヤリ）」

「常に周囲を警戒しておけ。相手があまりにも多数が待ち伏せていたら退却して構わん。ガンガン攻めるが特攻しろというわけではない。帝都に仇名す最後の賊だ。確実に追い詰め、仕留めて見せろ!!!」

「「「「了解!」」」」

—それから約4時間—

エスデスはボスの名につられ東へと歩を進めていた。

「セリユー。敵と遭遇するまで力みすぎなよ?」

「はい!大丈夫です!でも、この頃私ばかり心配してくれますが、何か私に至らない所

がありましたか？」

「お前の面倒は私が見ると決めたんだ。それを忘れるなよ？」

「は、はい隊長!!」

(流石隊長……。セリユーさんを元氣付け士気を鼓舞するとは、中々の人物ですね)

「ですが隊長。さすがにもう付いてもいいと思います。少しおかしいのではないでしょうか？」

「それは私も思っていた。こちらがフェイクであちらが本命かもしれん。一度引き返すか……」

エスデス達は乗っている馬の方向を変え、来た道を引き返そうとしたその時。

「中々勘がいいな。エスデス!!!」

ドオオオオオオオン!!!

後ろから聞こえた爆発音が耳に入り、三人は後ろを振り向く。そこに居たのは顔を虚の仮面で隠し、黒い服に身を包んだリュウが立っていた。

「デストロイヤーか!」

「コロ! アイツを捕食しろ!!」

『ギユアアアアアア!』

セリユウの帝具。ヘカトンケイルがさつきまでの小さな可愛い姿から巨体の獣の姿に変身し、その巨大な口をあけ、リュウに襲い掛かる。だが……。

「スタープラチナ!」

『オラアツ!』

ドガアアアン!

『ギユウアアア!?!』

コロの巨大な口での攻撃を躲し、その胸に渾身の右ストレートが炸裂する。その拳が

直撃したコロは、地面をゴロゴロと転がり近くにある小さな岩山に直撃した。

「コロ!!」

(アイツ！シエーレを殺した……セリユー・ユビキタス！)

アイツがシエーレを殺した。マインからはそう聞いていた。今回はエスデスの足止めが任務だが、どうやらそれを守れそうになさそうだった。今俺が感じている怒りは、『今までよりも上回っている』!!だが、作戦を台無しにするわけには行かない。ここは耐えて、足止めに専念するんだ……。ごめんよ。シエーレ……。

スタープラチナを消し、背中に携えていた身の丈を超える大刀、元の形から姿が変わった、新『斬月』を構える。

「さあ!!戦いの始まりだ!!」

第二十話

「デストロイヤー……」

「よお、イエーガーズのみなさん。悪いがボス達の所に行かせる訳にはいかない。少しの間、俺に付き合ってもらおうぜ」

持っている斬月を三人に突きつけ宣言する。今回の俺の任務は足止め。ランやエスデスはともかくあのセリューは今ここでボコボコにしてやりたいが我慢する。任せられたことはちゃんとやり抜く。

「まさか、ナジエンダではなくデストロイヤーとはな、本当なら貴様なんぞ無視してクロメたちの所に行くつもりだが、貴様はナイトレイドで1、2を争う強者だ。帝国にとつての不安要素の貴様はここで排除する！」

エスデスは鞘からレイピアを引き抜き、ランは帝具・万里飛翔「マスティマ」を展開し、セリューはコロの口から出した『十王の裁き』の武器を装備する。

「三人相手は疲れるけどやってやる!!」

斬月に自分の霊圧を込め、三人に向かって巨大な剣圧を放つ。
ブウン！ドオオン！！

「「！」「」」

流石はイエーガーズ……。簡単に避けやがったな。

「コロ！5番！」

『ゴアアアア！ガブウ！』

コロに自分の右腕である義手に噛み付かせ、コロの口の中から人の数倍の大きさがあ
るドリルを装着した。

「正義！閻魔槍！！」

「そんなポンコツ、斬り裂いてやる！」

閻魔槍が高速回転しながらまっすぐ俺に向かって突っ込んでくるセリユ。俺も迎
え撃つために斬月を構えて走り出す。

「ドクターの作ってもらった対悪殲滅兵器を甘く見るナアア！！」

「っ！！」

閻魔槍が俺に当たる瞬間、右に体を捻り巨大なドリルを横に斬り裂いた……。

だが、
ガキインン!!

「え!？」

横に大きく振り被ったのにドリルには傷一つ付いていなかった。

「嘘だろオイ!？」

「そう簡単に壊せるものか!コロ!7番!」

『バクンツ!』

閻魔槍を腕から外し、またコロに腕を噛ませる。そこから出てきたのは数メートルはあるまるで戦車に取り付いてある主砲を取り出した。

あれ?あの大ききどこかで……。

「正義!泰山砲!!」

あ!思い出した!!

「ギガントの152ミリ砲オオオオオオオオ!？」

ドツカアアアアア!

「アチチチチチ!?!」

飛んできた砲弾を防げたのはいいが、斬月で防いだ時に怒った爆発で俺の髪の毛に引火。つてかなんでこの世界にギガントの主砲があるんだよ!ここはソ○か!?

あ、少しハゲた……………。

「俺の髪ヲオオオ!許さん!」ダダダダ

「まっすぐに走ってくるだど!?!馬鹿め!」

ドオオオオン!

セリユーに向かつてまっすぐ、全速力で走りだす。右に避けるも左に避ける事もなく。そして飛んできた152ミリの砲弾を斬月で縦に斬り裂いた。

ズバァア!

「なんだと!?!」

「キサマユルスマジ……………」

髪の毛の恨みは恐ろしいのじゃああ!

斬月をセリユーの腕にくっ付いている砲身に向かつて振り落とした。が、その斬撃は『突然現れた氷に防がれた』。

ガキイン！

「セリユーだけが相手だと思うなよ……」

おくおく、帝国最強さまがお怒りだ。

「セリユーさん！避けてください！」

声のした方向をみると、空中でランがマステイマを展開し、その翼から鋭利な羽根を飛ばしてきた。

「手出しはさせません!!」

「んなモン効くカアアア！」

剣圧で羽根を弾き飛ばす。

「ラン！セリユー！少し動くな！私がこいつを止める!!」

「隊長!?!」

レイピアを俺に向かってまっすぐに振り下ろす。

キイン！

「デストロイヤー……貴様の実力みせてもらおうぞ!!」

ギャリリリリリン!!

縦の振り下ろし、横の薙ぎ払い、下からの斬り上げ、正面からの突き。すべてのエスデスの攻撃を防いでいく。

「中々の反応速度だな！これも防げるか！！」

エスデスが後ろに後退し、氷を展開。

『ヴァイスシュナーベル！』

前見た時よりも明らかに多くなった氷片の槍が飛んできた。

「ギア・2（セカンド）！！」

体の肌が赤光り、全身から湯気が上がる。パンプアップを応用することにより血液の流れを通常時より上げ、爆発的な瞬発力を得る。

「ゴムゴムのお！JETガトリング！！」

爆発的な瞬発力を得た体で繰り出す、全身ゴムでのラツシュ。通常の攻撃より何倍にも速くなったラツシュは傍から見たら拳が見えなかった。

ドドドドドドドドドド！！

飛んできた氷片を全て叩き落す。

「ならばこれだ！」パチン

指を鳴らすと空中に巨大な氷の塊が現れた。

落ちてくる氷に対して俺も飛び上がる。ギア・セカンドを解除し通常状態に戻る。そして右手に能力で作った巨大な黄金の丸い形をした塊をくっ付け、右腕のゴム体質を利用し限界までねじる。

『ハーゲルシュプルング!』

「ゴムゴムのお!黄金回転弾(おうごんライフル)!!」

捻った腕を氷の塊に向かって飛ばす。捻ったお陰でパンチのスピードが増し鋭いジャイロ回転を生み出した。その攻撃はまるでライフルの弾丸のような鋭さであった。

バゴオオオン!

粉々になった氷片がそこらにバラバラと落ちていき、俺とエスデスの周りに氷の壁が出来上がっていた。

(ヤベー!これじゃ時間稼ぎはできたけど俺がボス達の所に行けない!!)

「人間離れした瞬発力と凄まじい破壊力。確かにこれは帝国の脅威になる……が、

私の前ではすべてが凍る!!」

地面に手を付けるとそこから氷が発生し、二人が立っている場所から半径20メートルの範囲を氷で被い尽くし、さきほどの攻撃で爆散して出来た氷の壁もより強固になった。

「これで私と二人つきりだ。存分に殺しあおう!!」

エスデスがいきなり走り出す。だがそれは俺の方ではない。氷の壁の方向へ走っていった。そして俺たちを囲っている氷の壁に手を当てていく。

「何を・・・・・・・・・・・・・・・・?」

「先ず貴様は串刺しの刑だ。『グランホルン』!!」

全ての氷に触れたエスデスが技名を叫ぶ。その瞬間全ての壁から巨大な氷の槍が俺に向かって伸びてきた。

「やべっ!?!」

全方位から飛んできた氷の槍が当たる瞬間に上空に飛ぶ。

「あぶねえ・・・・・・・・・・。体に風穴が空くところだった・・・・」

だが、それがエスデスの狙いだった。

「上空では身動きできまい!!」

上を見上げるとエスデスが俺より遙か上まで飛び上がっていた。

「ふんー！」

「しまっ………！」

エスデスの踵落としが飛んできたから右腕と左腕を交差させ防御の形を取るがあまりにも蹴りの威力が強すぎて完全に防ぐ事ができず地面に叩き落とされる。

ドガアアン！

「がはあッー！」

地面に直撃した威力でアバラの1、2本が折れる。さらに大量の血を吐血してしまい視界が霞んでしまう。

「くそっ……視界が………！」

微かに見える視界で見るとエスデスの第二撃が襲い掛かってくる。直撃は避けなれないと思いい体を起こそうとしたが、『動けなかった』

「………は？」

左右の手を見ると地面に広がっていた氷が両手を凍りつかしていた。ガチガチに固められてるから動かす事もできない。

『ヴァイスシュナーベル！』

ズドドドド！ブスブスブス！

「ぐあああああ!!」

上空から飛んできた氷片が腕や足、胸や腹に深く突き刺さる。

「これで動けまい。さてと、大臣から貰ったこれを……」

懐から取り出した得体のしれない物体。なんだあれは……石?

エスデスが手に持っているのは黒と白色の付いた勾玉であった。それを俺の胸に置く……

キユウウウウウウ……

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア?」

体の奥から何かが引きずり出されたような痛みが襲い掛かった。まるで胸に着けた傷口から麻酔をする事なく腕を入れられ心臓を鷲掴みされ引きずり出されたような痛みだった。

「おお。これは凄い……。大臣め。よくこんなものを用意できたな……。これで『アレ』が出来るな」

置いていた勾玉を広い懐に入れなおす。

「あ、アレって何の事だ……」

「それは貴様に話す義理はない。今からはナイトレイドの全員を拷問室に連行する。」

『死ぬより苦しい罰を与えてやる』

「つ！てめえ！」

レイピアを高々とあげるエスデス。そのレイピアの狙っているのは……。

「先ずは貴様の頸を落としてこの戦いを終わらせよう……。楽しかったぞ」

俺の頸を目掛けて振り落とした。

その頃、ナイトレイド本隊ではウェイブ、クロメ、ボルスと接触した。三人が現れた瞬間、マインの狙撃が行われた。目標はクロメ。数キロ離れた場所からの狙撃だったが見事に失敗に終わった。次の手段としてシンプルに真つ向勝負を仕掛けた。狙撃に失敗したナイトレイドはスーさんの奇襲攻撃を行った。スーさんの奇襲は成功したと見えたがクロメを庇ってウェイブを遥か彼方に吹き飛ばした。これで戦力差は8対2。どうみてもナイトレイドの方が有利に見えた。だが形勢は逆転された。

クロメの帝具・死者行軍（ししやこうぐん）八房（やつふさ）。日本刀型の帝具で切り捨てた者を呪いで骸人形にし操ることが出来る帝具。死体の数は8まで操れる。

勿論クロメは8体を全員操った。その中には帝具の素材にもなる超級危険種をも召還してきた。そしてついに戦いは始まる。全員でかかり6体の死体人形を瀕死状態にしクロメとボルスを追いつめた。ボルスに至ってはレオーネに帝具を噛み千切られ戦えない状態にまで追い込まれた。もう戦えなくなつたボルスは自分の帝具を破壊、大爆発させ、クロメ、ボルス両名は戦場から離脱した。だがそれを逃がさないのが我らが変身の達人、チエルシーである。帝具を大爆発させたボルスは戦場から離脱しエスデスのチームに合流しようとするのを離れた。その時に怪我をした少女と遭遇。その少女を見過ごすわけにも行かず怪我を治療した……が、その少女は姿を変えたチエルシーであった。ボルスの後頭部に細長い針を突き刺し、脳幹に針を食い込ませた。その一瞬、ボルスは家族が目の前にいるという幻想を見て力尽きた。これで標的はクロメのみ。戦線離脱したナイトレイドは拠点となる小さな小屋に撤退したが、チエルシーは一人、まだ八房に二体死体人形を宿したままのクロメを、『一人で追いかけた』

第二十一話

—ナイトレイド拠点—

「あー、はやく予備の服に着替えたいわ」

「治療が終わってからだ」

クロメたちとの戦闘で負傷したレオーネとマインはスーさんの治療を受けていた。

マインはクロメの死体人形との戦闘で腕に傷を負い、死体で操っていた危険種のカエルに飲み込まれて服の各々が溶けていた。レオーネに至ってはクロメに腕を斬りおとされボルスの帝具の大爆発からアカメを庇い、深手を負った。まあ、ライオネルの治療力で治って来てるけど……。

「レオーネ、怪我は大丈夫か？」

「ああ。もうよくなってきたよ。後はラバが帰ってきたら糸の帝具で腕くっ付けて完治だ」

「え!?!その腕治るの?」

「私とラバの限定コンボだけどな普通じゃなおらん!!」ドヤア

「……………(汗)」

タツミ……………。汗が尋常じゃないくらい垂れてるぞ。オチツケ

「この治癒力こそライオネルの奥の手!!」獅子は死なず!」（リジエネレーター）
なんちゆうネーミングセンスだ……………。語呂合わせただけじゃん。

「ふん。対したものだな。私のスサノオの回復は一瞬だけどな」ドヤア&キラキラ

「ハイハイソーデスネ」

レオーネ姐さん……………。棒読みダヨ?

「でも。姐さんの腕が治るならよかつたな。アカメ」

「……………うん」

あれ?なんでアカメさんそんなに顔赤くしながら微笑んでるの?萌えコロス気なの?
?

「でも。しぶとさが奥の手つてらしきよねえ」

「なんだ?奥の手が羨ましいのか?」ニヤニヤ

「パンプキンにそんなの必要ないわ。ピンチの時ほど強いのが撃てる。あらゆる難局を突破かのうd……………」

「薬草を塗りこむ。少し染みるぞ」

ゲキツウハイリマース（へっへ）

「あいたたたたたたたた!!!」

誰に会いたいのかな?（笑）

「カツコつけようとしてもカツコ付かないって辛いよな。分かるぜえ」

「はあ!?何憐んでんのよ!アンタなんか何時もカツコ付かないでしょ!一緒にすんな!!」

ひでえ言われようだ……。

ガチャ!

扉が開くとそこには肩で大きく息をしていたラバが帰ってきていた。

「おーラバ!帰ってそうそう悪いんだが………」

「チエルシーが!」

!?

クロメside

「はあ……。ナタラとドーや以外の人形、壊されちゃった……。あれだけの素体を捜すの無理だろうなあ……。」

小さな巾着に入れてあるお菓子を口に含みながらポソリと小さく呟く。

「お菓子おいしい……。」

ガサツ

「！」

持っている八房の柄に手を添え、草むらから出てくるモノに警戒を強くするが、そこから出てきたのは。

「あ。クロメちゃん！無事だったんだね！よかった！」

「そういうボルスさんこそ、大爆発だったのに……。」

「焼却部隊で耐火性を上げる儀式を受けてるからね」

「あ、そっか！よかったあ……。」

「でもごめん……。帝具は無くなっちゃった……。」

ボルスは殺したはずと思うものもいるだろうが、これは姿を変えたチエルシーであ

る。帝都での偵察で得たイエーガーズの情報。各メンバーの口調や性格、その全てを帝具を利用して情報を得ていた。

（八房も解除されてる……でもまだ仕掛けない。アカメの情報ではクロメは『ドーピング』を受けている。攻撃した時そんな動きをするか分からない。念を入れて決定的な隙が出来るまで待つ）

ナイトレイド side

「なるほど。ボルスは仕留めたか」

「アイツ、単身でクロメを追ったのね。ボス、クロメがアタシの狙撃を避けた時の動き、あれは……聞いてた『ドーピング』以上の物を感じたわ。アカメの知らない何かクロメにはあるのかも……」

「!」

「チェルシーだって、攻撃を当てられるかどうか……」

ドーピング：スポーツ選手などが運動能力を高めるために薬物を使うこと。不正行為として禁止されている。

だが、クロメのドーピングはそのようなものではなかった。帝国では1000人の子供に武芸を教え込み、ある組織を作った。政府特務機関：暗殺部隊。その中にはアカメもクロメも混じっていた。まずは子供達の力量を試され、選りすぐりの7人とその他に分けられた。精鋭7人は辺境に送られ、暗殺者として純粹培養された。だが……素質が低いとみなされたその他の大勢の子供達は、帝都の地下深くで大量の薬物投与による能力の底上げをされていた。精鋭の7人の中にアカメは選ばれたが、大量の薬物投与はクロメにも行われていた。

「リユウもエスデスの足止めの任務についてから帰ってこない。これは嫌な予感がする……」

普通なら戻ってきてもおかしくない時間になったが、リユウは拠点には帰ってこなかった。

「アカメ、タツミ！聞いたとおりだ。回復しきつてはいないと思うがチエルシーの後を追ひ、援護しろ。その後に全員でリユウを迎えに行くぞ。あいつの事だから無事に逃げているだろう。」

「了解した!」

「すぐに向かう!」

タツミとアカメ。両名は自分の帝具を持ち拠点を出て行った。

チエルシー side

「もうすぐ町に到着だね」

「待ち伏せされてるかも……しれない……」

息を上げながらクロメは小さく呟く。クロメは八房で八体の人形を操って体力が少なくなってきた。普通の人間ならこのように弱っていたらすぐさま攻撃するのだが、

(んー……なんだろう。この標的、得体の知れない不気味さを感じる……。決定的な隙が出来ないし、こりや仕掛けないで逃げよつかな……)

「おそらく隊長は戻ってくる。それまで慎重に……うぐつ……」

ドサッ

「だ、大丈夫!?!クロメちゃん!」

(い、意識が薄れてきた．．．．途中でお菓子食べるのやめたからだ!)
 「ど、どこか痛いのかな?」

「へーき．．．．お菓子を食べれば．．．．」

「苦しそう．．．．可哀想に、そうだ! 楽になるおまじないをしてあげるね」

ボルスこと、チエルシーが背中に手を伸ばし出したものは．．ボルスを殺した時に使った細長い針であつた。

ドスツ

「．．．．え?」

クロメの後頭部に突き刺す。女なのでボルスするときより深く針が食い込んだ。

「ほら、これでもう苦しまない．．．．サヨナラ」

「お．．．．ねえ．．．．ちゃん．．．．」

変身を解き、地面に倒れたクロメに一度目をやった。

「標的二人とも暗殺完了」

この子・・・最後にお姉ちゃんって言ってたな・・・。気の毒だけど・・・、これも殺しの因果だと思つてね・・・。

チエルシーはメンバー内では生まれは地方の一般家庭で育った、賢く要領も良かったおかげで役所勤めとなり、そこで玉の輿を狙っていた。

しかし、そこで上層部や太守の非道さを知った。帝国の役場は賄賂が当然の汚い世界。それだけならまだしもこの太守は狩りを獣ではなく人で楽しむような畜生だった。それを見たチエルシーの口からは二つの言葉しかでなかった。

「腐ってる・・・・・・・・」

「狂ってる・・・・・・・・」

秘密裏に行われる賄賂や狩り、次第にその光景を見る事に慣れていく自分に嫌気がさしてきた。

なんとか出来ないかと思いい悩んでいたが自分ではどうにもできないと思つていた時、

ガイアファンデーションを見つける。自分を呼んでいると感じた彼女はそれを盗み出し、その能力を使って太守を殺害。その後選ばれた太守はまともな人物だった為、街に平和が訪れた。

自分の力で世直しが出来たことに喜びを覚えたチエルシーは「一度汚れた手ならば」と革命軍へ入り暗殺者としての道を歩み始めた。

「もうすぐ平和な世にしてみせるわ。その時また生まれてきなさいな」

落ちていた八房を拾い、ナイトレイドの拠点になっている小屋の方向へ歩み始める。

普通、人間の脳幹を突き刺したり撃ち抜いたりすれば数分をする内に死に至る。脳幹に傷をつけることで自発呼吸が出来なくなる。呼吸中枢機能停止である。人間は呼吸から酸素を取り入れ、血流と共に心臓へ流れていますので、この機能が廃絶されると程なく心臓は停止する……………はずである。

ねえ・・・・・・・・。。。

「!？」

背後からうめき声に似た声が聞こえたので反射的に振り向くと、手からもぎ取った八房を持っているクロメが立っていた。

「いつのまにっ!!」

「今のおまじない・・・効かないよ?とつても痛いし・・・とつても苦しいよ・・・」
後頭部に突き刺さっている針を抜くクロメ。その体からはどす黒い『気』、いや・・・オーラのようなものが滲み出ていた。

「そんな・・・確かに急所を抉ったはず・・・ッ！」

「お姉ちゃんがいなくなつてから暫くして、新薬が開発されたんだあ・・・。より肉体を強化する劇薬がね・・・。負担は掛かる一方だけどさあ」

クロメの目からハイライトが消え、血走つた真つ黒の眼でチエルシーを見つめる。その目は人の目ではない。【怪物の目】である。

「自分でも驚きだけど・・・。私を殺す気なら、心臓を潰すとか、首を切り離す事ぐらいしないとダメみたいだよ？」

八房をスラリと鞘から引き抜き構える。

チエルシーは服のポケットから小さな煙玉を取り出し、クロメの足元に投げつける。

ポオオン！

「っ！」

チエルシーは振り返る事をせず、その場を全力疾走で走り去つた。

（くっ！まさか半分人間やめてるなんて!!変身して逃げ延びる！）

ガイアファンデーションを持ち、中身を取り出そうとした瞬間、

ズガアアン!!

後ろから飛んできた弾丸がチエルシーの左手の親指以外と、ガイアファンデーションを弾き飛ばした。

後ろを頸だけ振り向くと、銃を構えた女性【ドージャ】と槍を構えた【ナタラ】が走ってきた。

「くツ………そっ！」

八房を杖代わりにしてフラフラしながらも立ち上がるクロメ。

「はあ………はあ………。動けない……やっぱりダメか………」

（でもそれなら意識のある内にあの女だけは殺す。さつき標的二人暗殺完了って言うってた。きつとボルスさんの仇に違いない！）

「そいつを刻んで！ナタラ！ドージャ！！」

走って逃げ、林を抜けると大きな花畑に出た。

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

後ろを見ても誰も付いてきて居ない。どうやら撒いたのかと思ったチエルシーだが、

「っ!!」

飛んできたナタラがチエルシーの前に立ちふさがる。

ズバアツ! ドオン!

ナタラの槍がチエルシーの右腕を斬り落とし、ドーヤの拳銃からでた弾丸がチエルシーの腹を貫通する。

「あ．．．．．」

その場に仰向けで倒れ込んだチエルシー。ナタラはその倒れたチエルシーの頸を掴み槍を振り上げる。

大粒の雨が降り出す。

ああ・・・・・・・・・・・・・・・・。報いを受けるのは私の方だったか・・・・・・・・・・・・・・・・。

ちえ・・・・・・・・・・。戻って褒められたかったな・・・・・・・・。どう？リュウ、私、凄いでしょつて？

あれ？なんでこんな時までリュウの事、考えるんだろう・・・・・・・・。

ドキツ・・・・・・・・。

そつか・・・・・・・・・・。この気持ちがなんなのか、やっと分かった・・・・・・・・。

この気持ちは『好き』だ・・・・・・・・・・。リュウが好きだからいつも考えてしまう・・・・・・・・。

リュウが好きだから、ちよつかいをかけてしまう・・・・・・・・。

リュウが好きだから、一緒に居たいと思ってしまう・・・・・・・・。

そう。この気持ちは恋心。リュウに惚れたんだ……。私は……………。

でも、ごめんね。リュウ……。私……………もう帰れないから……………。

目じりに涙を浮かべる。でも、良かったと思える……………。やっと、この気持ちに気付けたから……………。

振り上げた槍が、まっすぐ私の頸に向かって振り下ろされる。

「リュウ……………大好き……………」

目をゆつくりと閉じる。

だが、頸には刃物のような冷たい感触の物は当たらなかった。合ったのは、手で優しく抱き上げられた感触。

この世にヒーローなどいるのだろうか？否、居るわけがない。腐敗している帝都で苦しんでいる人に手を差し伸べた者いないだろう。罪もないのに殺される世の中。ヒーローがいるならばはやくこの世を終わらせてほしいものだ。だけど、私は今確信した。今はまだ帝国にとって小さな存在でしかないかもしれない。でも、いつか私達のヒーローになってくれる人が居た。

涙で霞んでいる目を少しずつ開ける。そこに居たのは………。

「またせたな」

戦いできた部分部分が破れている黒い服。手に持っているのは愛刀の真・天鎖斬月。

視線を上に向けていくと、三本の鋭い角が付いていた左目部分だけ壊れている虚の仮面。少し長くなっている元の髪から変わっている紫色の髪。そして左目には古い切り傷。

そう、私の大好きな………。帝国を倒せる力を持つ、私のヒーロー……。

「リュウツ！」

チエルシーは大粒の涙を流した。もうあと少しで殺される瞬間に助けに来てくれた。嬉しかった。怖かった。だけど今はそんな事よりも安心の感情の方が大きかった。

「おいおい泣くなよ。折角ぶっ飛ばしてきたんだから」

「グスツ………だ、だって………」

「大丈夫だ。すぐに終わらせてやる」

チエルシーを下ろし、二人に視線を変える。仮面を消すと紫の髪が元の色の髪に戻

る。

ドオンドオン!

「ツー!」

キーンキーン!

飛んできた弾丸を避けることもなく弾く事もなく、真つ二つに斬り裂いた。

「確か死体なんだろう? 死んだやつをおもちやにしゃがつて・・・クソつたれの帝具だな!!」

ドーヤが発砲する瞬間、一瞬で近付き刀を一振りした。普通の人間なら一振りに燃えたかもしれないが・・・・・・・・・・。違った。

「アトミック斬!!」

ドーヤの体全体が包丁で斬った千切りのように細切れになり地面にボトボトと崩れ落ちた。

ドーヤを斬り終えた後ナタラに目を向けた。警戒しているのか様子を窺っているのか知らないが動こうとしない。

「ならこつちからいくぜ!!」

刀を捨て拳を握る。ナタラに近付くスピードはどんどん速くなり、最後は『音速』に達した。

「安らかに眠れ………17連!!!」

槍でガードするがそんなもの無意味。防いだとしてもこの音速の攻撃は防げない!

バキイイイン!!ドゴオオン!

「音速釘パンチツ!!!」

槍で防いだが粉々に砕け散りナタラの胴体にパンチが食い込む。届け、釘の振動。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!ドバァン!

17回の衝撃を浴びたナタラは胴体から凄まじい勢いで弾け飛んだ。

「チエルシー、大丈夫か？」

「リュウ……。助けてくれてありがとう。でも、指と腕が……」

「大丈夫だよ。くっ付けてやる。『クレイジーダイヤモンド』」

チエルシーに触れると、指と腕が元通りくっ付き、腹に撃たれた傷も癒えた。

「元通り！完ツ壁」

「ありがとう。でも？なんでそんなにボロボロなの？」

「エスデスの足止めで色々とな、ボスに話したいこともあるしはやく帰ろうぜ」

「うん！あ、でもガイアファンデーション……」

「それも拾って治してやるから、先ずは行こう」

差し伸べられたリュウの手を掴み立ち上がる。手を握っただけでも胸がドキドキする。心臓持つかな……。

「あー……。でも疲れた……。早く戻って飯が食いたい……」

先に拠点の方角に歩き出すリュウ。その後ろに付いていくように小走りする。

絶体絶命のピンチの時にリュウに救われた。こんなもの……反則だよ……。よしっ！

「ねえリュウ。ちよつとこつち向いてくれない？」

「ん？」

チエルシーに声を掛けられ振り向くと……。

フワツ

「ん．．．．．」

背伸びしたチエルシーとの距離がゼロ距離になっていた。そして唇に感じるのはチエルシーの柔らかい唇。エスデスとはまた違う口付け。いや、エスデスのとは比べ物にならないくらい心地のよい物だった。柔らかな唇が俺の唇に押し付けられる。びつくりしたが拒む理由がなかった。拒むよりむしろ、両手をチエルシーの背中に回し、優しく抱きしめた。抱きしめてみると分かる。凄く細い体。力を入れたら軽く折れるのではないかと思い、優しく抱きしめた。

「ふはっ．．．．．」

唇を離すと、うつすらと銀色の糸がお互いの唇をつないでいた。

「ちえ．．．．．チエルシー．．．．．さん？」

「なに？／＼／＼」

「な、なぜ．．．．．キ．．．．．キスを．．．．．」

「まだ分からないの？鈍感馬鹿クソ虫……」
 すんごい罵倒されてる……

「リュウ……私……、リュウの事が好き……。貴方から向けられる笑顔、優しき、守ってくれた強さ……。全てが私の心に刻まれる。私を……貴方の女にして……」

「……へ？」

あ、もしかしてもしかするけど……。これって告白？ダヨネ？人生で初めて告白された。どきがムネムネ……。あ、違う。胸がドキドキする。心拍数が上がっていく。あまりの驚きに顔が熱くなる。やばい……。凄く可愛い……。チエルシーってこんなに可愛かったけ？今のチエルシーは凄く魅力的だ。レオーネほどスタイルがいいと言う訳ではないが、全てが魅力的に見える。え？告白の返事？そりやあもちろん。

「俺も好きだ。チエルシー……。これからもよろしく」

「うん!!」

抱きついてきたチエルシーを抱きしめる。柔らかい……。しかも少しいい匂

いが……おっと、こんな事してたら変態だと思われる。(既に変態)

俺はチエルシーをお姫様抱っこし、ナイトレイドの拠点へと帰っていった。

その頃のアカメ&タツミ。

「なあ……。俺達いつ出るんだよ……」

「今は二人つきりにさせるべきだ。我慢しろ」

分) 木の陰に隠れてキスから全て見ていた。(覗き見ではありません)……………多

第二十二話

先ほどの戦闘が終了し、ナイトレイド全員は拠点を小屋からキヨロクへと移した。今回の任務の目的はポリックの暗殺。エスデスを足止めしたとしてもいずれは此処に来るはず、出来る限り急いでキヨロクへと向かった。

そして今回の戦いで俺とチエルシーは恋人同士となった。どうやらあの絶体絶命の危機を救った事でチエルシーの心を打ち抜いたらしい。まあ俺はいいんだけどな。こだけの話だがチエルシーは少し前から気になっていた。少し大人の女性みたいな雰囲気とかが良い……。めでたく恋人同士になれて俺も嬉しい。あ、ちなみにこの恋人になったことはメンバー全員知っている。ボスに俺から報告したのとアカメがぼらしたからである。あの野郎……。俺たちのやりとり全部見てやがったな……。ハズイ……。

それからというもののラバには凄い目で見られたり。レオーネにはチエルシーの居ない処でからんできたり。マインに女のなんたらを教えてもらったり、ボスには褒めてもらったり、アカメにはお祝いとして肉をもらったり、タツミにはこれからのことを応援してもらったり、スーさんにもお祝いとして肉もらったり、嬉しい限りである。みんな

ありがとう。

勿論、チエルシーとは仕事に時とプライベートの時とは区切りをつけている。その怠けている処を隙としてつかれそうだからな。仕事では厳しく接してもらっているが、プライベートになると人に見せたくないほど甘えてくるようになった。会った時とはまるで別人のようになっていらっしやいます。だつて想像できるか？最初は甘い所とかどうか行つてたけど今となつちや俺の部屋に来ては甘えてばかりだからな。甘あまだお。

ま、感無量だからいいもんね。

閑話休題。今回の戦いでエスデスに捕まって死に掛けていたのになんで俺が生きているのかと思う者もいるだろう。簡単に説明させてもらうぜ。

俺には奥の手がいくつか合つてな。その一つを発動させたわけだ。その一つが『完全虚化』だ。ブリー○の主人公がなるあれだ。でもデザインは違う。仮面には三本角、形はエ○ア初号機。色は赤と黒、髪の色は紫色に変色する。変身した瞬間、俺のパワーとスピードは桁違いにあがる。だけでもちろんデメリットもある。それは『変身の持続時間』だ。この姿になれる時間はたったの10分。それを過ぎた後に変身を解いたら体に

激痛が走り数日能力が使えなくなるわけだ。エスデスの戦いで5分使用し、チエルシーの元へ移動したのに3分使用したわけだ。危ない危ない……。

エスデスを倒すまでとは行かないが完全に足止めは出来た。説明終了。(他の奥の手もまた出すかもな)

「で、今は戦いがきつかったのかナイトレイド全員休養に入っている訳だ」

「誰にいつてるのリュウ？」ギユツ

読者サマたちだ。気にするな。そしてお胸サマが腕に当たっておりますよチエルシーさん？

イエーガーズ side

「……………」

急所を抉られて瀕死状態になっていたクロメを寝かしたウェイブは寝ずに見守って

いた。

「(クソツッ! ボルスさんも殺されてクロメまでこんな事に! ボルスさん奥さんや子供も居るのにどう説明すればいいってんだよ!!)」

自分は戦闘開幕最初に吹き飛ばされ、何の役にも立てなかった事を後悔していた。しかもボルスを殺された事にショックも受けていて、かなりネガティブ状態になっていた。

「ウェイブ………。少しは寝てください。あなたも休まないよ………」
ティーカップに紅茶を入れてきてくれたランが寝室に入ってきた。

「ラン………」
「クロメさんやボルスさんの事が悲しいのは私も同じです。でも、貴方がそのままだったら二人の二の舞になります。紅茶を飲んだ後少しでもいいので休んでください」
「………あぁ」

渋々頷き、ランの渡してくれた紅茶を啜る。

「ランの言うとおりで。少しは休め」

防止を外し、右腕に包帯を巻いた、普段着に身を包んだエスデス登場。

「今回の事はもう気にするな。誰が悪いでもないんだからな」

「セリユーさんは？」

「もう休んでいる。貰った一撃が強かったらしいな」

リュウとの戦いでエスデス軽傷、セリユーは気絶させられるくらいのダメージを負った。

「腕の傷大丈夫なんすか？」

「問題ない。氷で膜を張っていたからな」

逆に言うと、膜を張ってなかったらセリユーと同じ事になっていたかもと言う事だ。

「だが……」

エスデスから殺気が滲み出てくる。

「今回はナジエンダとデストロイヤーにしてやられた……。同じ手は喰わんぞ……キョロクでは必ず蹂躪してくれる……」

手を顔にあて歯軋り。よほど悔しい思いをしたのであろう。

「我々もキョロクに向かう。今休める時は休め」

「分かり……ました」

紅茶を飲み終え、クロメの寝室に向かった。

(クロメの傷は深い。セリユーも気絶、隊長も大丈夫そうだけど軽傷。八房の死体も全
て潰されて補充も出来てない……。今まで何の役に立ってねえし……。)

『クロメの分まで……。俺が頑張らないと!!』

ナイトレイド side

「ところでリュウ……。話たい事とは？」

時刻は夕方。スーさんとアカメは夕食の準備、マインとタツミは買い物、ラバとレ
オーネとチエルシーは偵察。ここに居るのは俺とボスことナジエンダしか居ない。

「今はボスにだけ教えておきたい、他の奴らが聞いて心配させない為にな」

俺からボスに伝える事、それはエスデスの戦いでやられたあの勾玉の事だ。あれをさ

れてから俺の中の何かが無くなった。言っても性格がどうか体にとつて大切な器官が無くなったとかではない。その無くなった物は何なのかすぐに分かった。『出そうと思っても出せなかった』。これを言えば分かる者もいるだろう。そう……俺から無くなった物、それは……。

「『俺の能力が奪われた』」

「!？」

流石のナジエンダも驚く。確かにリュウの能力は不思議な事が多い。見た事もない能力、その性能、すべてこの時代には無いものである。今までどんな事があってもリュウの能力でどうにかしていたからこのようなパターンが起ころとは思わなかった。

「と言つても全てが奪われた訳じゃない、言つて見れば俺の能力の半分が無くなったつてトコかな」

「体に異常は？」

「体に特に異常はない。残つてる能力も問題なく使える。けど少しだけ違和感があるかな」

「使いたい能力があつてもそれが使えないんだからな」。

「ならいいが、処でお前の能力を奪う時に使つて居たのは？」

「手のひらサイズの勾玉だな。帝具なのかもしれないけど帝具つて一人一つなんだよな？」

「ああ、帝具は一人に一つしかつかえない……はずだが、それは帝具ではないのかもしれないな」

「帝具ではない？でも俺の能力を奪えるとしたら帝具くらいしか……」

『『帝具ではない何か……』かもしれない……』

帝具ではない何か？

「帝都で、私が居なかつたときに無かつた何かがあるのかもしれない……」

帝具でもないのに俺の能力を奪える帝具ではない何か……。それを作れるつてスタ
イリツシュ並の科学者か、それ以上の科学者……。

「まあ今は特に問題ないから大丈夫。今ある能力でも充分に戦えるからさ」
「ならいいが、何かあつたらすぐに知らせろ。その時は何とか対処するぞ」

「了解。話はそれだけ、俺はみんなが入る前に風呂を済ませてくるよ」

ナジエンダと別れ俺は風呂場へと向かつた。

(リユウの能力を奪えるほどの性能を持った物……。帝都で何が起こっているんだ……。大臣の策略か？それとも……。)

それからは風呂を貸切状態で満喫し、スーさんとアカメの作ってくれた料理を買い物や偵察から帰ってきたみんなで食べた。完璧にスーさんに厨房を奪われた。(血涙)

そしてその日の夜。

俺は無くなった能力の事を考えていた。無くなった能力は大体検討が付く。けど中には奪われたくない能力もあった。それは最強のスタンドであるザ・ワールド。圧倒的な力を手に入れた半獣人になれる豹王。この二つを奪われてヤバイと感じている。豹王はともかくザ・ワールドを奪われてしまつては数秒しか時間を止めれないスタープラチナだけになってしまった(いや充分心強いんだけど)。もし、「敵がザ・ワールドの能力」を持つていたら勝ち目は無いかもしれない。俺以外の仲間の時間を止められたら殺される。あつちは1秒時間を止めれるがこっちは5秒ほどしか止めれない。いや、1秒よりも先まで時間を止められたら死ぬ。確実に……。

「どうしたもんかねえ……。」

あまりの危機を感じ頭を抱えるリュウ。そんな時に優しく肩に触れてくる手があった。

「リュウ、大丈夫？」

「チエルシー……」

「凄く思いつめていた用だったけど……」

「大丈夫だ。心配してくれてありがとうな」ナデナデ

「えへへ……」

この頃気づいた事がある。チエルシーは頭を撫でると凄く喜ぶ。俺を萌えコロス気マンマンだなく。

「エスデスとの戦いでなにかあったとか？」

「まー……、そんなトコだな」

「……」ムスツ

あ、あれ？チエルシーさんなんで黙ってらっしゃるの？そしてなんでそんなにムスツとしてるの？俺なんかした？

「エスデスに何されたの？怪我させられたの？拷問受けたの？キスされたの？」

「怪我也拷問もキスもねえよ。てかなんでその中でキスがあるんだよ……」

「だってこの前無人島で飛ばされた時に帰キスされたって言ってたから」

あ……………。

「ソナナコトイツテタツケ」

「言つてたよ、つてかなんで片言……」

キニスルナ。

「ねえリユウ……。一つ聞くけどさ」

「お……………おう」

なんか怖いよ？

「エスデスに何回キスされたの？」

はい？

「えっと……キスは一回だけど、後は何回も抱きつかれたり胸に顔押し付けられたりとか……………」

ムカツ

あ、今チエルシーの鬼モードのスイッチが入った。

「へく、リユウは彼女がいるにも関わらず、エスデスとの思い出までしつかり覚えてるんだ。しかも胸のことだなんて」

やらかしたああああ！激オコだー！！

「いや……………巨乳だったからつい……」

そして火に油を注ぐリユウ。ヤラカシピーポー

「最低変態巨乳好きクソゴミクス野郎」

罵倒のレベルが半端ない!!前よりグレードアップしちゃってる!彼女からこんな事言われないようにしような?諸君(言われるのお前くらいだ)

「ふんっ……………」
「プイッ」

あ…………、怒りすぎてチエルシーがへそ曲げちまった…………。

仕方ない…………。

「ごめんな?チエルシー…………」

また優しく頭を撫でる。

「彼女がいるんだから…………。他の女の人の事考えないでよ?」

こっちに振り向き、体を預けてくるチエルシー。悪い事しちゃったな…………。

「どうしたら許してくれる?」

「……………」
「ん」

手を俺の肩に置き、目を閉じて軽く背伸びして唇を向ける。ナルホド

「ん……………」

軽く触れるくらいのカスをする。許してもらえたのか抱きついてくる。恋人同士に

なってからどんどんチエルシーの魅力に惹かれていく。まるでチエルシーのモノになつていくような……。そして唇を合わせているときに、軽く舌を入れるとチエルシーもそれに答えて自分の舌を俺の舌に触れてきた。

「ん……………んくつ……………ちゅ……………」

舌に触れる度にチエルシーの体がビクビクと震え、頬が紅潮していく。この行為をこれ以上続けてもいいが、明日もキョロクで動かなくてはならないので、そこで口を離れた。

「ぶはっ……………」

「これで許してあげる……………（本当はもう少ししたかったけど…………）」

「お、おう……………」

自分の唇をペロツと舐める動きにドキツとしてしまう。いかんいかん……………危うく襲いそうになった。

「じゃ、寝るか」

「そうだね」

今いる場所は一階のリビングで、各自自分の部屋がる。野郎共は二階、美女達は一階と決めた。誰が決めたって？ラバニキマツテンダロ。あいつが俺とチエルシーをイチャイチャさせないためにだよ。チツ。シタウチシテナイヨ？

「じゃ、おやすみ。チエルシー」

「おやすみ」

お互い自分の部屋に戻り床に就く。そして翌日、毎日のことだが起きるとチエルシーが俺のベットに入って抱きついてくるのだ。俺はそのチエルシーの額に軽くキスをした後、抱きしめながら二度寝するのだお。

まあ、後で色々トラバに怒られてるけどな。オレダケ。

「よく帰ってきました。遅くなりましたねシユラ」

「おう、色々と勉強していたぜ。親父」

オネスト大臣の屋敷に二人、オネストとその息子シユラ。大臣はたくましい男に育てるためにシユラに旅をさせていたのだ。

「んでよ親父、エステスの姉ちゃんに渡したアレどうなったよ」

「あれなら無事に持つて帰つてきましたよ？ 奴の力を吸つてね」

「じゃあやつぱりやるんだな？」

「勿論です。素体はもう決まっていますよ。アナタと一緒にきたあの科学者で錬金術師の女性が作った実験体でね」

「おそらく革命軍もだがナイトレイドの奴らも驚くぜ」

「間違いないですね。〔自分たちのチームの最強戦力が襲つてくる〕のですからね。ですがシユラ、貴方にはそれは預けません。此方で動かしませぬ。それに貴方の言つていた【仲間】がまだ全員集まつてませんからね」

「チツ、あいつら集まり悪いからなあ。別にいいけどよお、でも集まつた時は遊ばせて貰うぜ？」

「それは構いません、存分にどうぞ」

「(ニヤリ)」

シユラとオネスト大臣は同時に笑う。親子揃つて屑である。

この男、シユラ。これから先では罪もない人を殺していき、イエーガーズとナイトレイドに敵対される程の組織を作り出す。帝国のだれにも手出しはされない事をいいことに好き放題悪事を働く。

そしてこの二人が考えている悪事。それは帝国に仇名すデストロイヤーを潰す計画である。あるモノを作り出し、デストロイヤーを潰しに掛かる。

デストロイヤー・リユウ。彼はこのキヨロクでの戦いで、〔自分と戦う事になる〕

第二十三話

「派遣？」

早朝に起こされた俺はリビングでナジエンダの話を聞いていた。

「ああ。キヨロクでポリツクの屋敷に行くまでの潜入ルートなどを革命軍密偵チームが探してくれているんだが、その密偵チームを捜している帝国の兵士達がゴロゴロいるんだ。勿論イエーガーズもな。その護衛としてナイトレイドから一人派遣してくれとの事だな」

「その派遣要員が俺か？」

「今はタツミとラバック、レオーネとチエルシーがキヨロクで偵察も兼ねて動いている。アカメとマインはまだ手配書が回ってないとしても危険だからな。いつでも動けるお前しかいないんだ」

「なるほど、了解した。その密偵チームがいる場所は？」

「キヨロクの町の南側の端にある一軒家だ。元は廃墟だったところを住処にしている。だれも寄り付かないからな」

「おk。じゃさっそく行つて来る」

「くれぐれも怪我をしないようにな」

と、いう訳でさつそくキヨロクの町にレッツラゴーだぜ。スーさんから弁当も貰ったし準備は完璧。チエルシーには後で言ってもらおうようにボスに言ったし大丈夫だろ。

「気をつけて来い。なにかあつたらすぐに戻つて来るんだぞ」

「ありがとスーさん。弁当美味しく頂くぜ！じゃいつてきまーす」

なんだが遠足気分だな。(。―。)

―キヨロク聖堂付近―

「なんていうか・・・すんげえ人の数だな・・・」

帝都には人口では負けるが活気はこちらの方が断然上である。おそらく安寧道のお陰で生き生き出来るって訳か。安寧道の力オソロチイ。

あ、このソフトクリーム美味え。(ω^ω)ペロペロ

ドンッ

おっと、移動中に通行人の肩に当たってしまった。

「あ、すいません」

「いや、こつちこそ………あ」

視線を下に移していくとそのぶつかった人の服に俺の舐めていたソフトクリームがベツチヨリと………。

チーン

「あー……！悪かったいやわざとじゃないんだああああ！」

「いやいや大丈夫だよ。宿に戻って洗えばいいし！」

「いややそういう訳にはいかん！お詫びに何か奢らせてくれるか奢らせろ！！（T

OT）／

「そ、そこまでしなくても俺は大丈夫なんだが………」

「問答無用！まずこつちに来い！」

「つて話しをキケエエエツエエエエ！！」

俺はその人の腕を掴み全速力で飯屋へ向かい、かなり豪華の飯をおごった後、キヨロクの傍にある小さな野原で話をしていた。お弁当はすでに俺の腹の中さ。

「さつきはありがとな。なんだが飯を大量に奢られたけど………」

「気にすんな。俺がやらかしたんだからよ。あ、いい忘れてた。俺はリュウだ」

「俺は帝国海軍の軍人で今はイエーガーズに所属しているウエイブだ」

なるほどウエイ………ん？

「い、いまなんと????」

「ウエイブって名前だけど？」

ぎにやあああああ!!!まさか俺は敵と飯を食っちゃまったのかー!ウエイブって名前は知ってるけど顔は一回も見た事ないんだよオオオオオ!そして今思い出した!結構前にぶっ飛ばしたインクルシオに似た帝具付けてたのこいつだああああ!!

ま、いいか↑(オネスト大臣)

よし、情報でも集めるか。

「そのイエーガーズってのが何でこんなところに？」

「ああ、安寧道のポリックって奴の護衛任務で来たんだ。今は仲間の一人が中々動けないのがいてな、その分俺が頑張らないと思ってるな」

なるほど、その動けないってのはクロメの事か。チエルシーに急所を抉られてんだからな。いや抉られて生きてるクロメもやばいけど……。

「今度こそ、ナイトレイドの奴らを倒してやる……あのデストロイヤーも……」
俺のことですな分かります。

「なんでそんなにまで……ナイトレイドを潰したいんだ？」

「分かりきつているはずの疑問をウェイブの問いかける。ウェイブの返した言葉は……」

「帝都に仇名す賊でもあるが、仲間を傷つけられて……黙っていらねえんだ」
敵だとしても、こいつは仲間思いの奴だと言う事が分かった……」

「そっか……」

「あ、悪いな。会ったばかりの奴にこんなこと言つて……」

「大丈夫だよ。ナイトレイド、倒せるといいな」

「おう！ありがとうな。リュウ」

「いえいえ。じゃ俺は用事があるからこの辺で。また会えたらまた飯でも食おうぜ」

「ああ！またな」

「そういい残し、俺は野原を後にした。」

（面と向かつて話せたからいいが、ウェイブか……。あいつは強い。おそらくエスデスの次に強いかもしれない……。用心しないと……）

「そいえばさつきのリユウって奴……。どこかであつたような……。気のせい
か」

ウェイブもこれから夜の護衛任務のためにイエーガーズが泊まっているボルスの屋敷へと向かった。

それから約五時間、ウェイブと別れた後、ボスの言っていた密偵チームがいる廃墟が分からず迷子になっていたが無事に到着。

「ここでもいいんだよね？」

見た感じ、心霊スポットみたいな場所だな……。よくこんなところで居れるな。俺
だったら一時間も持たないぞ。

「よくぞおいでくださいました。リユウさん」

廃墟の中から二十代くらいの男の人二人が出迎えてくれた。

「今回の護衛任務。よろしくお願ひします」

「まかせとけよ。じゃそつちで集まった情報でも聞こうかな？」

案内された後、俺は建物の中にいた数十人の密偵チームに挨拶し渡された書類に目を
とうした。

渡された書類には、安寧道から半径30メートルの地形の数々。ボリックに関する少ない情報（少ないんかい）。そしてその書類の中に気になる項目があった。

「羅刹四鬼？」

「それは最近手に入れた情報です。皇拳寺羅刹四鬼。教団を牛耳るためにボリックが集めた暴力の化身です。やつらは皇拳寺の中で一番の実力者で、調べた中では帝具持ちにも勝つほどの実力の持ち主達です。今もキョロクでイエーガーズと一緒に警備に務めている処も目撃しています」

帝具もちに勝つか……。俺も勝った事あるけどまさか皇拳寺にもいたとはなあ。

「面白そうな奴らだな。思い切って潰してみるか？」

「なっ!?それは危険すぎます。いくらリュウさんでも四人を相手にするのは……………」

「いけると思うんだけどなあ。……………」

体を感じた嫌な気配を感じ窓から外を眺めた。

「リュウさん？」

「やれやれだぜ……………。全員此処から逃げろ。この場所はもうとつくにばれてる!」

「え？」

その時…………。

ドガアアアアアン！

住処の天上が崩れ、そこから二人の細身で背の高い男と大柄で逞しい髭を持つ男が降ってきた。

「まさかこんな所に革命軍奴等がいたとはなあ。全員地獄行きにしてやるぜえ」

「違うだろうイバラ。魂の開放と言え」

着地した男達は密偵チームのメンバー全員に視線を移した。

「で、俺がもらっていいのか？シユテン」

「儂が行こう。ではいまから、貴様らの魂を開放してやろう!!!」

大柄な男がその太い腕を、俺を案内してくれた男性に向かって振り下ろした。

「ぬうううん!!」

「!!」

ズシイイイイン!!

「何？」

シユテンから振り下ろされた腕は男性に当たることなく俺の片手によって防がれた。

「速く逃げろ!!」

「「「「うわああああ!!」」」」

密偵チームは一斉に家から飛び出し、その場には俺たち三人だけとなった。

「貴様、中々の実力を持つているようだな」

「おお、おっさんに褒められたけど嬉しくないね」

恐らく、こいつらがさつき見た羅刹四鬼。んでこの二人の中での実力は1、2位かな？

「お〜お〜。お前がもしかしてデストロイヤーか？いつも仮面に顔隠してるのに今は素顔丸出しだな〜」

「お前からよりイケメンだぜ☆」

「ケケケ。ならその実力見せてもらおうぜー！ー！」

ドガアアアアン！

飛んできた拳が住処の壁に直撃。結果、粉碎し俺たちは住処から飛び出した。

「おつとと………」

地面に着地した時、俺は二人に挟み撃ちの状態になっていた。

「では今から！貴様の魂を開放してやろう!!」

最初に動いたのはシュテン。両の太い腕を振り上げ俺に向かって攻撃してきた。

「皇拳寺百烈拳！」

隆々とした筋肉の体から繰り出される 連続の拳撃。ふむ、なら俺は……。

「北斗百烈拳!!」

「これしかないでしょ。」

「ぬうううん！」

「あたたたたたたたた！」

ドドドドドドドドドド!!

百を超える拳撃。お互いの拳はすべて相手に防がれてしまった。

「貴様も、どこかの拳法を学んでおったのか……」

「まあな」

違うけど。

「だけど、今のでお前の負けは決まったぜ？」

「何を根拠に言っておるのだ貴様」

「試してやるよ。その筋骨隆々の体で受け止めてみる！」

拳を握りシユテンに向かって走り出す。

「貴様の軟弱な体でこの鍛え上げられた肉体がやられるものか!」

シユテンが体に力を入れた瞬間、ケ〇〇ロウみたいに筋肉が膨れ上がり着ていた胴着もビリビリに吹き飛んだ。キヤー／＼／

「ハイパーエキセントリックウルトラグレートギガエクストリームもつかいハイパーすごいパーンチ!!」

名前なげえ (@ | @)

ボゴオオオオン!!

シユテンの筋骨隆々に止められたと思ったがよかった。シユテンの胴体に直撃した拳はそのままめりこみ、最終的には拳が貫通した。

「がはあ!!な、なぜだ!鍛え上げたこの肉体があ!!」

「北斗神拳の経絡秘孔の一つ、大胸筋という秘孔をついた。お前の筋肉はぶよぶよの脂肪になったんだよ」

「お………のれえ………ドサッ

拳が貫いた時に心臓も一緒に破壊したので、シユテンは糸の切れた人形のようにバタリと地面に倒れた。

「シユテンを倒すとはお前やるなあ。だがよお、羅刹四鬼で一番の実力を持つてる俺

を倒せるかあ？」

戦いを観戦していたイバラはその細長い体をのたうつように動かし俺の挑発してくる。

なんかその動き腹立つなあ（ー；）

「んじやまあ、今すぐ殺してやるよお！」ゴキンッ

体の関節を外し、その長い腕を関節を外した分腕をのばして攻撃してくる。

「へいへいへいへいへいへいへい!!」

「ゴムゴムのガトリング!!」

ドストドストドストドストドスト!!

腕が伸びるならこつちも伸ばさないとなあ!

「いまだ!」

伸ばした腕を戻したイバラに隙が出来たので、一瞬で接近し拳を叩き込む……

「ひゃっはあ!」

ドシューン!

体の体毛の穴から勢いよく針のようになった体毛が飛び出す。

「ハリネズミかお前は!!」

速めに察知したお陰で回避できた。危ない危ない……。蜂の巣になるとこだった。

「俺たちは皇拳寺での壮絶な修行に加え、寺の裏山に居るレイククラーケンの煮汁を飲んで修行してきたんだ。そのお陰で体を自由に操作出来るんだよお」

いや気持ち悪いのこの上ねえな……。そんな体いらねえよ。

「なら、その気持ち悪い体ごと、一瞬で消してやるよ!!」

右足に力を込め、足を振り上げた。

「レッグナイフ!!!」

ドバアアアン!

足から飛び出した月牙天衝に似た斬撃。威力は少し劣るがスピードはこちらの方が上。その斬撃はイバラの体を真っ二つにし、その場に残ったのは衝撃によって消えた体の両手両足だけであった。

「ふう。羅刹四鬼の二人の処理終了。と、言いたい処だけど……。その木の後ろに隠れてる奴出て来い」

見た感じ誰も居ない場所に声を掛けると、白い袴をきた女性が現れた。

「いやあくばれてたなんてね。君、中々の実力者だね」

「褒めていただき光栄の叱り」

軽くお辞儀するが、顔は無表情のまま。

「分かってると思うけど私は羅刹四鬼のスズカ。今ここで二人の仇をとつてもいいんだけど、分が悪そうだからやめておこう」

「賢明な判断だな。俺もやめておこうと思う。今は疲れたしな」

「はははっ。そんな事微塵も無いくせに。だけどいつかは殺すからね」

素晴らしい残し、スズカは闇の中に姿を消した。

「メンドクサイ奴らも出てきたもんだな。俺の半分の能力の居場所も分からないし」

この所、能力探しも兼ねてキヨロクを歩いて偵察しているんだが、一向に手掛かりが掴めない。エスデスの言っていた「アレ」も気になるし……。

嫌な予感がプンプンするぜ。

以外にも、俺の勘は外れないのだ。

第二十四話 前編

— ナイトレイド拠点 —

「タツミ。今日も偵察いくわよ」

「マイン？ おう、いいぞ。けど変装は忘れずにな」

「分かってるわよ。ついでにリュウとチエルシーも呼ぶわよ」

「それはいいけど、リュウって今あれやってるんじゃない？」

「あ………忘れてた」

羅刹四鬼の二人が殺され、イエーガーズはナイトレイド出現が確定したことで警戒をより一層強めた。ナイトレイド側では偵察部隊が大勢殺され、動きが鈍くなっていた。そのまま戦闘も起こらぬまま膠着状態のまま二週間が過ぎた。

今回のポリツクの任務では大聖堂で決行するらしい。なので潜入ルートを作るために大聖堂までのトンネルを掘っていた。前半はリュウとスーさん。後半はレオーネとスーさんである。（スーさん頑張るねえ）

タツミとマインはトンネルを掘っているリュウとそれを近くで見物している

チエルシーを呼ぶために穴の入り口に向かった。

「しつかし、よくもこんな風に穴掘れてるな」

「あいつ本当に人間なのか不安になってくるわ」

間違いない人間です。はい

「しかもこれ道具使ってないんでしょ？危険種よりアイツの方が怖いわ」

「そこまで言うとりユウ泣くぞ？」

な・・・泣いてないもんん！ビエエエ！（号泣）

「あ、いた」

タツミの視線に移った光景は・・・。

「「（???)」キエアアアエエエアアwwwキエロキエロキエロ!!!」

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!』

スタンドのスタープラチナのオラオララツシュ。そのダイヤモンドの歯すら粉々に出来るスタンド能力で頑張つて穴掘りしていました☆

「ストレス解消ウウウウウ!!」

「楽しいなリユウ！」

スーさんもノリノリでっす！

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

見た感じのご説明を致します。リュウのオラオラとスーさんの棍棒で攻撃する度、道を決して開けていらつしやいます。タツミ、マイン両名は砂埃で外見がとんでもない事になっております。

? 「道というのは自分で切り開くものだ。こんな風にな」

ドコカラカゲンチョウガ

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!」

『オラオラオラオラオラオラオラオラ!!』

「リュウ? タツミとマイン来たわよ?」

「へ?」

振り向くと砂埃で茶色になっているお二人さん。ドシタノ

「何かあったのか? 二人とも」

「何かあったのかじやないわよ! 偵察に誘おうって思ったのになんでこんなに汚れないといけないのよ!!」

「あ、俺が悪いのか……」

「そうよ!!」

「悪い悪い。もう少ししたらレオーネと交替するからもうちよつと待っていてくれ」

「じゃあマイン。私と温泉入ってこよ?」

「チエルシー?」

「たまにはいいでしょ? ほらいこ!」グイグイ

「ちよ、ちよつと押さないでよ!!」

マインはチエルシーの背中をグイグイと押され風呂場へと向かった。

—温泉—

二人は衣服を脱ぎ、湯船に浸かり始める。

「やっぱりマインはちよつぱいさんだね」

「うるさいわね! これから大きくなるんだから!」

マインとチエルシー。二人のスタイルは見て分かるようにお胸様ではチエルシーの方が上回っていた。でもマインもまだ若いのでこれからの成長に期待。

「ねえマイン」

「何よ、改まって……」

「タツミとは本当はどうなのよさ」

「……はあ!!?」

「どう見ても分かるよあれはさ」

そう、この頃マインはタツミと一緒に行動する事が増えていた。気付いたのはチエル

シーとレオーネ。キヨロクに入ってからかマインは偵察に行く時も買物の時もずつとタツミを誘っていた。

「ち、違うわよ!!ちよつと……気になるだけで……」ボソボソ

「ふーん……。どんな所?」

「その……ブラートの意志と帝具を引き継いでからかな……。ちよつと男の子なトコロもあるなと思って……」

「なるほど。マインも乙女だね」

「お、乙女!?!」

「その想いを持っているのはいいと思うよ。私がリュウを好きになったのも一緒。最初は馬鹿で甘い男の子だなんて思ってたけど、やる時はやる。私が危険な時に助けてに来てくれるヒーローなの……」

「チエルシー……」

「私も協力するよ。仲間の恋は手助けしないとね」

「……ありがとう……」

顔が真っ赤になってしまったので顔を逸らすマイン。でもその顔には嬉しさのあまりニヤけていた。

その頃のリユウとタツミ。

「遅いなあ……。あの二人風呂でなにしてんだろうな？」

「シラネ」

『オラオラオラオラオラオラオラオラ!!』

鈍感コンビ結成ですしお寿司。

「ホイッ」

「はい！お姉ちゃん!!」

「はーいっ！」

イエーガーズのセリユーはボリッククの護衛任務での休憩時間にキヨロクで住んでいる子供たちと生き抜きを含めて一緒に遊んでいた。

（子供達と遊ぶのがこんなにも癒されるなんて……。隊長、いいリラックス方法を教えていただきありがとうございます……。それに……。）

「みんなー！次の遊びもズル一切無しで楽しみましょうねーっ！」

「「はーいー」」」

『若いうちに正しい方向に導ける幸せ！』ジーン

「なんか毒気抜けちゃってるねえ。ほのぼのしてて」

「だな」

ウエイブと羅刹四鬼のスズカはセリユーの子供達と遊んでいるのを遠くから眺めていた。本当は羅刹四鬼の残りはあと一人いるがおやすみ中。

「つていうかあんたここにいて俺たちの仲間になったのか？」

「協力かな……？エスデス隊長に【命令】されるチャンスだし」

【命令】の部分強調しながら。

「ふふふ……ハアハア」

(なんだろう……この感じ。スタイリッシュと同じ何かを感じる……(汗))

ここで羅刹四鬼の残りの二人を簡単に説明しよう。

スズカ：一見クールで常識人そうだが、本性は痛みの快楽を喜ぶドMな性格。より激しい痛みを求めため、エスデスを襲うことも辞さないと考えている。

メズ：褐色肌で無邪気な性格の女性。他の3人とは異なり、純粋に仕事として殺人を

行っている。

二人の違いがパネエ……。

「お、おーおーっ?」

羅刹四鬼は普通の人間に比べて視力は頭一つ抜けている。数キロ先のものを視界に捉える事もできる。その視力のお陰でキヨロクの町を変装して歩いているリュウ、タツミ、チエルシー、マインを見つける事が出来た。

(あの四人……。歩き方と眼光……。しかもあの少年はイバラとシユテンを殺したナイトレイドのデストロイヤー……。変装してるけど全部隠しきれてないわね)

「セリユーちゃん! 遠くの位置だけど賊発見したよーっ!」
「っ!!」

「あーもうっ! なんでアタシがこんな手の込んだ変装しなくちゃいけないのよ!」

「極度の偵察不足なんだから仕方ないだろ? それともさっきまでリュウがやっていた姐

さんとスーさんがしてるトンネル掘りでもするか？」

「いや…………それはもつと勘弁だわ……………」

顔についている化粧やらをタオルでゴシゴシと拭き取っていく。

「んー…．．．なんか今違和感があるわね…………．．．メイク落ちてる?」ズイツ

「っ！お、落ちてるぜ?」ドキッ

「何照れてるのよ?……………っ！まさかこの前安寧道の教

主様に言われた赤い糸のこと真に受けてるんじゃないでしょーね!!」

「んな訳ねえだろ！そういうお前こそ真に受けてんじゃねーの!？」

「はあ!? 笑えない冗談言ってるんじゃないわよ！第一、赤い糸に結ばれてるんだったら

クロメとの戦いの時助けなさいよ！肝心な時に役にたつてないんだから！」

「う、うるせえ！こっちだつていっばいいいっばだつたんだよ!!」

あーあ…………．．．なんでこんな所で喧嘩するかなあ…………．．．喧嘩するほど仲が良いとは言

うけど……………。

「……………ニヤニヤ

「なんでニヤけてんだチエルシー?」

「リュウはを女の子がどういいう物なのか理解した方がいいよ?」

「????」

何を言われているか分からない。それはリュウが最強の鈍感という能力を所持しているからだ！

そしてその場から少し離れた崖には……………。

双眼鏡で四人を見ているセリユーとその横に羅刹四鬼のスズカとメズ。

「あの女は……ナイトレイド？」

「ビンゴだったね〜」

「しかもその横にいるのデストロイヤーだよ？」

「あれは……リュウ君……？まさかデストロイヤーだったなんて……………
悪に染まってしまったなんて……………コロ、9番!!」

『ゴアア！バクンツ!!』

コロがセリユーの右腕に噛み付く。そして口から出したものは、潜水艦のソナーがうでにくっ付いた腕。

「正義・都市探知機！」

探知機を覗くと白い点が7つ浮かび上がっていた。白い点は人間を示している。四つの点が集まっているのはナイトレイド。探知機を中心に感知されている三つの点はセリユーと羅刹四鬼の二人。

「偉大な隊長に想われながら悪に堕ちたりユウ……。そしてあの夜私の両腕を奪ったナイトレイドの片割れ!!コロ!!」

『ゴアアア!バクンツ!』

コロの強大な口がセリユウを飲み込む。そしてセリユウを吐き出した時に装着されていた装備は。

「十王の裁き、2, 7, 8番を装備したこの殲滅装備で……。砲撃する!!」

装備されたものは十王の裁きの三つ。

2番：初江飛翔体（しよこうひしようたい）小型ミサイル

7番：泰山砲（たいざんほう）ギガント152ミリ砲（笑）

8番：平等魚雷（びやうどうぎよらい）水陸両用魚雷

見た感じ、ガ〇〇ム。

ナイトレイド side

「んじゃま。動くとするか」

「だな」

「もう変装はごめ……。ん?」スンスン

「どうしたのマイン？」

歩き出してすぐマインは立ち止まり鼻をスンスンと匂いを嗅いでいた。犬？

「火薬の匂い!!」

「「え？」」

「正義・一斉射撃!!」

セリユ一の装備から吐き出されたミサイル、砲弾、魚雷。すべてが四人に襲い掛かる。

「「ツ!？」」

ドガアアアアアアアアアアアン!!!

巨大な黒煙が上がり、周りが見えなくなる。

「コロ。探知機」

『キュイ!』

持っていた探知機を見ると、自分から少し離れた場所に四つの点が移動していた。「生きているか!しぶとい悪だ!!」

そして第二射が発射される。

黒煙の中からインクルシオに変身しマインを担いでいるタツミとチエルシーをお姫様抱っこして走っているリュウが飛び出した。

「いきなりなんだよこの砲撃はヨオオオオオオ!!!」

「喋る前に早く走って!!」

「くそっ!どこからだ!」

「私達がキヨロクで帝都警備隊から逃げている時にあの場所に誘導されていたってことね。まだ来るわよタツミ!リュウ!」

背後から第二射のミサイル郡が近付いてくる。装着しているインクルシオはタツミの想いに応えるようにタツミの駆ける脚力を増幅させる。

リュウは能力の『一方通行』で足にかかる運動量のベクトルを変え、普通の走るスピー

ドの何倍もの速さで駆け抜ける。

「うおおおおおおおおお!!!!」

鈍感コンビ2名は全力で走り抜け、近くにあった崖の上に飛び降りる。

「あー．．．．．走りすぎた．．．」

「お疲れ様リュウ」ナデナデ

「砲撃がやんだか．．．．今チラツと見えたけどさつきのはセリユー・ユビキタスだ」

「っ！セリユー．．．ユビキタス．．．．．どっから撃ってきた!?!」

メインがケースからパンプキンを装備した瞬間、羅刹四鬼が俺たちに攻撃してきた。

「[[[!!]]」

四人とも速めに察知し、攻撃が当たる前に避ける。

そしてリュウだけ気付いた。

「てめえ！あの時のビ○チ!!」

「誰がビ○チよ！スズカよスズカ!!」

「なんだスズカ。デストロイヤーと知り合ひ？」

そしてもう一人いた女性。ふむ．．．．．褐色系女子か．．．．．悪くない。

「違うわよメズ。イバラとシユテン殺したのこの少年だよ？」

「まじか！なら二人の仇として頭蓋骨カチ割らないとね」ゴキッ

まさかのお目当て俺かよ!!

「なら、相手してやるよ!!」

羅刹四鬼の二人の足元に向かって拳を振り下ろす。

ボガアアアアン!

そのままリュウは崖から降りていった二人を追いかけた。

「リュウ!」

「タツミ。リュウの援護に行つてあげて?」

「な、なんでだよチエルシー! あんな巨大な武器持つてるセリユウの相手をしないとつ

!

「いや、それはそれでミスマッチになる。忘れた? マインのパンプキンの特徴は?」

「.....あ」

そうか。ここで俺とチエルシーが離れたら.....

「分かった。チエルシーもこの場を離れるよ?」

「分かつてるよ」

タツミはチエルシーの言った言葉を理解し、崖を降りてリュウを追いかけた。

「マイン.....大丈夫だよね?」

「当たり前よ。アタシもカタをつける。シエーレの仇打ちよ!!」

「無理はしないでね……」

チエルシーはガイアファンデーションで姿をドラゴンに変え、その場を離れた。

「待てゴラアアアア!!」

二人を必死で追いかけるリュウ。おのれちよこまかと!!

「ふふつ。焦ってはダメ。すぐに殺してあげるから」

「あんたが攻撃するから逃げてるんだけどね!」

二人が立ち止まった瞬間、俺も少し間をとる。すると背後からタツミが近付いてきた。

「タツミか。ナイスアシストだ」

「マインを一人にしちやっただけど大丈夫だよな?」

「大丈夫だよ。あいつを信じろよ。んでちやっちやと速めにコイツらぶつ飛ばしてマインを助けに行くぞ!」

「おうよ!」

「へえ。私達を倒す?できるのかなあ?」

「その前にあたし達が君らを殺すからね」

メインVSセリユー・ユビキタス
リュウ&タツミVS羅刹四鬼のスズカとメズ

今、戦いが始まる。

第二十四話 後編

今俺たちが戦っているのはキョロクから少し離れた場所にある古い遺跡跡地。
羅刹四鬼に振り回されここまで来てしまった。

「はあっ!」

スズカの爪が異常なまでに伸びてきて、俺に向かって襲い掛かってくる。

「このビックリボデイがあ!!」

伸びてくる爪を避けて行くが普通の銃弾のように飛んでくるのでよけるのがやっとだ。

「どうしたの? イバラと戦った時はこんなもんじゃなかったでしょ?」

「やつかましー! シルバーチャリオッツ!!」

背後から甲冑を纏った騎士のスタンドを出す。このスタンドの剣捌きをふせげるかあ?

「はああ!!」

スタンドを操り、右手に持っているレイピアでスズカの体を斬りつけていく。

ズバズバズバズバ!

タツミside

「だあああ！」

ノインテータを振り回し、メズに攻撃を仕掛ける。

「そんな大振りじゃ当たらないよ？」

刃先はメズに触れることなくすべて空振りになる。

「くそつ。だああああ！」

接近し、距離が近くなった瞬間、メズに向かってノインテータを振り下ろす。
が………

ツルンツ

「え？」

当たった瞬間、刃がメズの体を『滑った』。

「な、なんでだ!? 刃は当たったのに!!」

「その正体はこれだよ？」

良く見ると、メズの体中にネトネトした液体が付着していた。エロいな………

「油？」

「油つつうか、私の汗だね。羅刹四鬼はこういうからだの操縦得意なんだ。だから刃が

当たっても滑って傷つけられないって訳」

手で体を撫でまくる。すると体からどんどん汗が滲み出てメズの体をネットネットにしていく。すげえ……。すごいエロい……。

スベスベの実だな。うん。

「ぶへあっ！」

ドガアアアアアアアアアン！

「!？」

その二人の間にリュウが飛んできて遺跡の壁に激突したことにより壁に大穴が出来た。

「イテテ……。中々強いなあいつ」

「リュウ!?大丈夫か!？」

「な、なんとかな……。つてあれ?あの褐色娘。エロくなってねえ?」

「そこには気付くのかよ!!」

サーセン。

「痛みをくれたのは嬉しいけど、君全然弱いね? ホントにあのデストロイヤーなの?」

(クソツッ！能力が半分無いお陰で体力まで半分になってやがる！不便でならないぜ！)
フラフラと立ち上がり口にたまった血を吐き出す。

ペッ！

(と言つてもどうしたつもんかねえ。あつちのエロいのはいいとしてこつちのドMを何とかしないとなあ)

攻撃が当たるのはいいんだけどちよこまかと動かれて強めの攻撃が当たらない。斬り傷ぐらいいはいけるけど打撃がなあ。仕方ない・・・。

「タツミ！今すぐマインの方に行つてやつてくれ！」

「え!?またいきなりなんでだよ！」

「ちよつと今からおもいつきりぶちカマす事するからさ。お前を巻き込みたくないんだよ」

「えええ!?まだなんか能力あるのかよ！」

「まあまあそれは今度見せてやるから。それよりマインの方に行つてやりな。遠くから音を拾つてたけどそろそろあつちも終わりそうだからさ」

「お、おう！分かった。無事に帰つて来いよ！」

「もちのろんだ」

タツミは回れ右し、マインが戦っている方向に走り出す。

「逃がすわけないでしょ!!」

ドシユン!

スズカとメズが爪を伸ばしてタツミに襲い掛かる。だが、爪はタツミに当たる前に……。

「チャリオッツ!!」

シユバアアア!

チャリオッツのレイピアで伸びてきた爪を切り刻んだ。

「行かせるかよ。お前らには今から『デツカイ』のを相手にしてもらおうぜ!」

「『デツカイ??』」

チャリオッツを戻し、右手を口に持っていく。

これで分かった者もいるだろう。

必殺ウウウウウ! 『巨人化!』

口を大きく開け、思いつきり噛み付いた。

ガブツ! イタイ……。

ビツシヤアアアアアア!!

空から俺に向かって雷が落ちる。おちた衝撃により土煙が上がり俺の姿が見えなくなる。

「な、何をしでかすのかと思っただら煙幕のつもり？」

「そんなモンなんの役に立つってのよ!!」

メズは煙幕の中に爪を発射するが硬い物に弾かれてしまう。

カキーン!

「なに? 今の手ごたえ……………」

グググググググ……………」

煙の中から妙な音が聞こえた。あるでそこに『何か』が現れたような……………」

そして煙が晴れてくる。そこに現れたのは、人のと比べ物にならないくらいの体。足や腕、胴体も桁違いのサイズと化していた。そして現れたモノの正体は。

『巨人』

「ウオオオオアアアアアアア!!」

リュウの巨人化。

高さ：18メートル。

見た感じ、筋肉がそこそこついてる感じ。鎧の巨人ほどではない。

髪は全てオールバック状態。

目の瞳の色は蒼。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

羅刹四鬼のお二人、絶句。顔面蒼白になり冷や汗が止まらない。

「グルルルルル・・・・・・・・」

「さ、流石にそんな責めは勘弁っ!!!」

スズカはリュウから離れるために遺跡の中へと逃げていく。

「グオオオアアアア！（待てやごらあああああ！）」

巨人になっても理性のある俺は逃げていったスズカを追いかけた

「ス、スズカ!? わ、私あんな怪物とやるのはごめんだよ！今のうちに逃げ・・・・・・・・」

ドスッ！

「・・・・・・・・・・・・・・・・え」

後ろを振り向くと、チエルシーがメズの後頭部に針を突き刺していた。

「逃がさないわよ……」

針を抜くとメズはうつすらと涙を流しながら地面に倒れた。

「羅刹四鬼の一人、排除」

目を開けたままのメズの脛を人差し指で閉じ、死体を誰も分からなさそうな岩陰に隠した。

「さてと、後はリュウの帰りを待って、マインの迎えにでもいきましようか。それにしてもリュウの能力には驚かされるわね」

リュウ side

「グアアアアアアア！（キエエエエエエエ！）」

ドガアン！ドガアン！ドガアン！！

スズカを追いかけ遺跡に入った俺は遺跡の壁など殴ったり蹴ったりなどして行く手を阻んでいた。

「は、初めて体験する責めだけどちよつと私の体が持たないかな?」
崩した壁などの瓦礫によりスズカの逃げ道はなくなつた。

「ガアアア!」

「わあっ!?!」

その大きな手でスズカを鷲掴みにする。

「グルルルウ……」

「い、イイ……、この痛みがいいのよ!」

捕まつてるのにこいつは喜ぶばかり……。これが同じ人間か?

「ウオオオオオ!」

ブウン!バゴオツオン!

「かはっ……」

スズカを掴んでいる腕を大きく振り上げ、壁に手ごと叩きつける。

「か、感じたことのない……痛みね……」

叩きつけたことで壁にスズカの腕や足がめり込んでしまい身動きがとれない状態。

「ウオオオオオアアアアアアアアアアア!!」

右腕を大きく振りかぶってスズカがめり込んでいる壁をおもいつきり殴りつける。

ドガアアアアアアア!

壁に大きな穴があき、良く見ると穴の奥に血みどろの姿で気を挟まっていたスズカの姿。流石に死んだだろ……。

遺跡から出てチエルシーを捜していると、一匹のドラゴンが飛んできて俺の肩にとまる。なんだこれと思っているとポフンと音を立てチエルシーが姿を現した。

お前化けてたのかよ。

「お疲れさまリユウ。それにしても大きくなったね」

「ガウガウ……（まあな）」

巨人になっているので上手く言葉が喋れない。

「何言ってるのかさっぱり……。それよりはやくマインたちを迎えに行くよー」

「ガウ！（おう！）」

チエルシーを手に乗せ、全力疾走。巨人の全力疾走って走るたびにドシンドシンのなるからうるさいな……。

だが、走っているにつれてなにやら嫌な予感がしてきた。ので、すこし急ぐ事に……。その瞬間。

ドオオオオオオオオオオオオオン
!!!!

前方から巨大な爆発音。そして巨大なきのこ雲が発生し、そこから激しい衝撃波が襲ってきた。

(マズイ!!)

チエルシーを一旦下ろし、地面に膝を付く。

「え？リユウ!？」

その巨大な体を丸くし、チエルシーの体を守るように身を屈める。

そして襲ってくる衝撃波がチエルシーの当たらないように身を挺して庇う。

(ナイスなところで助けに行ったじゃんタツミ!) ニヤニヤ

なんでチエルシーこんなにニヤニヤしてるの? 分からん

「がうが? (どした?)」

「女の子にしか分からない事。あと速くもとの姿に戻って」

「がい (はい)」

その後、俺たちは体を休めるために隠れ家に帰還した。帰還中気になったのはマインはなぜか顔が真っ赤の状態でした。風邪かな? (違います)

番外編その2

ナイトレイドアジト付近。突如現れた新型危険種排除の為に俺が選ばれ出撃していた。

「ギユアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

今回出現した危険種は恐竜みたいな危険種。全身真っ赤で口から紫色の煙を吐いていた。ボス曰くその煙をほんの少しでも吸えばとてつもないことが起こるらしい。

「という事でてめえは死刑だああああああああああ！」

「キシヤアアアアアアア！」

恐竜の巨大な尻尾が振り下ろされる。

「パワー比べか？スタープラチナ！」

『オラア！』

ドゴオン！

尻尾に目掛けて拳をぶつけ、攻撃を防ぐ。

「ギユアアアアアア!？」

「パワーじゃ負けないぜ！スタープラチナ・ザ・ワールド!!」
キユイイイン！

俺以外の全ての時間が止まった。

「行くぜエエエエエ！」

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア！』

恐竜の胴体、手足などに連打を当てる。そして4秒経過。

「そして時は動き出す」

キユイイイン！

時を止めている間に与えた連打のダメージが一気に恐竜に襲い掛かる。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアア!」

体中のあちこちから血が噴出し、フラフラの状態になる。

「止めだ！擬似・村雨!!」

右手にアカメの帝具・村雨を顕現する。といっても本物の村雨ではない。村雨を能力で出来る限り似せた物である。斬れば即死ではあるが俺の方は死ぬのに少し時間が掛かるものである。

では、アカメの真似！

「葬るー！」

ズバアアアア！

恐竜の頸に一太刀いれ、大きな斬り傷を付ける。その傷口から遅効性ではあるが猛毒が体内に入っていく。その瞬間……。

「ブハアアアアア！」

「うおおあ!？」

死に際に放った紫色の煙。俺は頸を斬る為に接近する必要があったので勿論顔の近くに自然に行ってしまう。ので、モ口に恐竜の吐いた煙を吸ってしまった。ってかこいつの煙クサッ！

(あ………やべ………意識が………)

思いつきり吸ってしまったからか、意識が薄れていき俺はそのまま地面に倒れて気を失った。

—それから暫くして—

「ん．．．．．んうっ？」

意識が朦朧としてる中、俺は目を覚ました。目の前には先ほど倒した恐竜が白目をむいて倒れている。キモイな．．．。

俺どれくらい寝てたっけ．．．。あのクサイ煙を吸ってから倒れて．．．．．気を失ったんだっけ．．．。ダメだ思い出せない。

「とにかく排除は出来たから帰るとするか」

だが一つ引つかかる。なんだか変な違和感があるんだよなあ。

あれ？

立ったのはいいんだが、何だか目線の高さが低いような．．．。あと、なんでだ？服がブカブカ．．．。

目線を下に下げていくと着ている服が大きくなったのかブカブカ。そしてそこには大きな膨らみが二つ．．．．．ん？二つ？

「ま、まさか．．．．．」

俺の服はブカブカになるほどの大きい物は身につけない。そして俺の胸にはこんな

二つの膨らみがあるわけが無い。と言う事で触ってみる。

「んあつ……あん……え？」

なんだ今の？触った瞬間に体がビクツって反応したんだが……。しかもこの柔らかさ……。レオーネの時にも体験した事がある……。

「ま……まさか……」

能力で鏡を出し、自分の姿を見てみる。そこに移っていたのは。

「なんじゃこりゃ……」

そこに写っていたのは、髪の毛が背中まで伸びたロングヘア。いつもより少し大きくなった目。長くなっている睫。プルンと潤っている唇。大きな胸。キュツと括れた腰。少し大きいお尻。そして服がはだけて露出している肩。そう、俺は。

『女になっていた』

もう一度言おう。

「あ、リュウ！おかえ．．．．．え？」

「リュウ。アンタ時間掛かりすぎ．．．．．は？」

「どうやら危険種は無事排除でき．．．．．ん??？」

「おいリュウ。危険種相手に時間かかり．．．．．はい?！」

女性陣に沈黙の中、そこに現れるのは俗に言う『女体化』になっている俺ことリュウである。そりゃあいきなり自分で言うのもあれだけど美人が現れたんだからなあ。あれだけ？ボンツ！キュツ！ボンツ！になってるんだからな。言つてやろう。チエルシとメインよりスタイルは良い!!

「『誰?』」

「俺だよ。リュウだよ」

「『はあっ?!』」

オチツケオチツケ。

「実は．．．．．カクカクシカジカ」

これ便利だな。

「まさか、あの危険種にそんな能力があったとはな」

「これっていつくらいに解けるんだろ・・・」

「どうせ数日だろ。気にするなつて」

「気にするだろ！女の姿になつちまつたんだぞ！」

「大丈夫だリュウ。女でも生きてはいける」

「人生論とかのレベルの話をしてるんじゃないやねーよ!!」

「これもうら○まー／＼2じゃねえか！あいつの気持ちがよく分かったよ！女になつたらこんな気持ちになるんだな！あ・・・でも少しくらいは堪能してみたい・・・。男の姿より柔らかかいし、視線も違うし、なにより可愛い！男でイケメンで女で可愛いとか俺完璧だろ！もう素晴らしい！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ？チエルシーさんとマインさんがすんごい暗くなつてる？なして???

「おい、マイン？チエルシー？どうしたー？」

沈黙が凄く怖い。この二人の周りからどす黒いオーラがゆらゆらと・・・。

—それから数分後—

「……………」チーン

胸がデカイだけでこんな痛みに襲われるなんて……………。

「確かに男ではイケメンなのはいいけど、女になった瞬間スタイル抜群なのは許せない」
解せぬ。

「ってかどうやってたら美少女になっちゃうのよ。私はそれが許せない」

解せぬ！

「アカメちゃん。リュウのおっぱい斬っちゃって」

「うん。分かった」

「承諾すんな!!」

「とは言ってもこのままじゃなく。いや女の子のリュウは面白いと思うけど」

「面白くもなんともねえよ!」

（こんなところタツミとラバヤスーさんに見つかったら……………）

悲劇は自ら歩いてくる。

「ただいま〜（今戻ったぞ）」

(帰ってくんなあああああああ!!! (TOT))

「え!? 誰その美少女! もしかして新しいナイトレイドのメンバー!」

「新しい帝具使いとかか!? これで戦力も増えて帝国に勝てるぞ!」

(ん? どこかで見たような………誰だ?)

全然違うんですけどねえ。んでよ、その端っこで笑ってるアカメ、レオーネ、ボス。お前ら後で拳骨な?

「それ、リュウよ。詳しい話は後でね」

「「え?」」

「マジだ。美少女になった俺d「ふんっ!」……いつてえ!!」

チエルシー! 足を踏むな! そしてマイン! 俺の足をグリグリすんな!

そして俺の体中をまじまじと見てくる三人。スーさんはすぐに察してくれたけど、この野郎共は………。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」 シュク
「ふんっ！」

アジトの床に煙をだしながら頭から埋まった二人のアートの完成だア三下が。

「馬鹿だなく二人とも、今のモロにリュウの痢に障ったぞ？」

「今のは二人が悪い」 ツンツン

「まあ二人にはいい薬になったんじゃない？」

だといいいけど・・・・（汗）

「この場においても元に戻れなさそうだから俺は自分の部屋に戻るぞ。飯まで呼ばないよ
うに!!」

ガチャ！バタン！

—自分の部屋—

「とは言ったものの。どうやって戻ろうかな」

もしかしてずっとこのままだったり？ いやいやそれは勘弁。あ、でもいいかも。こんな美少女だぜ？ 他の男共はほって置けないだろ。そしてその野郎共の金を巻き上げ

る！体を売るのはなんて断固断る！」

「口に出てるよ？」

「わっしょおおおい!?」

ベットで座って考えてると扉でチエルシーが凭れ掛かった。

「いつから？」

「野郎共つてどこから」

（セーフ！全部聞かれてなかったー！）

「さっきはごめんね？その……おっぱい引つ張ったりして」

「あ、いや別に怒ってないけど……」

むっっちゃ痛かったけど!!

「で、どうする？もしそのままの姿で戻れなくなったら……」

「ん……」

心底……『悩む』。男でも女でも能力は使えるし、特に不便と言うものは無い。あるとしても男の時と女の時の日常での過ごし方が少し変わるくらい。トイレとか服とか。まあその辺りはチエルシーに任せる。どうせ俺は着せ替え人形になるだろうし。

「別にいいよ」

「え？」

「女のまままで生きる事が俺の運命なら……それが運命ならそれに従うぜ」
「リュウ……」

決まった☆チエルシーも惚れ直しただろう！

「それなら、女の事をもっと知っておかないとね」

「……へ？」

瞬間、チエルシーがベットのの上に押し倒されていた。ハッと気付いたら手をチエルシーに押さえられ、身動きが取れない状態に。

「チエル．．．．．シー．．．．．?」

「女の事を知りたいなら．．．．．直接教えてあげる．．．．．」

手を押さえていたチエルシーの片手が俺の服の中に手を入れてきた。

「んう．．．．．な．．．．．にを．．．．．」

「先ずは女の子の体の仕組みを．．．．．教えてあげる．．．．．」

服の中に入れてきた手が除々に上にながっていき、胸の膨らみに当たった瞬間、体に電流が走った。

「あつ．．．．．チエルシー．．．．．そこ．．．．．あ．．．．．だめ．．．．．え．．．．．」

「敏感なんだねリュウは．．．．．でもだめ♥まだ教えなくちゃいけない事あるんだから．．．．．」

膨らみに触れていた手が円を描くように撫でまわしていき、そして優しく温かい手で胸を包み込む。

「あつ．．．．．やつ!チエルシー!それ以上は．．．．．やんつ!」

「ダメじゃないよ．．．．．リュウにはこれからもつと．．．．．もつと知ってもらおう事があるんだから．．．．．」

体が徐々に火照り始める。片手は胸に、もう片方の手はズボンの上から股の部分を優

しく撫で上げ、そしてその手がズボンの中に手を入れていき直に股を触り始めていた。

「ああっ！……おい待って………んん!!もうそれ以上やったら……やんっ！………こ………壊れる……う………」

「壊れてもいいよ?リユウは私のモノだから………壊れてもずっと手元に置いてあげるから………」

そしてその手の動きが激しくなっていく。…まだ体の火照りは治まらない、まだ心の疼きは治まらない。リユウは自身の疼きと火照りに、さつきの行動にどうなってしまうのかという不安を抱いた……が、そんな事を考える事が手遅れであった。

「ちえ………ちえるし……い……もうそれ以上………は……ああっ！ダメ!だめだめだめえ!……ひゃあああああああ!!!」

「ああああああああああああああああ!!!」ガバアツ!

勢い良く起き上がると滝のようば汗が体を濡らしていた。息が荒くなる。頭がクラクラしだす。外を見れば窓から眩しい朝日が差し込んであり、鳥の鳴き声が朝だと言う事を知らせているかのように鳴いている。

「・・」

俺は全てを理解した。あの世界での話を、女になった話を、みんなから色々と言われた事を、そして・・・・チエルシーに押し倒され●●●をされた事を・・・・。

第二十五話

セリユー&羅刹四鬼との戦いから数日。遂に大聖堂までのトンネルが掘り終えた。ボリック暗殺の時は来た。それはエスデス率いるイエーガーズとの全面対決も戦いが始まりでもある。

「今日は月に一度ある祈りを捧げる日だ。これを機会に攻め込むぞ」

「派手にでたね。流石にこの日に攻め込まれるとは思って無いだろうしね」

「でもイエーガーズはそれくらい予想してそうだがな」

「だが相手にはするな。引っかけ回して生き残る。今回はチームを二つに分ける」

「え？二つ？」

「先ず、トンネルから大聖堂に潜入して陽動を行うチームに私、スサノオ、タツミ、レオーネ、チエルシード」

「そのメンバーを選んだ理由は？」

「回復力と防御力のあるチームという理由もあるし、個々の力が強いメンバーともいえる」

スーさんとナジエンダの二人での攻撃。奥の手を使ったパワーアップも期待できる。レオーネの獣と化した姿での身体能力の高さ。タツミのインクルシオの姿を消しながらのトリツキーな攻撃。姿を変えるチエルシーの臨機応変な動き。確かに個々の力が強いな……。

「残りのメンバーは空中からの強襲チームだ。アカメ、ラバック、マイン、リュウ。頼むぞ」

「アイサー！」

「了解した」

「任せときなさい」

「期待にこたえて見せます！」

全員気合充分。全員完璧なコンディションで挑める。後は全力で挑むのみ。

「全員！席に着け！」

スーさんの声に反応した俺達はコンマ0.2秒で席に着いた。俺たち人間か？

「今日の俺は本気も本気！覚悟はいいな、お前達!!」

「「「「ウオオオオオオオオ！」「「「「「」」」」」」

スーさんの手を見るとお盆の上に大量の料理が。ま、まさかソレハ！

「ナジエンダには塩ラーメン麺固め。鳥のうまみと塩のキレに自信ありだ！」メエエン
！

「おお！」

「マインにはイチゴパフェ！隠し味もいれてある！」パフェエ！

「あら♡」

「ラバツクには鮮度の高いボツカイ海老の造り！」ギョカイツ！

「わお！」

「レオーネにはおでんと評価の高い地酒の冷酒！」サケエエエ！

「きやー！」

「アカメにはあらん限りの肉料理だ！俺秘伝のタレで煮込んである！」ニクウウ！

「わ♡」

「チエルシーには特製チーズケーキだ！じっくり時間を掛けて作った一品だ！」チー
ズウウ！

「やった！」

「リユウには神戸牛のステーキだ！俺も一口食べたがあまりの美味さに全部食べそう
だったぞ！」ステーキイイ！

「だから少しだけ切った跡があるのかよ！つてかなんで神戸牛しってるの!?しかもなん
であるの!?!」

「作者のおすそ分けだ」

「把握」

作者「(・ω<) てへぺろ」

「タツミは何でもいいと言ったので、特製スサノオランチだ！」オコサマアア！

「え!?これってお子様ランチじゃ・・・」

「プツ」

こらマイン笑うんじやない。(o?ー?o) ムフフ

「各々の好物をスサノオに作ってもらった。存分に食べて鋭気を養って・・・」

ガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツ!!!

「……………と言っている前に食べているな。元気で結構」

ンン~~~~! オイジイイイイイ!

各々メンバーが戦いの準備をしている時、俺は一人外に出て夜風に当たっていた。

「いよいよか……………」

流石の俺も緊張しているのか奮えが止まらない。怖くは無い。負けるわけにはいかないからな。

「リュウ」

振り向くと準備が出来たのかチエルシーが立っていた。

「チエルシー……。絶対に無理はするなよ」

「しないよ。リュウを放って死ぬわけにはいかないしね」

「違う。俺も簡単には死なないさ。チエルシーとはまだあんな事やこんな事したいからな」

「ば、馬鹿なこと言わなくてもいいの!!」バシッ!

「いてっ」

背中にキツイ一発。ぐぬぬ……………。

「絶対に死なないですよ?私だって……………リュウとはまだして無い事いっぱいあるから」

「例えばどんな事?」ニヤニヤ

「斬り落とすわよ?」

「何をっ!」

無意識に股間を押さえる俺氏。本能的に危機を察知した。

「もし．．．．．だよ？リュウ」

「ん？」

「もし．．．．．今回の戦いで、私が死んでも．．．．．私の事わ「やめろ」．．．え？」

「やめろ。俺もお前も死ぬわけにはいかないし死ぬつもりも無い！俺は死なないから！俺がお前を守るから!!」

「リュウ．．．．．」

「俺は絶対に死なないから！お前を置いて死なねえから！それにお前も死なせないから！」

「っ！うん．．．」

「一体どうしたんだよ。チエルシーがそんな事言うなんて．．．」

「ごめん……。最近さ、夢を見るんだ。怖い夢……。…」

「怖い夢?」

「リュウが私の目の前で殺されるっていう夢……。リュウが……。『リュウ』に殺されてるって夢」

「俺が俺に殺される?」

またへんてこりんな夢だな。

「夢だから信じてないよ。そんな事が起こるなんて絶対じゃないし。でもずっと一緒の夢見てるからさ。怖いんだよ……。…」

「……。…」

「大丈夫だよ。所詮は夢だからさ。ほら! 気合入れないと、今からの任務に支障がでるよー!」

「お……。おう」

チエルシーは先ほどの暗くなった表情ではなく笑っていた……。が、俺はその表情が作り笑いにしか見えなかった。痩せ我慢なのか知らないが無理矢理その表情にしているのが簡単に分かった。

「チエルシー」

「？」

「俺はお前に誓う！例え自分の身に危険が襲つてこようが俺は絶対にお前を守る！絶対に死なせない。俺は絶対に死なないから！」

「リュウ……うん！」

チエルシーの顔を見て宣言する。死ぬつもりなど毛頭ない。ナイトレイドの皆やチエルシーと一緒に帰るんだ。

「リュウー！準備できたぞ！出発だ！」

声のしたほうを見るとタツミ達メンバー全員が準備を整えていた。

皆の顔を見ると、伝わってくる。全員の覚悟が、これからの戦いへの勇気が。

「ナイトレイド！出動だ!!」

「「「「「「了解！」」」」」」

二つのチームに分かれ、帝都へと向かった。

俺達強襲チームは危険種のエアマンタに乗って上空から帝都へと向かっていた。

「いやあそれにしてもしリュウとチエルシーのラブラブには見飽きたね」

「もっとお前の前でいちやついてもいいんだぞラバ？」ニヤニヤ

「この野郎！俺には縁がない行為をお前がしやがって！この場でゴロジデヤル！」
「アガガガガ！シヌシヌ！」ブクブク

クローステイルを俺の頸に巻きつけまじで俺を殺す気で締め上げてくる。

「アンタ達なに馬鹿なことしてんのよ！そろそろ着んだから気合いれなさいよ！」

「そんな事言つてタツミと一緒にいてデレデレしてるのは誰なんですかね〜マインさん？」 プププ

「よく分かつたわりユウ。アンタは今此処で蜂の巣にしてやるわ」

「パンプキンの銃口を眉間に当てて怖い事言うんじやねえよ！」 ガタガタブルブル

「このパンプキンのおかげでタツミの頭がハゲたつてこと知ってるんだからな！」

「あまりマインを刺激するなリユウ。タツミとイチャイチャできて嬉しがっているんだ」

「ちよつとアカメ！ 変なこと言てんじやないわよ！」

「顔真つ赤ですぜ？ マイン殿。」

「ま、今回も期待してるぜマイン」

「ふんっ！ 任せなさいよ。なんとたつて私は射撃の………」

天才。と言いたかったのは誰でも分かったであろう。だがその言葉は掻き消されてしまった。それはなぜか？

『6時の方向から飛んできた空を飛べる帝具持ちの高速移動により発生した巨大な風を斬る爆音によって掻き消されたのだ』

「なっ!？」

「上空からの奇襲。どうやらこちらの読み勝ちですね。しかし私という帝具使いという存在を知りながら領域である上空から攻撃を仕掛けてくるとは・・・『愚作』ですね」

マステイマを所持しているイエーガーズのランが奇襲を仕掛けてきた。

「はあ!」

背中の翼から鋭利の羽根を飛ばしてくる。

ズドドドド!

「しまった！」

羽根が狙っていたのは俺達ではなく乗っていたエアマンタだった。エアマンタの胴体に直撃し俺達はそのまま地上に落下した。

「うおおおおああ!？」

「マズイ！今のでエアマンタが即死しちゃったぞ！」

エアマンタに捕まった状態で落下する。だがそれくらいでランの攻撃は止まらない。

「ふん！」

追い討ちをかけるようにまた羽根を飛ばしてくる。

「このピンチは逃さない！」

メインがパンプキンを構えランに反撃する。今のピンチにより威力が数倍にあがり飛んできた羽根をビームにより掻き消され、ランの脇腹に直撃する。

「くっ……」

（あの帝具……意外と厄介ですね……）

ランはそのまま俺達と距離をとりはなれた場所に着陸する。

「なんとか撃退かな？」

「らしいな……」

「そんな事よりこの状況どうするのよおおお！」

「俺に任せとけよ」

ラバがクローステイルを使ってなにやら巨大なナニかを作りだす。

それは、

「即席のマットだ！」

クローステイルで作ったエアマンタを多い被せるほどのマットを作りそのまま地面に落下する。

ドスウウン！

落下の衝撃を死んだエアマンタが吸ってくれた。アザマス。

「ありがとう………」

「今までありがとうね」

おお……。お嬢様の二人がエアマンタに対して悲しみの表情。

「よし。今すぐ大聖堂に向かおう」

「おうよー！」

だが、そう簡単に事は進まない。

「いかせねーよ………」

目の前を見るとイエーガーズの帝具使い。

「お前らの相手はこの俺だ」

ウエイブが立っていた。

「イエーガーズ！」

「やるのね？ 標的ではないとはいえ4対1よ」

「こいよ殺し屋共。ランにまでダメージ与えやがって……もうこれ以上仲間を失うのはごめんだ。もう誰一人傷つけさせはしねえ……！！」

そして手に持っていた帝具を地面に突き刺し怒りの咆哮をあげる。

「グラン！ シャリオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

インクルシオと同じタイプの帝具。グランシャリオを装着する。

「ボルスさんとセリユーとコロの仇……。そしてクロメの怪我のケジメ……。つけさせてもらうぜ！！」

隙のない構えを取り俺達4人を睨みつける。見ただけで分かる。以前戦ったよりもパワーアップしている。

「ふん！いくら強いかも知れないからって4人を相手に出来るわけないでしょ！」

「標的ではないがここで葬る」

此方も戦闘体勢に移るが、俺はそれを制止させた。

「いや、ここは俺がいこう」

「リュウ!？」

「お前本気か！」

「ここで俺達がいっつを倒すのも一つの手かもしれないが、それじゃあ大聖堂に向かっているチームが心配だ。皆はあっちの方を支援してやってくれ」

「リュウ・・・分かった。マイン、ラバック。先に進もう」

「お、おう！」

「リュウ！負けるんじゃないわよ！」

「任せとけ」

三人は俺達の横を通り大聖堂に向かう。

「行かせるわけ無いだろ！」

ウエイブの拳がラバを捉え攻撃してくる。だが、

「やらせるか！」

ドゴオオオオオン！

ウエイブの拳を片手で受け止めた。

「なに!？」

「お前にも誰も死なせたくないという信念があるのも分からなくも無い。だが、俺もお前と同じで、ナイトレイドの皆をやらせるわけにもいかないんだよ!!」

「くっ！」

「リユウ！」

「いいから早く行け！あいつらを支援にやってくれ！」

「分かった！死ぬなよ！」

「死んだら骨は拾ってあげるわよ」

「勝手に殺すんじゃないよ！」

そういい残しアカメ、ラバック、マインは大聖堂へと向かっていった。

「デストロイヤー……」

「悪いなウェイブ。少しの間俺の相手になってもらうぜ」

左腕にまるで龍の嗅ぎ爪のような赤い籠手が出現する。

「バランス・ブレイク！」

『Welsh Dragon Balance Breaker!!』

籠手の手の甲の部分にある宝玉から赤色の光が放たれる。眩い光が無くなったその場所にいたのは赤い鎧に身を包んだリユウが立っていた。

『赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメール）！』

「赤い鎧!? 帝具か!」

「説明する必要は無い。あいつらの追撃はさせねえ!」

お互いが対峙するように構える俺とウエイブ。仲間を殺させないお互いの信念。その信念が籠もった二人の拳が……………。

「うおおおおお!」

交差した。

ドガアアアアアアン!

「エ、エスデス將軍！イェーガーズは一体何をしているのだ！」

「黙れ。羅刹四鬼に遊ばせてナイトレイドを甘く見るからだ」

焦りきったボリックは玉座から飛び降りエスデスの前で手をつく。

「わ、私を守れ！それが大臣の命令……ぐわ！」

「ふん。だが命令は命令だ。お前の身柄は私が守る……。お前はここから一步も動くな………」

「う……うん………」

履いていた靴でボリックの顔を踏みつける。こわ………。

「心配するな。こちらには大臣から送り込まれた切り札がある」

エスデスの背後には見知らぬ人物が立っていた。だが何かしらのオーラを漂わせていた。

「エスデス將軍？そこにいる人物は？」

「ああ……。私もこれを見て驚いた。大臣の奴、とんでもない事をしてくれたものだ。デストロイヤーという名前は知っているな？」

「ええ……。ナイトレイドに所属している殺し屋の………」

「少し前の戦闘でそいつから能力を奪う事に成功してな。その能力を大臣に渡したらこいつがやってきたんだ」

「どういう……ことですか？」

「くくく……。ナイトレイドの連中、これは驚くぞ……。なにせ『仲間が攻撃してくるとは思わないだろうしな』」

「なか……。ま？」

この前の戦闘で奪取したデストロイヤーの能力。奪取に使った勾玉を大臣に渡した後にこいつを渡された。そこで大臣はこう言っていた。

『エスデス將軍。この人物を貴方に任せます。あのデストロイヤーの能力を植えつけた実験体です。はつきり言いましょう。この人物は『デストロイヤー』本人と言っても過言ではありません!!存分に使って!奴らに死を!!』

第二十六話

ドガアアアアアアアン!!

「中々粘るな。流石イエーガーズと言ったところか」

「こちとら、伊達に海賊や海の危険種共とやり合ってなかったからな」

ウェイブと戦い始めて約数分。大聖堂の庭はありえないと言うほどボロボロであった。

「でもこつちも時間を掛けてはいられないんだ。悪いが再起不能になってもらうぜ!!」

『Boost!』

（まただ。あの音声が鳴るにつれてデストロイヤーのパワーが上がってる。一体どんな能力なんだ・・・）

「いくぜええええ！」

『explosion!』

音声がなったと同時にリュウの力が倍加する。これは10秒後とに自信の力が二倍になる倍増ののうりよくである。ほかにもパワーアップした力を仲間に譲渡する事も出来る。

因みに、庭がボロボロになっている大半の原因はリュウの倍加の力によるものである。

「だあー!」

ドゴオン!

「ぐおー!」

ウェイブの腹に直撃。だが休むな。殴り続ける!

ドドドドドドドドドド!

「うおおおらああ!!」

「ぐおああ!」

腹、胸、腕、顔。すべてに打撃を与え、

「再起不能になつてもらう」

渾身の一撃を叩き込んだ。

ゴオオンン!!

「がはあああー!」

庭の奥に聳え立っている木々の中に飛んでいき、大聖堂を取り囲んでいる壁面に直撃する。

「野郎……。飛ぶ前に後ろに飛んで衝撃を減らしやがった」

やっぱり戦いの経験つて奴かな。流星は海の男。

壁面に直撃したウェイブがフラフラと立ち上がる。

「二度も負けるわけには……。いかねえんだ……。クロメを……。守らないと……。」

ドサツ。

氣を失つてそのまままるで糸の切れた人形のようにバタリと倒れる。

「悪いな……。お前の信念は俺には届かない……。」「

クロメを守りたい。仲間を傷つけたくない。その気持ちは俺は痛いほど分かる。恋人であるチエルシーを守りたい、俺とライバル的存在でいてくれるタツミを守りたい、俺の師匠のような存在のアカメを守りたい、いつも怒ってくるがちゃんと言を氣遣つてくれるマインを守りたい、からかわれたりされるが優しくしてくれるレオーネを守りたい、俺のある意味でもの仲間でもあるラバックを守りたい、任務を優先するが部下を信じているボスを守りたい、みんなをずっと見てくれるスーさんを守りたい。ナイトレイド全員を守りたい。俺はこの想いを胸に秘め戦っている。お前もボルスやセリユーを失つて悲しい気持ちになつてゐるのは分かる。だが俺にも、シェーレやブラートみたいに、仲間を失いたくないんだ。同じ気持ちでも……。負けるつもりは微塵もない。

「こうしちゃいられん。早く大聖堂に……。」「

行こうと思ひ振り返った瞬間……。

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアン!!

大聖堂の天上が吹き飛んだ。

そしてその吹き飛んだ天井の瓦礫のなかに居たのは……。

「スーさん!!!」

体の部分部分がなくなっているスーさんが俺の元に飛んできた。

「おい!大丈夫か!」

「む……リユウか。俺は回復できるから大丈夫だ。それよりナジエンダ達の所に向かつてくれ。まさかイエーガーズにあんな奴がいたとはな……」

「奴?」

「俺も見た時は驚いた．．．．．しかも強い。あのアカメが苦戦するほどだ」

「誰なんだよそいつは！勿体ぶらないで教えてくれスーさん！」

俺はその答えを早く知りたいためにスーさんをせかした。俺はこの任務が開始してから嫌な予感がしていた。もしかしたらその嫌な予感がそいつなのかもしれない。

「良いか．．．．．良く聞け。その人物は．．．．．」

俺はその言葉を聞いて、驚きを隠せなかった。

『リュウ。お前がイエーガーズにいる』

世界にそっくりな人物が三人いるという話を聞いたことがある。だがこの世界が本当に俺の生きていた世界と同じであるとは思えない。その話を聞いたのは俺がまだあの世界で生きていた頃に聞いた話だ。

だが、スーさんの言葉を聞いたとき確かに驚きは隠せなかったが、それほど仰天するほどではなかった。それはなぜか？あの戦いの時だ。

ボルス・クロメ暗殺の時に奪われた俺の能力だ。大体の予想はつく。エステスが俺の能力を収めたあの勾玉を大臣にでも渡したのだろう。その勾玉を使ってその人物を実験などで使ったのだろう。

だが俺は自分で確かめないと信じないタチなのだ。

俺は再生しているスーさんとその場において大聖堂に全速力で走った。

背中に嫌な感覚が波打っている。冷や汗が止まらない。

俺は大聖堂の正面の壁を蹴り飛ばした。

ドガアアアアアアン!!

大聖堂の壁を潜り抜け中に入り込む。そして顔を上げた時に目に入ってきた光景は。

大聖堂の壁にめり込んでいるアカメとマイン。倒れているボスとチエルシー。奥の玉座に座っているポリックとその横に立っているクロメ。レオーネにレイピアを突き立てているエスデス。そしてその中央にインクルシオを身に付けたタツミとラバックの頭を鷲づかみしている人物。蹴った衝撃によって起こった土煙が晴れ見えたその人物の姿は、虚の仮面をつけているから一瞬分からなかったがすぐに理解した。

【本当に瓜二つの俺が立っていた】

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

瓜二つの俺がタツミとラバックの頭から手を話し此方にゆつくりと近付いてくる。

「来たな。デストロイヤー。大臣から貰ったこちらのデストロイヤーとナイトレイドのデストロイヤー、どちらが強いか見ものだな」

レオーネの体のあちこちに傷をつけたエスデスがボリック達の元に向かう。

「野郎・・・・・・・・・・」

鎧を外し仮面を装着する。

「仲間の下に向かわなくていいのか?」

初めてこいつの声を聞いた。少し俺の声を低くした感じかな?だが俺とほぼ瓜二つってのが腹が立つ。

「近付かないと、テメエをぶちのめせないんでな」

俺と奴の距離が約2杯の距離まで近付いたときお互い立ち止まる。

「自己紹介をしよう。俺は【ビヤッコ】だ」

「ビヤッコ……。覚えとくぜ。俺の分身野郎」

「分身とは人聞きが悪い。これは本当の名だ。ある人物の実験でこうなつちまつたんだ。だが気分は悪くない。おかげでこんな素晴らしい力を手に入れたんだからな」

仮面をつけていて分からないが俺にはわかる。俺のことを上から目線で嘲笑っているのが分かる。

「俺の能力で……みんなを傷つけてんじゃねえよ!!」

「その能力で俺は満足してるんだから喜べよ。楽しいぜ。この力があれば誰も相手にならない。例え……お前でもな!!」

「っ!!」

今ので俺はプツンときた。楽しい?人と戦って傷つけて楽しいだと……。

「ぶちのめす!!」

「やってみな!!」

戦闘態勢にはいる。

「スタープラチナ!」

「ザ・ワールド!」

お互いの背後からスタンドが飛び出す。

『オラア!』

『無駄ア!』

ドオオン!!

拳がぶつかつた瞬間、その衝撃波によって当たりに散らばっている瓦礫などが吹き飛ぶ。

「くっ……リユウ」

「大丈夫かナジエンダ」

「スサノオ……。私はい……。他の皆の所に連れて行ってやってくれ……。今の状態じゃ動く事もボリックの下に行く事も出来ない……」

「分かった……。だが今はなんとしてでもボリックを討つ」

「ああ……。もしもの時はお前の奥の手を使うぞ」

「ナジエンダの言葉で変身できるように準備してある。いつでもいけるぞ」

「よし……。アカメたちをみてやってくれ」

「了解した」

俺達の攻防の間にボスたちはこっそり行動を開始した。

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!』

『無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!』

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

お互いのラッシュが当たるが、俺は少し焦っていた・・・。

(傍から見たらお互い互角に見えるけどスタンドの性能的にあっちの方が上だ・・・。このまま押し勝つ事は出来るかもしれないけど奴に時を止められたら終わりだ。

その予想通り、俺の嫌な予感的中した。

「こりや戦いが長引きそうだな。お前と長く戦うのも良いけどそんな事してたらエステス將軍の拷問を受けてしまうんでな。お前の知ってる技を使ってやる!」

「ま、まさか!!」

「そのまさかだ! 『ザ・ワールド! 時よとまれ!!』」

ザ・ワールドから発したオーラらしきものが俺達を包み込む。ビヤッコ以外の時が止まった。

「とは言ったものの、お前もこの止まった時の中は見えてるはずだ。動きはしないがなあ」

1秒経過。

(野郎………。調子に乗りやがって……。だが俺のこの中で動ける時間は5秒だ。その時間内にスタープラチナを叩きこんでやる！)

2秒経過。

「今思っている事は、動ける時間内でスタープラチナを叩きこむだろ？」

(っ!?)

3秒経過。

「青ざめたな。凶星だろう？確かにいい考えかもしれない。まだ俺はこの能力を完璧には使いこなせてないんでな。お前に負けるかもしれない。だが、お前の読みが通じるか試してやる」

4秒経過。

「今だ!!」

『オラオラオラオラオラオラ!!』

「ふんっ」

『無駄無駄無駄無駄無駄無駄!!』

ザ・ワールドが時を止めていられるのは9秒。残りの時間が5秒となったとき、俺は攻撃を仕掛けた。

ドドドドドドドドドドドドドドドド!!

「いけえー!」

「うーおあああー!」

スタープラチナの拳がビヤツコを捉えた。ありったけの拳打を浴びせた。

そして……。

9秒経過。

「ざまあみやが………!!」

「くくっ………」

9秒経過した瞬間、時は動き出す……『はずである』。なのに俺の動きだけ止まりビヤツコは普通に動いていた。

「かかったなアホがあー！止められる時間はのびてるんだよ！今じゃー一秒なんだよ！読みはハズレだ。ざんねんでしたあ」

（くそつたれが！）

これくらい予想できたはずだ！あのままな訳がないと言う事に！！

「悪いな。デストロイヤー……。これで、チェックメイトだ！！」

『無駄！』

ドゴオオン！！

ザ・ワールドの拳が俺の体を貫通した。

「っ！！」

第二十七話

ビヤツコのザ・ワールドの拳が俺の腹を貫通し大量の血が噴出す。

「がはあっ!」

「以外にもあっけないもんだな。結局はこの程度かよ。拍子抜けだなあ」
勝ち誇っている顔。人を馬鹿にしたこの根性に俺は腹が立った。

「本当に拍子ぬけか?」

「あ?」

ポフンツ

俺の姿が煙と化しその場から跡形もなく姿を消した。

「影分身か!!」

「その通りだよマヌケ!!」

影分身。その名の通り自分の実体を持った自分の分身である。大聖堂の壁をぶち破った瞬間に自分の影分身を作り俺は姿を隠していた。俺に影分身に気付けないのも拍子抜けだな。

「人を馬鹿にしたためえの根性!文字通り打ち砕いてやるぜ!!」

背後から回り込みビヤッコの顔面をおもいつきり殴り飛ばす。

ドゴオオン!!

「(っ)ほあああ!!」

壁に殴り飛ばしたことにより体がめり込み身動きが取れなくなるビヤッコ。そのまま放置つてのもいいけどここで止めでもさして能力を返してもらおうぜ!!

赤龍帝の籠手を顕現しビヤツコに追い討ちをかけるが。

ビ
チ
ャ
ア
ア
ア
!!

ビヤッコの体から黒い液体が飛び出した。

「な、なんだ!？」

ビヤッコの体の穴という穴から黒い液体が飛び出し体がビクビクと痙攣を起こし始め気味が悪くなってきた。

「やはり、まだ改良が必要と言う事か」

ボリックの近くで観戦していたエスデスが懐から俺の能力を奪った時に使った勾玉を取り出しビヤッコに向ける。その瞬間、ビヤッコの体全部が黒い液体となりエスデスの持っている勾玉の中に吸い込まれていく。

何が起こったのかわからなかったが今まで色んな驚く事が多かったからほんの少ししか驚かなかった。

「中々面白いものを見せてもらったぞ。こいつはまだ実験体として未完成の状態なのだ。余興として受け取れナイトレイド！」

待て。今なんて言った？ 未完成？ あの力で未完成だと？ あの俺の能力の上に何かを上乗せする気か!?

「ナジエンダ。これで分かっただろう。お前達ナイトレイドが束になっても私やあいつに勝てない。さっきのがその証拠だ。ここで貴様らを拷問室に連れて行く」

再びレイピアを抜き俺達に近付いてくる。完全に俺達を狩る気だ。

だがナジエンダは。

「悪いが私達は全員しぶとい。そう簡単にやられるタマじゃないんでな。戦闘不能にしたと思っっているだろうが違う。回りを見てみる」

エステスの回りを見るとボリックとエステスの周りをナイトレイド全員で取り囲んでいる状態。俺とビヤッコが戦っている時にスーさんがナイトレイド全員に応急処置を施し何とか戦える状態にまで戻した。俺は全然気付かなかったけど……。

「今回の我々の目的はボリックの暗殺。お前と戦ってる暇なんてないんだ。スサノオ!!」

ボスの声を聞きスーさんが両手を合わせる。

『禍魂顕現』

スサノオの奥の手が発動される。スサノオの奥の手は狂化。主であるナジエンダの生命力を胸にある勾玉から吸い取り自分の力にする。奥の手を使えるのは三回まで。

それ以上使うと主の生命力が尽きるからだ。デメリットの方が大きいけどメリットもある。生命力を吸い取って得た力は『絶大』である。

奥の手を使ったスーさんの姿が通常の状態とは違う形態になった。髪は白くなり上半身がゴツゴツとした体型に変化した。下半身は黒いボロボロの袴で草履を履いていた。そして一番目を引いたのが背後にある巨大な鏡らしきもの。

「奥の手を使ったか。中々楽しめそうだなー！」

エスデスが氷の刃を出現させサノオを攻撃する。

「八咫の鏡！」

背後にあった鏡が正面に移動しその鏡で氷の刃を吸い込み氷の刃を反射させる。

「反射の鏡か………」

エスデスは反射してきた氷の刃を軽々と避ける。

俺も黙って見ていられない。

「赤龍帝の鎧!!」

鎧を身に着けスーさんの助太刀に向かう。

『Boost!』

「ドラゴン・ショット!!」

倍加した力を使い魔力の塊を発射する。

ドオオン!

「甘いー!」

氷の巨大な壁を出現させ攻撃を防ぐ。まだパワーアップが足りないか。

「リュウ!下がれ!」

言われたとおりに下がるとスーさんの右手に巨大な剣が出現した。

「天叢雲剣!!」

巨大な剣の柄を両手で握り締めエスデスに向かって薙ぎ払う。

「ふんっ！」

巨大な氷の壁を幾重にも重ね剣の攻撃を防ぐがかなりの破壊力により氷が全て破壊された。

「中々の威力だだな。ほめてやる。だが私には届かんぞ」

「お前にはな、だが『後ろの標的たち』にはどうか？ 戦いに興じすぎたな」

スサノオの狙いはエスデスへの攻撃ではなく、ポリックたちへの衝撃波での攻撃であった。氷の壁にガードされて刃は届かなかったがその威力による衝撃波はエスデスの背後にいるポリックたちに届いた。

「クロメ!!」

衝撃波によって起こった煙の中からクロメたちが姿を現した。

「全員無事です！」

そこにはクロメとポリックを抱えたナタラがいた。あの時に粉々にしたはずだった

が、どうやら殺して人形にしてきた人間の体を使ってナタラを作ったのだろう。だが本来の自分の体ではないので完全には力は発揮できないはず。

ドサツ

「ナタラ!!」

（衝撃波でポリックを狙ったがあれで倒せるほど甘くはないか。だが護衛の力は封じたぞ）

「戦いを楽しめないとは……護衛任務は二度とやらんぞ」

エスデスの上空に大量の氷の刃が出現。それが一つにまとまっていく。

（氷の数が今までと違う?）

「捕獲はせん。帝具人間！貴様の核をすりつぶしてくれ!!」

『ヴァイスシュナーベル!』

ドドドドドドドドドドドド!!

「最強の攻撃力をその身で味わえ!!」

『八咫の鏡!!』

鏡で吸い込みそのままエスデスに反射する。

ドオオン!!

(勝機!!)

エスデスが自分の攻撃を防いでる瞬間、ボリッククへ近付くチャンスが出来た。

『八尺瓊の勾玉!!』

体にオーラを纏い高速移動を可能とする技。そのスピードでエスデスの横を通り抜けボリッククへと攻撃を仕掛ける。

クロメはナタラに視線がいつていた為反応に遅れてしまった。

「とつた!」

スーさんの拳がボリッククを捉えた。

これでボリッククを倒して一件落着……かと思っていた。だがここからはありのまま起こった事を話す。ほんの一瞬だ。ほんの一瞬の出来事だ。スーさんとエスデスとはかなりの距離が開いていた。いくら奴でも瞬時に近付くのは不可能である。それが俺だったとしてもそれは無理だ。だが現実だった。何が起こったのか最初全然分からなかった。

『次に気付いた瞬間、スーさんの背後にレイピアを刺していたのだ』

「な、なにつ!?!」

レイピアを刺した場所から氷が発生しスーさんの動きを封じていく。

「スサノオ! 脱出しろ!!」

「もうそんな隙は与えん!!」

エスデスがスーさんが凍りついた瞬間にその氷を蹴り砕いた。

バガツ!!

「私の『奥の手』を使わせたのは褒めてやる」

砕いた氷の中から真つ赤な勾玉が飛び出してきた。

「スサノオのコアが!」

生物型は心臓部であるコアが無傷ならばすぐにでも再生するがエスデスはその隙も

与えることなくそのコアを踏み砕いた。

バキィ!!

「っ!!」

「これでこいつも動けまい。ナジエンダ、貴様の帝具は中々面白かったぞ」

「おい! さつき何をしやがった!!」

「知りたいか。教えてやろうこれが私の帝具の奥の手、摩訶鉢特摩（まかはどま）だ。一瞬で時空を凍結させる事が出来る。その時空の中で動けるのは私だけだ」

ザ・ワールドのようなものか……。だが俺達のは時間を止めるであって時空を止めるわけではない。もし俺がスーさんの立場だったら絶対に死んでいた。

ズ・・・・・・・・ズズ・・・・・・・・。

エスデスの攻撃により吹き飛んだスーさんの体の破片が一点に集まっていく。

「ほうまだ再生しようとするか。だがもう無理だ」

(スサノオ・・・そんな姿になってまで・・・)

「さあこれで存分に戦える。ナイトレイド、貴様ら全員を拷問室に連行す……………」
「シュツ！」つ!?」

エスデスの横を何かを通り過ぎた。

「ぎゃああ!!」

後ろを振り向くと巨大な風穴が空いたボリックが倒れていた。

「なんださっきのは……………」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

また正面を振り向くとそこに立って居たのは、体から真つ赤なオーラを滲み出しているデストロイヤー、リュウが立っていた。

「ふー……よくもスーさんを殺してくれたな。泣きたい所だけど泣いてられない……。エスデス、お前は俺を……怒らせたな!!」

怒号一発で衝撃波が走る。私、チエルシーは鳥肌が立った。リュウの怒ったところは初めて見た。いつもみんなにからかわれて怒るときもあったがそんなレベルじゃなかった。背中を見てるだけでも分かる。今のリュウは怒っている、おそらく私達でも止められないくらいに……。

「エスデスウウ!!」

『Boost!』

ドガアアアアアアン!!

パワーの上があった力を右手籠めてエスデスに攻撃を仕掛ける。エスデスは瞬時に分厚い氷を張ったが簡単に砕かれてしまう。

「ポリックも殺されたか………。任務失敗か。だが今はそんなことどうでもいい！今はこの戦いを楽しもう!!」
すぐさまレイピアで反撃してくる。

ドオオン!

音の鳴った方向を見ると空中にスーさんが復活していた。なんで？

「三度目の……禍魂顕現だ……。本来重ねがけでするものじゃないが今はそんな事言つてられない……。私の生命力を使いきった……。後は頼んだぞスサノオ……。」「血を吐きその場に倒れ込むナジエンダをタツミが抱きかかえる。

「ナジエンダー！貴様！！」

『八尺瓊の勾玉！！』

高速移動した勢いを使って攻撃を加える。

「む……パワーが上がっている……」

氷を張ったエスデスを押していき大聖堂の壁に激突する。

「スーさん！」

「逃げるぞ……リユウ……」

「なんでだよ！今なら！」

「重ねがけをしたツケだ……。スサノオのパワーが倍加したわけじゃない……。今のままじゃエスデスの命にまだまだ届かない……」

「分かった……」

タツミがレオーネとナジエンダを抱え、俺がチエルシーとラバックを抱きかかえる。

ドオン！！

壁からスーさんが吹っ飛んできた。

「スーさん!!」

「多少強化されているようだが．．．まだだ。私には遠く及ばん．．．」

「クソツタレガ．．．．．へ？」

スーさんが俺達全員を抱きかかえる。

「絶対にこいつらを放すなよ．．．．．」

「何を．．．．．うおおおおわあああああ!!?」

ブウン!!

スーさんが二人抱きかかえている俺とタツミとアカメとマインを上空に放り投げる。放り投げた先には戦いでできた穴があり俺達はそこを抜け大聖堂の外に出た。

「スーさん!?!」

(帝具と生まれてきて千年……。これほど楽しい事は無かった……。悔いは無い……。)
拳を高々と上げ握りこぶしを作る。

「さーらばだー！」

『スーさん。もしこの戦い全てがおわったらどうする？』

『そうだな．．．．．お前達とどこかえ旅をしてみたいな』

目から涙が毀れた。約束したのに．．．．．。

「スーさああああああああああああん!!!」

「逃がしはせぬ!!!」

「やらせるか!!」

氷の刃を上空に発射するがスサノオの鏡に防がれる。

「くっ!」

反射した攻撃を軽々とよけササノオとの距離をとる。

「奴らの追撃はさせん」

「自らが囷となつて全員を逃がすか……。ナジャンダの部下は甘い奴ばかりだな」

「俺は帝具人間だ。奥の手も使いきった。これ以上にならない適役だ」

「お前、名をササノオと言つたな」

「ふんっ。覚えていたのか……」

「帝具としてではなく戦死としてその名を覚えておいてやる……………」

お互いの武器を持ちにらみ合う。

「その命の塵際……。その最後まであがいて楽しませて見せろ!!!」

「うおおおおお!!!」

俺達が逃げ出した後、スーさんが帰ってくることは無かった。

第二十八話

大聖堂での戦いから数日。俺達ナイトレイドは南から回り込み帝都にある住処へと戻っていた。俺たちがもしあの場所であらば死んでいたのかもしれない。それなのにスーさんが囷になつて俺達を逃がしてくれた。自分の身を犠牲にして……。スーさんが生かしてくれたこの命。大事に使う。

ナイトレイドではアカメとラバックが全治六ヶ月の重症。ナジエンダは三回の奥の手を使用し生命力が著しく減つてきていた。タツミとマインは軽傷。レオーネは帝具で回復しているため治療はいらぬ。いつもなら俺がクレイジーダイヤモンドで治すのだが皆と一緒に逃げるために大勢の敵勢力と戦い怪我を負つた。少しの間スタンドを出せない状態だつた。この原因は勿論敵勢力でもあるが……ビヤッコである。あいつの攻撃が体の芯にまで届いて骨が何本も折れていた。レオーネまでとは行かないが回復力には自信がある。全治数週間といったところか。ポスの命令で今回の戦いの傷を癒す事になつた。

「大丈夫？リユウ」

「大丈夫だけど、やっぱり体が痛いな・・・」

「今は治療に専念して、一応任務は終了したんだし」

「一応な・・・。スーさんが死んじまって悲しいけど、悲しんでいられない。今は先に行く事を考える」

「そうだね・・・。だからこそ今は休んでて」

ベットで寝ている俺をチエルシーがずっと看病してくれていた。いい彼女をもったなどと思う俺氏。全国の非リア充君達。恨むなよ？

「チエルシーは怪我は大丈夫なのか？」

「少し怪我したくらいだから大丈夫。それよりリユウの方が心配だよ」

「俺より自分の心配をしろよな・・・」

「イヤだよ・・・」

「え？」

「自分が死ぬより・・・リユウに死んで欲しくないもん・・・」

俺の右手を強く握り締め顔を伏せるチエルシー。以前ならこんな表情見せなかったのに・・・。

「言つただろ。俺は死なないから」

「約束・・・破つたら斬りおとすから」

「死んでたら斬りおとすもクソもないだろ・・・」

「それもそうだね・・・ふふっ・・・」

今は体を休める時、しつかりと休ませて次の戦いへ挑もう。

だが、俺達が休んでいる時に帝都で大きな動きがあつた。

三ヶ月後、なにやら『大臣の息子が帰ってきたとか』。しかも帝具使いを連れてきてだ。そしてチームを結成。名前は秘密警察『ワイルドハンド』。表向きは帝都に仇名す賊を殺すつてのが建前だがそうじゃなかった。大臣の息子だという地位を利用し帝都の町の人を殺している残虐極まりない連中である。

俺は一人で帝都に偵察に向かった。

「そのワイルドなんとかって何処にいるんだよ・・・」

高い場所から辺りを見渡すと、遠くの方から少し騒ぎが・・・。

「貴様らをこれ以上野放しにはしておけん！我ら皇拳寺師範代が相手をしてやる！」

ワイルドハンドらしき一味を数十名いる皇拳寺の師範代たちが取り囲んだ。遠くから見ても分かる。実力差が圧倒的過ぎる。けどここで姿を現したらまた面倒な事が起こりそうだ。俺は押さえきれない怒りを押さえつけじつと見守っていた。

数分後。簡単に鎮圧され近くの店で無銭飲食をしており、その後にイエーガーズが到着。色々もめているらしいけど気にしない。ワイルドハンドの持っている帝具がなんなのか分かったので俺はアジトへ引き返した。

「リーダーのシユラ。帝具はシャンバラ。能力は空間操作」

「シユラは面倒だな。あの帝具を使われたらどこに飛んでいくか分からない……」
俺はいま偵察で得た情報をアカメとレオーネに報告している。

「他のメンバーの能力は？」

「まずはイズウって奴だ。帝具は持ってないけどその剣捌きはアカメに匹敵するかもし

れない。ま、アカメなら大丈夫だろ」

「誰が来ても葬るだけだ」

「さすが私の親友！頼りがいがあるね〜！」

「く・・・苦しい・・・」

おお・・・。アカメがレオーネの胸に挟まつてる・・・。いつも俺がやられてるけど見る側が変わったら相当・・・エロいな・・・。

「リュウ。顔がだらしなくなっているぞ。チエルシーを呼ぶか？」

「え!？」

「チエルシー！リュウがアカメに鼻の下伸ばしてるぞー！」

「おいしいiiiiiiii!!」

「後でお仕置きしとくから大丈夫ー！」

なんでお前も返事してんだよー！

「不幸だ・・・」

「あはははははは！アカメは誰にもあげないからな！」

「私は誰のものでもないぞ？」

この野郎・・・。まあ今回は見逃してやろう。

「で、次は女のドロテアだ。帝具はアブゾデック。他者の血を吸い込んである程度のパ

ワーアップや怪我の治療ができるらしい」

「まるで吸血鬼だな」

「血とは美味しいものなのか？」

「そこで食い意地は張らなくて良いぞアカメ」

血つて鉄みたいな味するらしいから吸いたくは無いな。

「次はコスミナ。帝具はヘヴィプレッシャー。マイク型の帝具で出した声を介して出た音が超音波として発せられる。その音を浴びた奴の骨はヒビがいくか粉々になるらしい」

「音か。面倒だなそれ。リュウどうにかできないの？」

「なぜ俺に聞く……。一応対応手段あるけど」

「あるならそいつよろしくね。私は肉弾戦したいから」

「肉弾戦できる奴一人も居なかったような……。…」

「ええええ!? まあ気にせずやるか」

「単純……」

まさに単純。レオーネは戦闘馬鹿だからな。

「次は細い体のエンシン。帝具はシャムシール。曲刀の帝具で真空の刃を飛ばす」

「リュウの技みたいだな」

「だがこいつがめんどうなんだよな。夜の月の形によつて刀の威力が変わるらしい」「どれくらいかわからないの?」

「偵察が昼ごろだからなく。けど弱点はある。攻撃した後大きな隙ができる。アカメはそこを狙つてくれ」

「了解した」

「最後は巨漢な男のチャンプ。帝具はダイリーガー。六つの玉に分かれている帝具で1つ1つに能力が付与しているらしい」

「これがワイルドハンドの戦力か。でも今はエスデスが居ないから攻めるなら今だな」「俺もそれは思った。でだ、皆動けない中、今回は俺たち三人で動こうと思う」

「私は構わないよ。久しぶりに暴れたくてウズウズしてるんだ」

「だつとよ。どうする?ボス代行?」

アカメに視線を移すと手を顎に当てて考えるがすぐに返事は返つてきた。

「やるぞ」

やっぱりな。

「おう!」

「暴れるか!」

無関係の人達を殺したりおもちゃにしている奴らを俺たちが許しておく訳が無い。

「今回の標的は非道の限りを尽くすワイルドハンド一味！葬るぞ!!」

「了解!!」

第二十九話

—帝都—

ワイルドハンドが悪事を行うのはただただ自分達が殺しを樂しむのも理由の1つだが、もう1つの理由がある。それはナイトレイドをおびき寄せ仕留めるためである。殺しに来てくれれば捜す手間が省ける。おびき寄せたらこちらのもんだと考えている。このワイルドハンドの動きに革命軍はナイトレイドに指令を出した。依頼を受けたナイトレイドは直ちに行動を開始した。

「んで？もしかしてとは思うけどワイルドハンド全員を相手にするのか？」

「いや、今回は3人だ。残りのものはそこには居ないという情報を貰った」

「そこに？」

「密偵チームからの情報なんだが、今、イエーガーズのランとクロメがワイルドハンドと交戦しているらしい」

「なんで？仲間じゃないの？」

「流石のイエーガーズもワイルドハンドは腹立つてことかな？」

「もし私がイエーガーズに居たら即効であいつらぶちのめしてるよ」

「こえーよレオーネ……」

「確かにクロメは標的だ。だが、今回はワイルドハンドを葬った後はすぐに撤退する」

「まだ俺たち全快じゃないからな。約1名を除いて……」

「誰の事？」

お前だよ巨乳!!

ドゴオオオン!!

「!?」

林の木々の枝を足場にしながら移動していると数百メートル先で爆発が起こった。

「あー……ドンパチしてるな」

「よおし! 私も参加しちゃうぞ!」

「急ぐぞ二人とも」

「しやらあああ!!」

ドドドドド!!

「くっ!」

ワイルドハンドの1人、エンシンの帝具の攻撃にクロメは苦戦していた。この帝具は月の形によつて帝具の威力が変わる。しかも今宵は満月。帝具の威力が1番強い時だった。

「そらそらあ!!逃げてばっかじゃ勝てねえぞ!」

「っ!!」

クロメはその身のこなしを活かし、飛んでくる真空の刃を避けエンシンの背中を斬りつける。

ズバアア!!

「くっ……。人形なんかより本体が1番強いじゃねえか……。だけど、敵は俺1人じゃねえんだぜ!!」

エンシンとワイルドハンドの1人のコスミナがクロメを挟み撃ちにする。

「聴いてください!出力フルパワー!!」

「死に晒せえ!!」

エンシンの真空の刃とコスミナのマイクを介しての超音波がクロメを襲う。

「しまった……」

『スタープラチナ・ザ・ワールド』

時は止まった。5秒間の間に俺はクロメを突き飛ばした。
こんな事に時を止めていいのかと思うが気にしない。

『時は動き出す』

バゴオオンン!!

「はあ!?!」

「え!?!」

刃と超音波がぶつかった後に土煙が発生。その土煙が晴れたところに仮面をつけた俺が立っていた。

「お前がデストロイヤーか．．．．．」

「ド派手は登場です☆」

「……………」

戦場を見渡すと、ワイルドハンドの一味と思われる男と女が1人ずつ。そしてイエーガーズのクロメ。そしてここから少し離れた場所で戦っているランとピエロの格好をしている男。確か名前はチャンプか……。ま、あっちの戦いはもう終わりそうだけだな。

「お前らの話はよく聞いてるよ。殺しを楽しんで人を自分のおもちやのようにしてるんだっけ？なんでこうどいつもこいつもクズばかりなのかね」

「そのクズ野郎共に自分の能力を奪われるつても、てめえ相当なマヌケなようだな」

「調子にのつてると、コスミナちゃんの声でイカしてあげるよ☆」

「そうかい。なら……………」

「地獄にいかしてやるよ!!」

バゴオン！

地面を蹴りつけ、辺りの岩壁や地面などに地割れが発生する。

「うお!？」

「きゃあ!？」

衝撃によって空中に岩などが浮遊する。

「今だ！アカメ!!」

その浮遊している岩などを利用してアカメがエンジンに接近する。

「こつちが本命かよー！」

帝具である曲刀を円を描くように振り回す。

『満月輪』

シユバババババ!

だが、それも所詮悪あがきに過ぎない。アカメは曲刀の攻撃を軽々と避けていき、村雨を鞘から引き抜き、

「葬る」

横一閃。

ズバツ!

胸の斬り傷から呪毒が入っていく。

「つ……強え……」

「エンシン!!」

「お前の相手は俺だ!!」

エンシンの元に向かおうとするコスミナの前に立ちふさがる。

「ちよつとー！そこどいて！」

「行かせねえよ」

「なら・・・もう一度聴いてください！」

「リュウ!!」

「まかせとけ。すううう・・・」

大きく息を吸い込み、肺の中に空気を一杯に溜め込む。

「出力最大フルパワー！☆」

ドゴオンツ！

「ボイスミサイル!!」

ドゴオンツ！

コスミナの声による超音波と俺の声のミサイルがぶつかった瞬間、声と声の衝撃が消え去った。

「え!? どうして?!」

「ノイズキャンセラーだ。お前の出した声の音の振動を俺のボイスミサイルの音の振動

で掻き消したんだよ。声の攻撃にも弱点があることをしつかり勉強して無いからこうなるんだよ」

「ふふふ……。貴方中々やりますね！けど、私の本気はこんなものじゃありませんよ！
☆」

「だろ。うな。だから速めに終わらせる事にした」

「へ？」

「レオーネ！」

「あいよ！」

林の奥からレオーネが飛び出し、二人でコスミナを取り囲む。

「女の人には興味ないんですけど」

「興味があったら逆に嫌だわ！と言う事であんたをぶちのめすよ！」

「レオーネ。あれつけてるか？」

「もっちゃん！」

変身したレオーネの手に俺が錬金術で作った特製メリケンサックを装着している。

「そうはさせませんよ！大出力！フル……。…」

させるかよ！

「マシンガンブロー！」

「メリケンナツクル！」

俺とレオーネのコンビ技。

『フルボッコだドン☆』

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!!」

2人の拳がコスミナを文字通りフルボッコにする。

「ぶげへえあ?!」

最後の一撃。

「デスビーム」

俺の指先から紫色の光線が飛び出し、コスミナの心臓を射抜いた。

「かはっ……」

ドサツ

「全員骨折の上に心臓に風穴。今まで殺してきた奴らに地獄で詫びてきな」

そして残るは……。

「クロメ……」

「お姉ちゃん……」

クロメとワイルドハンドの1人を殺してボロボロになって倒れているラン。

「クロメ。お前も革命軍の不安要素だ。悪いがここでぶっ潰す」

俺、レオーネ、アカメの3人とクロメ1人。普通ならクロメは撤退するのが普通なのだが、

「治安を乱す輩は私達イエーガーズが狩る！例えそれが誰であろうと！」

八房を抜き、戦闘態勢にはいる。

(ふ。私達は……か。出会った頃と変わりましたね……クロメさん。だからこそ彼女は無事に……)

「なら、遠慮なくやらせてもらう！」

「行くぞクロメ！」

がしっ！

「っ!？」

クロメを引き寄せ、ランが翼を広げる。

「マステイマ!!」

羽根がアカメに向かって飛んでくる。

「ザ・ハンド!!」

右手に異様な能力を持っているスタンド・ザ・ハンド。右手に触れたものは空間だろうと物体だろうと全て削り取ってしまう。その削り取ったものがどこに行くのか俺に

もわからない。

ザ・ハンドの能力でランの羽根を右手で削り取る。

ガオンツッ!

「このままてめえを!.....あ」

ランが羽根を飛ばしたのは俺たちへの攻撃ではなく、逃げるための時間稼ぎ。羽根を飛ばした瞬間、ランはクロメを抱きかかえ、遙か遠くへ逃げていた。

「ちっ。逃がしたか」

「力を搾り取つての渾身の離脱みだったね」

「だが、今回は私達の勝ちだ。ワールドハンドの帝具も回収できる」

「だな。さっさとずらかるぞ。今の戦闘の音で帝都の兵士が聞きつけてくるかもしれないからな」

「いやあ。久しぶりにぶちのめせたからよかった!」

「俺とレオーネのコンビネーション完璧だな!」

「技名はくっそダサイけどな」

「うぐ.....」

エンシン、チャンプ、コスミナの帝具を回収し、俺たちはアジトへと帰還した。

「クロメ．．．．．」

アカメの悲しく呟いた声と共に。

クロメ&ラン

「くっ．．．．．」

「ラン！」

（致命傷だ．．．）

「すぐに殺さなかった．．．。ツケでしようね．．．」

「駄目だよ！死んじやだめだよ！ランが死んだらウェイブだつて悲しむよ!!」

「ふふ．．．。ウェイブに伝えてください．．．。優しい気持ちのまま．．．．．まっ

すぐ進みなさいと．．．．．」

「ラン．．．．．」

クロメは確信した。ランはもうすぐ死ぬ。今すぐ治療したとしても死ぬに違いない

と確信できた。けどランとは離れたくないと思った。ならばどうする？一緒に居るために？クロメの頭には1つだけ方法が浮んだ。それは……………。

『八房でランを殺し、死人形にする』

「なら、こうすれば……………ずっと一緒に居れるよ……………」
「え？」

クロメは八房をスラリと引き抜き、ランに向かって振り下ろした。

その瞬間、

『ザ・ワールド！時よとまれ!!』

リュウの能力を所持する男。ビヤッコの時間停止によって時は止まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ビヤッコはクロメの握っていた八房を鞘に戻し、ランの近くに跪く。

「クレイジーダイヤモンド・・・・・・・・」

唯一、このスタンドだけ二つに分かれていた。そしてランの傷に触れ怪我を治癒する。

残り時間4秒

「俺は何をしているのか分からねえ。なんでこんな死に損無いを助けたのか分からねえ。こんな素晴らしい能力を持っていながら、こんなことをしたのか分からねえ・・・・。けど1つだけ分かる。死に掛ける奴は・・・・・・・・なぜか見捨てられねえんだ。一体俺はどうしちまったんだ・・・・・・・・」

残り2秒。

「やっぱり・・・・・・・・リュウ・・・・あの野郎の能力も奪った時に他の何かも取り込んじゃまったのか・・・・・・・・。くそつたれが・・・・・・・・」

ビヤツコは林に身を隠した。

『そして時は動き出す』

止まっていた時間が動き始めた。

「え？」

「は………?」

クロメとランは驚きの表情を見せる。一体自分達の身に何があったのか。なぜクロメは引き抜いたはずの八房を鞘にしまっているのか疑問に思った。

ランはどうして自分の傷が完治しているのか謎だと思った。

「どう………して?」

「私にも………分かりません………」

2人は一体何が起こったのか………知る由も無かった。

第三十話

「おいアベックども！頼るのもなんだが相談があるー！」

ラバの声が厨房に響き渡る。

ワイルドハンドの戦いから数日。この日はナイトレイドの休日で、メンバー全員完全回復しいつでも戦える状態になっている。そんな俺たちにボスことナジエンダがほんの少しでもリラックスさせるためにとの事で休日を作ってくれた。

ここはお言葉に甘えてゆっくりすごす事にした。俺はチエルシーとマインとタツミの4人でクッキーなどのお菓子作りに時間を費やしている。ん？なんでマインとタツミがいるのかって？二人も作りたいんだとよく。しかもこいつら・・・付き合ってるらしいぞ。恋人同士と言う事だ。他のメンバーは知ってたけどなぜか俺だけ知らなかったんだぞ!!なんで誰も教えてくれなかったんだよおおお!

「私、一応リュウに言ったんだけどね・・・」

「え?」

「多分リュウは鈍いからどういう付き合ってるかを理解していなかったんだと思うよ?」

「まじすかチエルシーさん……」

てつきり買い物に付き合ってるのかと……。
まあこの話は置いて。

「何だよラバ」

「何よいきなり唐突ね」

「こつちは大切な時間をお菓子作りに費やしてるのよ！」

「だからあんまり人前でくっ付くなつて！」

マインさん。タツミと付き合ってからイチャイチャしすぎだろ。リア充爆発しろ！
俺もリア充だった……。

「お、俺もそうやってイチャイチャしたいんだよ！だから力を貸してくれ！」

「[[[[はこっ]]]]」

『会議室』

「なるほどね。ナジエンダが好きだけど中々告白ができないと・・・」

「情け無いわね。男なんだからがつんとききなさいよ」

「そのほうが女性は心にグツつとくるもんだよ？」

「でも・・・それがだめで今までの関係が崩れたらと思うと・・・」

「おいおい・・・。いつも覗きとかがばれてポコポコになるまで怒られても尚ポジティ

ブなラバが超ネガティブになつてる・・・」

「男のくせに根性無いわね！」

「碎けて来い!!」

「碎ける前提で話を進めないでくれ!!」

「チエルシーとマイン容赦ねえな・・・」

「ん?」

「すまんチエルシー。便所いつてくる」

「は〜い」

俺は会議室を出てすぐその近くの壁にもたれ掛かっているナジエンダに向かって笑
いながら言った。

「モテるな。ナジエンダ」

「少し・・・恥ずかしい気がするな・・・」

「はははっ。で？どーすんだ？」

「確かに私はモテるが・・・今は恋をしているわけにもいかない」

「ほう・・・」

「私はこう見えて尽くしてしまうタイプだからな」

「別にそれは聞いてねえよ!!」

「む・・・。だが、革命が終わったら・・・それもいいかもな・・・」

「そうか。男の決意は強いぜ？ちゃんと考えてやってくれ」

「ああ・・・」

少し騒がしいまま、その日の休日は幕を閉じた。

『ワイルドハンド詰所』

自分達の住処として使っていた詰所は、以前のナイトレイドとの鬨いのあと、ワイルドハンドの科学者でもあるドロテアがシユラに頼み込み、詰所の半分を自分の研究室&

工場にした。

そしてその工場にはあるものを材料に実験をしていた。それは前の戦いで戦死したコスミナだった。

工場に用意してある培養器の中にコスミナを投入し錬金術を用いて実験を開始している。

「どうだコスミナは？」

「おおシユラか。まったくこやつ胸はけしからん！ 妾よりも大きく実っておる！」

「いや…使えるかどうかって話なんだが……」

「まあそこは安心せい。まさに窮地に一生をえておる。デストロイヤーの攻撃を受けながらも生きておるのだからな」

「こいつは故郷で魔女扱いされて親も殺されてるからなあ。そのとき色々なもんがぶちぎれたんだろうな。ある意味じゃ人間じゃなかったのかもな」

「まあそこはまかせい。妾の錬金術も使って使えるようにする。じゃが心臓を撃ち抜かれた時に脳にもダメージがいつとるが……」

「使えるなら壊れていようが関係ない。使えればそれでいい……」

(じゃないとまた…親父に呆られちまう……)

「あとの二人は生き返らせることはできんぞ？完全に死んでおる」

「負けるようなやつはいらねえよ。エンシンなんか有利な満月な時に負けやがって」

（エンシンとは仲がいいよ思っていたが、こういう切り替えができるのがシユラのすごいところじゃ）

「んじゃちつと親父のところいつてくる。コスミナを頼んだぜ」

「ああ。任せておけ」

「そうですか。その女も中々しづといですねえ。とはいえ現在の頭数ではナイトレイドには敵わないんじゃないですか？」

「イゾウがいればいけばいくらでも巻き返せる」

「そんな息子にパパからのプレゼントを」

大臣がパンパンと二回手を叩くと、置くからある人物が出てきた。

「お呼びでしようか？」

リュウとの戦いで生き埋めにした筈のスズカがいた。

「羅刹四鬼のスズカです。シユラに上げましょう」

「四鬼じゃなくて一鬼でおめおめ帰ってきたんだろ？ いらねえよ雑魚の皇拳寺なんか」

「つ……」

（いきなり言葉責めなんて……いい上司になりそう……）

お忘れないように、スズカはDMである。

「私も許せなくて拷問部屋に送ったのですが、逆に喜んでいましてね」

（筋金入りのDMじゃねえか……）

「もう殺そうぜこいつ。今ものほほんとしてやがるし」

「ええ。けどいい情報を持っていたので生かしております」

「いい情報？」

スズカが持っていた一枚の紙をシユラの前に置く。そこに書かれてあったのは素顔がばれていないはずのリュウの似顔絵が書かれていた。

「ナイトレイドのデストロイヤーと呼ばれている人物です。名前はリュウ。いつも仮面

で顔を隠していたので分かりませんでした。以前の戦いで顔が分かりました。能力は帝具でもなくこの世に存在しないものと思われれます。こちらで半分の能力を植えつけたビヤッコも同じ顔でした」

「私も仮面は取れない常備装備だと思っていましたから気付きませんでした」
(前に山頂でエスデスといた奴と似てるが・・・同一人物か?)

シユラは顔に手を当て記憶を思い返してみる。

「この話は誰にも話しておりません。シユラに任せます」

「本当か！サンキュー！親父！」

「頑張りなさい。ですが・・・」

「っ！」ゾクッ

「苦労を見かねての父の愛・・・無下にしたら怒りますよ・・・シユラ」
本当に自分の子供に向ける顔なのかと思われる鋭い目つきでシユラに念を押しした。

「・・・っ。ああ！やってやるさ！」

「後、シユラにも知らせです」

「なんだよ?」

「西の異民族を相手にしていた・・・エスデス將軍が帰ってきますよ」

— ナイトレイド side —

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

休日から約一週間が過ぎた。不自然なほどにワイルドハンドが動きを見せない事を不審に思った俺たちは帝都に偵察に来た。メンバーは俺とラバ。顔がばれて居ない変態コンビでの出撃だ。

「俺は変態じゃねえよ！」

人の心読むなよ！

「しかも・・・なんで女装なんだよラバ」

「このほうがばれにくいからだ。惚れるなよ？」

「そのお花畑の頭に一発きついのをぶち込んでやろうか・・・」

冗談はこの辺にして。

「情報はどうか？俺のほうではだめだったけど」

「こつちも駄目だ。どうやら完璧に宮殿内で閉じこもってるな」

「まるで引きニートだな」

「引きニート？」

「いやこつちの話だ。んじゃ早いとこアジトに戻るか。ワイルドハンドは当分諦める……」

ドシユウツ！

『諦めるか』と言おうとした瞬間、上空から帝具・シャンバラで転移してきたシユラが現れた。

「っ!」

「転移!」

シユラは俺たちに近付き、地面にシャンバラを押し付け半径5メートルほどの魔方陣を出した。

キュイーンンンンンンン!

—宮殿—

光に包まれて気付いた次の瞬間、俺、ラバ、シユラは帝都の宮殿に転移されていた。

「はあ!？」

「宮殿だよ！お前達は罠に掛かったんだ！」

「っ!!」

ラバはシユラの攻撃を避け、帝具であるクローステールを装着するが、

ドッ！

「がっ!」

「峰内ですまぬ。江雪………」

江雪と言われる刀をもった男、イゾウの攻撃で気絶してしまう。

「ラバック!」

「デストロイヤー！おっひさしい！」

ガバッ！

「てめえ！ドM！」

「羅刹四鬼があんな簡単に死ぬわけ無いでしょ？」

「血気盛んな奴は、血を抜いて大人しくさせるに限るの！」

ガブツ！

「いってえ！」

ドロテアの野郎！俺の首に噛み付きやがった！

「むむっ！」

（なんて美味しい血潮じゃ！妾がこれまで一度も味をしたこともない味じゃ！）

「てめえら！調子に乗りやがって！」

やるしかねえのか！

「虚化！」

仮面を作り装着する。その瞬間、あふれ出した霊圧でスズカとドロテアが吹っ飛んだ。

「うわっ!？」

「くっ！美味すぎて力が抜けてしもうたわ！」

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

(今はなんとかして・・・ラバを逃がさないと！)

だが、事はそう簡単には行かなかつた。一番会いたくない人物達に会ってしまった。

ザツ

「・・・・・・・・リユウ・・・なのか？」

「エスデス!？」

しまった！顔がばれた！

ドオン！

俺の背後に落ちてきたのは・・・。

「久しぶりだな」

「ビヤツコ!？」

更に。

「この殺気・・・・・・・・。誰だ・・・宮殿で暴れているのは」

奥から出てきた大男。こいつは・・・ナジエンダから聞いたことがある。帝国軍の最上位に君臨する大將軍。

「てめえが・・・・・・・・ブドー大將軍・・・・・・・・」

こいつの使う帝具は雷を操る帝具。確か名前は……アドラメレク……。ラバは気絶して俺の周りには帝国最強のエスデスとブドー。ワイルドハンドのシユラ、イゾウ、ドロテア。羅刹四鬼のスズカに……俺の分身ともいえるビヤツコ。

まさかこの言葉が本当に使うときがあるとはな……。この状況まさに……。

『絶体絶命』

「ワイルドハンドの待ち伏せプラス、騒ぎを起こせばすぐ最強クラスが駆けつけてくるセキユリテイ。詰みだぜナイトレイド！そして手柄は……このシユラ様のモンだ！」

第三十一話

「絶対絶命・・・確かにそうだな・・・」

いくら俺の能力が万能だったとしても帝具持ちを4人と超人1人に自分が1人。これを相手にするのは少しばかり骨だ。しかも今はラバがやられてる。ラバを庇いながらここを切り抜けるためにはどうしたらいいんだ・・・。

「おいおいデストロイヤー、お前まさかここから逃げようとしてるんじゃないだろうな？生け捕りにして仲間の情報を吐かせる！殺すのは後だぜ！」

「この人数では逃げるのは無理というものよ？」

「大人しく妾にその血を寄越すのじゃ」

「デストロイヤー・・・宮殿に侵入したことを後悔させてやるぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

完全に囲まれてる・・・。まさに袋の鼠だ。今はここから逃げる事を考えるんだ・・・。

『ロギア系メラメラの実！』

「火拳!!」

右手から業火の炎を出しそれを地面に叩きつけた。

「「「「「っ!?!」」」」」

地面に当たった炎はそのまま地面を走り俺の回りに巨大な火の壁を作った。

(よし!今のうちに!)

俺は両手で印を組み『ある準備』をした。

「アチイ!?!これじゃ見えねえぞ!」

「妾たちを寄せ付けない気か!」

流石にこの炎には誰も寄り付けないと思っていたが、そうも行かなかった。

「私がやる」

バシユウツ!

エスデスが炎の壁に向かって巨大な氷をぶつけその炎を鎮火する。

「ちっ!」

「リュウ・・逃がしはしない!」

「よしいまだ!」

シユラ、ドロテア、スズカが一斉にこっちに向かつて全速力で走ってくる。だがそれは好都合。

「グラグラの実！」

海震を纏った拳で大気に打撃を与える。その衝撃で向かってきた3人が一斉に宮殿の壁に激突する。

「ぐはっ！」

「がっ！」

「きやあっ!？」

(よし今のうちに!)

「やらせるかよ！」

「っ!？」

白い鎧に身を包んだビヤッコが飛び出してき、俺を上空に蹴り飛ばした。

「がふっ……!！」

それだけでは終わらなかった……。すでに上空にはエスデスが待ち構えていた。

「リュウ……大人しくしろ……」

エスデスの踵落としが炸裂し今度は地面に叩き落される。

ドゴォ!

「がはあっ!!」

軽く脳震盪が起こってしまい視界がぼやけてきた……。早く動かないと……。早く動かないと……。早く動かないと……。早く動かないと……。早く動かないと……

「陛下の宮殿で暴れる者は私の帝具が裁く……」
ブドーの両腕に装着されている籠手型の帝具『アドラメレク』に電気が蓄電されているのが分かった。

(まづいつ!?)

すぐさま防御の体勢に入ったが意味がなかった。

「アドラメレクッ!」

アドラメレクの電撃が防御した腕を通り抜け俺の胴体に直撃した。

バチインツ!

「ぐふっ………」

電撃が体全体に流れた上にその衝撃が予想以上に強すぎて一瞬で意識が飛んだ。ただど、『俺がすべき事は出来た』。

「ミツシヨン………コンプリート………」

そして俺は意識を失った。

—ナイトレイドアジト—

「リュウ達遅いな・・・」

「もう少ししたら帰ってくるとは思うが・・・」

「もしかしてワイルドハンドと出くわしたんじゃないか」

「さあ・・・わからないわね・・・」

アジトに残っていたタツミ、アカメ、マイン、レオーネ、チエルシー、ナジエンダはリュウとラバックの帰りをずっと待っていたがその当の2人は中々帰ってこない。

ガチャツ！

扉が開いてそこに立っていたのは先ほど戦いに巻き込まれていたラバックとそれを担いでいたリュウだった。

「リュウ！ラバ！」

「もう遅いから心配したじゃない！」

「つていうかラバどうした!?!」

リュウは担いでいたラバをその場に下ろした。

「リュウ………?」

チエルシーがリュウが何時もと違う感じがしたので近くによると………。

「来るな………」

それを言い残して煙と一緒に消えた。

「これって!」

「リュウの影分身か!」

リュウは先ほどの戦いで火拳を使い炎の壁を作った。少しの隙が出来た瞬間にリュウは自分の影分身を作り、そいつにラバックを担がせナイトレイドまで連れて行かせたのだ。

「リュウはラバを逃がすために1人残って……」

「しかもさっきの来るなって危険だから来るなって意味だよな？」

「あいつ……無茶しやがって……」

リュウの意図を汲み取ったメンバーは険しい表情で頭を抱えていた。

「リュウ……大丈夫よね……」

チエルシーは祈りを捧げるかのように両手を組み目を閉じた。リュウの無事を祈るかのように……。

「ん．．．．．ここどこだ．．．．．」

薄暗い場所で目を覚ました俺は辺りを見渡した。一瞬で分かった。ここは牢獄だった。そして俺は両手をつるされた状態で捕まっていると言う訳か．．．。

「しかもこの手錠．．．ビヤッコの仕業だな」

こんな牢屋なんか能力を使えば一瞬で逃げれるのだがこの手錠のお陰で抜け出せれない。ビヤッコの力で作った能力封じの手錠だな。発動しようにもうんともすんとも言わない。

「やれやれだぜ．．．．．」

「起きたか．．．．．」

「え？」

牢獄の鉄格子の前にエスデスが立っていた。

「エスデス．．．」

「さつきぶりだなリュウ」

牢屋の中に入り俺の前に腰を下ろすエスデス。殺気は微塵も感じない。

「言いたい事も・・・聞きたいことも沢山あるが・・・」

エスデスは両腕を広げ俺に抱きついてきた。

「お前の顔を見たら全て吹き飛んだ・・・リュウ、会いたかった」

いつもなら鼻の下伸ばしてデレデレしているかもしれないが今の俺はそこまで馬鹿じゃない。

「やめろ！離れろ！」

なんとかして鎖で繋がれている腕を伸ばしてエスデスを突き飛ばす。

「なんでだリュウ・・・今更触れ合うのをなぜ拒む・・・」

そうか・・・エスデスは知らないのか。ならここではつきり言つてやる。

「俺には！愛してる女の子がいるんだよ！」

エスデスの目をしっかりとみではつきりと言ってやった。敵同士とか関係なしでもこういう行為はダメだと思う。チエルシーに対して面目が立たない。

それからエスデスは「そうか・・・」と呟いて牢屋を後にした。

「どうだよ親父！ナイトレイドをしかもデストロイヤーの奴をとっ捕まえてやったぜ！」

「よくやりましたね。一応息子だと認めましょう」

オネスト大臣、シユラはドロテアの研究室でドロテアと一緒に蟹を食べながら今回の

出来事について話していた。

「そうだ親父。言っておきたい事があるんだけどよ」

「なんですか?」

「エスデスの姉ちゃんなんだけどよ、以前あいつ山の上でリュウと密会中なのを見たぜ」
「で?」

「これ裏切りの証拠じゃね? 監視の為にイエーガーズをワイルドハンドの中に組み入れてくれよ」

(そしたらイエーガーズの奴らを大臣の息子って地位を使ってオモチャに出来るぜ)

シユラの顔にはこれからまた楽しい事ができるぜつと怪しい笑みを浮かべていたが、相手のオネスト大臣の顔には呆れたとも言わんばかりな顔をしていた。

「はあ・・・」

「なんで溜息つくんだよ」

「彼女が裏切るなら今頃嬉々として反乱軍の先鋒にいますよ。寧ろ立場が危ないのはシユラの方ですよ」

「あ?」

「人形の危険種を帝都近郊に放ったのはDrスタイリツシユの友人であったシユラの仕業だとイエーガーズのランが突き止めてくれました。その完璧な証拠です」

オネスト大臣はその内容をまとめた資料をシユラに見せた。

「な……!」

(ラン……あの野郎!)

「これはエスデス將軍からの貰い物です……ブドーにばれたら後々面倒でしたよ……」
「くそつたれが……」

「エスデス將軍の要望通り、ワイルドハンドは解散とします……。悪戯をしたことはどうでもいいのです……証拠を簡単に掴まれたのが情けない。私は無能な人間は嫌いです……シユラ」

「つ……!?なんでだよ!俺はナイトレイドを捕らえたんだぞ!」

「だから罪には問わないようにします。今は大人しくしておきなさい」

「く……ちくしょう!!」

ガンツ!

シユラはぎっしりと詰められた本棚を蹴り飛ばしそのまま部屋を飛び出した。

「厳しい教育方針じゃな」

「愛の鞭ですよ。無能に育っても困ります。ですが……貴女という稀代な錬金術師を招いた功績は認めますがね」

「うむ♪様々な援助感謝感謝じゃ！あのスタイリツシユの研究材料をそのまま渡しても
らったからあいつの研究を妾の研究に取り込むこともできるぞ」

「では・・・私の『依頼』も受けてもらえますかな？」

「妾に任せておくがいい」

「親父に呆られちゃった・・・まだだ・・・まだ逆転の目はある」

（今日中ならまだワイルドハンドの権限が使えるはず・・・そうだ・・・あいつを、
リュウを脅してナイトレイドの情報を吐かせればいいじゃねえか！そしたら親父も文
句はねえだろ・・・。そしてもし無理だったら帝都の町を火の海にしてナイトレイドの
奴らをおびき出す！邪魔する奴らがいたらシャンバラで活火山の火口に転移してやる
！）

ガラッ！

「てめえ……シユラ……」

「ようデストロイヤー……久しぶりだな」

シユラは俺の目の前に立ち怪しい笑みを浮かべた。

「なんでお前がここにいいのか聞いていいか？」

「そんなもん決まってるだろ？」

するとシユラは俺の胸倉を掴み。

「オラアッ！」

「がふっ！」

そのまま壁に向かって殴り飛ばした。殴り飛ばしたのはいいが鎖に天井で縛られているので壁に当たるより先に鎖に引っ張られ腕も痛くなった。

「なにすんだよてめえ……」

「決まってるだろ？ボコボコにしてナイトレイドの場所を吐かせる為だよ！」

「ぶっ!？」

今度は顔面を蹴り飛ばされ痛さで一瞬痛みで分からなかったが奥歯が折れた事が分かった。

「くっ……ペっ」

「おっと歯が折れちゃったかあ。悪い……なあっ！」

「がはあ！」

その後覚えていないが何十発というほど殴られ口から血がボタボタと滴っていた。

「ほらあ！早く吐いちまえよ！どうせナイトレイドは助けに来ないんだからよ！」

「勝手に・・・決めつけてんじやねえよ・・・こんな手錠がなかったらぶつ殺すところだ
けだよ」

「いいじやねえかよ吐いちまえよ！ナイトレイドなんかどうせエスデスにもブドーにも
勝てないんだからよ！」

「だから勝手に決めつけてんじやねえよ！ナイトレイドの強さを馬鹿にするんじやねえ
！」

「だってそうだろうがよ！エスデスに勝てるのは誰も居ない！どうせ革命軍は帝国軍に
は勝てないんだよ！お前らが束になろうと親父にもかけてないんだよ！」

「いい加減なこといつてんじやねえよ!!」

「いい加減じやねえ事実だ。いいからてめえはとつと吐いちまえよ。生きるのにも疲
れただろ」

「誰が吐くかよ。ナイトレイドの誰も売りはしない」

シユラは溜息を付いた後俺の胸倉を掴み俺の耳元に語りかけてきた。

「お前が吐かないのは仲間を守るべきだろうが違うぜ？お前は誰も守れない……お前の正義じゃ誰も守れないんだよ！だからてめえは能力を半分能力を奪われるんだよ。お前に一体……何が守れるってんだ？」

「!？」

俺はその時、一瞬で怒りのボルテージが上がった。こいつ……いまなんつった？俺に一体何が守れるんだ？だって？こいつは俺を……。

「お前は本気で俺を怒らしたな」

「あ？」

俺は出せる力を振り絞り手にくっ付いている手錠を外そうとしたが流石に無理だった。なのでその手錠にくっ付いている鎖を引っ張り壁についている鎖の根元を壁から引きちぎった。

「うおおおおああ!!」

バキイッ!

「てめえ!」

すぐさまシユラが誰かを呼ぼうとしていたがそんな時間なんか与えない。

「ほほ肉シヨット!!」

「ぶげあ!!」

ドッ……ガアアアン!

シユラの頬にを蹴り飛ばした。

「あつがあ………こんの………野郎があ………」

こいつだけは絶対ゆるせね！……ナイトレイドの皆のことも……そして何より俺が誰も守れないと馬鹿にしやがった。

「さつさと立ちやがれクソ野郎！てめえはぶっ殺してやる!!」

第三十二話

「さつさと立ちやがれクソ野郎！てめえはぶつ殺してやる!!」

シユラに向けて怒りの咆哮をあげる。シユラはフラフラと立ち上がりながら俺に不敵な笑みを浮かべていた。

「あーあ、お前やつちやたな。こりや死刑確定だわ」

「逆だよ。俺がお前を処刑してやるよ!」

シユラはポケットからシャンバラを取り出した。

「転っ……」

「スライス切肉シユート!」

右手に持っていたシャンバラを蹴り飛ばし、シャンバラは牢屋の隅までコロコロと転がっていく。

「男らしく素手できやがれ!!」

「なら……お望みどおり!」

シユラの右ストレートが飛んできた。俺は両手を前に出して防御の体勢にはいるが。

「こつちだよ腰抜け!」

「っ!?!」

右のストレートはフェイク。左のアッパーが俺の顎にクリーンヒットした。

「ぶっ!?!」

「ここからが俺の得意な殴りごろしだ!」

頬、鼻、額、胸、鳩尾、右と左からのランダムな攻撃が繰り返されてくる。

「ただだよ……。」

ガシツ

「あん?」

「悪いけど俺、喧嘩慣れしてるんだよ!」

バゴオン!

「ぶはっ!?!」

全力でシユラの顔面を殴りとばすが、すぐに体勢を立て直してきた。

これは自慢じゃないが現実の世界では俺はちよつとやそつとじゃ学校の喧嘩では負けなかった。

「……………」

(シユラの野郎……あいつの顔から慢心が消えた……。こつからが本気か……。)
「褒めてやるよクズ。俺に本気を出させたんだからな」

「ならお前はまだまだだな。俺に出させてくれよ．．．本気を」
「抜かしやがれ！」

シユラの左フックが飛んでくる。

「受付！」

踵を繰り出す蹴りで防ぎ、そのまま片足でジャンプし。

「腹肉シユート！」

腹に向かって遠心力を使って回し蹴りを繰り出すが。

「甘えよ．．．」

腹の前にはシユラの右腕がすでに防御に入っていた。

「胸ががら空きだぜ？」

シユラの両手が相撲の張り手のように飛んできた。

ドオン！

バキゴキツ

「がはっ．．．．．」

口から血を吐き出す。さっきの張り手でアバラが何本か折れてしまった。

威力が強すぎたせいか体のバランスを崩し尻餅をついてしまった。

「おいおい、今ので終わりかよ．．．．．こりゃナイトレイドの底がしれるぜ」

「っ!!」

こいつ、またナイトレイドを馬鹿にしやがった。ナイトレイドや自分のことをクソツタレな奴に馬鹿にされると反吐がでる。怒りが収まらなくなってくる。

「そのまま動くなよ。蹴りで首の骨粉々に砕いてやるからよ!」

シユラが両手を地に付け逆立ちをしている状態になり体を回転しながら俺に蹴りを放ってきた。

「死ねえ!!」

右の蹴りが俺のこめかみに向かって襲ってくる。

(.....俺を.....ナイトレイドのみんなを.....)

舐めるんじゃねえ!!

「上部^カもも肉^ジ!」

ガッ!

お互い逆立ちの状態で両方の足が交差する。

「うおおおおあああ！」

ガツ！ドツ！ゴゴツ！ガキツ！

「おらあ！だつ！クラア！ぜやあ!!だあ！」

「後バラ肉！上部もも肉！尾肉！もも肉！すね肉！」

足での攻撃が止まらず繰り返される。お互いの蹴りのスピードがほぼ同じのため蹴りは防がれ相手の胴体に当たらない。

（もつとーもつと早くー）

体全体の神経に意識を集中する。

「ぐっ………」

蹴りを繰り返す瞬間、シユラのバランスが崩れた。

（今だ!!）

俺は足で地面に立った。この瞬間を無駄にしない！

「鼻！頬！口！顎！」

「ぶっ！べがっ！だはっ!？」

鼻、頬、口、顎。顔面のあらゆる場所に全力で蹴りを入れる。

「これはお前に傷つけられて死んでいった人達の分！」

「ぶへあ……」

シユラの顔面にある穴という穴から血がでてゐる。だめだ……これじゃまだ足りない！

「^{エポール}肩肉！」

足をシユラの肩に添えそのまま地面に叩き落す。

ガゴンツ！

「あぐつ!？」

「これはナイトレイドのみんなを馬鹿にした分！」

そして……

「^{ジゴ}もも肉!^{セル}鞍下肉!^{コートレット}背肉!^{ボワトリーヌ}胸肉！」

ドツ! ドガツ! ズドンツ! ドズンツ!

「ぎゃあ! こへ! かはつ! ぬあ!？」

胸を蹴り飛ばすとシユラはボールのように転がり鉄格子に激突する。

「ブツクロス……大臣の俺をここまでしたてめえを……」

あらゆる場所から血を出しながらフラフラと立ち上がるシユラに向かって俺は最後

の攻撃を繰り出す。

これが……………。

——俺の怒りだ!!!

「羊肉^{ムートン}……………シヨット」

ドゴゴゴゴオン!

鉄格子を突き破り、その奥の壁に激突するシユラ。その拍子に鉄格子の破片がシユラの胸、心臓の部分を貫通していた。

「かつ……………あがつ……………」

「せいぜい今までの罪を数えながら地獄に行きやがれ……………んで閻魔様に泣きながら懺悔するんだな」

「こんな………処で………俺があ………つ」

シユラは目から悔しの涙を流しながら目を白目に向けたまま地面に倒れた。

(これで………少しは人が救われたはずだ………)

俺は脱出のために牢獄を飛び出した。今は速めにここを出てナイトレイドの皆と合流しないと。

警備や拷問官の目を盗みながら移動する。1番いい手でシャンバラを使うつてのもありかもしれないが俺はあの帝具がどうも気に入らない。前チエルシーが言つてたな。自分が帝具に対する第一印象が必要だつて。じゃあ俺はシャンバラとは相性が悪いのかもな。やっぱ帝具だつたらタツミみたいな鎧みたいなカツコイイのがいいし。こんな手錠さえなければすぐに能力使つて逃げるんだが………。

そんなこんなで何とか外に出れる扉を見つけた。少しだけ扉を開け周りを見渡す。見た感じだれも居ない。

「よし………のまま王宮を出て………」

扉から一步。たった一步を出した瞬間。

パキインツ！

「っ!？」

視線を下に移すと俺の胸から下が一瞬で凍り付けにされた。腕も足も完全に動かない………。牢獄の次は凍りに囚われた。

「逃がすつもりはないぞ……リユウ」

「エスデス……」

影から顔を出したエスデス。そのままレイピアを引き抜き俺に近付いてくる。

「大臣の息子を殺したようだな？」

「まあな。今は地獄で火あぶりにでもなってるんじゃないかねえか？」

「私はあんな奴興味はない。ワイルドハンドは私にとつて不快な存在だけだからな」

「じゃあ俺に感謝するんだな」

「ああ。私はお前に感謝してる。よくやったな」

エスデスが俺の頭を撫でてくる。以前なら嬉しがつてただろうが今はそんな感情出てこない。腕さえ凍り付けにされてなかったらこの撫でてくる手を払いのけるんだけどな。

「お前の処刑日が決まったぞ。明日だ」

「明日……か。随分気が早いな」

「皇帝さまの命令だ。まあ半分大臣の命令だろうがな」

「大臣が悪の根源だつていうのにそれを放っておくのかよ……」

「前にも言ったはずだ。弱者が負けて強者が生き残る。大臣が国民にとっては強者なんだ。まあ、その強者である大臣がいるお陰で革命軍が存在して私もおもしろい戦いに身を挺する事ができるんだがな」

「お前は根っからの戦闘狂だよ……くそたつれが……」

「戦いこそ私の全てだ……じゃあまた明日会おう。処刑場で」

「何を……」

ガッ！

「ぐっ!?!」

レイピアの取っ手の部分が後頭部に切り俺の意識はそこで途絶えた。

(皆……ごめん……)

革命軍の本隊は帝都へ向け順調に進軍していた。

腐った国を打倒するという志を持ち鍛えられた兵達である。なまりきった帝国の地方軍が勝負できる相手ではなかった。内応を取り付けていた太守以外にも無血開城する城がほとんどであった。抗戦すれば内部で民の暴動が起きるからである。

こうして革命軍は驚くべき速さで進軍。要害シスイカンを抜ければいよいよ帝都である。

だが

ブドー大將軍率いる近衛兵が守るシスイカンは鉄壁の要塞と化し革命軍の進軍を阻んでいた。

シスイカンにブドー大將軍がいるだけで革命軍に対したたらかなりのプレッシャーとなる。更にエスデス將軍とブドー大將軍の存在が周辺に大きな威圧を与えている。

大臣はこの上に革命軍の士気を下げる行動に移る。

それは

ナイトレイドの一員であるデストロイヤーことリュウの公開処刑である。デストロイヤーを処刑すれば革命軍の戦力は格段に落ちる。

処刑にはエスデス將軍、ブドー大將軍という最強クラスの帝国トップの2人を組み合わせている。

デストロイヤーの処刑はナイトレイドをおびき寄せる罠でもあった。仲間を助けにきたところを確固激破。

100%の死が待ち受けている。

(例え罨でも私は行く。リュウは絶対に殺させはしない)

チエルシーは帝都に向かうためにアジト付近にある森を全速力で移動中。
リュウの救出を目的としている。

森を抜けると、そこには………。

「え!?!」

「先回り成功!」

「どこに行くつもり? チエルシー?」

「ナイトレイドを脱退しますか。かなりぶつ飛んだ思考だな」

そこにはナジエンダ、アカメ、レオーネ、マイン、タツミ、ラバックがいた。

「な、なんで!？」

「そんなの分かつてるだろ? チェルシー」

「大事な仲間をみすみす殺されるわけにもいかないだろ?」

「私達も協力する!」

「リュウには俺を助けてくれた借りがあるしな」

「俺たちには甘いだのなんだの言いながら自分も中々甘いじゃないか」

「でも……. したらみんなが……」

「大変な目に合うって? それは違うぞチェルシー」

「え?」

『大事な仲間を見捨てない』

「それがナイトレイドだ」

「つ……. あ……. ありがとう…….」

チェルシーは両手で顔を隠して涙をながしていた。それをレオーネが抱きしめる。

「まったく、色々困るよねウチのメンバーには」

「なあタツミ。リュウを連れ戻したら一発ぶん殴ろうぜ」

「いいな。勿論本気でだ」

「チエルシー。勿論なにかしらの策はあるんだろう？そうじゃなかったらお前一人で特攻なんてしないだろ？」

ナジエンダが吸っていたタバコをチエルシーに差す。

チエルシーはレオーネから離れて涙を拭くとニヤリと笑った。

「ええ。策はあるわ」

持っていた黒色の宝石をみせる。

これはリュウに渡されたチエルシーの切り札である。

「よかろう・・・ならばその覚悟。汲み取ろう」

4
時間後。
リユウ処刑時間。

第三十三話

—帝都スタジアム—

「………下半身冷てえ」

スタジアムの真ん中には処刑人としての俺が氷付けの状態で捕まっている。そしてその俺の目の前にはエスデスと大將軍のブドー。そしてその客席には帝都の住民が大勢俺の処刑を見るために集まってきていた。

「今から殺されるといふのに余裕だな？デストロイヤー」

「一回あんたも氷付けにされたら分かるよ。足の感覚無いどころか俺に足があるのかわからなくなってきたぞ」

「ふんっ。死ぬ前の戯言として聞き流しておこう」

「聞き流すのかよ」

この雷親父が!!

とは言ってもマジでどうしよう。完全に逃げれないぞ……。エスデスにブドー。そして俺のすぐ横にはビヤッコが氷にもたれ掛かっている。帝国最強クラスが近くに居

て能力も封じられてるし氷付けで動く事も出来ない。せめてこの手錠だけでも取れればいいんだけどまあお約束の如く取れないし……。

「ナイトレイドの連中は来ると思うか？」

「ナジエンダは甘い奴だ。恐らくリュウを助けに来るだろう」

「宮殿を襲うという可能性は？」

「私の部下を置いている。今は我慢してここにいてくれ。ここに私とお前がいるのは脅威を見せしめるためだからな」

「大臣の考えそうな事だ」

「オリジナルも中々ドジ踏んじまったようだな」

「うるせえ。喋りかけてくるなクズやろうが」

「おいおい。そんな口利いて良いのかよ。ここでぶつ殺してもいいんだぜ？」

「つ……クソツタレが」

「だけどそんなことしたらエスデスにぐちゃぐちゃのひき肉にされそうだから取り合えず手は出さないで置いてやるよ」

『取り合えず』か。出そうと思えば出せるんだぞといっているようなものだ。

それとなぜかこいつが近くに居ると落ち着かない。理由は至極簡単。自分の目の前に瓜二つの自分がいるんだ。自分が自分と話すことなんか人生で一度もないはずだからな。あとさつきから以上にこいつがいるとは別の理由で落ち着かない。

(こいつの顔をみてから異様に嫌な予感がする……これが単なる勘違いだといひんだけど……)

「そろそろ時間か……。リュウは私が殺す。死体ももらうぞ」

「そういう約束だ。構わん」

エステスがレイピアを引き抜いて俺のゆっくりと近付いてきた。

「人の殺し方は熟知している。何処を殺したら死ぬか……。リュウお前の生命力に期待するぞ」

「ああそうかよ……」

なんだよ客の奴ら。俺のこと見て笑ってやがる。そんなに俺が死ぬのが面白いかよ

「くはっ」

「リユウ・・・死ぬ」

レイピアが俺の胴体に向かって飛んでくる。流石にこれは死ぬな・・・。

(みんな・・・あばよ)

ドドドドドドドツ！

瞬間、上空から大量のレーザー光線が降り注いでくる。

『!?!』

4人全員が空を見上げる、そこには危険種から飛び降りてきたもの達が居た。

「リュウ！助けに来たぜ！」

「借りは返すぜ！」

「まだ生きてるようになによりよ！」

「タツミ、ラバ、マイン……」

そしてその3人の奥からもう1人落ちてくる。

あれは。

「チエルシー!!」

俺の最愛の少女、チエルシー。

俺たちより少し離れた場所に着地した4人はすぐさま自分の帝具を装備する。

「エスデス、ブドー、それとビヤッコ」

「本当にリュウにそっくりだ。大聖堂と宮殿での屈辱を晴らしてやるぜ！」

「ラバ、あなたは全開じゃないんだから少しは押さえなさいよ。今はリュウを助ける事が最優先！」

「ナイトレイド、来たか」

「賊が調子に乗りよって・・・」

すぐさまエスデス、ブドーも戦闘態勢にはいる。けどビヤッコは動かない。

「ここで貴様ら纏めて拷問室に連行してやろう！覚悟しろ」

エスデスの回りに冷気が纏わりつきみると氷を生成していき、ブドーは腕に装着されているアドラメレクに電気を走らせる。

『死ね!!』

エスデスのヴァイスシュナーベルとブドーのプラズマが4人に向かって一直線に襲ってくる。けどそれに向かって飛び込む者が居た。タツミでもなくマインでもなくラバックでもない。立ち向かったのは

「チエルシー！馬鹿野郎！逃げろ！」

攻撃型の帝具を持って居ないチエルシーが飛び出していった。ガイアファンデーションにはあんな攻撃を防ぐ能力なんてない。一体何をするつもりだと、血迷ったのかと俯いてしまった。だけどそんな時にチエルシーの口角が上に上がった。

「大丈夫だよりユウ。これがあるから」

チエルシーの手には黒の宝石が握られてあり、その宝石を氷の槍とプラズマに向かって投げた。

（あれは・・・俺がチエルシーに渡したお守り・・・）

あの黒い宝石はチエルシーに渡した俺の能力で作ったアイテム。その効力は……。

「お願い……リュウを助けて……」

持ち主の身が危なくなった時、又は持ち主の強い願いによつて発動する仕組みになっている。

宝石が黒色から赤色に染まり出し氷おプラズマに直撃。その瞬間。

ゴアツ！

宝石の中から火炎放射の如く炎が噴出した。

「!?」

エスデス、ブドー、ビヤツコは突然の炎に驚き瞬時に炎から距離を取る。炎は氷とプラズマを完全に飲み込みそのまま氷付けとなつているリュウを飲み込んだ。

(あちちちち！チエルシーあの馬鹿俺ごと巻き込みやがつて！)

だがそのお陰で俺を凍らせている氷とこの鬱陶しい手錠は熱で溶かされた。つまり俺の体が動くと同時に？

「さあ・・・反撃の時間だ・・・」

能力の開放を意味する。

「ふんつ仲間ごと燃やし尽くしたか。血迷ったか？」

「少しは頭使えカミナリ馬鹿が。ナイトレイドがそんな頭悪い事するともおもってんのか？」

「なんだと・・・貴様」

「ビヤツコの言うとおりだ。ナイトレイドが今まで無策に挑んでくるはずがない。あの炎は防ぐべきだった」

「・・・っ、まさか」

「そのまさかだ。俺のオリジナルが動けるようになった」

会話が終了するとリュウごと巻き込んでいた炎が一瞬にして風と共に消えた。そしてそこに立っていたのは服の所々が燃えて少し黒焦げになっているリュウが立っていた。

「よう。待たせたな」

「デストロイヤー……」

「……これは逆に、好都合かもしれないな。エスデス、ビヤツコとやら。手は出すな」
「何言つてやがんだ。そいつを殺すのは俺だ」

「ブドー、リュウの処刑は私がすると決めている。貴様が邪魔をするな」

3人がグダグダと言いつつ合っているが、そんな隙を与えようか？

「タツミ！マイン！」

「!?」

「ブドーは俺たちに任せろ！」

「援護するわよタツミ！」

ブドーに向かってタツミとマインが攻撃を開始する。あの2人なら大丈夫なはずだ。

「エスデス！」

「アカメか！」

ガキインツ！

気配を殺していたアカメの攻撃を簡単に防ぐエスデス。その瞬間を狙ってレオーネ

が狙い打つ。だがしかしその攻撃すらも片手で防ぐ。

「中々の腕力だな。だが私にはまだ届かないぞ」

「くそー！」

チエルシーにはラバがついてくれている。一先ずは安心か。なら俺の相手は……。

こいつしか居ないよな。

「よう、ビヤッコ」

「やっぱり俺たちは引かれ合うんだな。ま、お前は俺で、俺はお前だからな」

「俺の半分的能力と人格を移植されただけだろうが。んなドラマチックなこと言うんじやねえよ気持ち悪い」

いや、この世界に来てる時点でドラマチックな事なんだが……。

「まあ、こんな戦争状態の中質問するのもあれだから聞きてえんだけどよ」

「あん？」

「あいつらはまだ知らないんだな」

「は？」

「なんのことだ？つていう顔してるよな？覚えてねえのか？この世界に来て初めてやってしまった過ちを」

「っ!?!なんででめえがそれを！」

「知ってるに決まってるんだろ？お前の半分を持つてるんだ。人格とか正確とかは分からないが、お前の記憶も入ってるかもしれないって事に疑問は抱かなかつたんだな」

「クソツタレが・・・めんどいな事ごと持って行きやがって・・・。思い出したくないことを思い出しちゃったじゃねえか・・・」

「そうだよなあ？ 思い出したくねえよな？ だって・・・お前はその数多の能力を手に入れた喜びで、無関係の村人達全員殺したんだからなあ！」

『!?!』

ビヤッコは俺に向かって言った訳じゃない。この場にいるありとあらゆる人の耳に届くように声を張り上げた。アカメ、タツミ、マイン、レオーネ、ラバツク、チエルシー、エスデス、ブドー。全員驚きの表情だった。

「それ以上！ なんにも言うんじゃねえ!!」

右手にエリユシデータ、左手にダークリパルサーを持ちビヤッコに全速力で突っ込む。

「その程度で倒せると思ってるんじゃねえよな?」

「黙れ!!」

両の剣が煌く青色の光を放つ。二刀流16連撃ソードスキル『スターバーストストリーム』。右からビヤッコの肩に目掛けて斬りおとす。だがその動きはビヤッコは熟知している。斬りおとし、斬りあげ、回転斬り、クロス、突き。16回の連続とした攻撃をビヤッコはすべて受け流した。

ガガガガガガガガガガガガガガッ!

「なん・・・だどっ・・・」

「んな攻撃読めるに決まってるだろ? 怒りに任せたそんな動き単純化するに決まってるだろ!」

ドオンッ!

「ぐはっ!」

ビヤッコの蹴りが俺の腹に食い込む。

「ほら、もつと頑張ってくれよ。相手はおまえ自身だぜ?」

「少しマジで黙れ・・・本気で潰すぞ?」

「ほー・・・? ならそうしてくれ」

「望みどおり!!」

虚の仮面を被ろうとした瞬間、俺とビヤッコの目の前に雷が落ちた。

「は?」

「なんだこりゃ・・・」

空を見上げると空が黒雲に包まれていた。そしてそのまま視線を移していくとブドーの体の回りに黒いオーラが纏われていた。

「タツミたち・・・かなり追い込んだのか」

「ほう・・・こりゃ俺は必要無さそうだな」

ドンッ!

「てめえ!どこ行く気だ!」

「ここでお前を殺しても面白くねえ。俺のエネルギーも限界が近いから決着はまた今度だ」

「ふざけんな!俺たちと戦え!

「戦え？俺たちと？そんなこと言えるのかお前に？」

ビヤツコはそのままスタジアムから姿を消した。

くそっ……後味の悪いもん残していきやがって……。

気付いたら俺の周りにはナイトレイドの皆が集まっていた。

「皆……俺は……」

「待つてリュウ。言わないで」

「そうだリュウ。詳しい話はこの戦いが終わったからだ」

「今はエスデスとブドーから逃げてから話の続きを聞かせろ」

「……分かった」

エスデスとブドーに向き直り各々武器を構える。

「さあこいナイトレイド」

「賊はここで消し去ってくれる」

『行くぞ!!』